太宰府市の文化財　第20集

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅲ

―― 尾崎遺跡第１次調査 ――

１９９３

財団法人　古都大宰府を守る会

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅲ

太宰府都市計画事業佐野土地区画整理
に伴う埋蔵文化財調査報告書（3）

1993

財団法人　古都大宰府を守る会

序

本書は、太宰府市の西郊で行なわれている佐野土地区画整理事業に伴います一連の発掘調査のうち、昭和63年度に実施いたしました尾崎遺跡の第１次調査についてまとめたものであります。

佐野地区の調査としては３番目に行なったものであり、まだこの地域が太宰府の歴史の中でいかなる位置を占めるかがまったく分かっていなかったころであり、日々出土する遺構や遺物はそれぞれに新たな事実を教えてくれました。なかでも大溝の中から出土いたしました木製の扉４点は、九州での出土例がきわめて珍しく、また全国的にみても類例は少なく当時の建物復原に貴重な資料を与える結果となりました。

さらに住居跡の発掘は、太宰府市内ではこれまであまり知られることのなかった古墳時代の生活の一端を窺わせる重要なものです。

発掘調査は春から夏にかけての厳しい炎天下のなかで行なわれましたが、地元大佐野・向佐野をはじめとする作業員の皆さんの並々ならぬ努力のおかげをもちまして、無事調査を終了することができました。感謝申し上げる次第であります。

ささやかな一冊ではありますが、学術研究はもとより文化財の保護、啓発にお役立ていただければ幸いです。

平成５年３月

太宰府市教育委員会

教育長　長野治己

例　言

1．本書は、太宰府市教育委員会が昭和63年度に実施した太宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴う大佐野・尾崎遺跡第１次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は昭和63年５月18日から10月15日まで実施した。地番は福岡県太宰府市大字大佐野字尾崎74、75-1、76-1で、開発対象面積は約25.000㎡（後日報告予定の雛川遺跡第１次調査地点を含む）、調査面積は7.500㎡である。

3．調査の関係者は第Ⅰ章に記載したとおりである。

4．検出遺構の実測及び写真撮影は、狭川真一・山村信榮・永見秀徳・山本孝浩・櫻井美也子、出土遺物の実測は、土器が境一美、木器は田中克子・森田レイ子が中心となり狭川・山村が補足した。清絵は重松麻里子・井上信正・河田聡・柴田剛・西村晴香・境・狭川が行なった。出土遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）にお願いし、検出遺構の空中写真撮影は、（有）空中写真稲富が行なった。また、検出遺構の全体図（配置図）作成はアジア航測株式会社福岡支店に委託した。

5．遺構実測図及び遺構配置図はすべて国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって図中に示される方位は特に注記のない限り座標北（G.N.）を指している。

6．出土した土器の付着物の分析は、国立歴史民俗博物館の永嶋正春先生にお願いし、併せて玉稿をもいただいた。また、花粉分析・種実同定・昆虫同定の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

7．本書の執筆は目次に記載したとおりである。

8．本書の編集は、狭川が担当した。

目　次

Ⅰ．はじめに ……（狭川真一）… 2

Ⅱ．試掘調査の概要 ……（狭川）… 6

Ⅲ．調査の概要

（1）遺構 …… 9

住居跡 ……（山村信榮）… 10

堀立柱建物 ……（山村）… 14

土壙 ……（山村）… 14

溝 ……（山村）… 18

その他の遺構 ……（山村・狭川）… 19

（2）遺物 …… 24

土器 ……（狭川）… 24

木器 ……（狭川）… 61

石器 ……（狭川）… 81

Ⅳ．小結

各遺構の年代 ……（山村）… 83

扉板について ……（山村）… 85

別表1．土師器坏の計測表 …… 89

別表2．杭・矢板計測表 …… 91

土師器表面の漆仕上げ処理について……（永嶋正春）… 93

太宰府出土の石包丁の使用痕分析……（山田しょう）… 99

自然科学分析 ……（パリノ・サーベイ）…100

石包丁の使用痕 ……（山村）…117

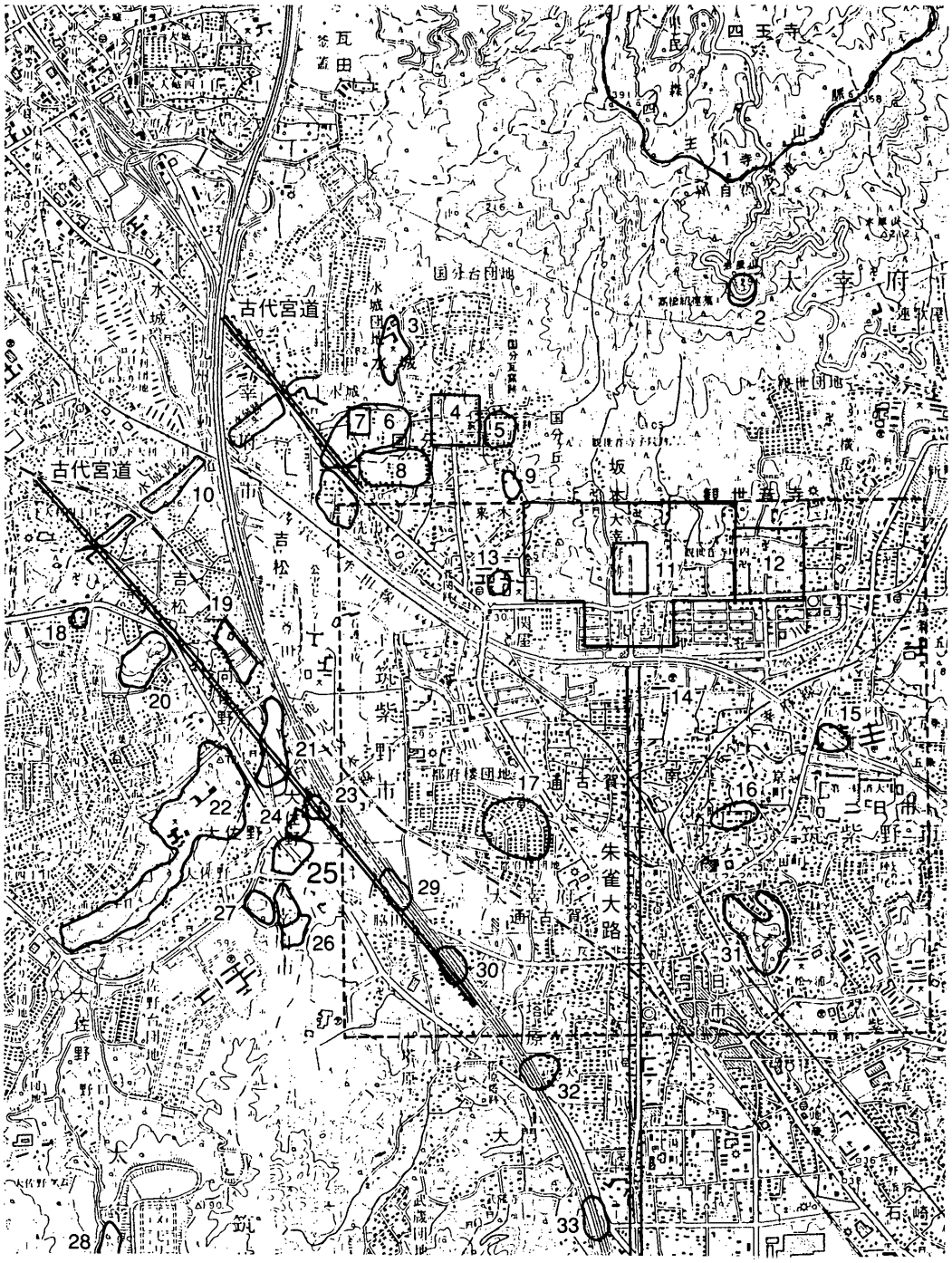


Fig. 1　太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

1	大野城跡	9	御笠軍団印出土地	17	市ノ上遺跡	**25**	**尾崎遺跡**
2	岩屋城跡	10	水城跡	18	神ノ前窯跡	26	脇道遺跡
3	陣ノ尾遺跡	11	大宰府政庁跡	19	原口遺跡	27	殿城戸遺跡
4	筑前国分寺跡	12	観世音寺	20	篠振遺跡	28	野口遺跡
5	辻遺跡	13	遠賀軍団印出土地	21	前田遺跡	29	剣塚遺跡
6	松本遺跡	14	大宰府条坊跡（破線内）	22	宮ノ本遺跡	30	唐人塚遺跡
7	筑前国分尼寺跡	15	君畑遺跡	23	雛川遺跡	31	峯遺跡
8	千足遺跡	16	般若寺跡	24	フケ遺跡	32	桶田山遺跡
						33	道場山遺跡

Ⅰ．はじめに

『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財　第14集）でも記載したとおり、太宰府市西郊の佐野地区における区画整理事業は、昭和63年度から一部工事に着工した。工事に伴う発掘調査は昭和62年度から着工し、当初計画では常に工事の１年前に発掘に着手できる予定であったが、諸事情から必ずしもうまく開始できず、今回の報告分である尾崎遺跡第１次調査地点も、先に報告を終えている原口遺跡第１次調査地点同様昭和63年度の工事着手地点であり、工事着手直前に調査がかろうじて終了した様な状況である。

以後毎年、年間を通じて発掘調査は続き、平成４年度までに向佐野地区４遺跡19次調査地点、大佐野地区７遺跡16次調査地点を数えるまでに至っている。そのなかで向佐野地区の前田遺跡は弥生時代前期及び後期の集落、奈良時代の官道など太宰府市内でも有数の遺跡の一つとなり、同じく宮ノ本遺跡は以前から知られる買地券を保有する墳墓だけでなく、奈良時代から平安時代中頃の一大官人墓地であることも判明した。大佐野地区では尾崎遺跡・脇道遺跡が弥生時代から古墳時代にかけての一連の大集落遺跡である可能性も考えられるようになるとともに、脇道遺跡第２次調査地点では５世紀後半頃の貯木場跡とみられる遺構が検出されたり、その上層から奈良時代前半とみられる木簡が出土するなど、こちらも話題性に富んだ遺跡が相次いで発見される結果となった。

しかしながら大きな発見に反して遺構の保存は思うにまかせず、前田遺跡で官道の一部が公園の下に残されることになったほかは目だった保存措置は行なわれておらず、削平の憂き目に遭わなかった遺構群もほとんどが宅地の下に再び眠ることとなってしまったのは残念である。

さて、今回報告する尾崎遺跡第１次調査地点は標高34m付近にあり、大佐野川によって開析された小谷から続く低位な沖積平野の一角に位置する。現在は県道32号線によって分断されているが、大佐野集落の南方、天拝山から北に派生する丘陵の裾部分に展開する脇道遺跡第２次調査地点（平成４年度調査）から続く微高地上に位置するものと思われる。

この遺跡は現在までに５次にわたる調査を数えるが、遺跡の主体は弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居を中心とした集落であることが判明しつつある。今回報告分はその一部で最も東端に位置している（Fig. 2）。

第１次調査は、調査時点での地番が、福岡県太宰府市大字大佐野字尾崎74、75-1、76-1で、現地での調査は昭和63年５月18日から10月15日まで実施した。この間、遺跡全般と住居の構造に関して記者発表を行なうとともに、7月9日には現地説明会を実施した。さらに調査終了後には扉に関して、専門誌上にその速報を掲載する機会を得た。

整理作業は調査終了後随時実施し、主たる整理は平成４年度を充てた。

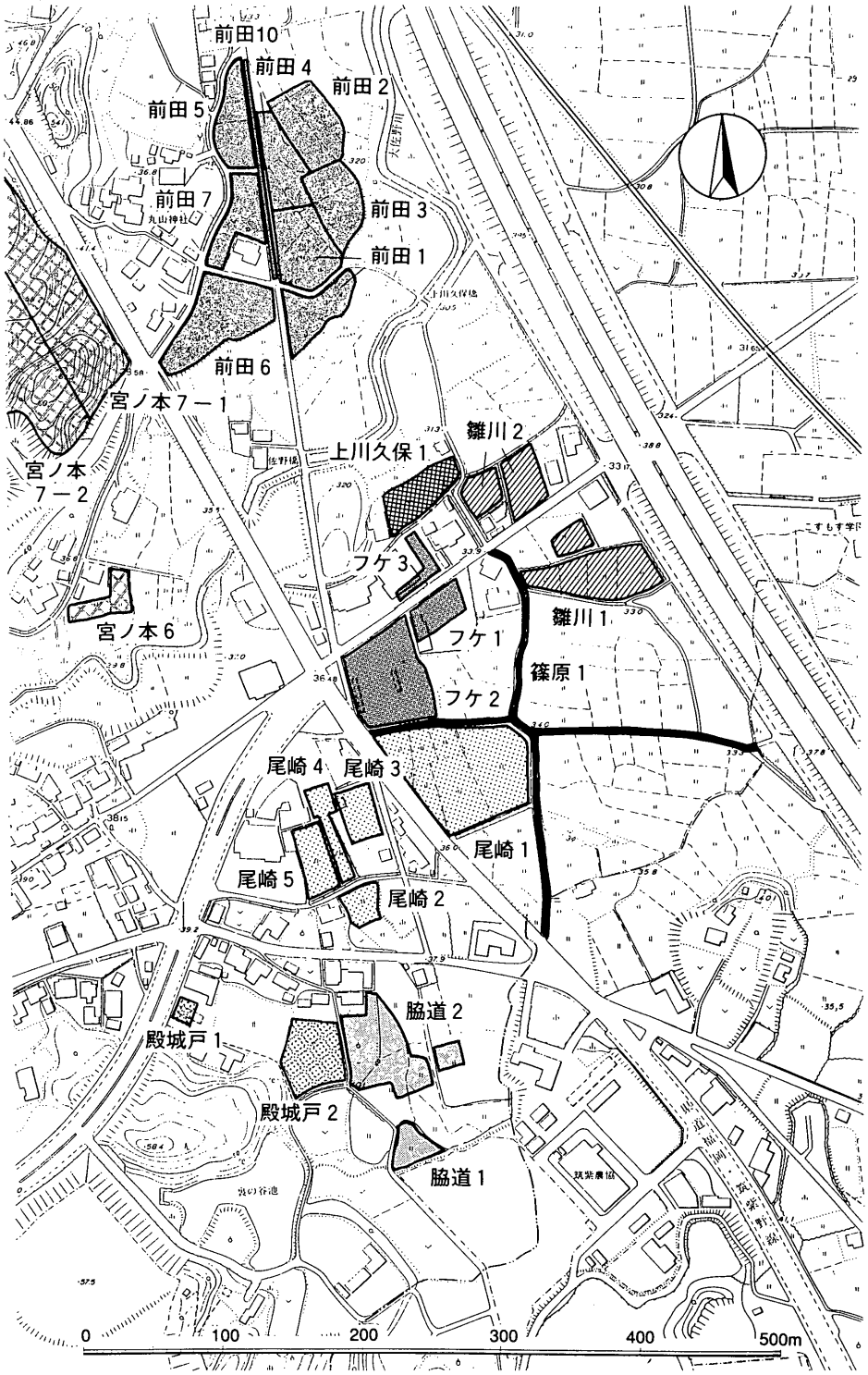


Fig. 2　尾崎遺跡周辺の発掘調査地点（1:5,000．遺跡名のあとの数字は調査次数）

第１次調査の現地調査及び整理の組織は次のとおりである。

発掘調査・昭和63年度

調査主体		太宰府市教育委員会
総　括	教育長	藤　壽人
庶務担当	社会教育課長	花田勝彦
	文化財係長	鬼木富士夫
	主事	岡部大治
		白水伸司
	技師	山本信夫
		狭川真一（調査担当）
		緒方俊輔
	（嘱託）	山村信榮（調査担当）

発掘調査および整理作業参加者（順不同、敬称略）

（発掘調査作業員）　田中平助　田部澄博　萩尾　昇　萩尾泰祐　八柳健之助
藤原重登　斉藤徳美　三上智久　太田ヤス子　高鍋キミヨ　古川トミ子　古川民子
古川ヨシ子　宮原ハナエ　山本洋子　大田敬子　宮原圭子　柴田ツキエ　岩男澄子
早田ミツル　中嶋幸子　中嶋さなみ　米原峰子　宮田恵子　岸　邦子　川原田美千代
高原改良子　白木ハルミ　大迫フミ子　江島スミエ　戸渡洋美　萩尾須磨子　萩尾カネ子
田中テル子　中島タキノ　中島タカ子　中嶋はじめ　松島順子　白水いせの　徳永モモエ
田原智恵子　山下澤子　渡辺ひとみ　花園美千子　楠林静香　吉田正子　大久保悦子
植村奈留美
山本孝浩　櫻井美也子（奈良大学学生）
（発掘調査補助員）　永見秀徳（現在筑後市教育委員会）、山田富美
（整理作業員）　高橋アイ子　堤登美代　横山美津子　岩下恵子　田崎しょう子

整理・平成４年度

総　括	教育長	長野治己
庶務担当	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	主任主事	川谷　豊
	主任技師	山本信夫
		狭川真一（整理担当）
		城戸康利

		緒方俊輔
	技　師	山村信榮（整理担当）
		中島恒次郎
		塩地潤一
	（嘱託）	田中克子
（整理作業員）		林美知子　中村房子　野田美子　堀尾はるみ　小西晴代　武堂年子
		境　一美　河田　聡　柴田　剛　西村晴香
（整理補助員）		森田レイ子　山中幸子
（調査補助員）		重松麻里子　井上信正

調査及び整理に際して次の方々からご教示、ご指導を賜った。文末になったが記して感謝の意を表したい。（五十音順、敬称略）

小田富士雄（福岡大学）　工楽善通（奈良国立文化財研究所）　斎野裕彦（仙台市教育委員会）　佐藤浩司（北九州市教育文化事業団）　永嶋正春（国立歴史民俗博物館）　松岡良憲（大阪府教育委員会）　山田しょう（旧東北大学、現ハーバード大学）　山手誠治（北九州市教育文化事業団）　山本輝雄（九州大学）

発掘調査に際して快くご承諾いただいた地権者の方々は次ぎのとおりである。文末になったが記して感謝の意を表したい。（五十音順、敬称略、字篠原、字雛川地区を含む）

大田　修　　大田　弘　　大田正己　　柴田泰博　　白石浅雄　　白石徳美　　田村恭子
中嶋範児　　古川　勲　　古川　壽　　古川芳宏　　宮原静馬　　宮原　堤　　宮原柳子

Ⅱ．試掘調査の概要

尾崎遺跡を発掘調査するに先だって、遺構の残存状況を把握すべく開発対象地区である字尾崎、字篠原、字雛川、字フケの約25.000㎡について試掘調査を実施した。試掘調査は水田一面に対して１～２本程度のトレンチを設定し、機械力を用いて掘削した。トレンチは51箇所に及ぶが、遺構が検出されたNO.１～11とNO.45～51についてはここでの報告を割愛した。またトレンチは、水田の耕作土をすべて除去した段階から掘削を開始している（調査方法については『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ』を参照)。以下に各トレンチの状況を簡単に報告しておく。なお、NO.１～11は雛川遺跡第１次調査、NO.45～51は今回報告する尾崎遺跡第１次調査地点にあたる。(Fig. 3)

NO.12～17トレンチ　床土を除去すると砂層、粘土層、砂層の堆積で、13トレンチでは粘土層の中に若干の遺物を包含していた。粘土にはブロックは混じっていない。14～16トレンチではすぐ粘土層に至り、17トレンチでは粘土層は観察されなかった。

NO.18トレンチ　床土直下から茶色砂の堆積である。

NO.19トレンチ　トレンチ中央付近で馬の背状に残る黄色粘土の地山を検出したが、遺構は確認できなかった。この地山の両側は砂の堆積である。

NO.20トレンチ　トレンチの南端は黄色粘土の地山が検出されたが、他は青灰色粘土と砂が入り乱れた状況を呈した堆積である。堆積中に流木が検出されたが、人為的な遺物、遺構は検出されていない。

NO.21トレンチ　床土の直下は砂の堆積である。

NO.22トレンチ　床土の直下は砂、青灰色粘土、砂の順に堆積している。

NO.23トレンチ　床土の直下は茶色粘土で流木を含んでいる。その下は砂の堆積である。

NO.24トレンチ　床土の直下は砂の堆積である。

NO.25トレンチ　最近の地上げがなされているが、その盛り土（真砂土）を除去するとよくしまった青色砂である。堆積土であるがかなり安定した面を形成している。

NO.26～28トレンチ　地上げの真砂土を除去すると砂の堆積層である。

NO.29～33トレンチ　床土を除去すると砂の堆積層である。このうち31～33トレンチでは粘土の堆積層が中間に挟み込まれており、32トレンチでは南側から流れ込んできた状況が窺える。

NO.34・35トレンチ　34トレンチの南端に地山と考えられる黄色粘土が認められるが、遺構は検出されていない。北側は砂の堆積である。35トレンチではそれに続くと見られる砂の堆積を確認したにとどまる。

NO.36トレンチ　床土の下は、砂、茶色粘土、黒色粘土、砂の堆積で黒色粘土中の北寄りには流木が含まれていたが、人為的な遺物、遺構は検出されていない。

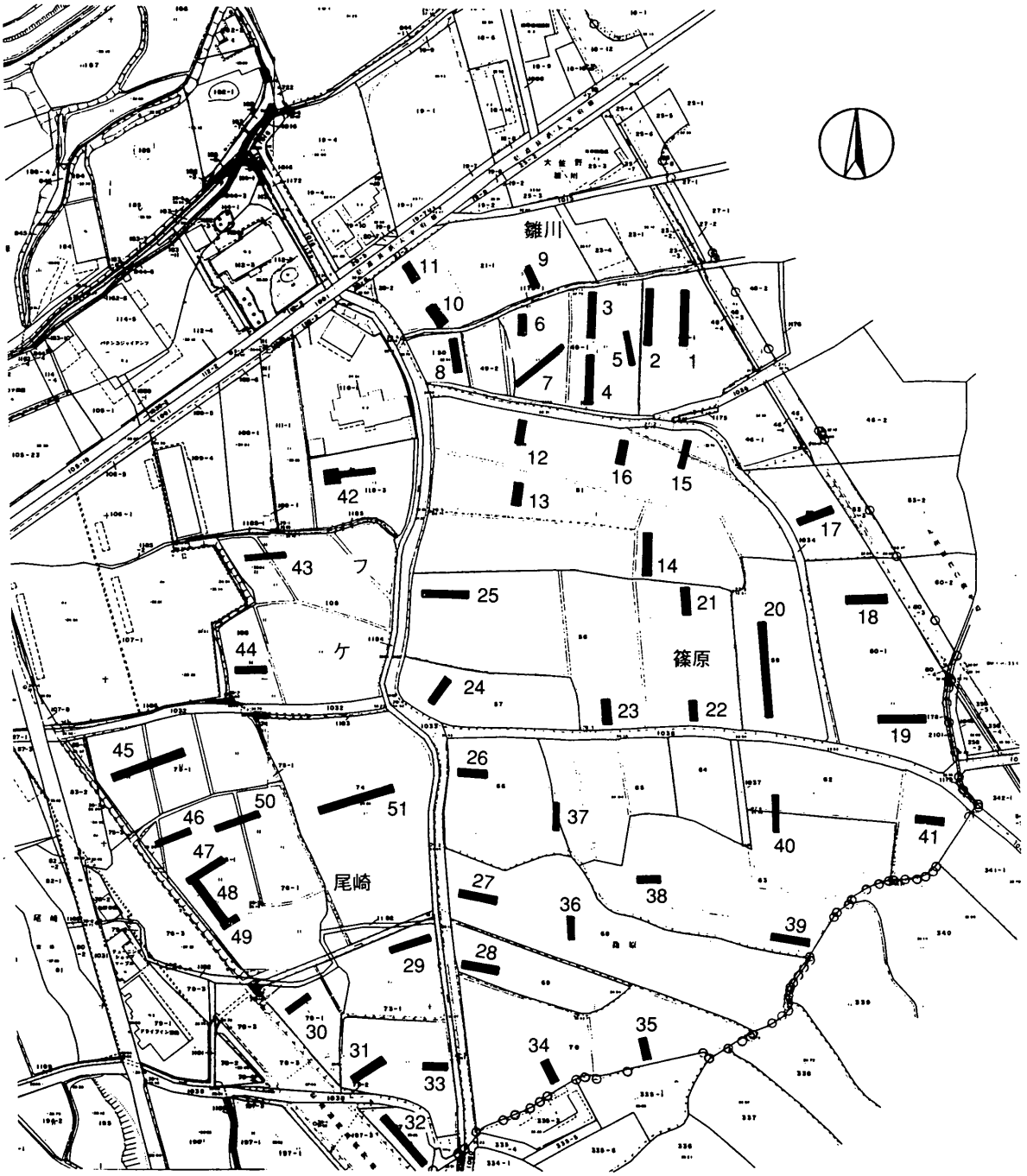


Fig. 3　宇尾崎・篠原・雛川地区試掘調査位置図（1/2000）

NO.37トレンチ　砂と粘土の混在した堆積層を確認した。

NO.38トレンチ　床土の下は、砂層、粘土層、砂層、青灰色粘土の順に堆積している。

NO.39トレンチ　床土の下は砂の堆積である。

NO.40トレンチ　床土の下は砂層で、その下に茶色粘土を混在する砂の堆積がある。さらに下層には黒色粘土の堆積が確認され、流木が検出された。

NO.41トレンチ　砂、黄色粘土のブロックを多く含む堆積土、よくしまった黄色砂、黒色粘土の順に堆積する。

NO.42トレンチ　床土の下に遺物を若干含む薄い包含層があり、以下茶色粘土、砂、黒色粘土の順に堆積する。

NO.43トレンチ　床土の下は、黒茶色土、暗灰色粘土、黄色粘土、茶色砂の順に堆積している。暗灰色粘土には若干の遺物が含まれていた。その下の黄色粘土は安定した面であったが遺構は確認されなかった。

NO.44トレンチ　床土の下は灰色粘土、黄色粘土、灰色砂の順に堆積している。灰色粘土および黄色粘土は遺構面の可能性があったが、この地点では確認されていない。

以上の結果から、地山の可能性が考えられるのはNO.19・20・25・34・41・43・44の各トレンチである。このうち41・43・44は、西側隣接地を平成3年度にフケ遺跡第2次調査として調査した結果、遺構面が著しく削平されていることが判明した。これらのトレンチでも遺構の確認されなったことはこの削平に起因するものと判断される。しかしながら42トレンチでは砂や粘土の堆積が確認されるため、この地域までは遺構面の広がりを期待することはできない。34トレンチにおける地山の検出は、32トレンチの堆積状況と併せて、隣接する宅地や水田の一部（筑紫野市）が、現在の筑紫農協がある丘陵から東に派生する微高地の一部である可能性を示唆するものである。19・20トレンチでわずかに検出された地山は流水によって抉られたような状況を呈しており、当初は安定した面を形成していたものが後に大きく削られた結果の産物と見做される。遺構が残存しておれば、この付近にも確認できた可能性が考えられる。

これ以外の地点は、ほとんどすべてが流路の一部分であると考えられる。大佐野地区の南側の丘陵地帯から流れ出る、大小の河川によって形成された流路であったとみられ、長い年月の間にいくつにも流れを変化させながら現在に至るものとみられる。

今回の試掘調査では対象地の大半に遺構はなく、西端の尾崎地区、北東隅の雛川地区にかろうじて残存していた状況を確認したにとどまる。また、フケ地区の未調査範囲に遺構の残存する可能性を推定できたことは、これ以後の調査の指針になり意義があるものであったと言えよう。

Ⅲ．調査の概要

（1）検出遺構

調査区の北側と南側に大溝が東西に流れ、それに挟まれた地点の中央付近に竪穴住居跡４棟、掘立柱建物２棟、土壙、ピットなどが検出された。また北側の大溝から北にも遺構は展開しており、竪穴住居跡１棟、掘立柱建物跡１棟のほか若干の遺構が検出された。さらに溝内には桝状のものをはじめとする４基の貯木等を目的としたと考えられる遺構が構築されており、その付近から多くの土師器、須恵器、木製品が出土した（Fig.4・Pla.1.2）。

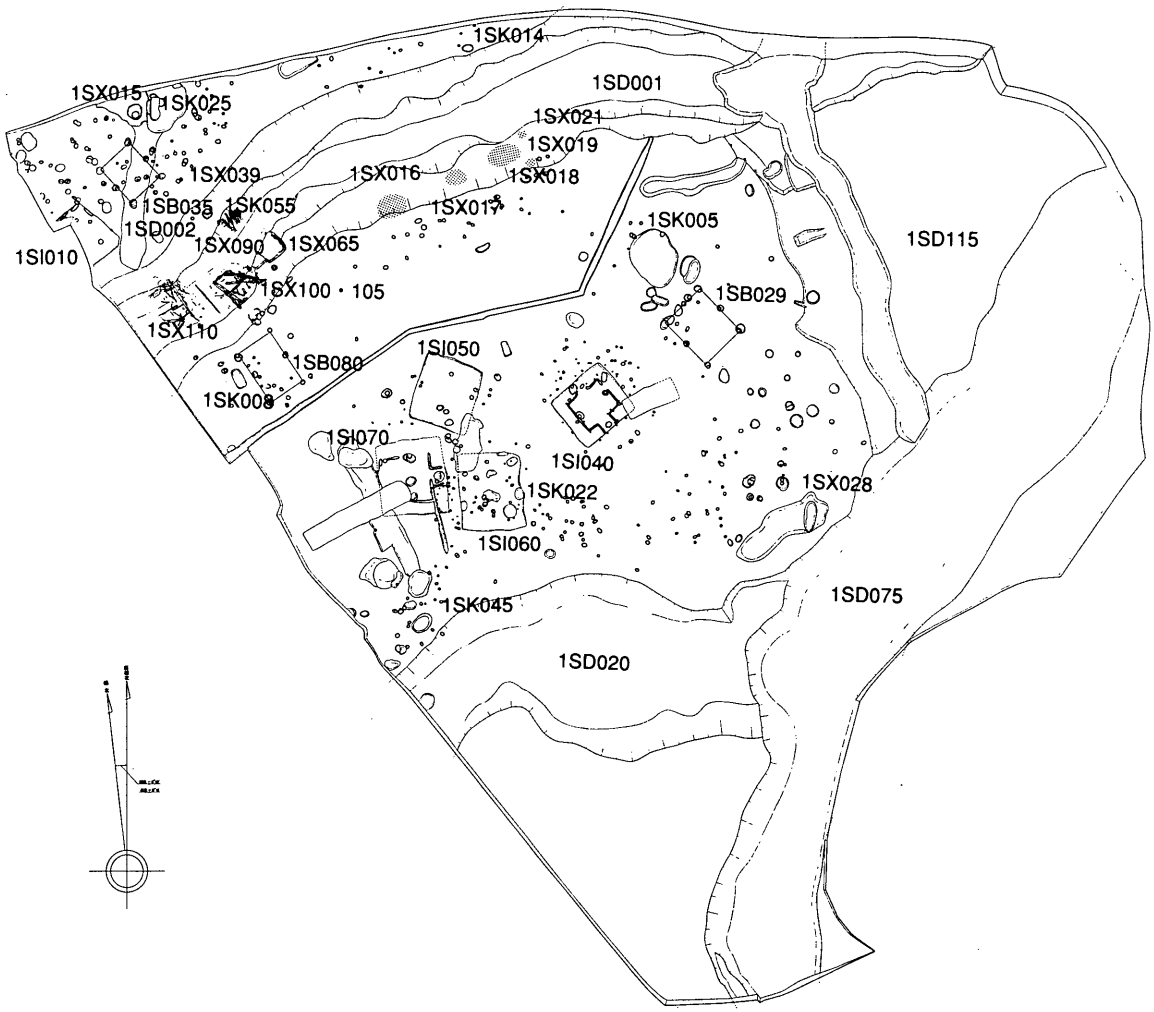


Fig. 4　尾崎遺跡第１次調査遺構配置図（1/800）

住居跡

1SI010

（Fig.5、Pla.3）

1SI010は調査区の北東隅で検出された一辺4.8mの方形を呈するもので、床面で検出した柱の位置や壁溝の存在から住居跡と判断した。

プラン検出面から床面まで8cmほどしか残存していない。柱は4本あるものと思われ、南側の柱穴には柱痕跡が確認されている。床面は顕著には積み土などの調整はなく、硬化も認められない。壁溝の深さは10cm程度で部分的にしか存在しない。プランはさらに調査区域外に延びる。

埋土は黒色土一層で、この土層は1SD001の黒色土層に近似し、両者が同じ様な堆積環境で埋没したものであり、上位層が同じ灰色土であることや出土土器から共時性を持つものである。

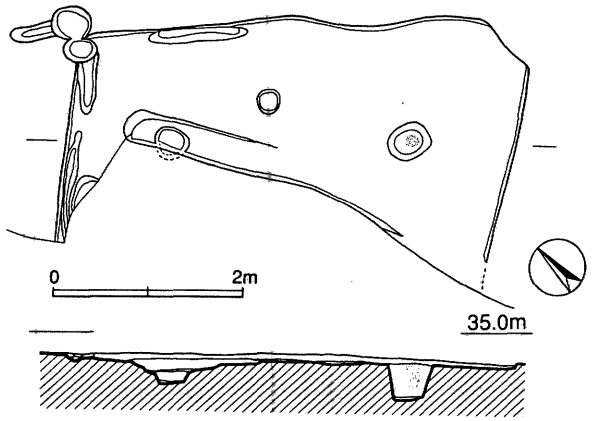


Fig. 5　1SI010実測図（1/80）

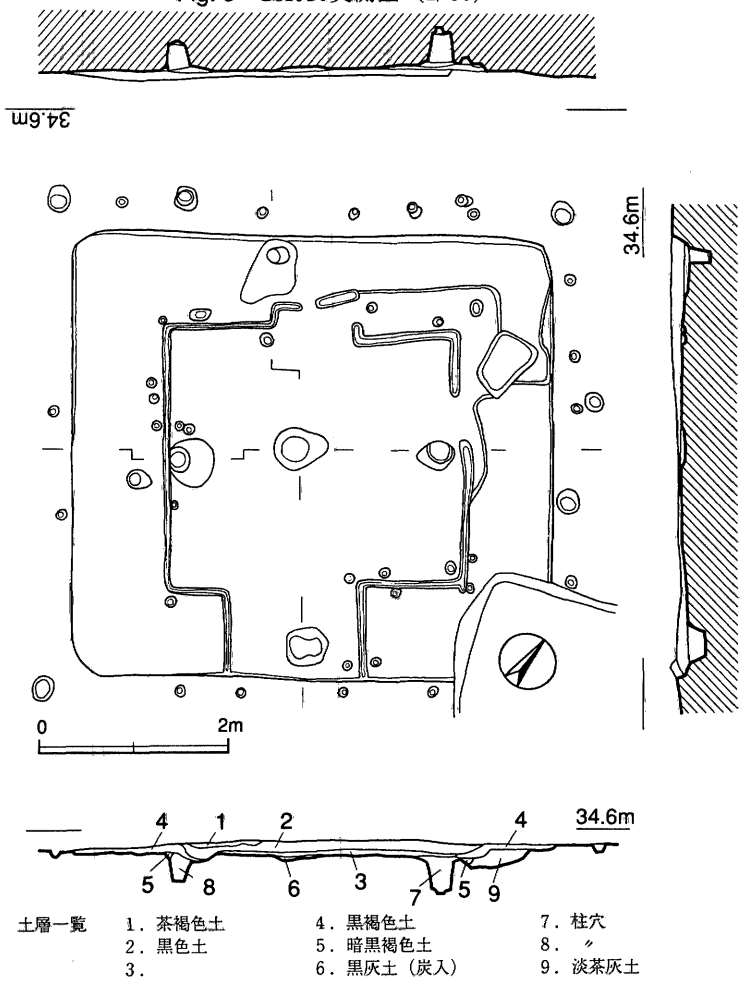


Fig. 6　1SI040実測図及び土層断面図（1/80）

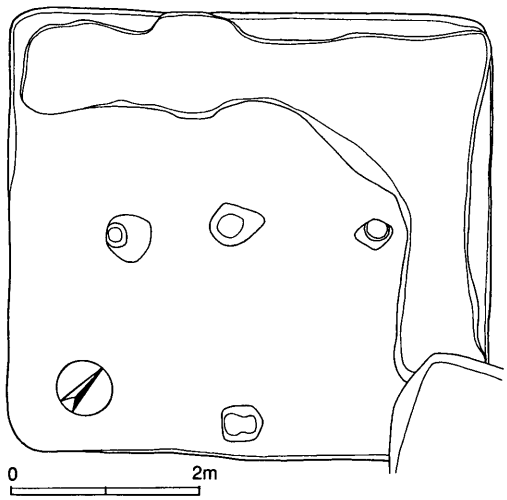


Fig. 7　1SI040掘り形プラン実測図（1/80）

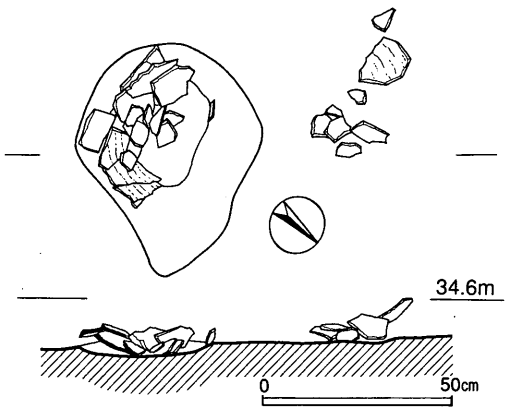


Fig. 8　1SI040中央炉付近土器出土状況（1/20）

1SI040（Fig. 6～8、Pla. 4・5）

調査区の中央で検出した正方形をなす竪穴である。検出時にはすでにベット状遺構が確認され、床面まで深いところで10cm程度しか残っていない。東隅を欠く。ベット状遺構は方形プランの辺に沿う様に壁溝を伴って矩形に巡り、一箇所が外に向かって1.4mの幅で開いている。中央に深さ20cm、径40cmほどのピットがある。この南東方向に開く空間がこの住居の入り口と想定している。その対辺が一部1m幅で矩形に凹んでいる。主柱穴は入り口の対辺に二つ一対で検出された。その間に浅い窪みがあり、甕型土器の胴部が破砕され伏せて置かれた状況で検出された。炭層を伴い、炉跡と判断している。壁溝は幅10cm、深さは深いところで10cm。溝の内外の不定位置に直径10cmほどの杭跡を伴う。ベットは土層から掘形を均した後、積み土をおこなって形成している。杭痕の存在からこの溝に板状の物が挟まれていた可能性がある。床面の人為的な調整は認められない。堀形は辺に添ってL字型に深い堀込みがあり（Fig. 8）、埋め戻している。掘形の四周には杭跡が並び隅のものは大きめのピットであり、壁もしくは軒に関する遺構と思われる。1SB029とは柱方向を揃えている。

1SI050（Fig. 9、Pla. 6）

調査区域の中央西寄りで検出した長方形プランの竪穴で、床面検出の柱位置から住居と判断した。

検出時で既にほぼ床面が露呈しており、床は黒灰土混じりの黄灰土が敷かれその上に黒灰土が堆積していたが、調査時には黄灰土まで遺構廃絶後の堆積土と誤認して一部堀過ごしてしまった。プランは長辺5.2m、短辺4.3mの方形を呈す。長軸方向に主柱穴が二つ。この間に不定形の薄い炭層の広がりが認められ（図中アミ部分）掘り形はないが火床と思われる。西角隅に1.4×0.6mの方形の窪みがある。東側長辺中央に二段掘りのピットがある。北側短辺中央は掘

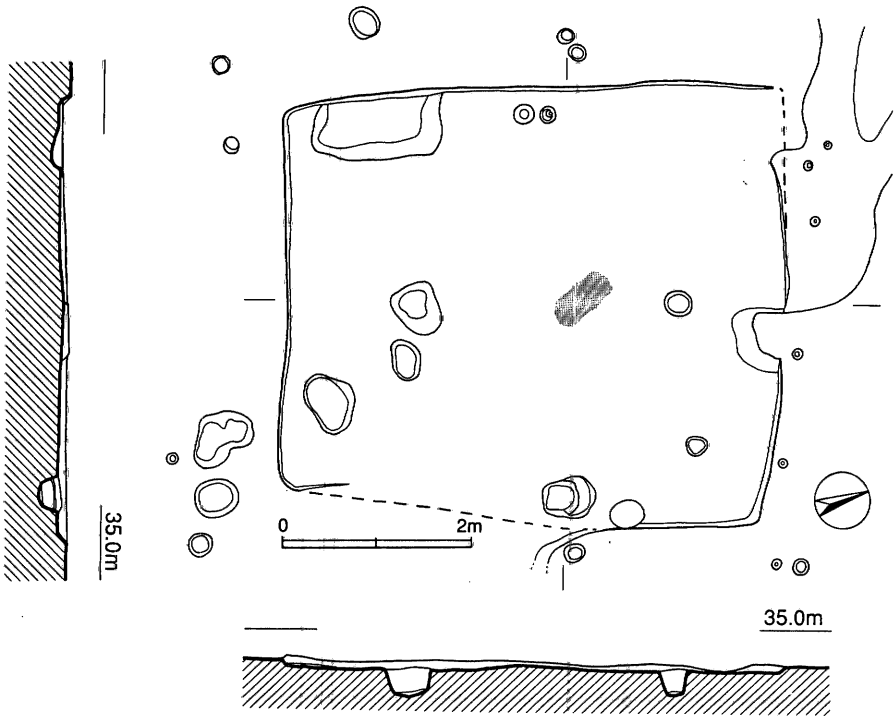


Fig. 9　1SX050実測図（1/80）

り形掘り下げ時に不定型に掘り残されている。壁溝やベットは無い。掘り形外に杭跡が散在する。

1SI060（Fig. 10、Pla. 7・8）

調査区域の中央西寄り、1SI050の南側で検出した長方形プランの竪穴で、床面で検出した柱、炉跡位置等から住居と判断した。検出時で既にはぼ床面が露呈しており、プラン内で検出したピット群の個々が床面使用時に形成されたものか埋没後に切り込まれたものかは弁別が難しい。

プランは長辺6. 1m、短辺5. 2mの方形を呈す。長軸方向に主柱穴が二つ。この間に不定形の浅いすり鉢状の掘り形を伴う薄い炭層の広がりが認められ（図中アミ部分）、この炭層を掘り下げる段階で破砕し火を受けた甕型土器片が検出され土器敷き炉であったこたが確認された。主柱穴は掘り形の大きさが南北で差があり、北側は掘り直しの可能性もある。東側長辺中央に二段掘りの土坑がある。掘り形が住居プランからはみ出し、床面と覆土が異なることから別遺構1SK022（土坑）と判断したが、この住居に伴う可能性も否定できない。この土坑は1×0. 8×0. 15mで東側に段があり底には東寄りに小ピットがある。北側短辺中央付近には長さ1. 3mの短い溝状遺構がある。ベット状遺構は確認されていない。

1SI070（Fig. 11、Pla. 8・9）

調査区域の中央西寄り、1SI050の南側で検出した方形プランの竪穴で、床面で検出した柱、炉跡位置等から住居と判断した。

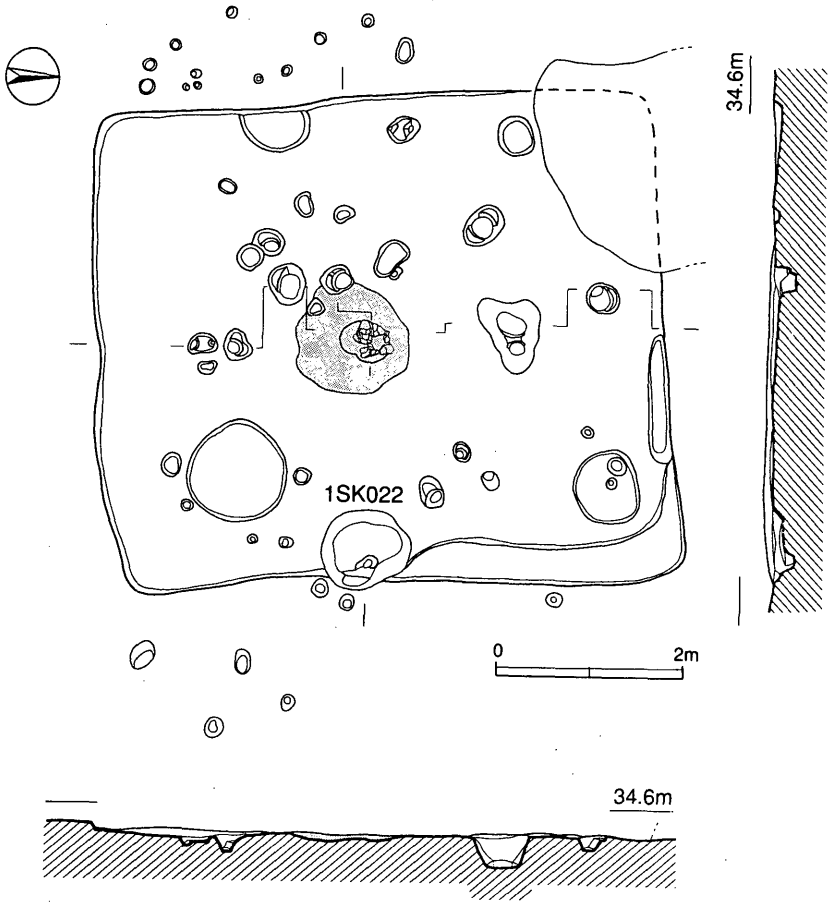


Fig. 10　1SI060実測図（1/80）

検出時で既にほぼ床面が露呈し一部削平されており、プラン内で検出したピット群の個々が床面使用時に形成されたものか埋没後に切り込まれたものかは弁別が難しい。プランの東側を南北に縦断する溝はこの住居より新しい。プランは長辺6.4m、短辺6.0mの方形を呈すものと思われ、1SI040に似る。短軸方向に深さ0.5mほどの主柱穴が二つ。柱は土層観察から抜き取られた可能性がある。ここから小型特殊器台が出土している。その柱間のやや南寄りの位置に径0.6mほどの炭層を伴う炉跡と思われる浅い土坑がある。矩形に展開する幅10cmほどの溝は床とベット状遺構との境にある壁溝と思われ、図破線のプラン復元はこの溝を基としている。床には黄灰土が敷かれている。この層とベットの積み土を取り除くとプラン南辺に黒灰土があり、掘り形はこの分だけ深かったことがわかる。

1SI040、050、060、070はごく近しい時期、もしくは同時期に営まれた住居と思われるが、構造的には1SI040と1SI070が近似している。平面プランが長方形から方形に移行しているが、主柱穴は２つであり弥生的な要素を持ちながら古墳時代のプランに移行しつつある例の一つで

ある。

掘立柱建物跡

1SB029（Fig. 12）

調査区中央付近で検出した2間×1間の南北棟の建物。柱間は南北が2.3×2m、東西3.8m。柱痕が二つ確認され径15cmほどの材が用いられていた。建物の南北軸の方位はN-46°-Eである。1SI040に添う。

1SB035（Fig. 13、Pla. 3・10）

調査区北西隅で検出した2間×1間の南北棟の建物。柱間は南北が1.8×2m、東西3.3m。径15cmほど柱痕が五つ確認され、そのうちの幾つかに材そのものが残存している。建物の南北軸の方位はN-41°-Eである。1SD002に切られる。1SI010に添う。溝状遺構1SD001から出土した木製品大半がこの1SB035と対岸の掘立柱建物1SB080の間で出土した。

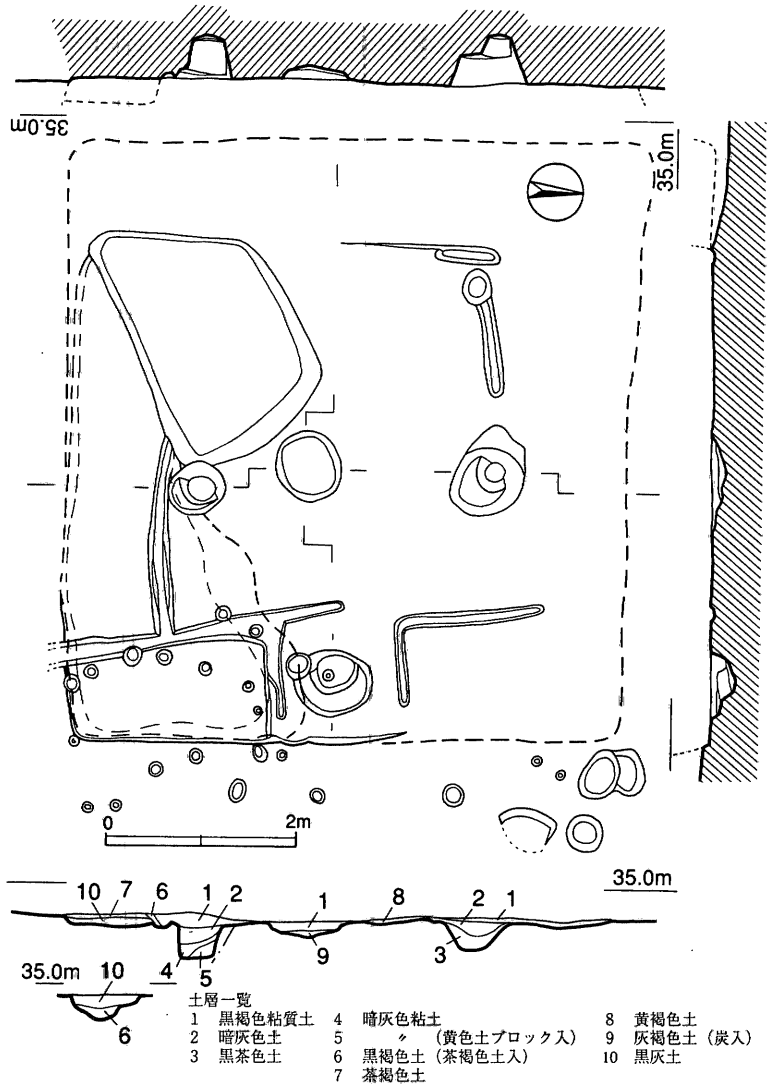


Fig. 11　1SI070実測図及び土層断面図（1/80）

1SB080（Fig. 12）

調査区西側で検出した2間×1間の南北棟の建物。柱間は南北が4.7m、東西3.1m。建物の南北軸の方位はN-35°-Eである。1SI035とは溝状遺構1SD001の対岸にある。ほかの建物と比較して柱間や柱位置がやや不揃いである。

土壙

1SK005（Fig. 15、Pla. 11）

調査区中央付近で検出した楕円形の窪みで、2.8×4.6×0.2mを計る。やや粘質の黒色土が

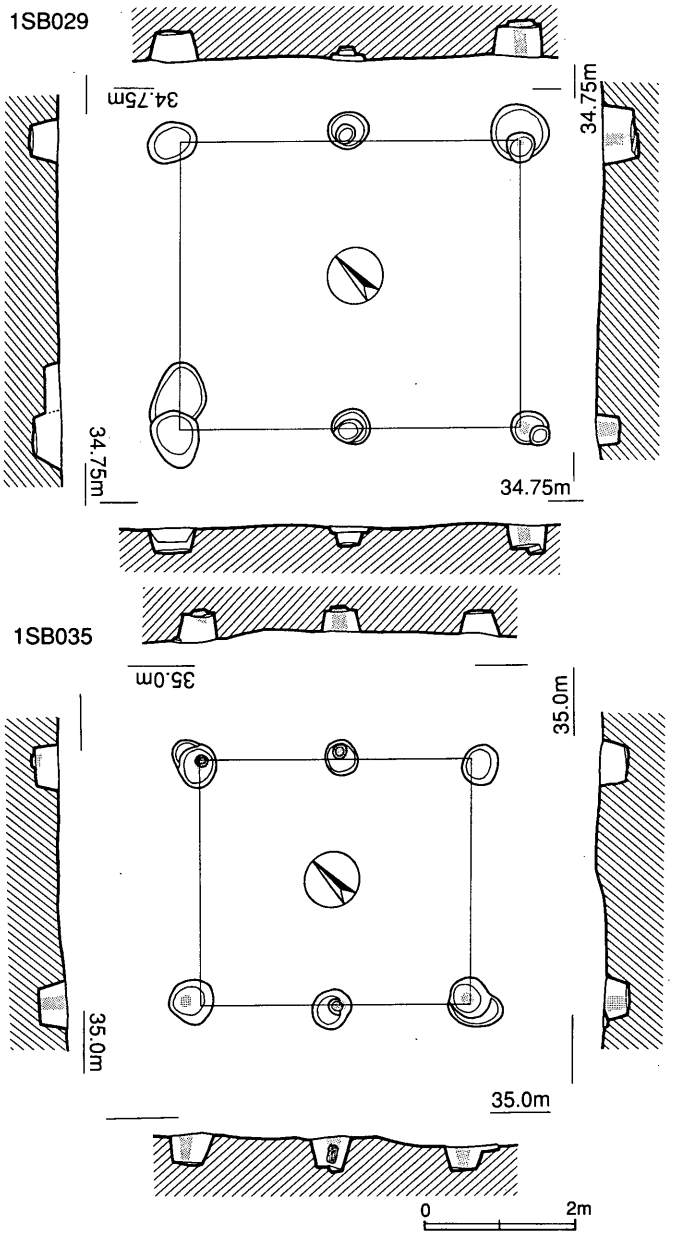


Fig. 12　1SB029・035実測図（1/100）

全面に堆積していた。

1SK008（Fig. 15、Pla. 11）

調査区中央付近で検出した長方形土坑で、1.6×0.8×0.2mを測る。茶褐色土が堆積していた。中央西壁際の底近くに赤色顔料塊が検出された。長軸は隣接する掘立柱建物1SB080に添う。墓の可能性もあるが、確定的な証拠は無い。埋土中から土師器片が出土している。

1SK014（Fig. 14、Pla. 12）

調査区北中央付近の溝状遺構1SD001の汀線際で検出した円形の土坑で、0.85×0.65×0.4mを測る。やや粘質の黒色土が全面に堆積していた。土層から1SD001の最終埋没と期を同じくして埋没したと考えられる。板材と鉄斧の木製の柄が出土している。

1SK022（Fig. 15）

前述の住居跡1SI060中で検出された。詳細は1SI060参照のこと。

1SK025（Fig. 15）

調査区北西隅付近で検出した不定形の窪みで、2.2×1.5×0.3mを測る。やや粘質の黒色土に地山の黄灰色粘土ブロックが堆積していた。不定形の溜まり状遺構1SX015を切っている。

1SK033（Fig. 15）

調査区西側付近で検出した楕円形の窪みで、2.75×1.7×0.7mを測る。複数の土層がすり鉢状に堆積していた。住居跡1SI070に添う。

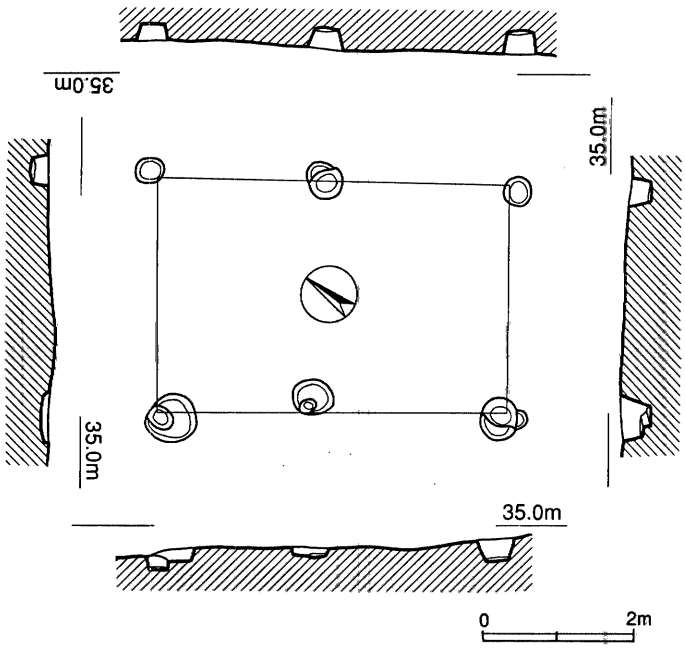


Fig. 13　1SB080実測図（1/100）

1SK045（Fig. 15）

調査区中央西の溝状遺構1SD002の北側汀線際で検出した惰円形の土坑で、3.4×2.4×0.9mを測る。

1SK055（Fig. 15）

調査区北西側の溝状遺構1SD001の汀線際で検出した円形の土坑で、0.8×0.7×0.3mを測る。やや粘質の黒色土が堆積していた。土層から1SD001の最終埋没と伴に埋没したと考えられる。土師器の高坏と甕、木製の農具（泥除け？）が出土している。

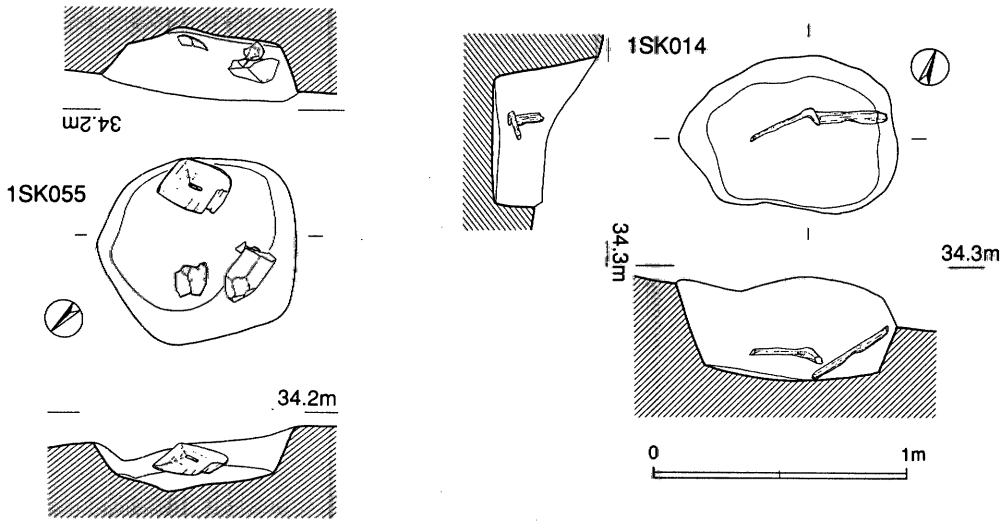


Fig. 14　土壙実測図Ⅰ（1/30）

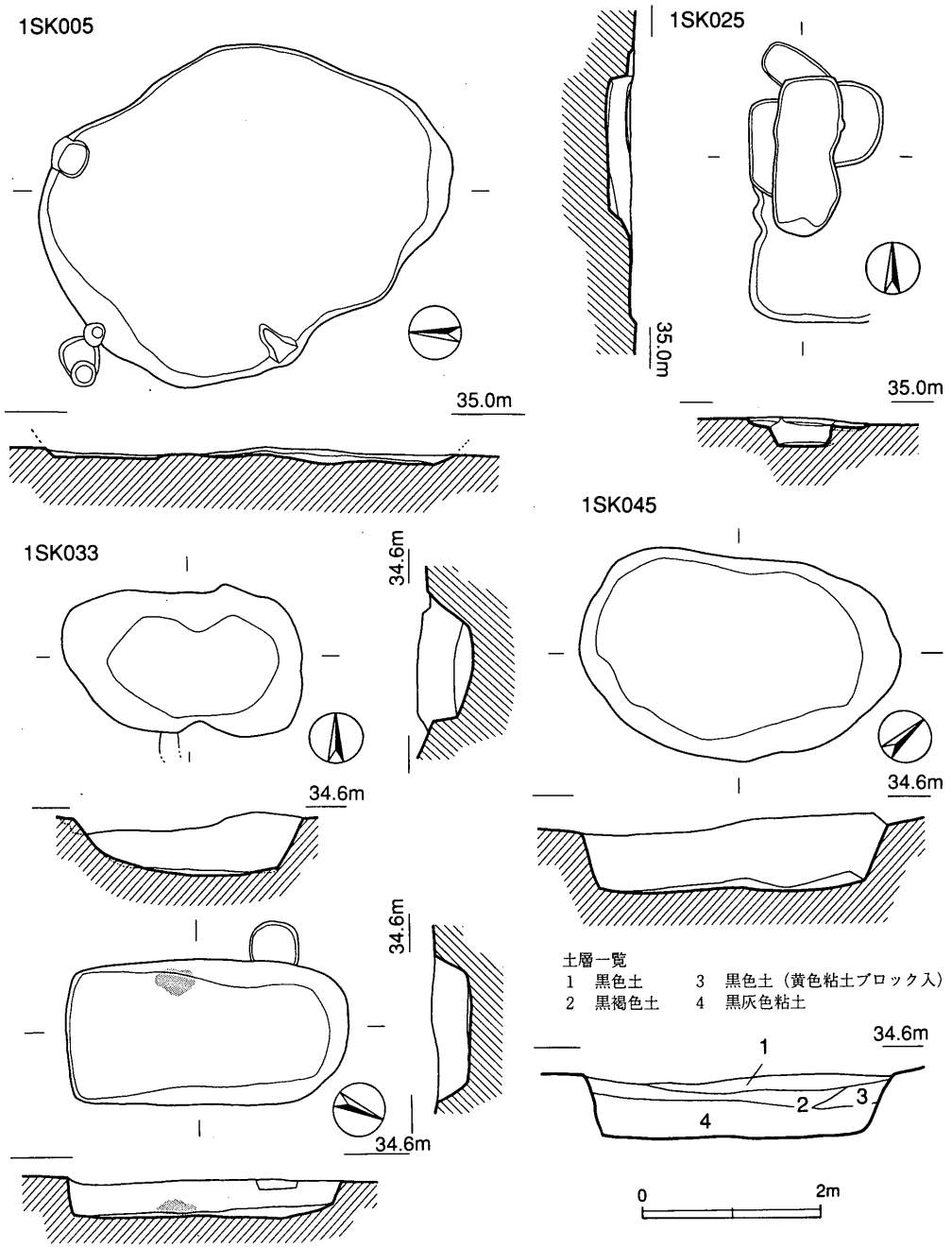


Fig. 15 土壙実測図Ⅱ（1/80）

溝

1SD001（Fig. 16）

調査区の北側を西から東に向かって流れる幅12mほどの大きな溝で、堆積土の大半を植物腐食に由来する黒色土層が占める。砂層の発達は無く滞水状態で低湿地状を呈していたものと思われ、この環境を利用して性格不明な貯蔵施設がこの遺構内に1SX065、100など複数存在する。また、多くの木製品や動植物遺存体も出土した。

1SD002

1SX015に続く長さ約12m、幅1.8mの溝で、黒色土層が堆積土の主体である。1SB035を切っている。

1SD020（Fig. 16）

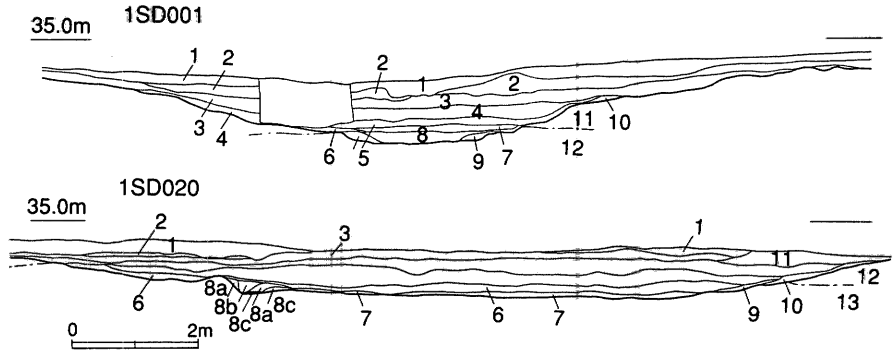
調査区の南側を西から東に向かって流れる幅15mほどの大きな溝で、1SD001と同じく堆積土の大半を植物腐食に由来する黒色土層が占める。この溝には砂層の発達が多少見られ、流下と滞水状態を繰り返したらしいが低湿地状態が長く続いたものと思われる。また、多くの動植物遺存体も出土した。1SD075に切られる。

1SD075

調査区の南側を西から東に向かって流れる幅15mほどの大きな溝である。顕著な遺物は出土していない。

1SD115

調査区の南から北に向かって流れる幅3mほどの溝で、すべて白色の粗砂層で覆われる。奈良時代の須恵器片が小量出土している。



土層一覧（1SD001）

1	淡黄灰色土（旧耕作土）	4	黒色土（植物腐食土層）	7	黒色土（混細砂）	10	黒色土（地山粘質ブロック混）
2	灰色粘質土	5	黒色弱粘質土	8	黒色粘質土	11	淡黄色弱粘質土（地山）
3	黒色土	6	白色細砂	9	黒色砂状土	12	灰色粗砂（〃）

土層一覧（1SD020）

1	黄灰色土	4	黒褐色土(腐食土層)	7	黒色粗砂	8c	黒色粗砂
2	灰色粘土	5	黒色土	8a	黒灰色粘土	9	淡灰色粘土
3	淡黒褐色粘土	6	黒色粘土	8b	黒褐色粘土	10	淡黒色粘土

11	淡黒灰色粘土		
12	黄色粘土（地山）		
13	青灰色粘土（〃）		

※3～6は、遺物取り上げに際し、黒色土とした。

Fig. 16　溝遺構土層図

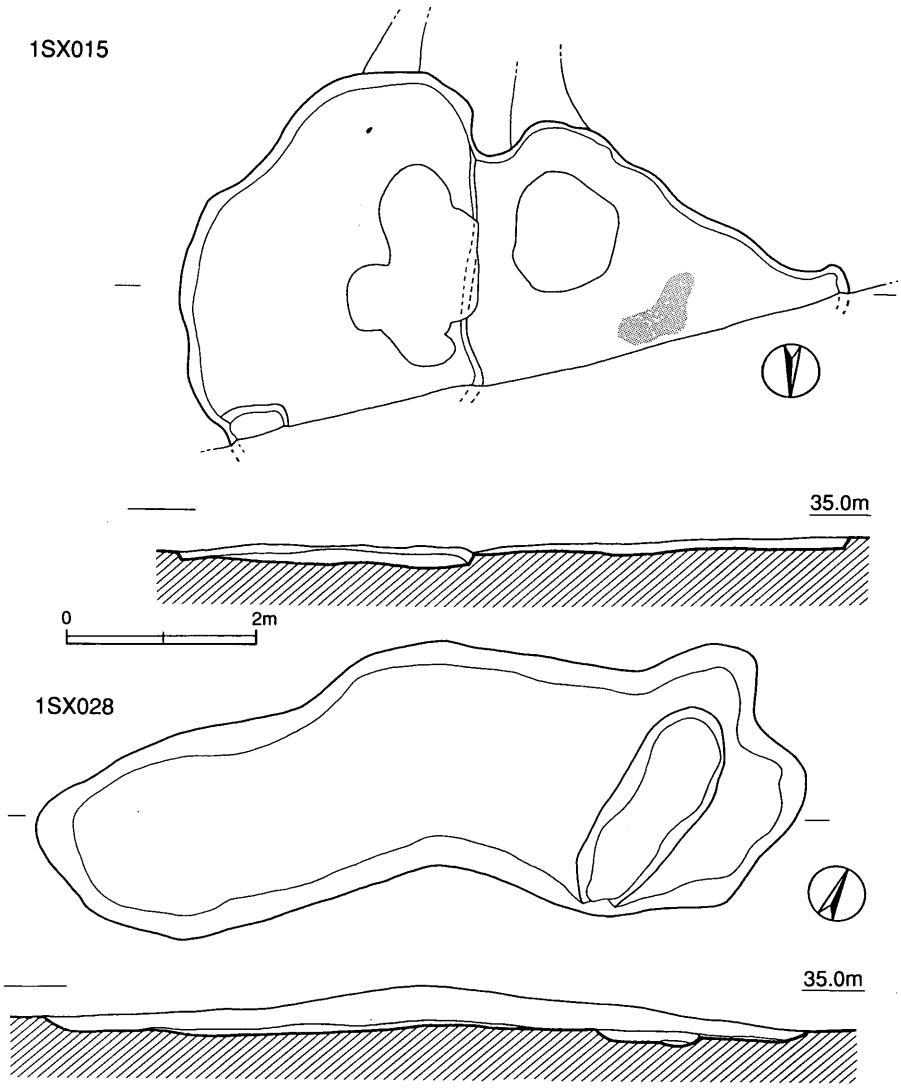


Fig. 17　1SX015・028実測図（1/80）

その他の遺構

1SX015（Fig. 17）

調査区の北側で検出された不定形の溜まり状遺構で1SD002に繋がる。上面はかなり削平されているらしいが、1SD002の溝底と比較しても極端に深いものでない。小型の手づくねの器台が多数まとまって出土している（図中アミ部分）。

1SX016・017・018・019・021（Pla. 13）

1SD001の汀線南側の黒色土層上面に検出された土器の集積群で、まとまりのある群ごとに個別番号を与えた。図示した出土土器は古墳時代前期（布留式土器古段階）の古いものを多く

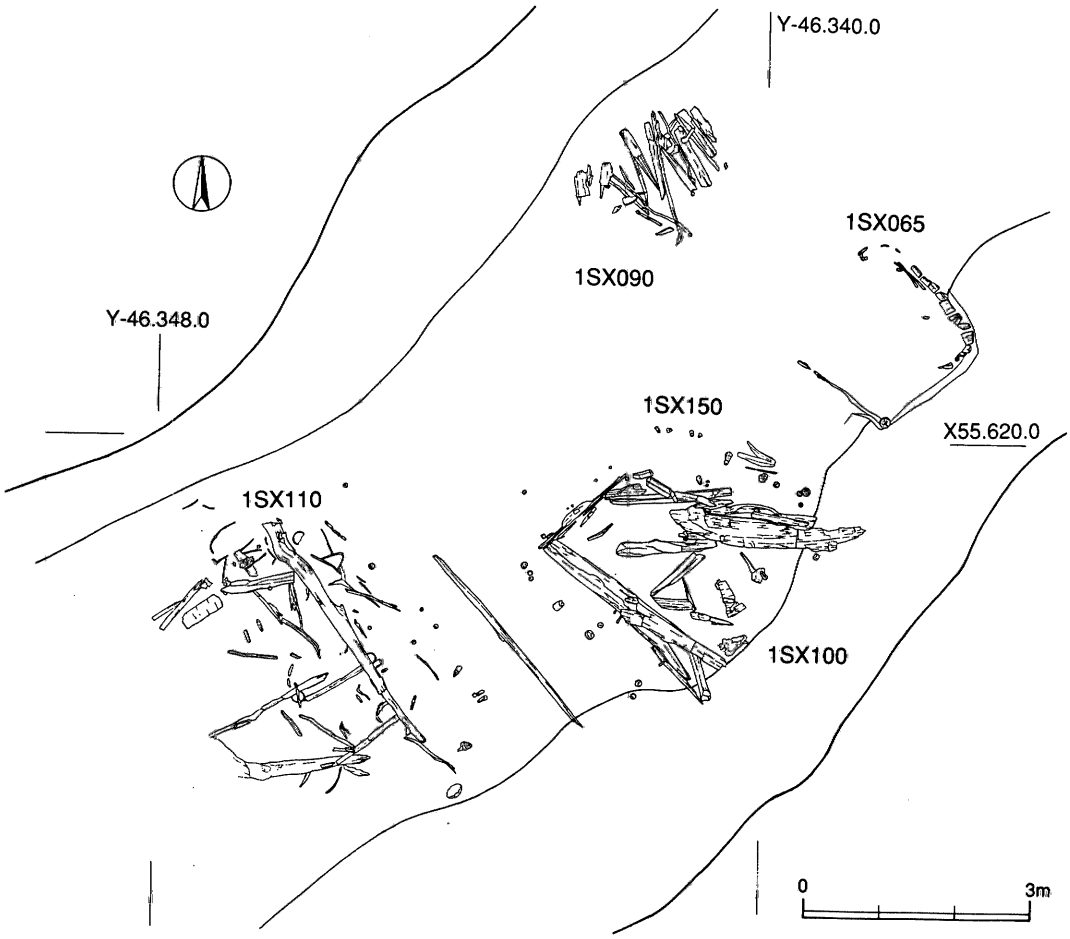


Fig. 18　桝状遺構等配置図（1/100）

含むが、集積した時期は土層から溝の最終埋没時期と考えられる。古い時期の遺物は調査区中央の住居跡群が機能していた時期の所産で、該期の遺構が削平、流出するのに伴って集積化したものと思われる。

1SX028（Fig. 17）

溝状遺構1SD020と1SD075が合流する場所の北岸にある溜まり状遺構で、粗い砂が地山を抉って堆積していることから自然作用によって出来た溜まりの可能性がある。

1SX039

掘立柱建物1SB035の南側にあるピットで柱材が遺存していた。有機的関係を持つピットが見当たらない。（以上山村）

1SX065（Fig. 19、Pla. 14）

1SD001南岸に接するように作られた遺構で、後述する1SX100の東側に位置する。溝岸を2m×1.8m程度加工し、岸中ほどに平坦部分を作り出している。その平坦部分の壁に沿うように

矢板を打ち込みその前面の所々に杭を打ち込む。矢板は方形の区画を形成するように打ち込まれ、西側では矢板の打ち込まれた跡が溝状を呈して残っていたが、北側の遺存状況は悪い。しかしながら当初の規模は1.9×1.9m程度に復原されよう。南隅にのみ直径12cmの柱がある。遺構は1SD001腐食土層上面に構築されていた。

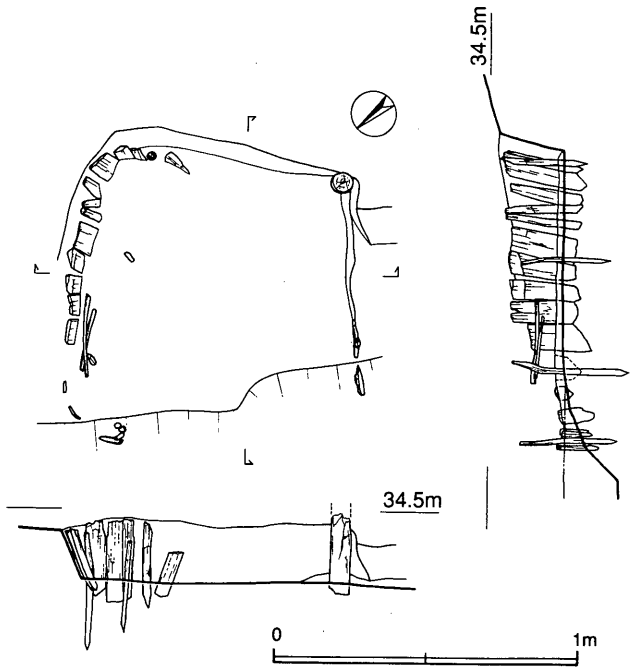


Fig. 19　1SX065実測図（1/25）

1SX090（Fig. 20、Pla. 15・16）

1SX001の中ほどで1SX065の北側に、杭を中心とした材を横に寝かせて並べた遺構である。範囲は2.0m×1.7mで、腐食土層の上面に構築されていた。杭などを打ち込んで固定した形跡はないがかなり意識した並べ方をしており人為的な物であることは確実である。用途については明らかではない。

1SX100・105（Fig. 21、Pla. 15・17～20）

1SD001南岸に接するように作られた桝状遺構で、1SD001腐食土層の上面に構築されている。ここでは桝状に作られた本体部分を1SX100とし、その周りを巡る杭列を1SX105として捉えているが、後述するように本来は同一の遺構であると判断される。1SX100は、主に建築部材を転用して作られるもので、現状での長さ3.26m、溝側の幅1.55m、岸側の幅3.20mの台形状を呈している。深さは溝側でおよそ0.3mである。岸側には木材を用いた施設はない。形状は大きく変形しているが、これに関連する1SX105の構造からみて材を杭によって挟み込むようにし固定していたと考えられる。このことから、当初は東西2.55m、南北3.1mの僅かに南で広がる台形状を呈していたと考えられ、北側の板材には扉材2枚（把手側が表）が転用され、西側は長大な板材と自然木を、東側では扉材（把手側が表）2枚と自然木を使っていた。また囲いのコーナー部分には青灰色粘土を用いて板同士の隙間を埋める作業をしており、何らかのものを蓄える目的で構築されたと考えられる。遺構構築にあたって溝岸を加工する

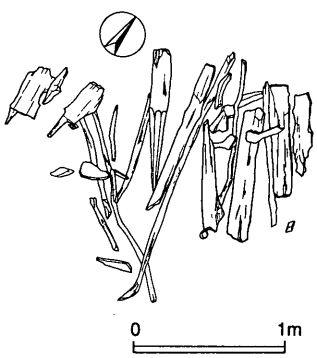
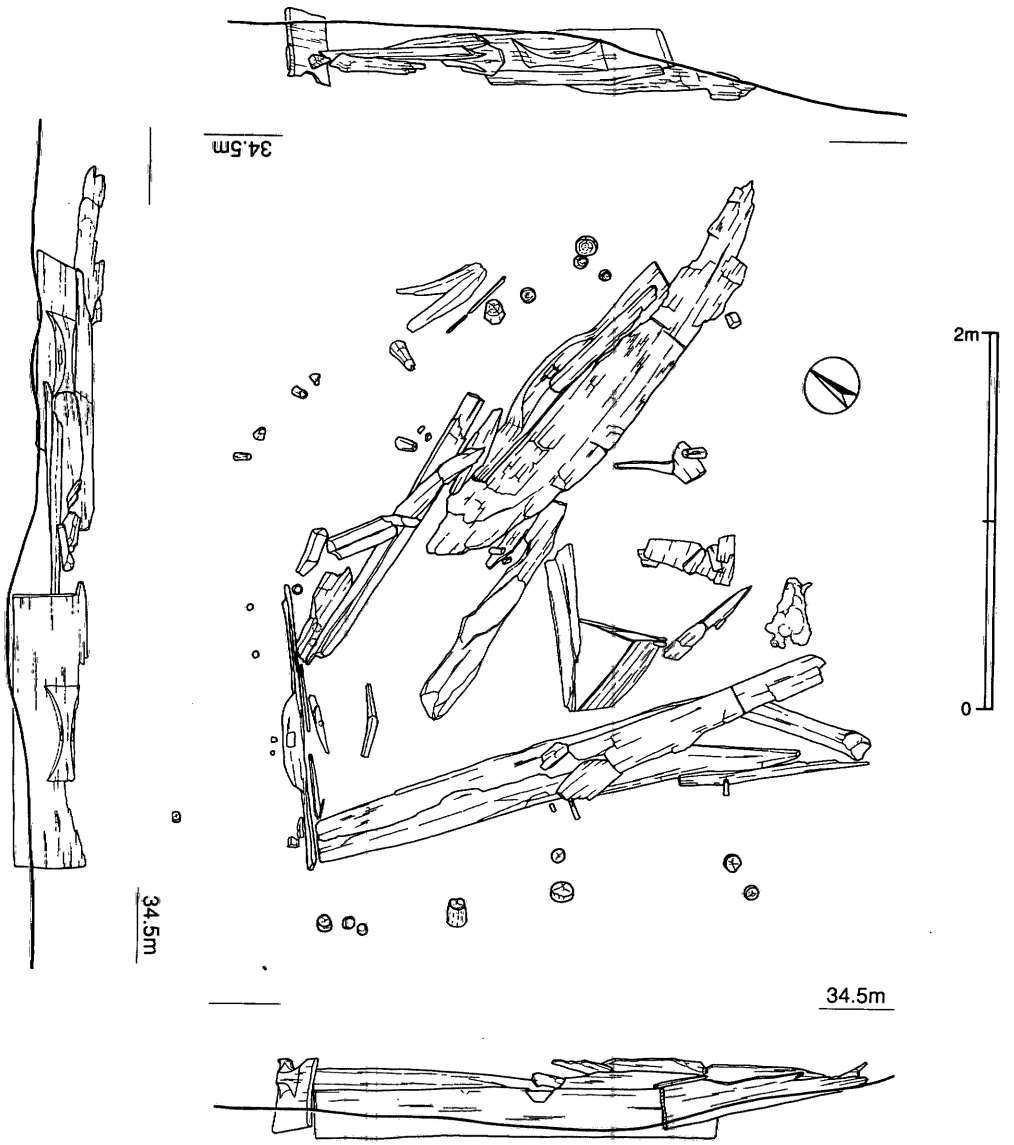


Fig. 20　1SX090実測図（1/50）



※見透図は1SX100のみで、1SX105杭列は除外している。

Fig. 21　1SX100・105実測図（1/40）

作業は確認されなかった。なお、遺構内の埋土は大きく3層に分層され、下から青灰色砂層、黄灰色砂層、黒色腐食土層の順でほぼ水平に堆積する。この黒色腐食土層の花粉分析の結果ではスギが高率に出現している事実があり、遺構内の状況と溝（1SD001）の状況が異なっていること（付編参照）から、遺構の崩壊がすすみつつも内部まで大きく撹乱するには至っておらず、内部の状況はかろうじて保たれていたといえる。また腐食土中からは土器、木器が多く出土したが、内部はあまり撹乱されていないとは言え遺構が崩壊途中の姿であることから、すべての遺物がこの遺構に直接関連するものとはいえない。

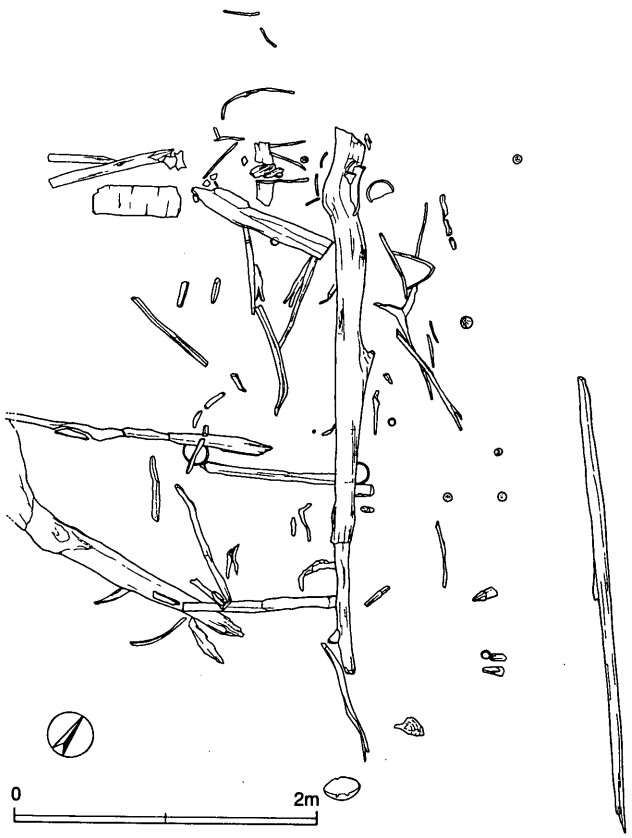


Fig. 22　1SX110実測図（1/50）

1SX110（Fig. 22、Pla. 15・16）

1SD001を堰き止めるように長さ3.61mの自然木を南北に横たえたもので、本来は杭で固定していたようである。他の検出材を観察すると先の自然木の小口付近のものはこの材に直交するように位置しており、西側が調査区域外に延びるものの当初は長方形を呈する囲み状の遺構であったと考えられ、復原長は南北約3.6m、東西2.1m以上になる。囲みの中ほどにも直交する材が存在し、これも当初の形状を伝えるものであれば内部に仕切があった可能性も考えられる。また1SX100との間に横たわる長さ3.06mの材もこの遺構に帰属するものと考えている。

1SX065・090・100（105)・110の4つの遺構は1SD001の腐食土層が堆積したあとで構築され、一箇所に集中して存在している（Fig. 18)。互いに何らかの関係を有していたものと考えられる。

（以上狭川）

（2）出土遺物

1．土器

各遺構及び層位から出土した遺物の個別報告を行なう前に、多量に出土した土師器坏形土器について説明の簡素化をはかるため、簡単な分類を行なっておきたい。

分類の視点　1．器形の特徴による分類、2．内面の調整、3．外面の調整、4．土器表面における黒色仕上げ（漆）の有無、の4点にポイントを置き分類を試みた。

1．器形の特徴による分類　ここで分類の対象となる椀形土器は、口縁部の特徴からI・II類に分けられる。I は口縁部が僅かに内湾するもの、II は口縁部が外反するものを指す。II は今回の調査では資料数が乏しく、まとめてはいるものの、形状を見るかぎりさらに細分したほうが好ましいと考えられる。また両者とも法量の差で細分を行なえる可能性が残されている。

2．内面の調整　器形の成形の後に行なわれる調整は、観察結果から次の3種が確認される。（1）コテ状の工具を用いて内面を平滑にする行為を指す。痕跡は底部に顕著で中央部から放射状に残っていることが多いが、口縁部付近でも観察できる資料がある。この痕跡は古代末～中世の土師器にみられるミガキbにきわめて類似した痕跡であるが、ミガキbよりも強く施されていることや作業工程から窺うかぎり、調整段階の痕跡とするよりも成形段階に近い痕跡と考えたほうが好ましいように思われる。（2）ナデを指す。ナデは口縁部付近ではすべてヨコナデされるが、体部内面では縦方向や粗雑な円周を描くものなどがある。これらのナデは先端が平坦で且つやや硬質の工具を用いているものとみられ、擦痕が顕著に観察される。（3）ヘラミガキ調整を指す。手持ちのヘラミガキで作業の際に土器を手の中で回転させるようにし、4～5回程度に分けて磨かれている。

これらの調整を作業工程に照らし合わせてみると、1→2→3の順に行なわれていることがわかる。しかし、すべての土器で全工程が行なわれるのではなく、2で止るものや3まで行なわれるものなど様々である。よってヘラミガキの行なわれている資料は最も丁寧に仕上げられたものと言える。なお、分類では最終調整の痕跡で判断しているが1の痕跡を著しく残す資料も2の工程が施されていることがほとんどである。したがって土器製作工程から考えればこれらの資料はすべて2の範囲で分類されてしまう。しかしながら痕跡の有無を明確に示す立場を採るものとし、例えば一つの資料中に1・2の両痕跡が確認された場合、1として分類している。よって2としたものは1の痕跡が全く確認できない（強いナデによって痕跡が消滅してしまった）資料群を指すものと理解されたい。

3．外面の調整　外面が手持ちのヘラケズリ調整されているもの（a）とヘラミガキ調整されるもの（b）の大きく2種に分けられる。b に関しては a の工程の後に行なわれており、より丁寧な調整と言える。この他に小数ではあるが、外面に縦方向のハケ目を施した後ヘラケズリを行なうもの（c）やハケ目調整で終わるもの（d）、叩きを行なった後ヘラケズリを行なうも

の（e）などが観察される。aとしているものの前段階としてcやeが行なわれている可能性もあるが、現状での観察結果ではcやeは特殊な調整として捉えておいたほうが良さそうである。

なお、いずれの資料も口縁部付近はヨコナデ調整である。

4．表面における黒色仕上げ（漆塗布）の有無　今回出土している資料の中に光沢のある黒色を呈するものがいくつかあり、これらは観察の結果なんらかの塗料が塗布されているものと考えられた。現状ではこれを漆とみるのが最も有力である。今回は黒色仕上げを施した資料に′記号を付しておく。

以上1～4の分類は、1が大分類、2・3が小分類とし4は補足として扱う。これを表記する場合は次のように行なう。

坏Ⅰ－1－b　　坏Ⅰ－2－a′

以下これに従って報告を行なう。また、今回の出土資料中にみられる高坏は坏部がここに分類した一群の坏と同一のものを乗せているため、同じ分類呼称を用いることとする。ただし脚部の形状が2種に分けられるため、中分類としてA・Bを用い、脚部の内側が中空のものをA、中空でないものをBとしておく。

なお今回の分類はあくまでもこの報告書における記載の便をはかることを主たる目的としており、この分類による編年的検討や詳細な型式分類に対して、耐えうるものとは考えていない。

住居跡出土土器

1SI010出土土器（Fig.23、Pla.21）

土師器

高坏（1）　坏部の口縁は外方に反り、脚部もやや踏ん張るような形状を呈している。坏部の調整は内面がナデ、外面が手持ちヘラケズリ、脚部は外面が縦方向のケズリ、内面はヨコナデ及びナデである。II－A－2－a 類。住居跡埋土の黒色土中から出土した。

1SI040出土土器（Fig.23、Pla.21、別表1）

土師器

坏（2）　内面が風化しているが、II－2－a 類と考えられる。

鉢（3）　口径10.5cm、器高10.3cmを測る。平底に近い底部を有し、口縁部は僅かに外反する。口縁部付近の調整はヨコナデ、体部外面は横及び斜め方向のハケ目、内面は手持ちのヘラケズリである。

器台模造品（4．5）　両者とも指圧による成形で、手捏ねによっている。口径は2.1～2.3cm、器高は3.1～3.5cmである。

2～5は住居跡の床面に近い埋土中から出土した。

甕（8）　体部中位以下及び頚部以上はないが、頚部の口径21.6cmを測る。外面はハケ目、

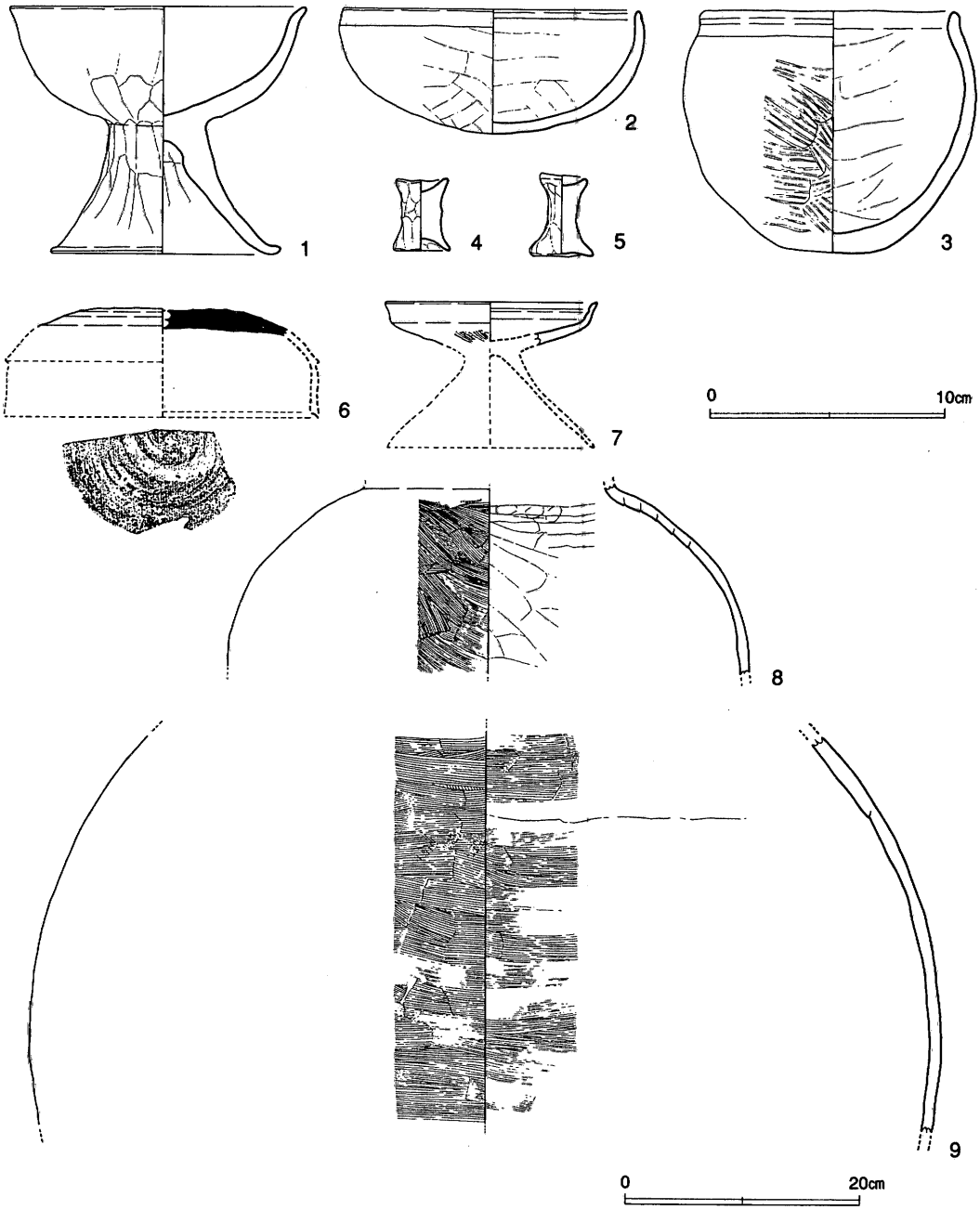


Fig. 23　住居跡出土土器実測図（小型品1/3、大型品1/6）

内面は体部がヘラケズリ、頸部付近が指圧の後ナデを施している。中央炉に据えられる炉の置き台として検出された遺物である。

1SI060出土土器（Fig. 23、Pla. 21）

土師器

甕（9） 体部のみの資料であるが、最大径39.0cmを測る。調整は内面外面とも横方向のハケ目である。中央炉に据えられる炉の置き台として検出された遺物である。

須恵器

坏蓋（6） 天井部のみの資料である。外面は回転ヘラケズリ、内面はヨコナデ及びナデであるが、それに先行して同心円の当て具痕跡（ナデにより不明瞭）が認められる。住居跡の床面に近い埋土の腐食土中から出土した。

1SI070出土土器（Fig.23、Pla.21）

土師器

器台（7） 坏部のみの資料で、口径9.0cmを測る。口縁部はやや外方に開き気味で、内面外面ともヨコナデされる。外面の一部にハケ目が認められる。住居跡柱掘り方内から出土した。

土壙出土土器

1SK005出土土器

（Fig.24、Pla.22）

須恵器

坏蓋（1．2） 口径11.9・12.5cm、器高4.6・4.1cmで天井部の大半を回転ヘラケズリする。体部及び天井部内面はヨコナデされる。

坏（3．4） 口径10.6・9.9cm、器高5.2・4.7cmで、底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面の一部にナデがみられる他はヨコナデである。

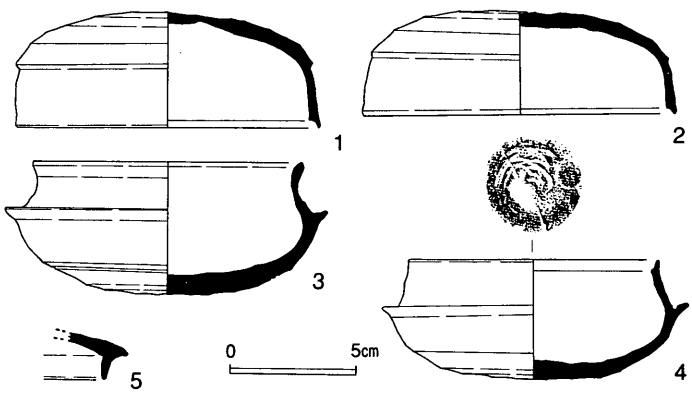


Fig. 24 1SX005出土土器実測図（1/5）

壺蓋（5） 返りを有する蓋の口縁部とみられる資料である。調整は残存範囲でヨコナデである。

1SK022出土土器

（Fig.25、Pla.22）

土師器

高坏（1） 外面を叩きで仕上げ、内面は指圧痕跡が残る。脚端部は横方向のナデである。脚端部の口径は9.9cmを測る。

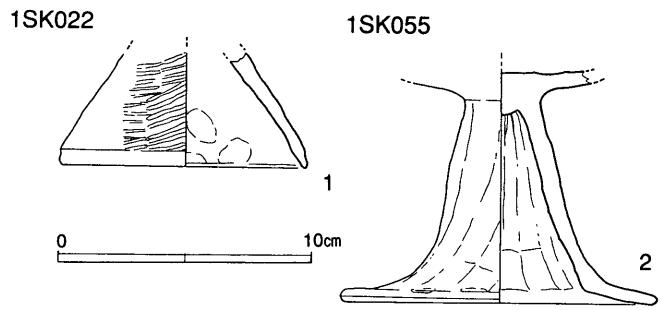


Fig. 25 1SX022・055出土土器実測図（1/3）

1SK055出土土器（Fig. 25、Pla. 21）

土師器

高坏（２） 脚端部の口径は12.6cm、脚部の高さ8.0cmを測る。脚部は内面外面とも手持ちのヘラケズリで、開脚部はヨコナデされるが一部に指圧痕跡を残している。

溝出土土器

1SD001灰色土層出土土器（Fig. 26、Pla. 22）

弥生土器

壷（１） 底部径5.0cm、胴部最大径8.4cm、現存器高7.0cmを測る。胴部中位から上には上下２条の沈線に区画された中に４条の沈線による鋸歯文を配する。体部外面から底部にかけてはナデ、内面は指圧ののちナデである。

土師器

鉢（２） 口径10.5cm、器高8.1cmを測るもので、口縁部は直立気味である。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリで口縁端部付近まで及び、その端部はヨコナデによっている。

壷（３） 口縁端部を欠失する。頚部径5.9cm、胴部最大径14.0cmで体部の外面はヘラケズリされた後丁寧なミガキが施される。ミガキは口縁部外面にまで及ぶ。内面は頚部付近がヨコナデ、体部がヘラケズリで肩部付近では粘土紐帯の痕跡が確認される。

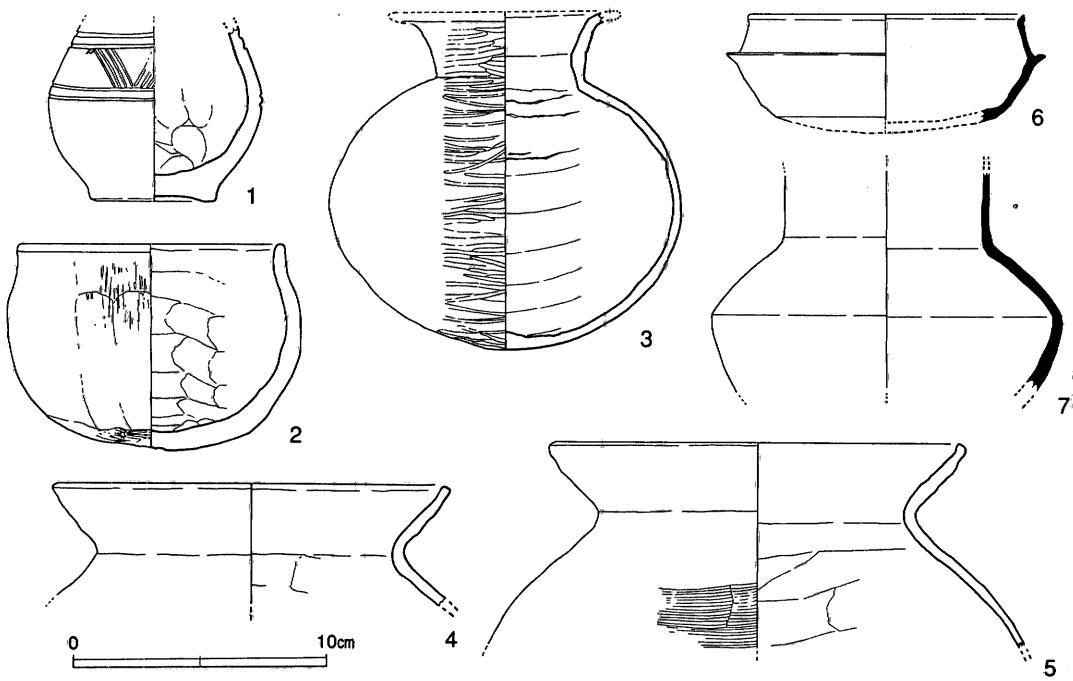


Fig. 26 1SD001灰色土層出土土器実測図（1/3）

甕（４．５） 口縁部は「く」字状を呈し、５の端部はわずかに摘み出される。器面の調整は口縁部付近がヨコナデ、内面がヘラケズリ、外面は５にハケ目がみられる。口径は16.0・16.7cm。

須恵器

坏（６） 口径13.0cmで、底部外面を回転ヘラケズリする。

壷（７） 頚部径8.3cm、胴部最大径13.9cmを測る。胴部の外面はカキ目風の調整、他は強いヨコナデで条痕が残る。

1SD001黒色土層出土土器（Fig.27～32、Pla.23～33、別表１）

出土した土器の多くは1SX100のある付近から西側に集中して検出されている。次の腐食土層出土土器についても同様の傾向にある。

土師器

坏（１～66） 先の分類に従って記述してゆく。１～25はI－1－a 類で、口径は10.8～13.6cm、器高は4.8～6.6cmを測る。口縁端部が内湾する点でＩ類の範疇で捉えているが、ほぼ直立に近いもの（11・13）や著しく器壁の厚いもの（3・13）などがあり将来は別の分類で扱うべき資料かも知れない。また、底部外面にヘラ記号を有する資料（3・9・13・14・20)もある。26～41はI－2－a 類で、口径11.3～13.6cm、器高4.2～6.1cmを測る。前者同様一部にヘラ記号を保有するもの（26・32・37）がある。また32の底部外面にハケ様の痕跡が残っている。42はI－1－c 類である。ハケ目は口縁部の外面付近に限られ体部はヘラケズリである。その点ではａ類の範疇で捉えるべき資料かも知れない。43～46は内面のみヘラミガキを行なうI－3－a類で、口径10.9～11.9cm、器高4.8～5.9cmを測る。このうち45以外は黒色仕上げが施されていることからI－3－a′類である。47～61は内外両面にヘラミガキを行なうI－3－b 類である。口径11.2～14.2cm、器高5.0～6.8cmを測り、やや浅目のもの（61）も含まれるが同一分類の範囲で差し支えなかろう。54・57の底部外面にヘラ記号がある。また黒色仕上げされるものは、47～49・53・55～57・59～61である。62～64はII－2－a類である。口径12.2～13.2cm器高6.2～7.3cmを測り、やや深めのものである。口縁部の外反の度合いが個体によって微妙に異なっており、今後の資料増加による再検討が待たれる。なお62・63にはヘラ記号がある。65・66はII－3－b 類である。口径10.4・12.4cmで、65は口縁部を大きく開くもので高坏の坏部である可能性も考えられる。両面ともヘラミガキされるが黒色仕上げは施されていない。

高坏（67～72） 67は口縁部が外反するII－2－a 類の坏部を保有している。脚部を欠失するが底部の状況から高坏と判断した。口径13.0cm。68・69は坏部がI－3－b 類で捉えられる。脚部については68が低脚であり台付き坏とも称すべきものである。69はA類に属する脚部をもち、外面はヘラケズリ調整である。両者とも口径は12.5cmで、黒色仕上げは成されていない。70・71はA類の脚部で、70は外面の調整にハケを用い、71は横方向の手持ちヘラミガキである。

両者とも下位に穿孔がある。72はB類の脚部で、外面に縦方向の手持ちヘラミガキを施す。

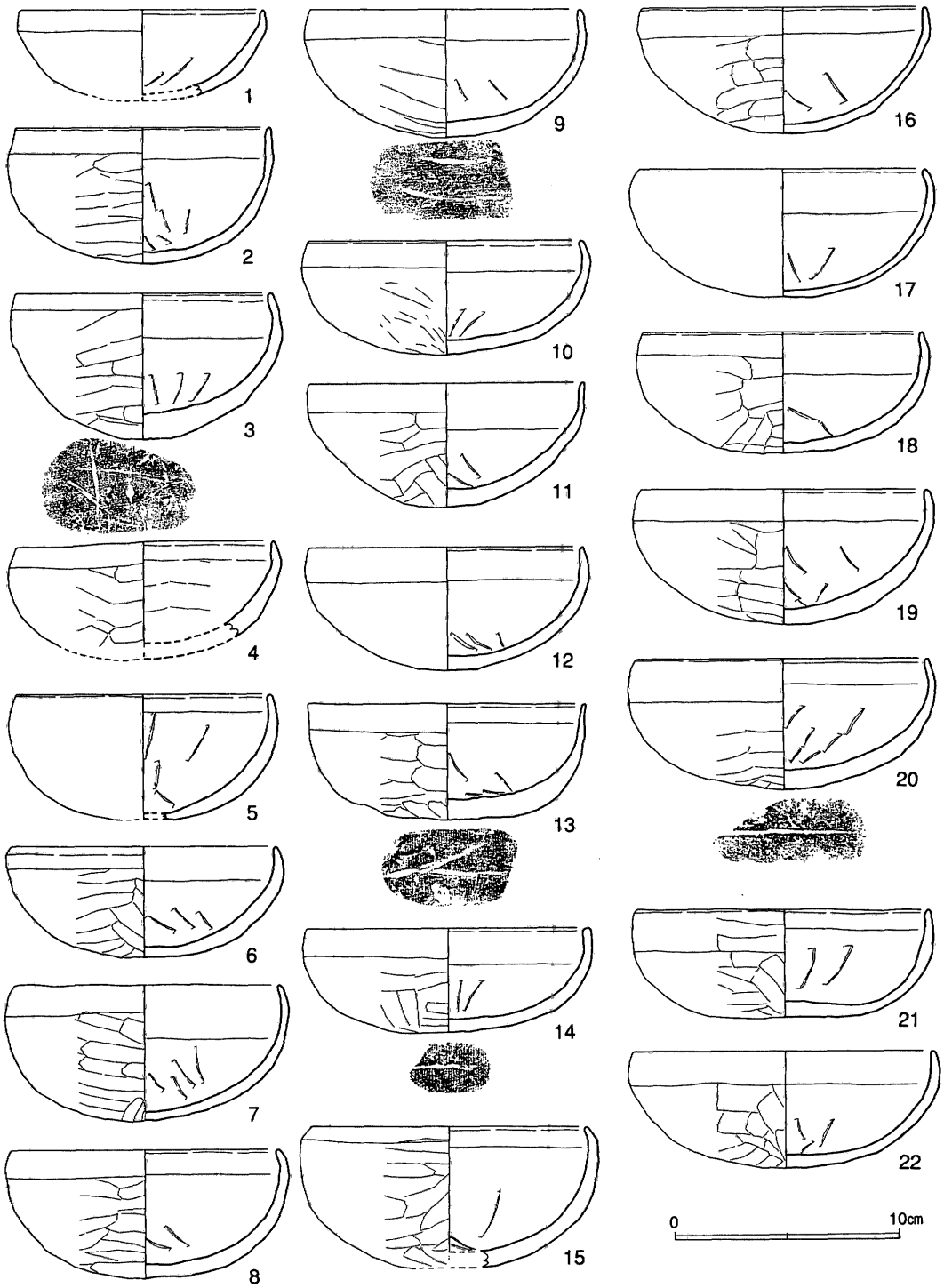


Fig. 27　1SD001黒色土層出土土器実測図Ⅰ（1/3）

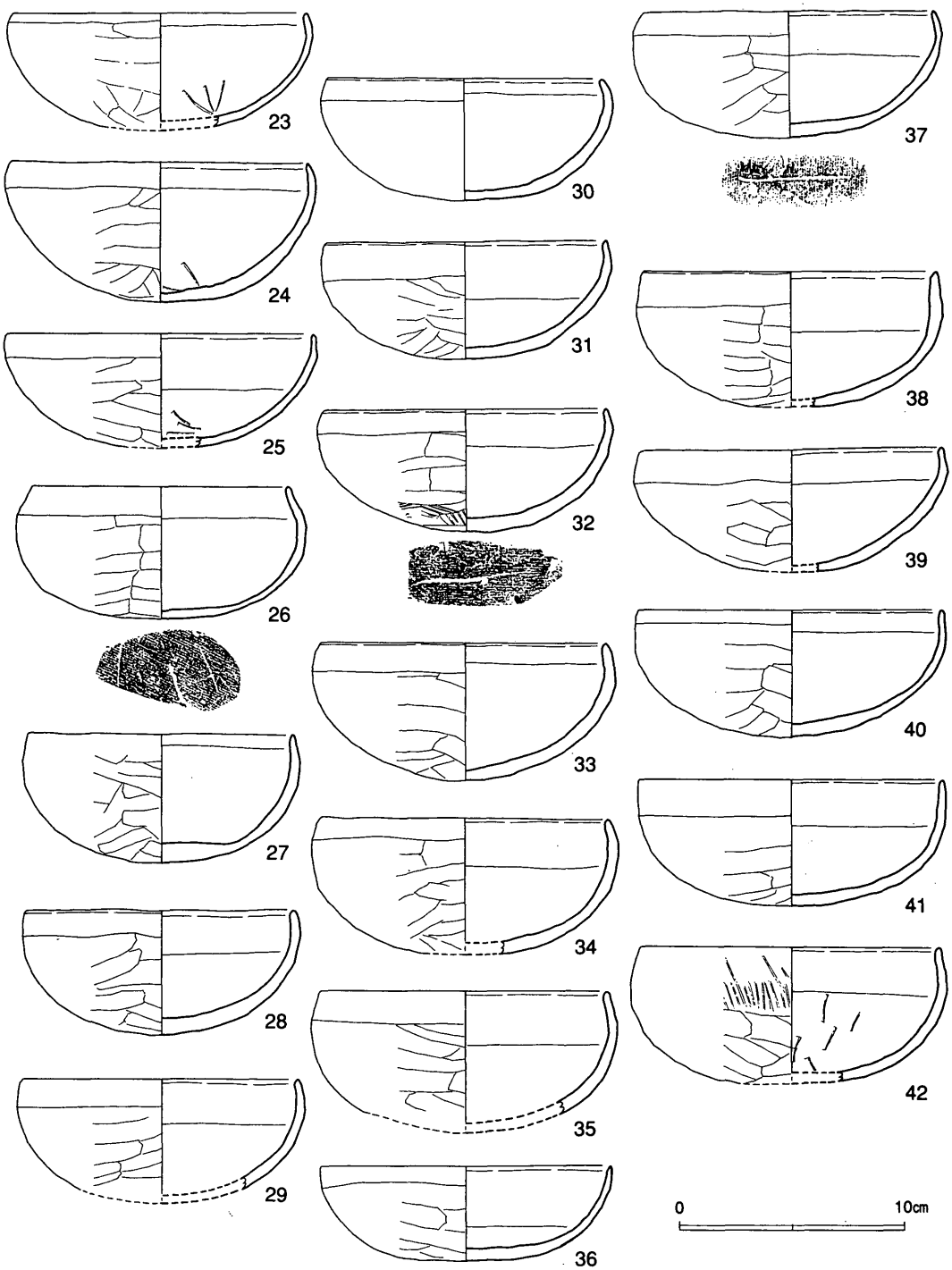


Fig. 28　1SD001黒色土層出土土器実測図Ⅱ（1/3）

壷（73～77） 73は、口径10.1cm、胴部最大径11.9cmの直口壷である。頚部内面及び胴部中位に指圧痕がみられる。頚部内面から口縁部外面にかけて横方向のヘラミガキ、頚部外面は縦方向のヘラミガキを施す。胴部外面は一部に縦方向のヘラミガキが観察されるが、基本的には

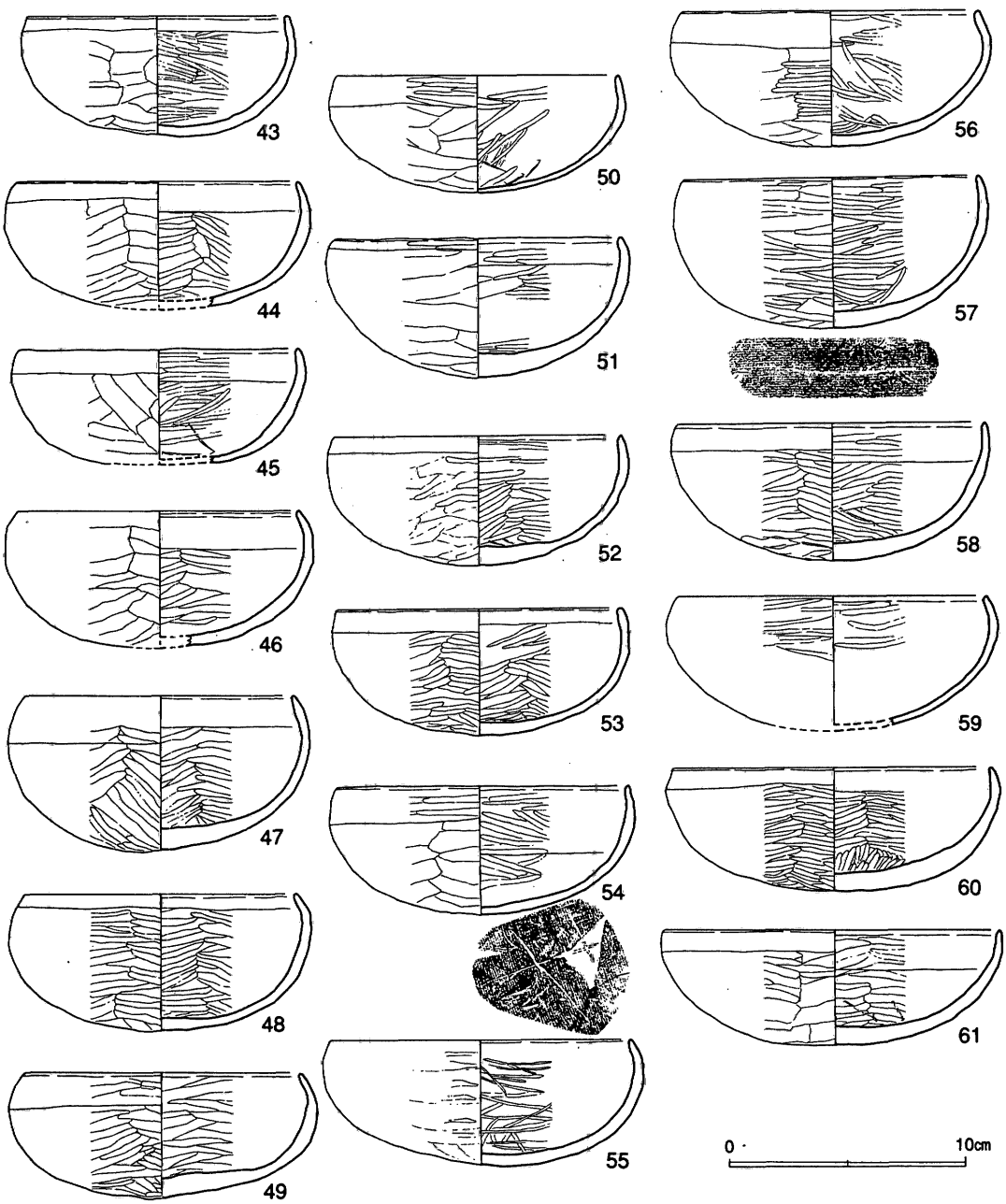


Fig. 29 1SD001黒色土層出土土器実測図Ⅲ（1/3）

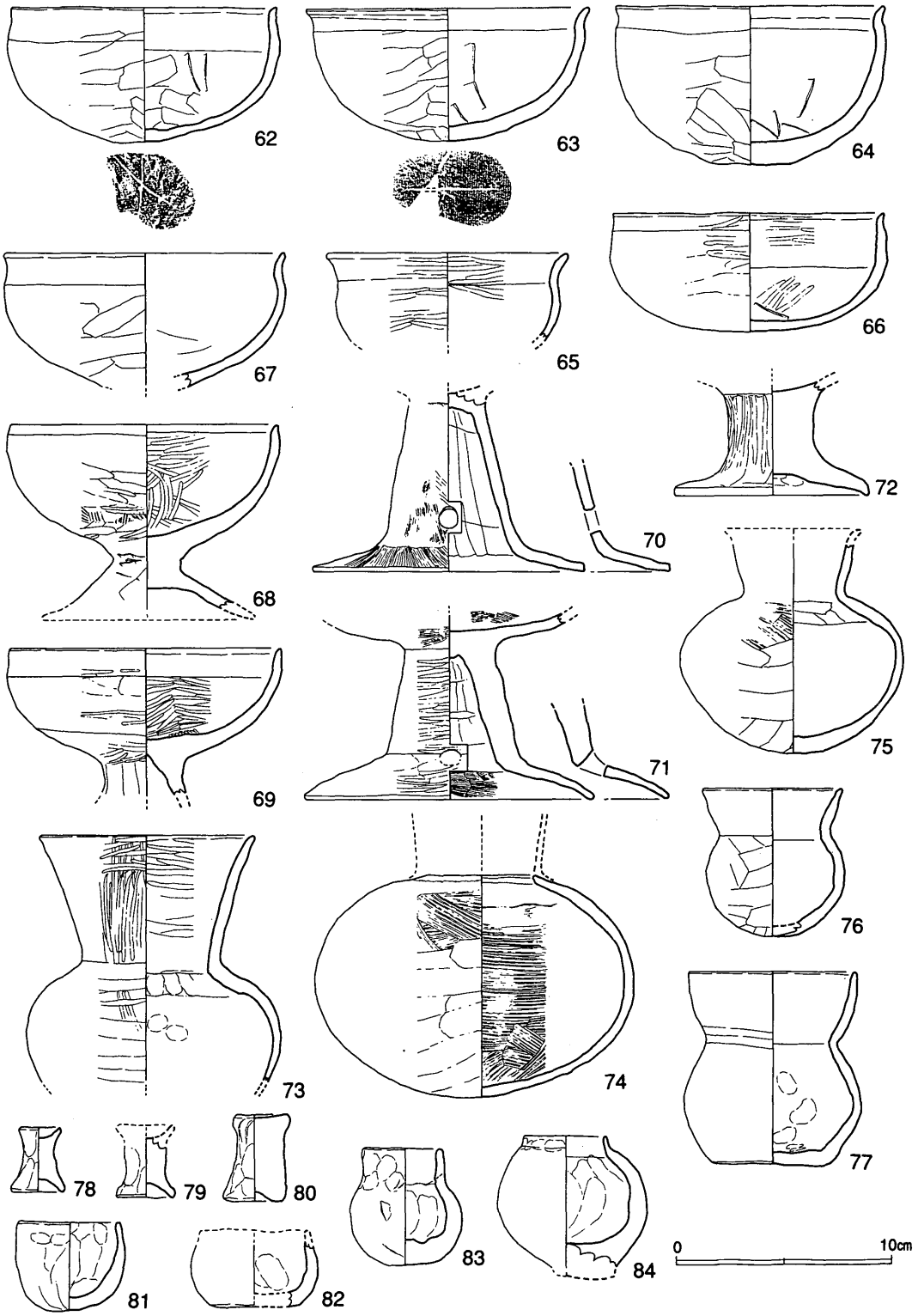


Fig. 30　1SD001黒色土層出土土器実測図Ⅳ（1/3）

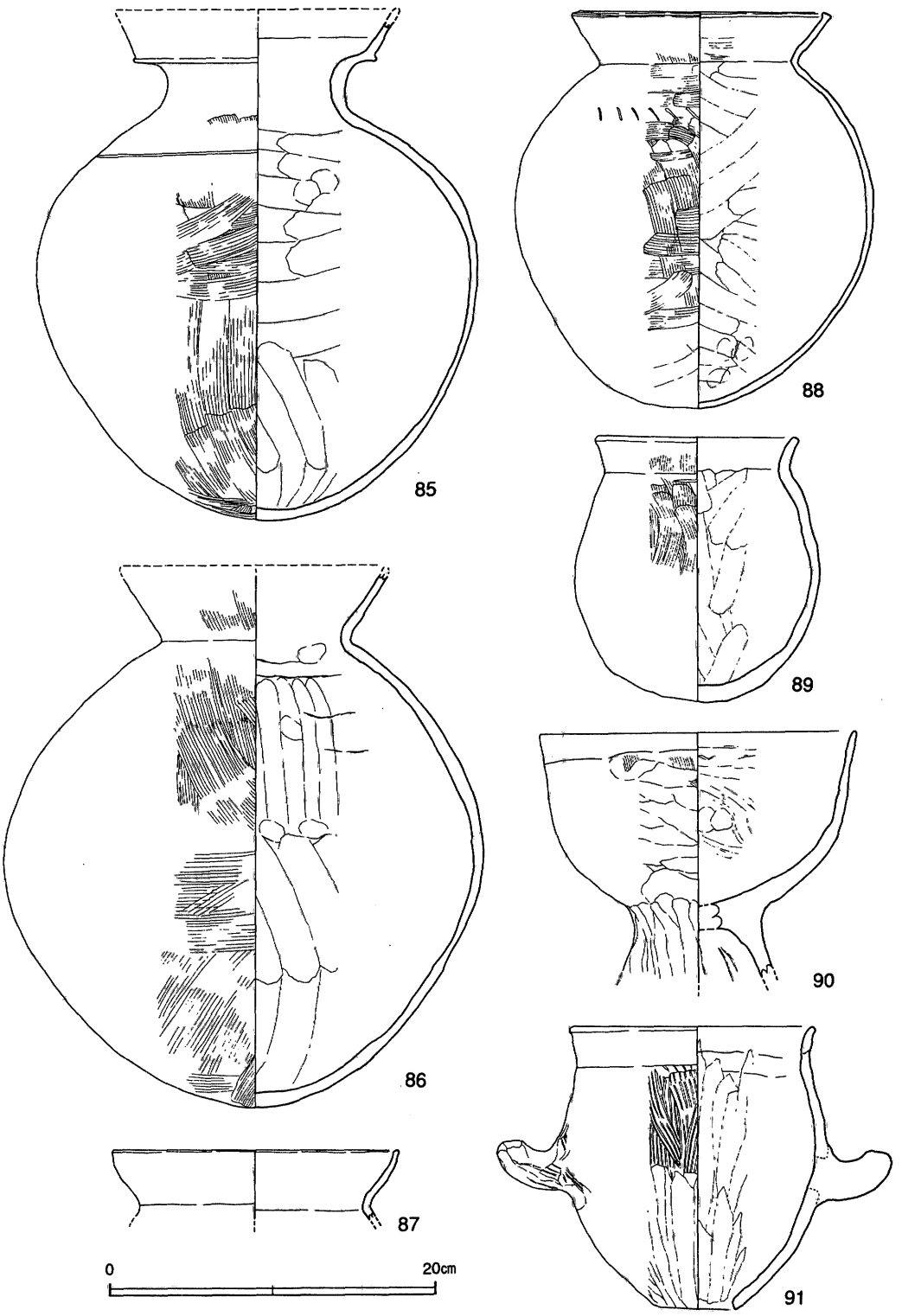


Fig. 31　1SD001黒色土層出土土器実測図Ⅴ（1/4）

横方向でやや幅の広いヘラミガキである。表面は黒色仕上げが成されている。74は胴部最大径14.8cmを測るもので、直口壷とみられる。内面及び外面の上位にハケ目が認められ、他は横及び斜め方向のヘラケズリである。75は胴部最大径10.5cmを測る。胴部内外面ともヘラケズリで成形されるが内面はナデにより再調整されている。肩部付近にハケ目がみられる。76は小型丸底壷で口径6.4cm、器高6.8cmを測る。口縁部はヨコナデ調整される。77は口径7.7cm、器高8.8cm、底径5.5cmを測る平底の壷である。内外面とも風化が著しいが口縁部はヨコナデされる。

器台模造品（78～80）３点とも指圧による成形で、手捏ねによっている。

小鉢（81・82） 手捏ねによる成形で指圧の後縦方向のナデで調整する。81は口径4.7cm、器高4.1cmで平底タイプである。

小壷（83・84） 手捏ねによる成形で指圧の後ナデで調整する。83は口径3.7cm、器高5.4cm、底径2.4cmを測る平底タイプである。84は口径4.0cm、器高6.3cm程度に復原される。

甕（85～89） 85は複合口縁の甕である。口縁端部を欠失するが、口径17.5cm程度、器高31.5cm程度に復原される。肩部下位から口縁部内面にかけてヨコナデ、胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ目である。肩部に１条の沈線が廻っている。86は最大径が胴部中位よりも下位にある。その径は29.5cmである。調整は外面が全面にわたってハケ目調整され、頚部から口縁部にかけてヨコナデされる。内面は胴部をヘラケズリし、口縁部をヨコナデ調整する。87は口径17.8cm。88は「く」字状を呈する口縁部を有し、その先端は摘み出される。口径16.2cm、器高24.4cm、胴部最大径22.0cmで、外面はハケ目、内面はヘラケズリ、口縁部は内外面ともヨコナデされる。肩部に斜め方向の刻み目が６個連続して配されるが、全周しない。89は口径12.7cm、器高16.2cmの小形の甕である。調整は外面上位にハケ目がみられるが下位はナデ、口縁部付近はヨコナデ、胴部内面はヘラケズリである。

脚付き鉢（90） 口径19.4cm、鉢部分の高さ約11cmを測る。調整は口縁部付近がヨコナデ、鉢体部外面がケズリ気味のナデ、内面は斜め方向のナデである。脚部はヘラケズリによる。

甑（91） 口径15.0cm、器高17.2cm、底径4.6cmを測る。胴部の２方に把手をつける。把手は把手末端を柄状に工作し、甑胴部の穿孔部分に差し込み、粘土を補足したのちハケ等で調整している。口縁部は外面が丁寧なヨコナデであるのに対して内面は粗いものである。胴部内面および外面の下半は縦方向のヘラケズリ、外面上位はハケ目である。

須恵器

坏蓋（92～95） 口径11.3～12.2cm、器高4.3～4.7cmを測る。天井部の多くを回転ヘラケズリ調整し、他の部分をヨコナデ及びナデ調整している。94の天井部外面にヘラ記号、天井部内面に同心円の当て具痕跡が観察される。

坏（96～99） 口径10.6～11.0cmを測る。底部の大半を回転ヘラケズリしている。98の内面

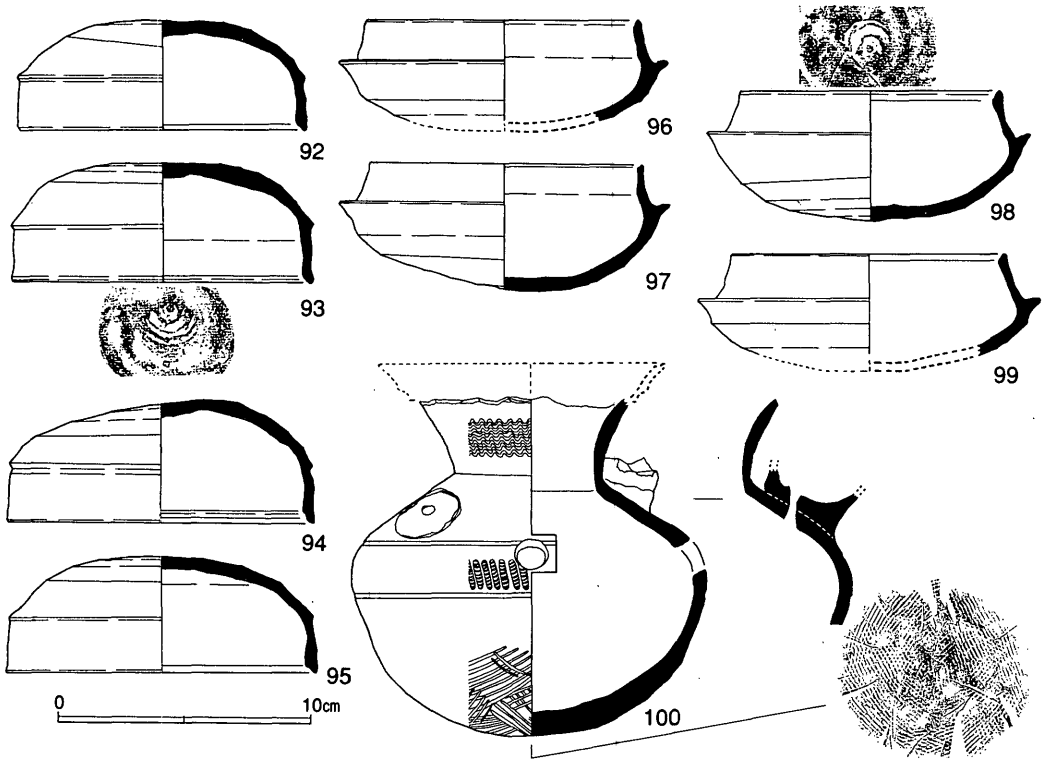


Fig. 32　1SD001黒色土層出土土器実測図Ⅵ（1/3、瑯の拓本は1/6）

底部に同心円の当て具痕跡がある。

子持ち瑯（100）　祭祀に使用されたためか口縁部と付属部位を故意に打ち欠いている。肩部と体部の境目付近に直径1.3cmの穿孔がある。付属部位は肩部の４方に貼り付けられ、すべて底部に穿孔があり貫通している。瑯本体の調整は底部が平行叩きで、叩きは大きく４方向に打ち分けられている。内部の同心円当て具痕跡の部分はナデにより擦り消される。他の部分はヨコナデである。表面の装飾は付属品のほか口縁部外面に12条の波状沈線、胴部と肩部の境部分で２条の沈線に挟まれる形で縦方向の刻み目を入れている。

1SD001腐食土層出土土器（Fig. 33・34、Pla. 33～37、別表１）

土師器

坏（1～26）　1～14はⅠ-1-a類で口径11.6～13.2cm、器高4.3～6.5cmを測る。このうち８は口縁部が僅かに外反する様相を呈していることと、器高が他に比較して著しく低いことから別の分類で捉えたほうが好ましい資料かも知れない。また、３と10の外面底部にヘラ記号がある。15はⅠ-1-c類で口径13.2cm、器高5.2cmを測り、外面にハケ目の痕跡が認められる。16はⅠ-1-e類で口径12.0cm、器高6.2cmを測る。外面を叩きにより成形した後にヘラケズリを行ない調整する資料である。17はⅠ-2-a類で口径13.2cm、器高5.5cmを測る。18はⅠ-3-a′類で内外面共に黒色仕上げが施される。口径13.2cm、器高5.9cm。19～23はⅠ-3-b類で、口

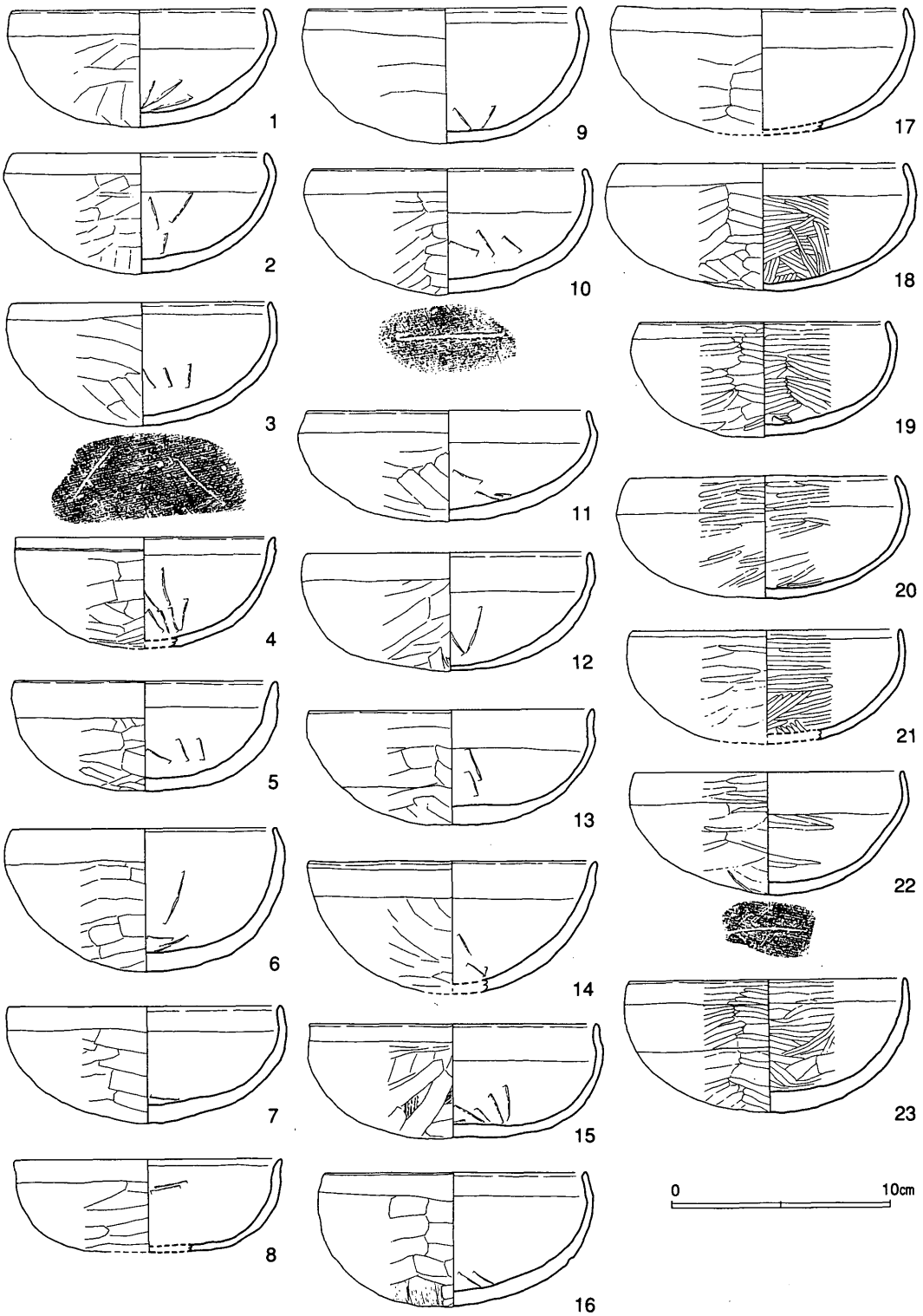


Fig. 33　1SD001腐食土層出土土器実測図Ⅰ（1/3）

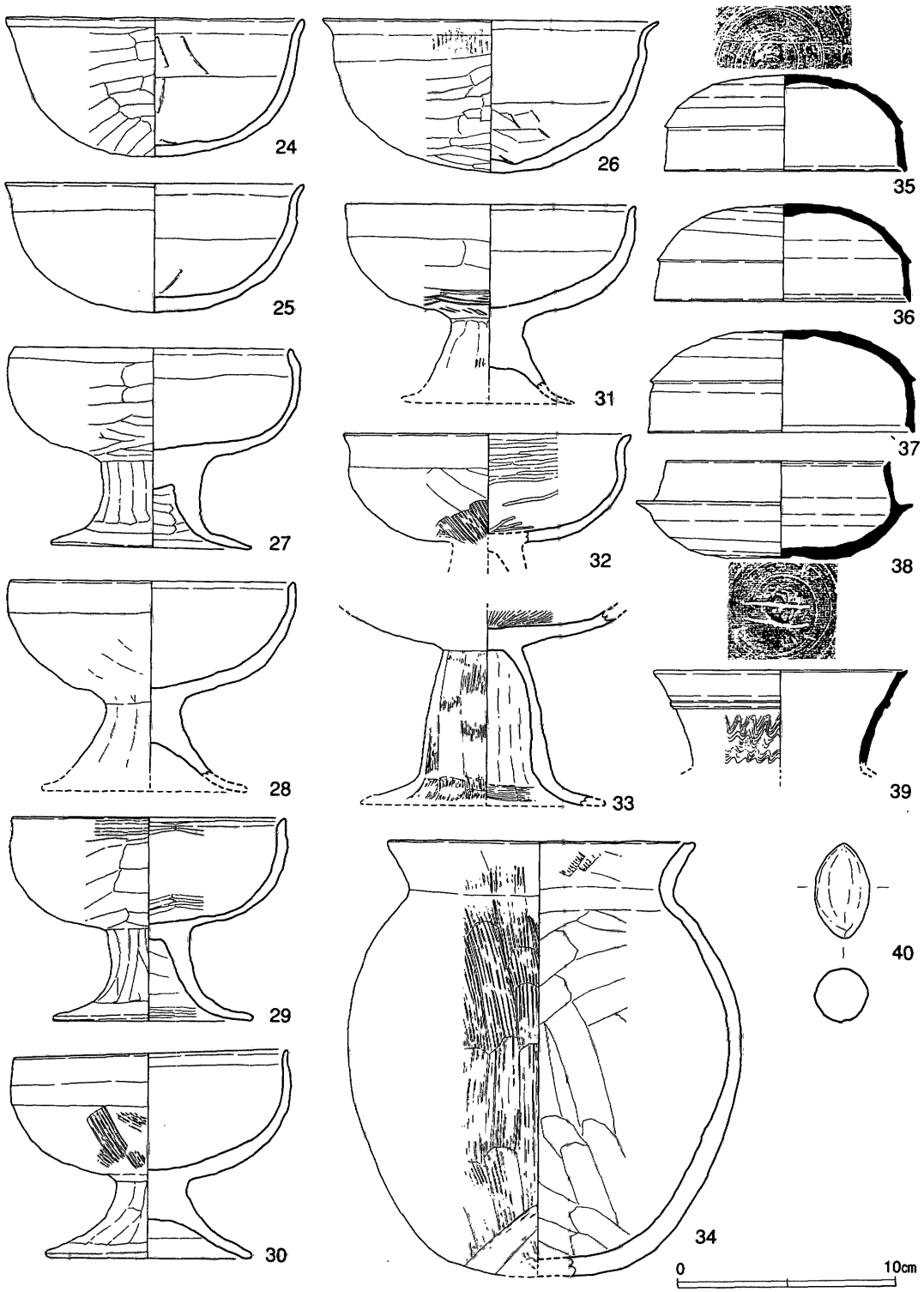


Fig. 34　1SD001腐食土層出土土器実測図Ⅱ（1/3）

径11.4～12.6cm、器高5.2～6.1cmを測る。20・23に黒色仕上げが施される。また22は他に比較してヘラミガキが粗く、外面底部にヘラ記号がある。24・25はII-1-a類で口径13.6・13.8cm、器高6.4・6.0cmを測る。26はII-1-c類で、口径14.5cm、器高7.0cmを測る。他に比較して口縁部の外反の度合いが著しく器高も高い。

高坏（27～33） 27は坏部がI-3-a類で口径12.6cm、器高9.2cm、脚端部径9.2cmを測る。脚部は低脚のA類で外面は縦方向のケズリ、内面は横方向のケズリ、端部周辺はヨコナデである。28はI類で内外面とも著しく風化しており調整を確認しがたい。脚部はB類で低く、内面はナデ調整される。口径13.2cm。29は口径12.5cm、器高9.4cm、脚端部径9.0cmを測る。坏

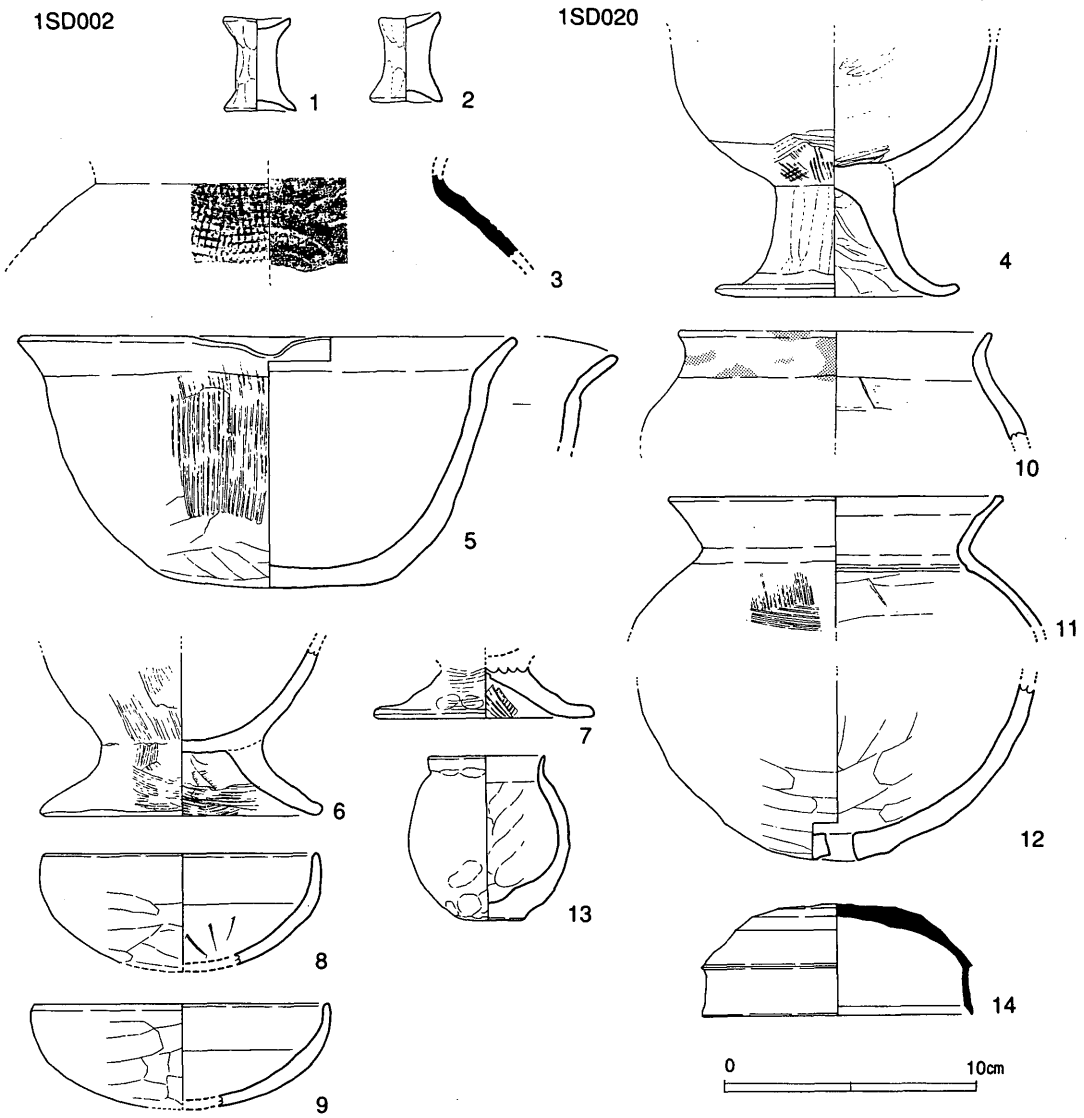


Fig. 35 1SD002・020出土土器実測図（1/3）

部はII-3-b類、脚部はA類で外面は縦方向のケズリ、内面は横方向のケズリ、端部周辺はヨコナデ及びヘラミガキである。30・31はB類の脚部を有するもので、口径12.6・13.3cm、器高9.4・8.4＋cm、脚端部径9.3cmを測る。両者とも表面は風化し詳細な調整は確認できないが、坏部の下半にハケ目が確認される。32は口径13.4cmで坏部はII-3-d′類にあたる。底部の形状及び痕跡から高坏と判断した。内外面とも黒色仕上げされる。33は高脚の高坏で、脚部はA類である。脚部外面は縦方向のハケ目、脚端部内面は横方向のハケ目、坏部外面は条痕を残すヨコナデ、内面は放射状に展開するミガキである。

甕（34） 口径14.2cm、器高20.1cmを測る。口縁部はヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケ目ののちナデ、内面はケズリである。

須恵器

坏蓋（35～37） 口径11.1～12.4cm、器高4.4～4.7cmを測る。すべて天井部の大半を回転ヘラケズリする。35の天井部にヘラ記号がある。

坏（38） 口径10.3cm、器高4.5cmを測る。底部は半分近くを回転ヘラケズリし、ヘラ記号がある。

甑（39） 口縁部の破片資料で、口径11.8cmを測る。内外面ともヨコナデされ、外面の突帯下に波状文を施す。

土製品

投弾（40） 長さ4.4cm、最大径2.5cm。

1SD002出土土器（Fig.35、Pla.37）

土師器

器台模造品（1・2） 両者とも指圧による成形で、手捏ねによっている。口径は2.7・2.5cm、器高は3.6・3.4cmである。

須恵器

甕（3） 肩部の破片資料である。外面は格子叩き目、内面は同心円の当て具痕跡をナデにより擦り消している。

1SD020出土土器（Fig.35、Pla.38、別表1）

土師器

坏（8・9） 8はI-1-a類、9はI-2-a類である。

高坏（4） A類の脚部を有する。脚外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラケズリ、端部付近はヨコナデである。坏部はやや深めのもので外面の一部にハケ目がみられる。内面はヘラミガキである。

鉢（5） 口径20.0cm、器高10.0cm、底径9.8cmを測る。外反する口縁部の一部が外方に押し出されるようになっており、片口を意識したものと思われる。口縁部付近はヨコナデ、体部

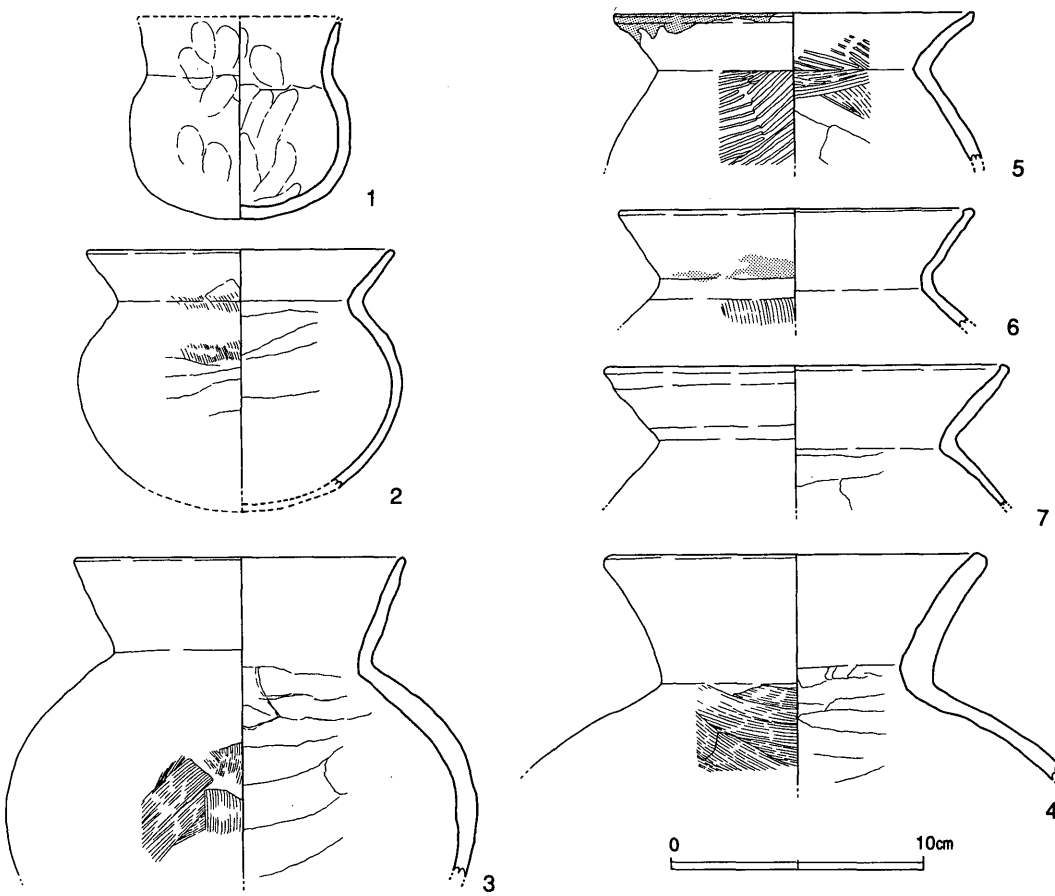


Fig. 36　1SD075出土土器実測図（1/3）

外面はハケ目、底部付近はヘラケズリ、内面はナデである。

脚付き鉢（6・7）　低めで外方に踏ん張る形状を呈する脚を有する鉢と考えられる。6は鉢体部から脚部内外面にかけてハケ目、鉢部内面はコテ当て状の成形痕跡が認められる。7は脚のみの資料であるが一応この項で報告しておく。端部径8.8cmで外面がヘラミガキ、内面がナデである。

甕（10・11）　10は口径12.7cm、口縁部付近はヨコナデ、体部外面の残存範囲はナデ、内面はヘラケズリである。11は口径13.4cm、体部外面はハケ目である。

甑（12）　底部の中央に直径1.0cmの穿孔があり、甑と判断した。体部の調整は内外面ともヘラケズリである。

小壷（13）　口径4.7cm、器高6.6cm、底径2.9cmを測る。手捏ねによる成形で指圧の後ナデで調整する。底部は僅かであるが円盤状に突出している。

須恵器

坏蓋（14）　口径10.7cm、器高4.4cmで天井部の多くを回転ヘラケズリする。

4・5・10・14は埋土上面、他は埋没土の主体をなす黒色土から出土した。

1SD075出土土器（Fig.36、Pla.39）

土師器

壷（2～4） 2は口径12.3cm、体部最大径12.9cmを測る。体部外面はハケ目の後ヨコナデされる。宮ノ本遺跡第10号墳出土資料からここでは壷として報告した。3は口径12.2cm、4は口径15.4cmを測る。両者とも体部外面はハケ目、内面はヘラケズリ、口縁部付近はヨコナデである。3のヨコナデは肩部外面まで及んでいる。

小型丸底壷（1） 口縁部の先端を若干欠くが、口径はおよそ8.1cm、器高8.1cmを測る。成形は指圧により、調整はナデである。

甕（5～7） 5は口径14.5cmで体部外面が叩き調整、内面はヘラケズリである。叩きは口縁部内面にまで及んでいる。6は口径14.4cmで体部外面はハケ目である。7は口径17.1cm。6・7とも口縁先端を若干摘み出している。

その他の遺構出土土器

1SX015出土土器（Fig.37、Pla.39・40、別表1）

土師器

坏（19） 口径13.1cm、器高5.8cmで、I-2-a類である。底部にヘラ記号がある。

甕（20） 口径12.7cmで体部外面はハケ目、内面はヘラケズリ、口縁部付近はヨコナデで肩部付近まで及んでいる。

甑（21） 口径28.8cm、器高22.5cm、底部径9.0cmを測り、2箇所に把手が付く。調整は口縁部付近がヨコナデ、外面上位が粗いハケ目、下位がヘラケズリ、内面はヘラケズリで縦及び斜め方向のミガキとみられる痕跡がある。底部の端部周辺はナデである。

器台模造品（1～17） 口径2.1～2.9cm、器高3.0～3.9cmを測る。すべて指圧による成形で、手捏ねによっている。

須恵器

甕（22） 体部最大径9.6cmを測り、中位よりやや上に直径1.9cmの穿孔がある。穿孔部と同じ高さに波状文帯が巡る。

1SX016出土土器（Fig.38、Pla.41）

土師器

高坏（1） 脚端部径9.7cmを測る。外面はハケ目調整される。傾斜変換部付近に直径0.8cmの穿孔がある。

台付き鉢（2） 脚部のみの資料である。端部径8.4cmで外面はヨコナデ、内面はハケ目である。

甕（3） 複合口縁の甕で、口径19.0cmを測る。口縁部は内外面共にヨコナデ、体部外面は

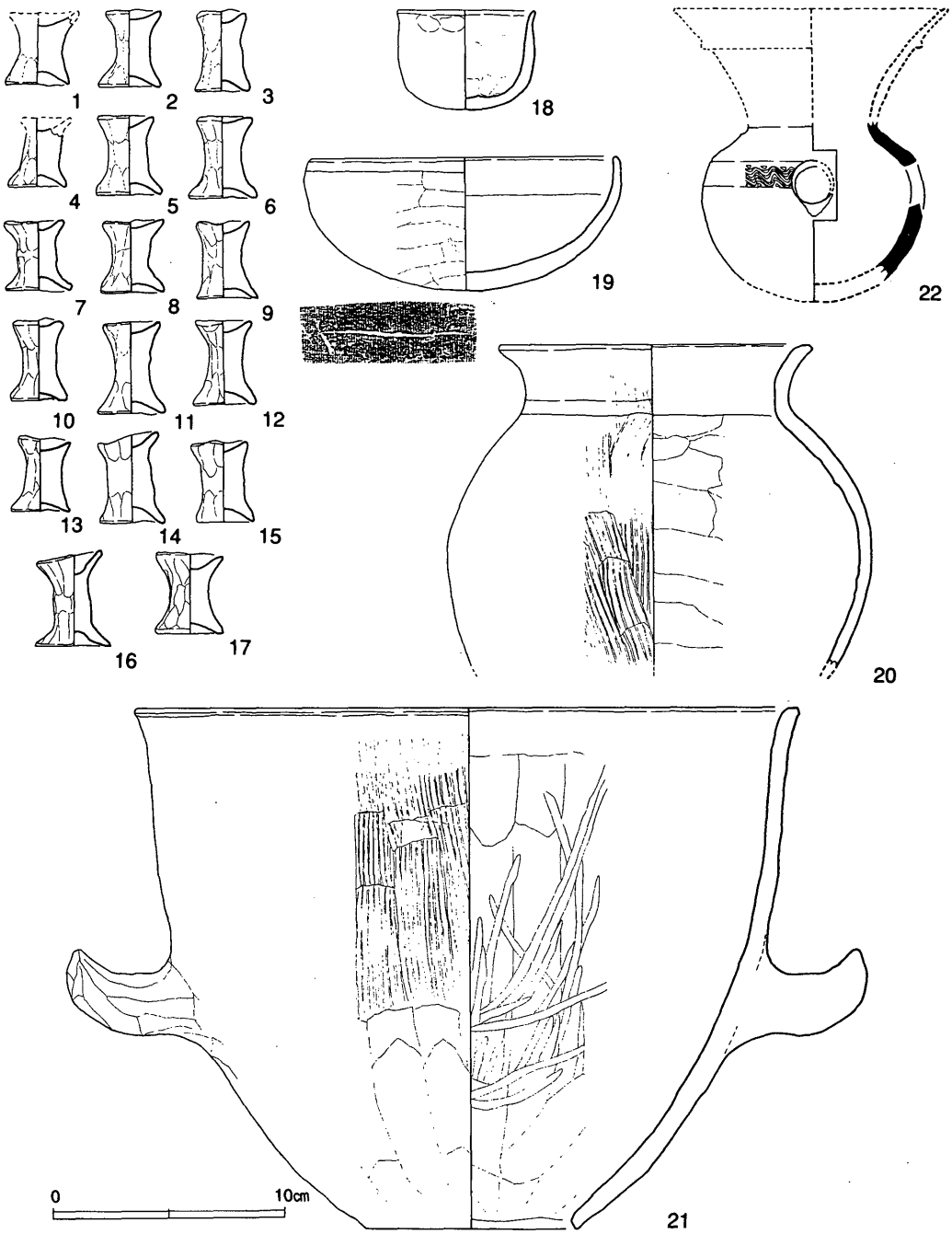


Fig. 37　1SX015出土土器実測図（1/3）

ハケ目、内面はヘラケズリである。肩部付近にハケによる横線文が巡る。

壷（4・5）　4は口径19.6cm、器高35.3cm、胴部最大径29.5cmを測る。壷の内外面全体

にハケ目がみられ、底部は内外面ともヘラケズリ、口縁部はハケ目の後ヨコナデ、胴部内面はヨコナデである。5は口径19.0cm、器高35.9cm、胴部最大径32.6cmを測る。調整は4に近似する。

甑（6・7） 6は口縁部が外方に大きく反る形状を呈し、体部中位の二方に把手をつけている。口径22.8cm、器高20.2cm、底径5.6cmを測る。口縁部付近はヨコナデ、体部外面はハケ目、下半はナデである。内面は口縁部のやや下付近にハケ目を認めるほかはヘラケズリである。把手は指圧およびナデによって体部と接合される。7は口径22.0cm、器高20.8cm、底径5.2cmを測る。口縁部はほとんど反らず直立気味である。体部の二方に把手を付けていた痕跡が残っている。基本的な調整は6に近似する。

1SX017出土土器（Fig.39）

土師器

甕（1） 口径17.2cmで、残存部分はヨコナデ調整である。

1SX018出土土器（Fig.39、Pla.42）

土師器

高坏（2） 端部径8.2cmで傾斜変換部付近に直径0.6cmの穿孔がある。

甕（3～6） 3は口径14.8cm、4は口径16.2cmを測る。残存部分はヨコナデ調整で胴部内面はヘラケズリされる。4の肩部に一条の沈線が巡る。5は胴部最大径23.5cmを測る。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリである。肩部に一条の沈線が巡る。6は口径28.8cm、器高26.0cmを測る把手付きの甕である。外面から口縁部内面にかけてハケ目がみられ、口縁部付近はその後ヨコナデされ、胴部下半部は若干のナデを施す。胴部の内面はヘラケズリである。把手は末端を柄状に工作し、甕胴部の穿孔部分に差し込み、粘土を補足したのちハケおよびナデで調整している。

1SX019出土土器（Fig.39、Pla.42）

土師器

皿（7） 口径12.4cm、器高3.4cmを測る。口縁部付近はヨコナデ、内面はナデ、外面は風化が著しいがヘラケズリとみられる。

甕（8） 口径17.4cmで、口縁端部をわずかに摘み出す。胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリである。

壷（9） 口径15.7cm。残存部分のすべてにわたってハケ目が観察され、口縁部はのちヨコナデされ、胴部内面はヘラケズリされる。肩部付近に叩きと思われる痕跡がある。

1SX021出土土器（Fig.39、Pla.42）

土師器

高坏（10） 脚部の資料で端部径9.15cmを測る。傾斜変換部からやや端部よりに直径0.8cm

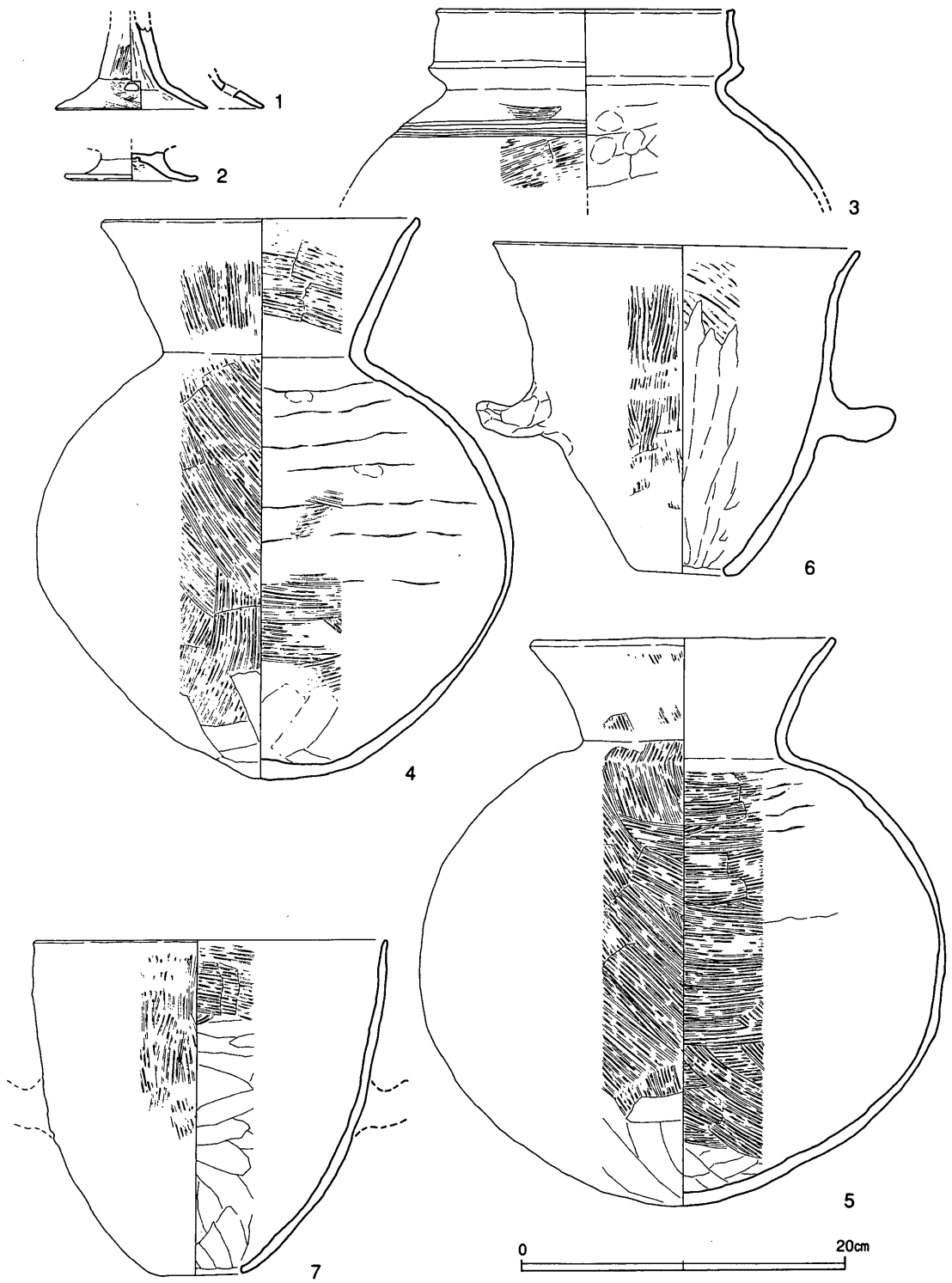


Fig. 38　1SX016出土土器実測図（1/4）

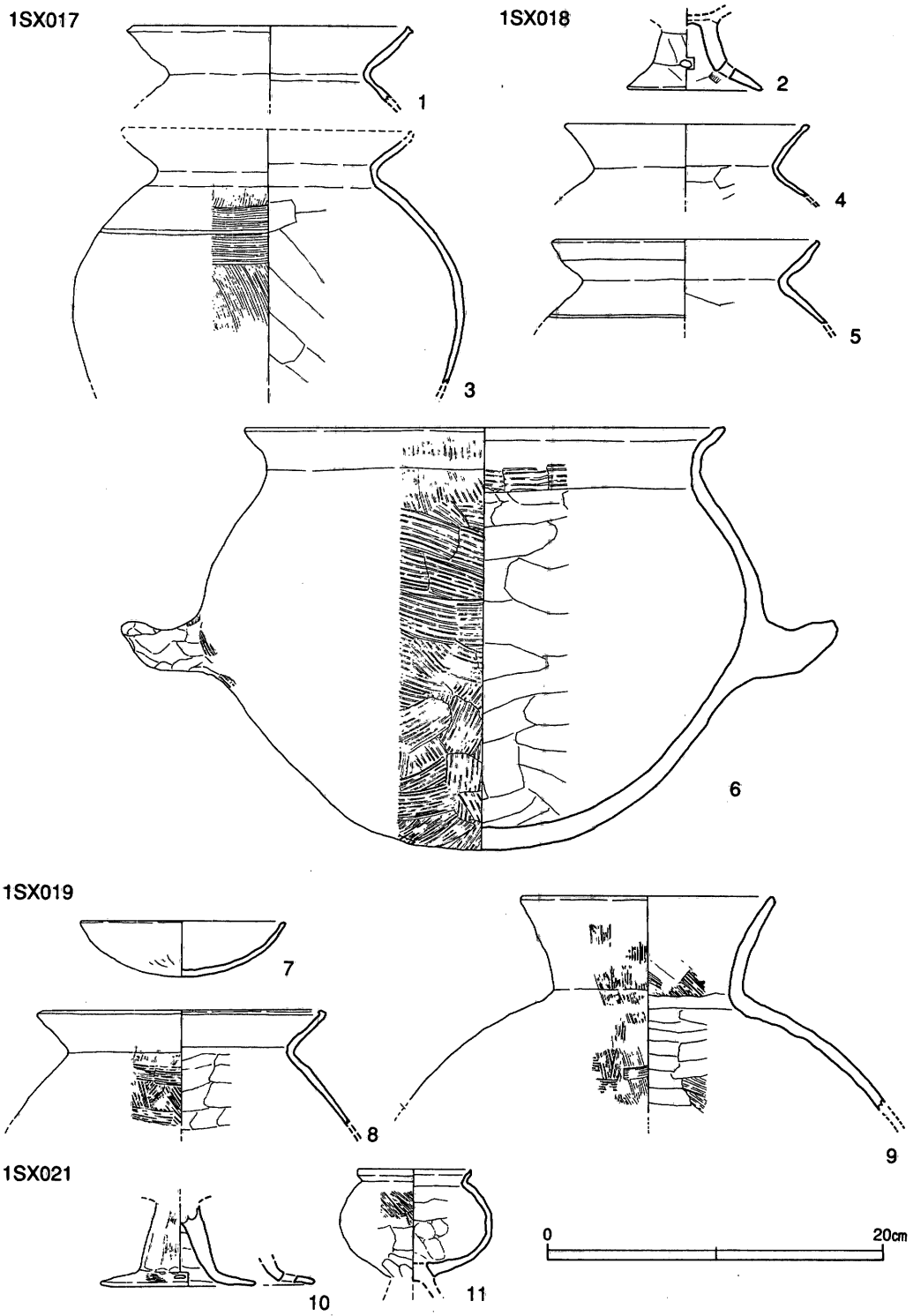


Fig. 39　1SX017・018・019・021出土土器実測図（1/4）

の穿孔がある。外面はハケ目調整。

台付き壷（11） 口径7.0cm、壷部分の高さ6.5cmで台（脚）部分は失われている。調整は口縁部付近がヨコナデ、胴部外面上半がハケ目、下半がヘラケズリ、内面はヘラケズリののち一部にナデがみられる。

1SX100出土土器（Fig.40～45、Pla.43～51、別表１）

すべて1SX100の主たる埋土である腐食土層から出土した。

土師器

坏（1～41） 先の分類に従って記述してゆく。１～13はⅠ－1－a 類で、口径は11.0～13.5cm、器高は4.2～6.2cmを測る。口縁端部が内湾する点でI類の範疇で捉えているが、ほぼ直立に近いもの（２・12）や著しく器壁の厚いもの（６）などがあり将来は別の分類で扱うべき資料かも知れない。また、底部外面にヘラ記号を有する資料（2・5・9・11）もある。14は口径12.5cm、器高5.8cmで、外面の一部にハケ目がみられ、後ヘラケズリを行なう点でⅠ-1- c 類とした。15は口径11.8cm、器高4.7cmで外面の体部下半から底部にかけてハケ目調整される。Ⅰ-1- d 類。なお内面底部にもハケ目がのこる。16～22はⅠ－2－a 類で、口径11.7～13.1cm、器高4.2～6.3cmを測る。このうち18は外面の調整が他の資料より粗く、胎土も砂粒が多量に混入している。23は内面のみヘラミガキを行なうもので、且つ黒色仕上げが施されていることからⅠ－3－a′類である。口径12.5cm、器高5.2cmを測る。24～32は内外両面にヘラミガキを行なうⅠ－3－b 類である。口径11.4～13.2cm、器高4.9～5.6cmを測る。黒色仕上げされるものは、27・29～31である。39は口径12.4cm、器高6.2cmでⅡ-1- a 類である。40は口径15.1cmで、Ⅱ-1- a 類である。高坏の可能性も考えられる。35～38はⅡ－2－a 類である。口径11.0～14.7cmを測る。口縁部の外反の度合いが個体によって微妙に異なるだけでなく、口径に対する高さの度合いも異なっており、今後の資料増加による再検討が待たれる。33・34は両面ともヘラミガキされるⅡ-3- b 類である。口径12.1～12.2cm。両者とも黒色仕上げは施されていない。41は口径11.9cm、器高7.2cmを測るⅡ類の坏である。口縁部付近は指圧により折曲げられた後ヨコナデされるが、体部の内面はヘラケズリ、外面はハケ目による調整が施される。底部にヘラ記号がある。

皿（42） 口径11.3cm、器高2.9cmで体部中位以下はヘラケズリされる。

鉢（43） 坏資料に比べて器壁が厚く、器高も高く深手に作られる。口径12.2cm、器高9.6cmを測り、口縁部は端部のみヨコナデされ、体部外面全体と内面の上半がヘラケズリ、内底はナデである。

高坏（44～46） 44はⅡ-3- b 類の坏部を乗せる。脚部はA類で外面が縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラケズリで外面の一部にミガキ状の痕跡がある。口径13.0cm、器高11.2cm、脚端部径10.5cmである。45は脚端部径9.1cm。端部付近をヨコナデし、他はヘラケズリ

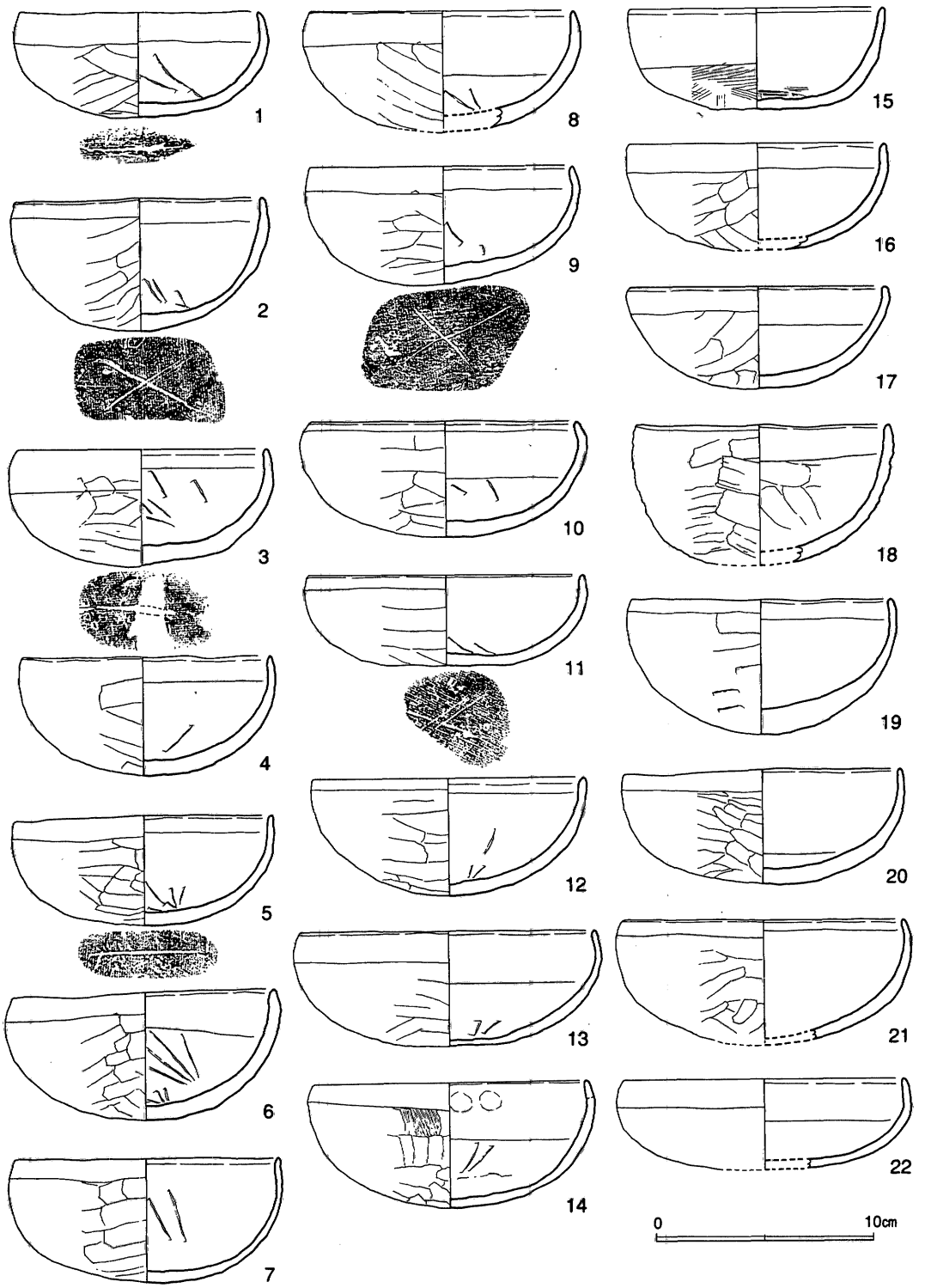


Fig. 40　1SX100出土土器実測図Ⅰ（1/3）

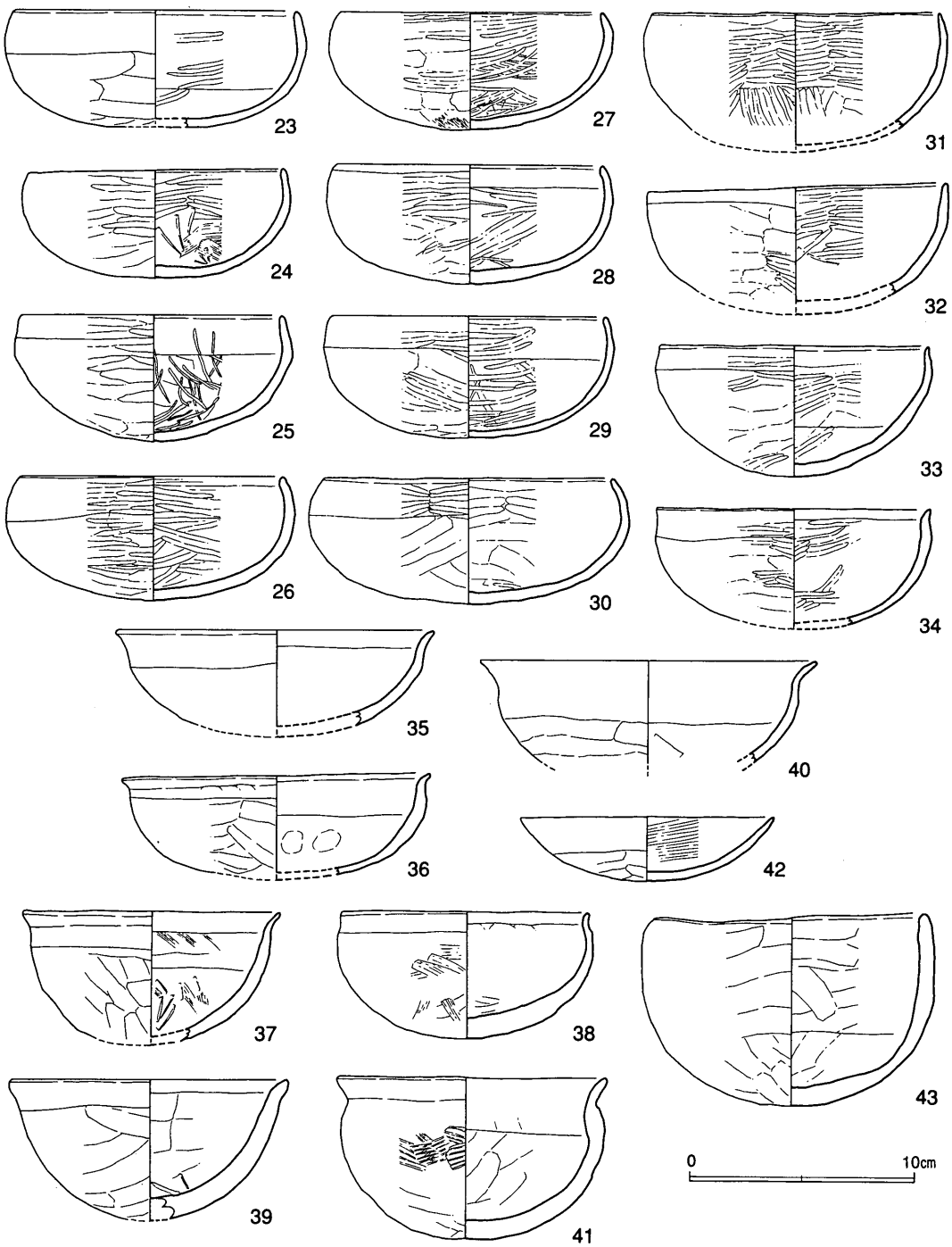


Fig. 41　1SX100出土土器実測図Ⅱ（1/3）

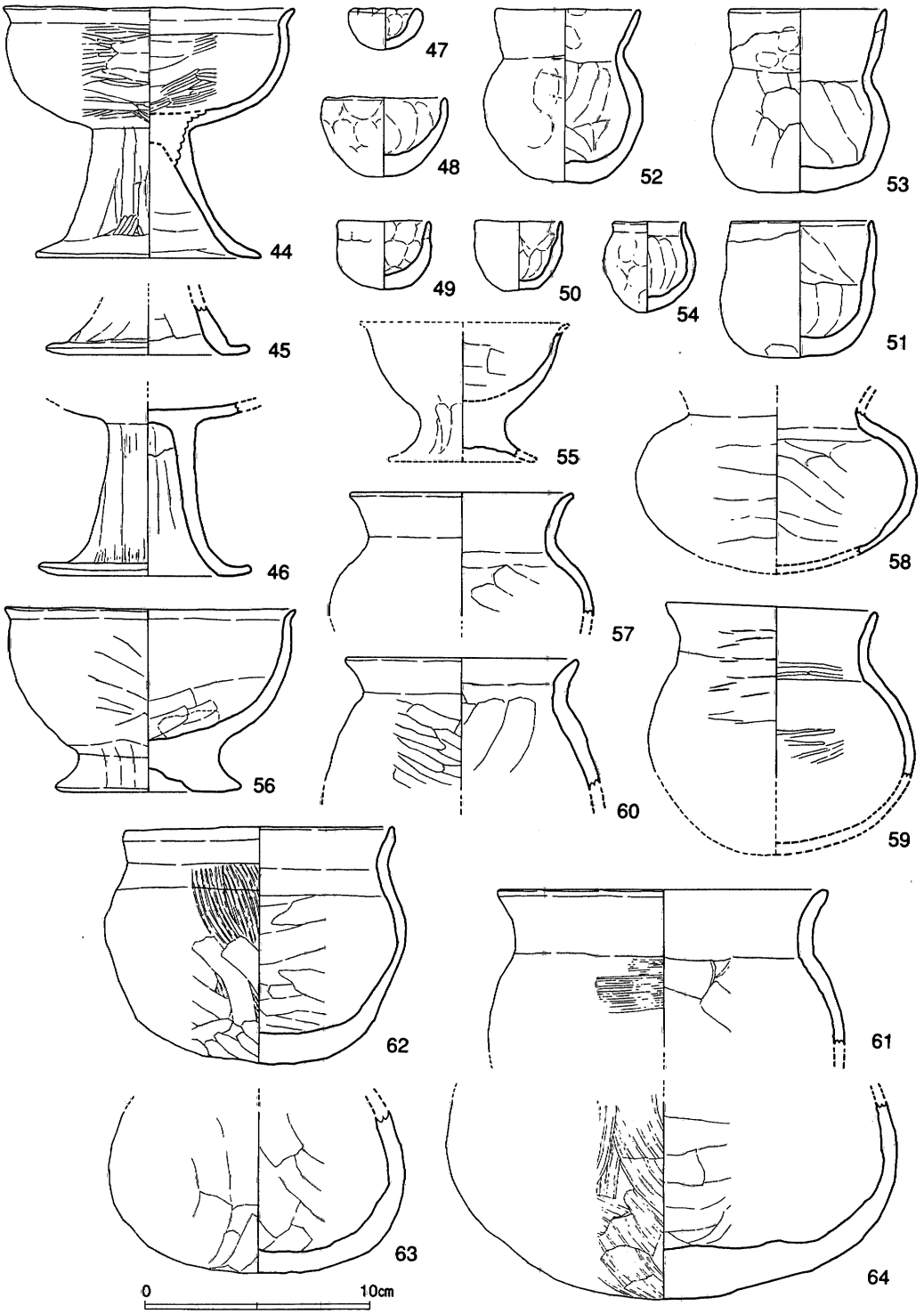


Fig. 42　1SX100出土土器実測図Ⅲ（1/3）

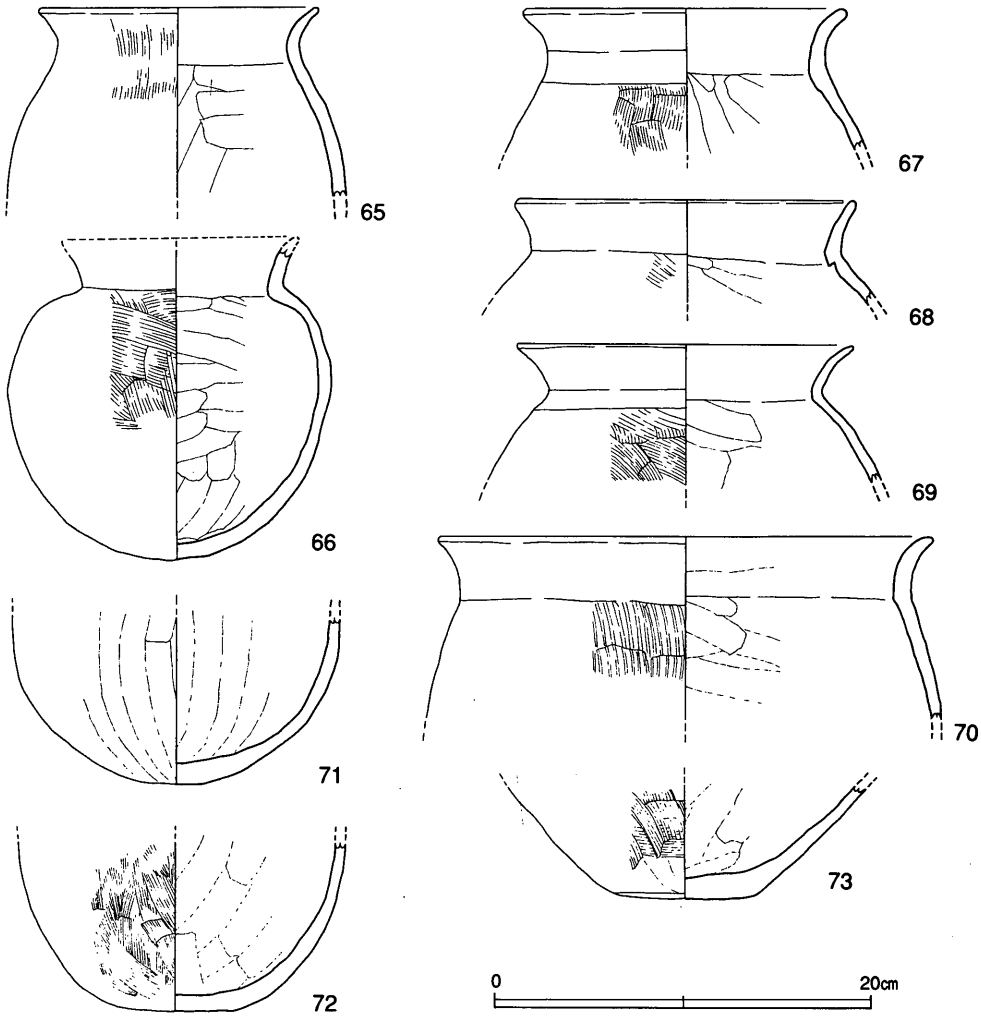


Fig. 43　1SX100出土土器実測図Ⅳ（1/4）

である。46は脚端部径9.5cmで外面はハケ目、内面はヘラケズリされる。

台付き椀（55・56）　55は、小型のもので体部の調整はナデである。56は口径13.0cm、器高8.1cm、台部端部径8.4cmを測る。椀部の調整はここに報告する坏のⅡ-2-a類と同じものである。台部はナデにより仕上げられる。

小鉢（47～51）　手捏ねによる成形で指圧の後縦方向のナデで調整する。51は大きめのもので口径6.3cm、器高6.1cmで平底を呈している。体部中位に僅かなくびれがあり、小型丸底壷の範疇で捉えるべき資料かもしれない。

小壷（54）　手捏ねによる成形で指圧の後ナデで調整する。口径3.2cm、器高4.1cmを測る。

小型丸底壷（52・53）　52は口径6.4cm、器高7.7cmを測る。指圧による成形の後ナデを行な

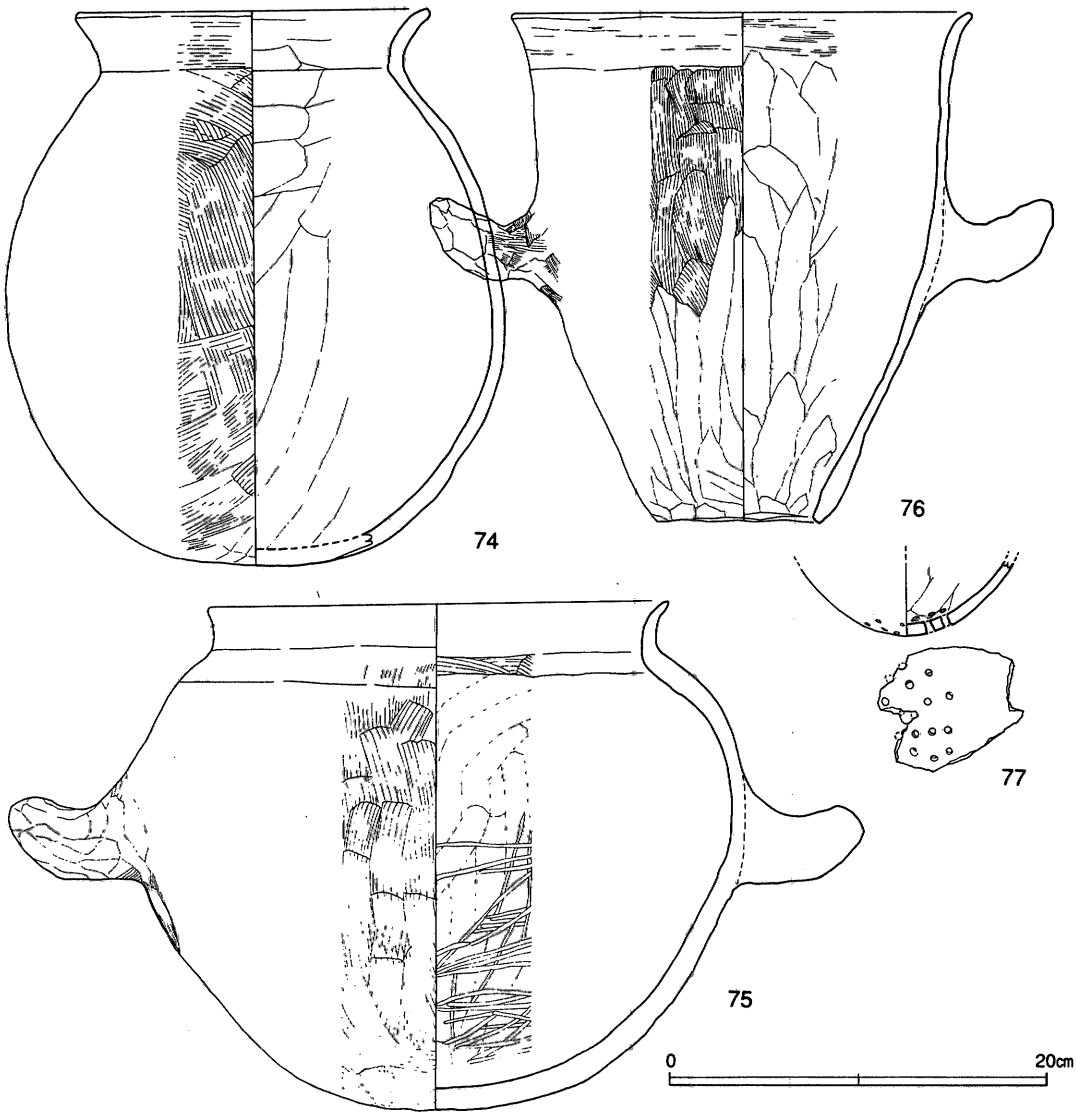


Fig. 44　1SX100出土土器実測図Ⅴ（1/4）

う。53は口径7.0cm、器高8.2cmで平底を呈する。指圧による成形の後ナデを行なうが、体部外面は一部ヘラケズリの痕跡がある。

壷（57～59）　57は口径10.0cmで口縁部付近をヨコナデ、体部内外面ともヘラケズリを行なう。58は胴部最大径12.6cmを測り、外面をヘラケズリ、内面をナデで調整する。59は口径9.4cmで残存部全面にわたってヘラミガキの痕跡を認める。調整の基本はヨコナデ及びナデである。黒色仕上げが成されている。

甕（61～75）　61は口径14.8cmで外面にハケ目が認められる。62は口径12.0cm、器高10.6cmの小型のもので、肩部外面をハケ目、底部外面をヘラケズリ、口縁部付近をヨコナデ、他

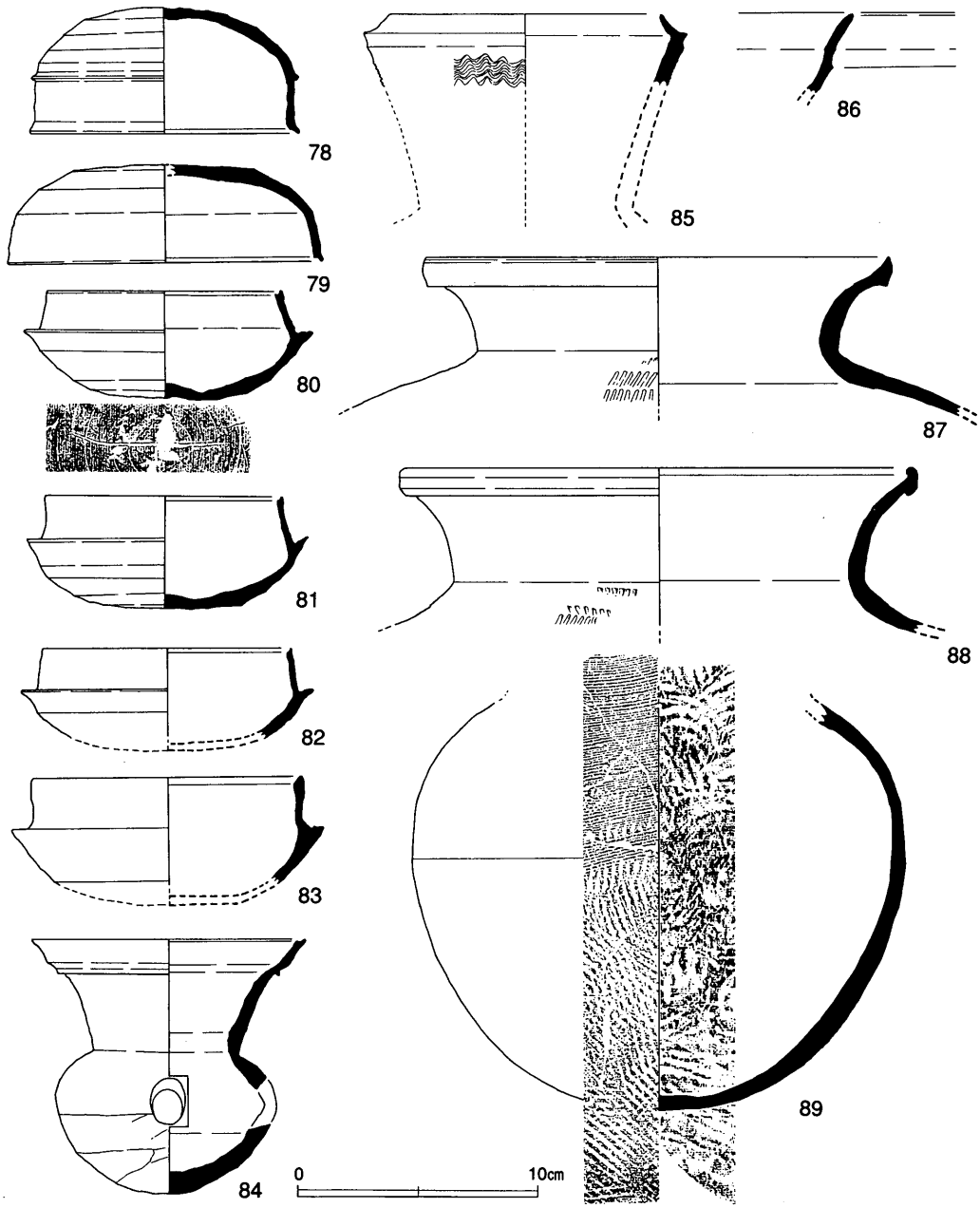


Fig. 45　1SX100出土土器実測図Ⅵ（1/3）

はナデである。62・63・71～73は底部の資料で内外面ともヘラケズリされるが、64・72・73の外面にはハケ目が認められる。なお72・73は平底を呈している。65は口径14.6cmで外面にハケ目が認められ口縁部付近にまで及んでいる。67は口径17.6cmで外面にハケ目が認められる。68は口径18.2cmで外面にハケ目が認められる。69は口径18.0cmで外面にハケ目が認められる。

70は口径26.5cmで外面にハケ目が認められる。66は胴部最大径17.2cmを測り、外面にハケ目が認められる。74は口径18.8cmで外面はハケ目、内面はヘラケズリ、口縁部付近はヨコナデである。75は胴部中位の二方に把手を付けるもので、口径24.4cm、器高17.3cm、胴部最大径33.0cmを測る。口縁部付近はヨコナデ、胴部外面及び頸部内面の一部にハケ目、内面はヘラケズリである。内面にヘラミガキ状の痕跡が認められる。

甑（76・77） 76は口径25.0cm、器高27.1cm、底径8.9cmを測る。体部の中位二方に把手を付け、口縁部を僅かに外反させる形状を呈する。口縁部付近をヨコナデし、体部外面上半をハケ目、体部外面下半と内面をヘラケズリする。把手は支持土を補足してナデ及びハケで調整する。77は底部のみの資料である。底部には直径0.3～0.4cm程度の穿孔を行なう。孔は現存の範囲で16箇所確認される。

須恵器

坏蓋（78・79） 口径11.4・13.2cm、器高4.1・5.2cmを測る。天井部の大半を回転ヘラケズリする。

坏（80～83） 口径9.9～11.2cm、器高4.5～4.7cmを測る。体部下半の多くをヘラケズリする。80の底部にヘラ記号がある。

高坏（86） 小片のため口径の復原は困難である。外面の稜下に波状文とみられる文様がある。

甕（84） 口径11.6cm、器高10.6cmを測る。調整は底部外面がヘラケズリ、同内面がナデ、他はヨコナデである。頸部の外面は不定間隔の強い条痕を残すヨコナデである。体部最大径を測る部分に直径2.0cmの穿孔がある。

壷（85） 口径11.4cm。外面に波状文を描く。

甕（87～89） 87は口径19.5cm。胴部内面の当て具痕跡をナデで消している。外面は平行叩き。88は口径21.8cm。頸部から肩部にかけて強い条痕跡を残すヨコナデがみられる。胴部は平行叩き。89は胴部最大径20.7cmを測る。肩部にカキ目状の痕跡がある。

1SX100灰色土層出土土器（Fig.46、Pla.51・52、別表1）

土師器

坏（1～3） 1は口径12.2cm、器高5.3cmで、I-2-a類。2は口径12.2cm、器高5.9cmでI-3-b類である。3は口径11.9cm、器高6.9cmを測る、口縁部の特徴はII類の範疇である。外面はハケ目、内面は横方向のヘラケズリである。

小鉢（4～6） 4は口径7.1cm、器高3.7cmで、手捏ねにより成形され内面は指圧の後ナデで調整するが、外面はヘラケズリされる。口縁部が外反する形状を呈する。5は口径5.7cm、器高11.2cm。手捏ねによる成形で指圧の後ナデで調整する。6は、口径7.1cm、器高7.2cmを測る。体部中位にくびれがあり、小型丸底壷の範疇で捉えるべき資料かもしれない。

小壷（7～9）　7は、口径3.1cm、器高6.5cmで、ナデにより調整される。8は口径6.0cm、器高7.2cmを測る。口縁部の一部をヨコナデする他はナデである。9は口径6.1cm、器高6.7cmを測る。指圧の後ナデで調整する。

須恵器

蓋（10）　口径11.8cm、器高5.1cmを測る。天井部を回転ヘラケズリし、中央にツマミをつける。

坏（11・12）　口径10.7・11.9cm。底部を回転ヘラケズリする。

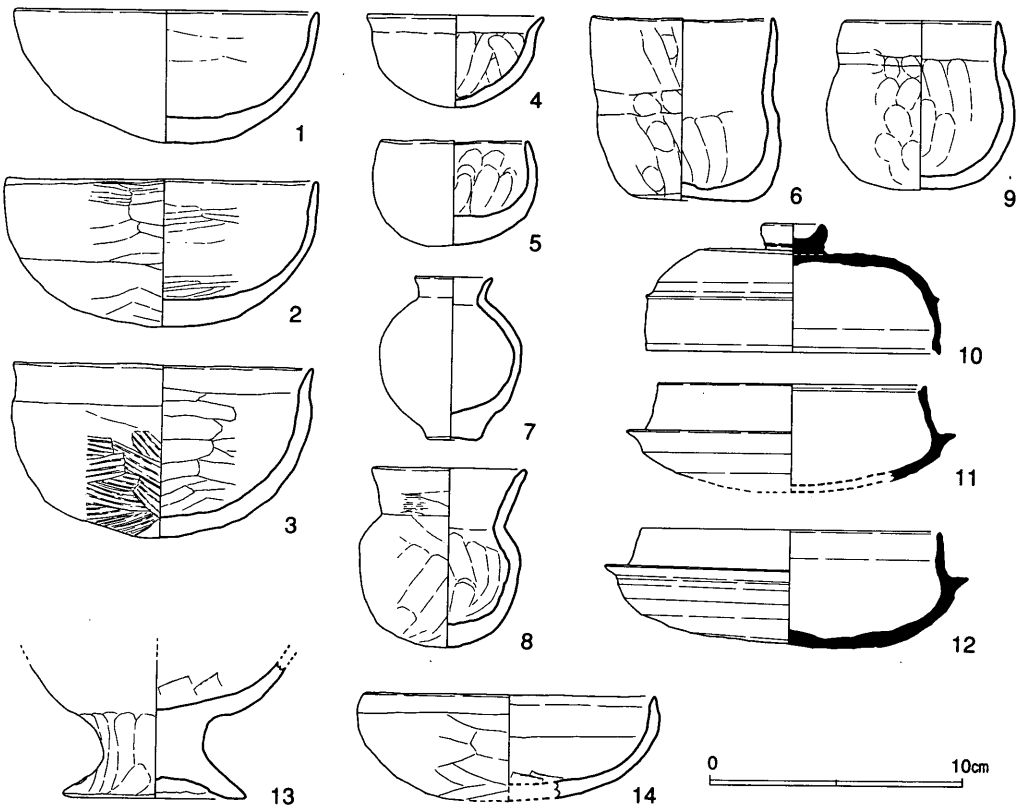


Fig. 46　1SX100各層出土土器実測図（1/3）

1SX100各層出土土器（Fig. 46、Pla. 52）

土師器

高坏（13）　脚部をナデにより調整し、脚底部はヘラケズリされる。1SX100堆積土の第3層から出土した。

1SX110出土土器（Fig. 47、Pla. 53、別表1）

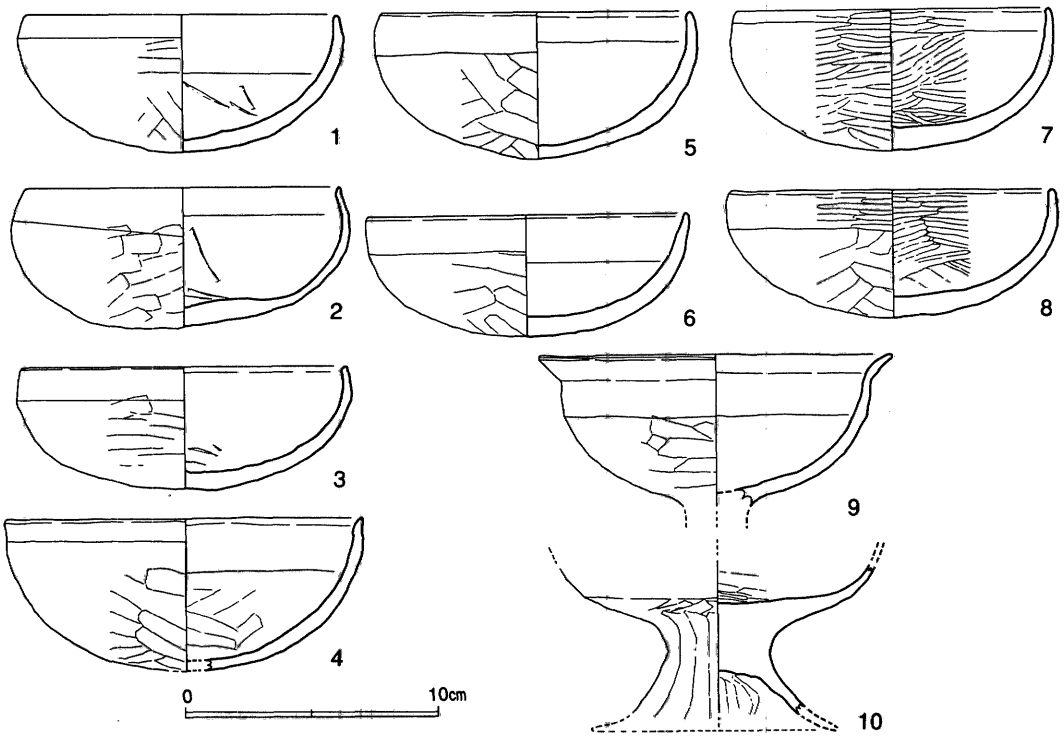


Fig. 47　1SX110出土土器実測図（1/3）

土師器

坏（1～8）　1～4はI-1-a類で、口径12.4～14.0cm、器高4.9～6.1cmを測る。5・6はI-2-a類で、口径12.2・12.6cm、器高5.9・4.8cmを測る。7・8はI-3-b類で、口径12.3・12.6cm、器高5.6・5.1cmを測る。7は黒色仕上げされる。8の外面の調整は口縁部付近のみミガキで、他はヘラケズリである。

高坏（9・10）　9は底部の形状から高坏と判断した。口径14.1cmで坏部はII-1-a類。10は脚部の外面が縦方向のヘラケズリである。

各層位出土土器

灰色土層出土土器（Fig.48・49、Pla.54～56、別表1）

土師器

坏（1～10）　1～4はI-1-a類で、口径11.9～12.9cm、器高5.3～6.4cmを測る。4の底部にヘラ記号がある。5はI-2-a類で口径12.7cm。6はI-2-c類で口径12.3cm。外面のハケ目はかなり強い力で施されたものである。7は黒色仕上げされたものでI-3-a′類。口径11.3cmである。8はI-3-b類で口径13.1cmを測る。9はII-1-a類で口径15.0cm。10は口径15.7cmでII-3-a類。9・10とも高坏の可能性も考えられる。

高坏（11～13、25・26） 低脚のもので口径12.8cm、器高6.6cm、脚端部径9.4cmを測る。坏部の外面は風化が著しいがハケ目の一部が観察される。脚部はナデである。12は口径10.8cmで端部をわずかに摘み上げる。13は指圧により調整される。台付き鉢の脚部の可能性もある。25・26は、口径20.7・22.2cm、器高14.0・14.1cm、脚端部径13.0・13.4cmを測る。器面が風化するが両者とも坏部はハケ目で調整されたものとみられる。脚部は、25の外面が横方向のヘラミガキ、内面の一部がハケ目である。26では外面が縦方向のハケ目である。両者とも傾斜変換部に3箇所の穿孔がある。

鉢（14） 口径12.0cm、器高8.4cm強を測る。口縁部外面は条痕を残すヨコナデ、体部外面

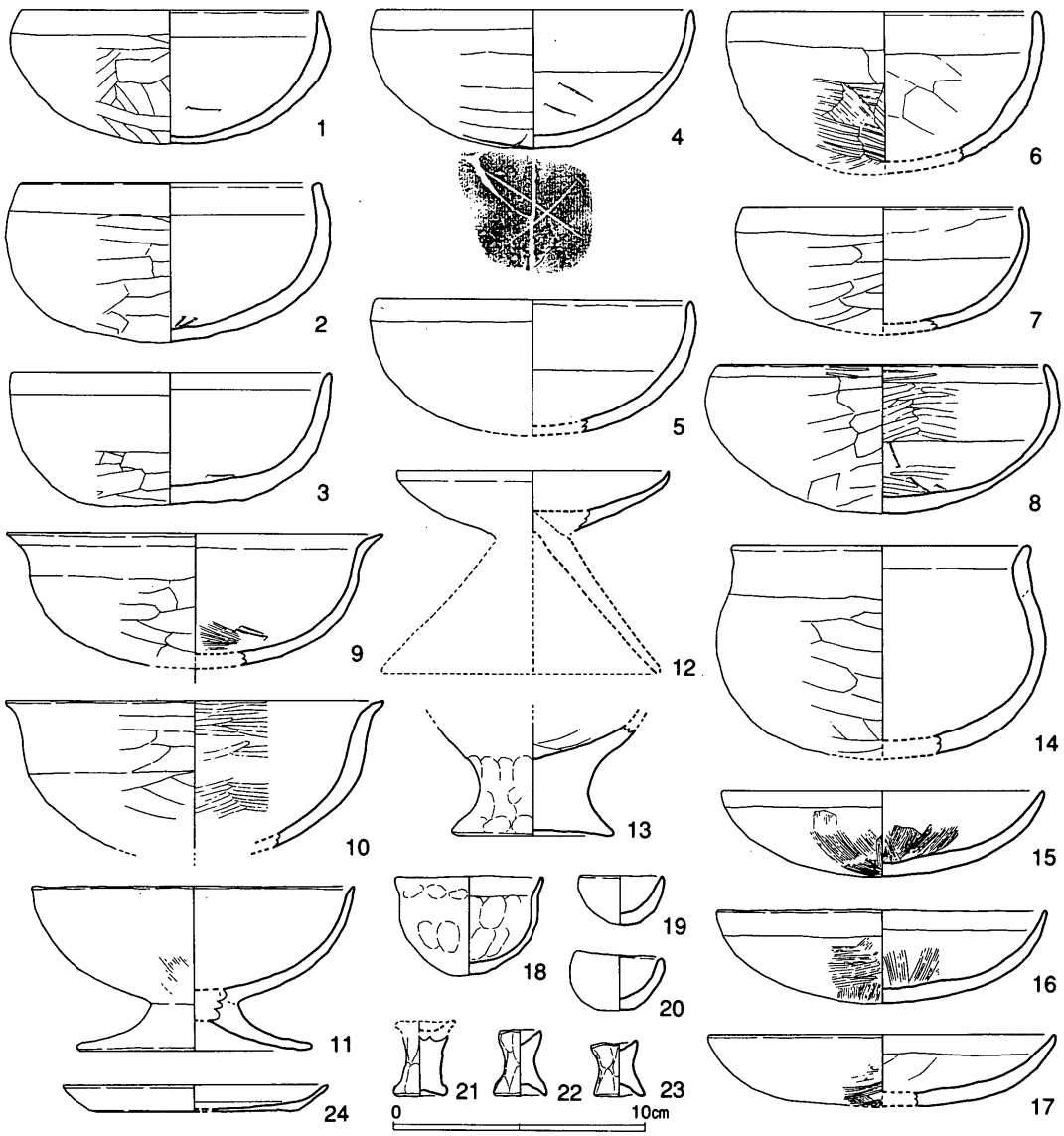


Fig. 48 灰色土層出土土器実測図Ⅰ（1/3）

はヘラケズリ、内面はナデである。

皿（15～17）　口径13.0～14.0、器高3.4～3.7cmを測る。内外面ともハケ目で口縁部付近の

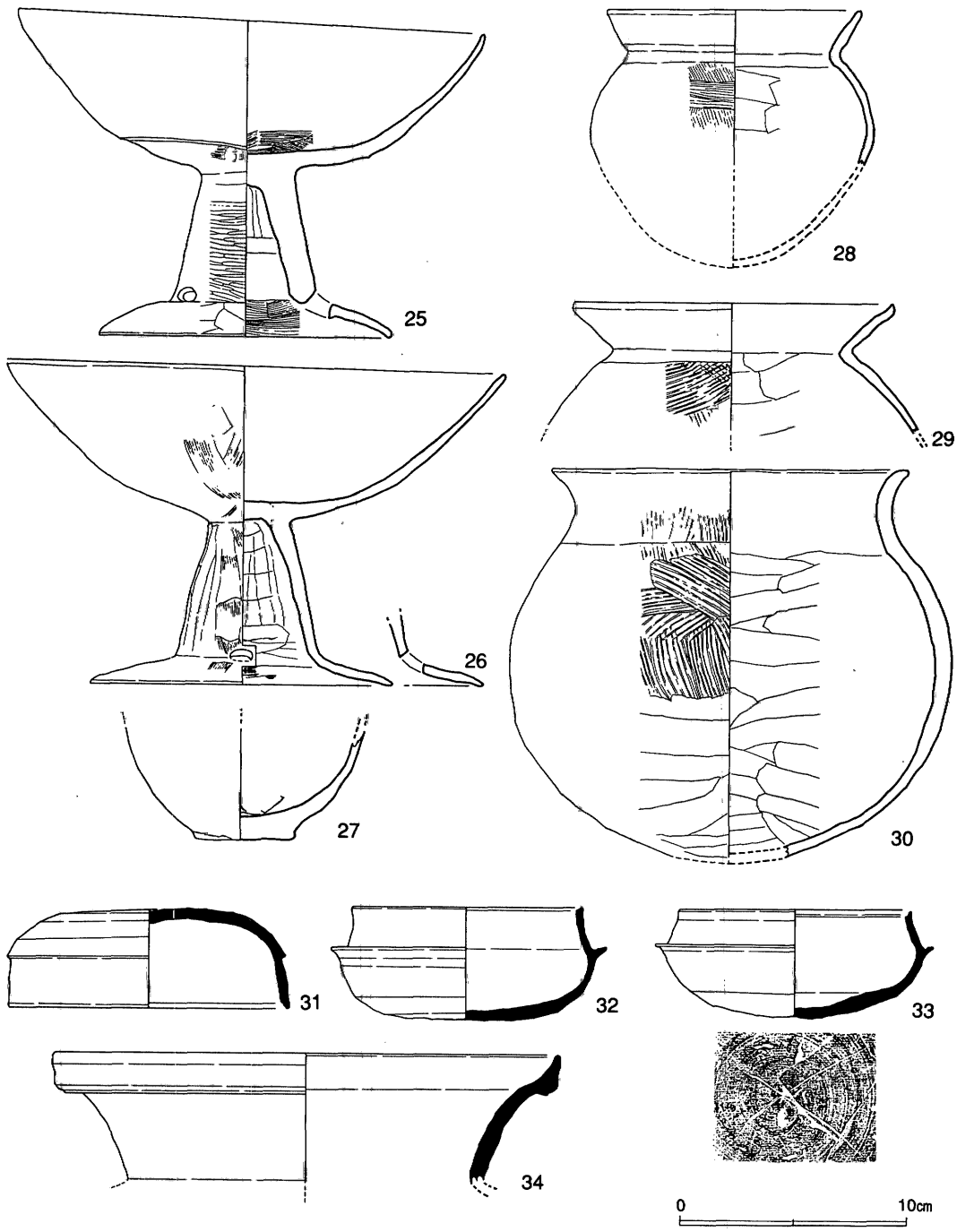


Fig. 49　灰色土層出土土器実測図Ⅱ（1/3）

みヨコナデである。

壷（27） 底部径4.6cmを測る。内面はコテ状の工具で調整した後ナデを施す。

甕（28～30） 28・29は口径11.2・14.2cmで外面をハケ目、内面がヘラケズリ、口縁部をヨコナデする。30は口径15.8cm、器高17.2cmで外面の底部付近をヘラケズリする。

小鉢（18～20） 口径3.4～5.9cm、器高2.0～3.9cmを測る。手捏ねによる成形で指圧の後ナデで調整する。18は口縁部をわずかに外反させる。

器台模造品（21～23） 手捏ねによる成形で指圧の後ナデで調整する。

小皿a（24） 口径10.7cm、器高1.1cm、底径8.4cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕がある。11世紀後半頃の資料である。

須恵器

坏蓋（31） 口径12.4cm、器高4.3cmを測り、天井部を回転ヘラケズリする。

坏（32・33） 口径10.2cm、器高5.1・4.8cmを測る。外面の底部を回転ヘラケズリする。33の底部にヘラ記号がある。

甕（34） 口径22.4cmで頸部に条痕を残す強いヨコナデを施す。

黒色土層出土土器（Fig.50、Pla.57、別表1）

土師器

坏（1） 口径11.6cm、器高6.0cmを測る。I-1-a類。

高坏（2） 脚端部径11.5cmで、脚中位に直径0.9cm前後の穿孔を3箇所に施す。調整は内外面ともハケ目である。

壷（3・4） 3は胴部最大径11.1cm。内面はナデ、外面は横方向のナデで一部にヘラミガキが認められる。外面は黒色仕上げが成されている。4は複合口縁の壷で口径17.7cmを測る。

表土出土土器（Fig.50、Pla.57、別表1）

土師器

坏（5） 口径12.4cmで、I-1-a類である。

壷（6） 口径10.4cmで、内外面ともヘラミガキされ、黒色仕上げが施される。

小鉢（7～9） 口径3.1～3.7cm、器高2.2～3.7cmを測る。手捏ねによる成形で指圧の後ナデで調整する。7は特に器高が強調される。

器台模造品（10） 指圧による成形で、手捏ねによっている。

須恵器

鉢（11） 口径10.4cm、器高6.1cmで体部中位に2条の沈線が巡る。底部外面はヘラケズリされる。

坏（12） 口径12.1cm、器高4.3cm。底部外面は回転ヘラケズリされ、ヘラ記号がある。

弥生土器

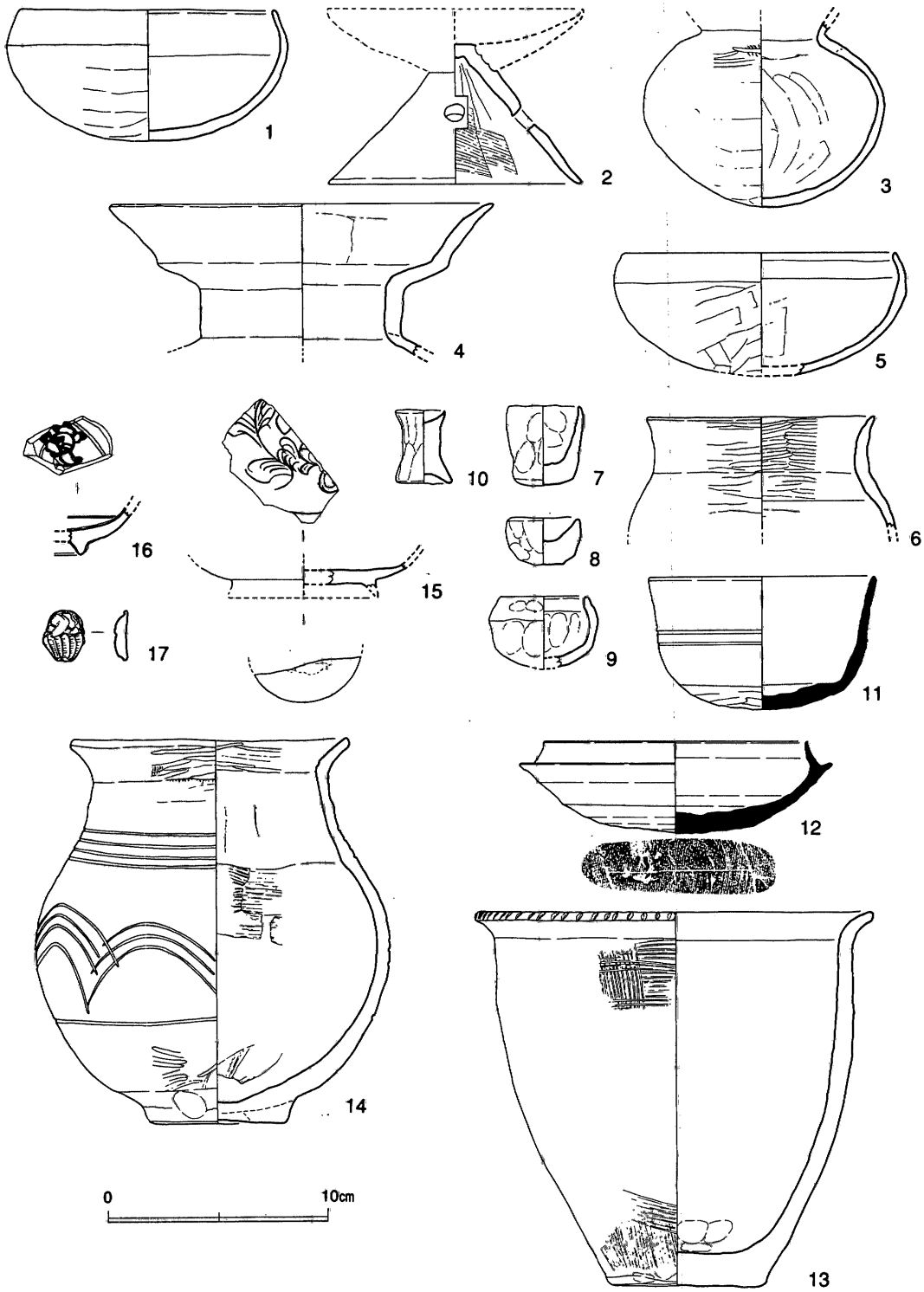


Fig. 50　黒色土層・表土出土土器実測図（1/3）

壷（14） 口径12.6cm、器高17.5cm、底径6.4cm、胴部最大径16.3cmを測る。口縁部は内外面ともヘラミガキ、胴部内面はハケ目、外面はナデ及びヘラミガキである。底部は粘土の貼り足しにより突状に作られる。頚部には4条の沈線、胴部下位に1条の沈線があり、その沈線に挟まれる空間に3～4条で構成される連弧文が配される。

甕（13） 口径18.3cm、器高17.1cm、底径7.1cmを測る。口縁端部に刻み目をつける。体部外面はハケ目、内面は指圧の後ナデである。

越州窯系青磁

椀（15） I類で、見込みに草花文をヘラ描きする。底部外面には目跡が認められる。

青花

椀（16） 見込みに草花文を描き、畳付けの釉は拭き取られている。明代のものとみられる。

土製品

めんこ（17） 籠に野菜が満載された意匠を呈し、高さ2.3cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmを測る。型により作られたもので背面は強いナデである。

人形（18） 嫗を型取った博多人形で、当初は翁の像と一対になり祝い事に用いられたものとみられる。頭部は髪を後頭部で束ね黒色に塗り、着物の上に羽織を纏い、左手に扇子を持ち、右手で羽織の裾をつまみあげている。型によって成形されたのち細部をヘラ等で整え、ナデにより滑らかな雰囲気に仕上げている。足部（底部）は平坦で0.5cmの穿孔があり、内部は中空である。高さ11.5cm。

2．木製品

以下に報告する木製品の実測図のうち、断面に記入される斜線はその遺物の木取りを表現したものであるが、斜線についてはあくまでも模式図であり実測によるものではないことを付記しておく。なお、樹種の鑑定はこの報告段階では行なっていない。今後機会をみて実施したいと考えている。

掘立柱建物出土木製品

1SB035出土木製品（Fig.51、Pla.60）

柱（2） 表面が著しく風化しており本来の形状を知り得ないが、末端部分は削り込まれ先端を僅かながら鋭利に作りだしている。現存長29.0cm、最大幅9.0cmを測る。

土壙出土木製品

1SK014出土木製品（Fig.51、Pla.60）

斧柄（3） 長さ31.0cm、斧台の長さ10.3cmを測る。自然木の枝分かれ部分を利用し、枝部を斧柄に幹部を斧台に加工したものとみられる。

1SK055出土木製品（Fig.51、Pla.60）

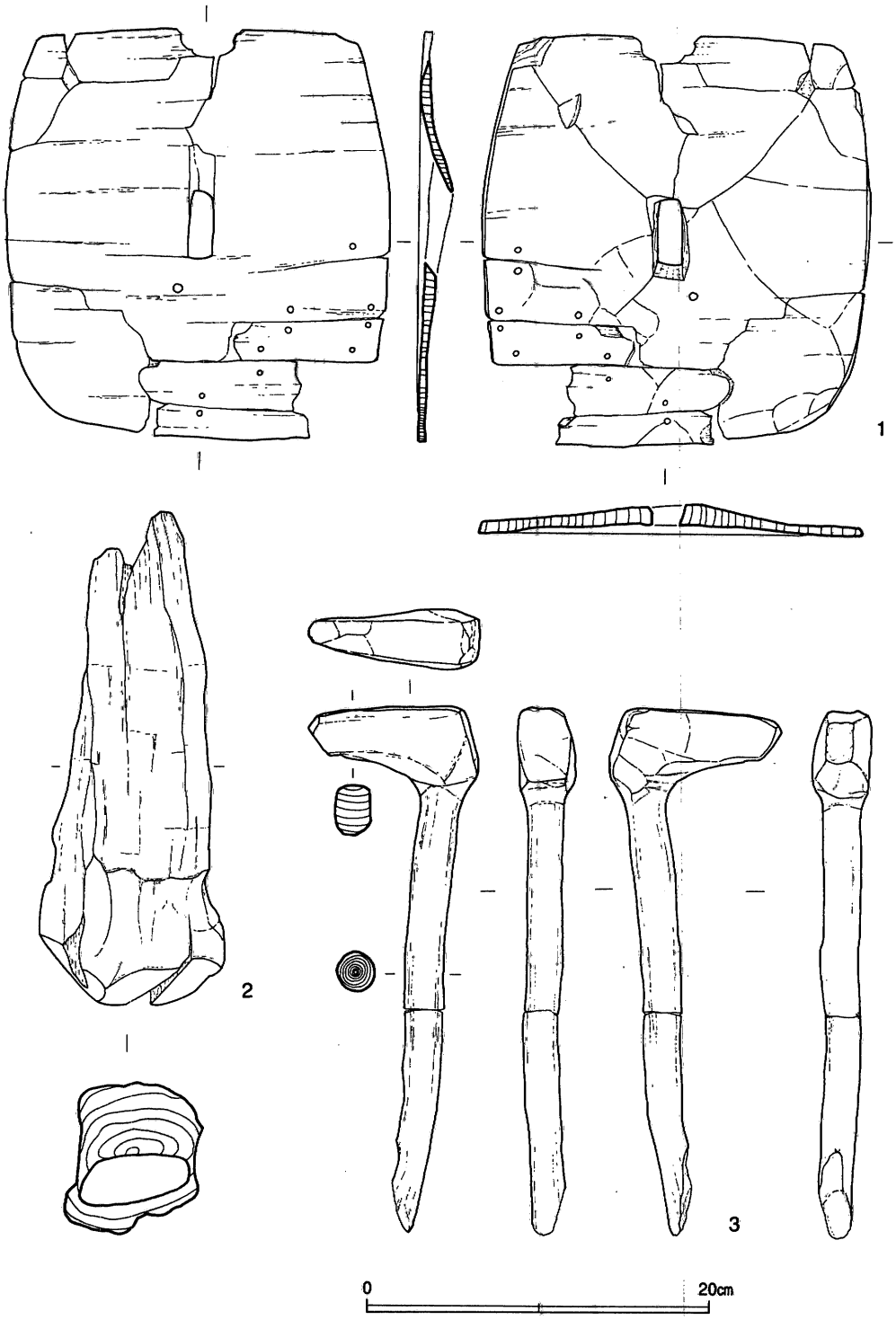


Fig. 51　各遺構出土木製品実測図（1/4）

停泥（1） 長さ24.1cm、幅22.9cm、高さ2.0cm、厚さ0.2～0.6cmを測る。隅丸の方形を呈し、柄つぼは4.0×1.5cmの長方形である。表面は柄つぼ付近を中心に4区分したピラミッド状を呈している。使用中に破損したためか補修したと考えられる穿孔が現状で11箇所残っており、その中のいくつかに結び付けに用いられた繊維状のものが残存している。

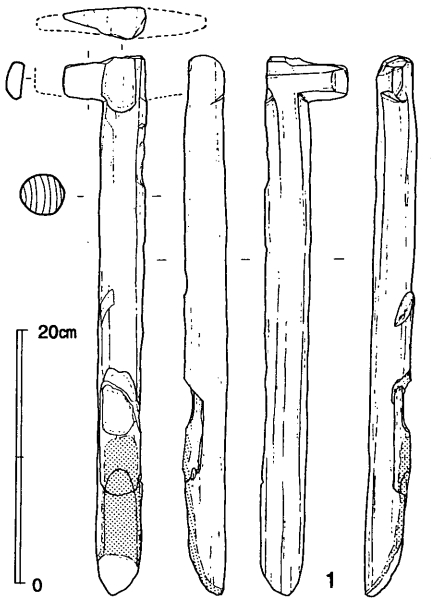


Fig. 52 1SD001出土木製品実測図Ⅰ(1/6)

溝出土木製品

1SD001出土木製品（Fig. 52～55、Pla. 59・60）

杭（1） 鋤の柄を2次加工した杭である。現存長43.6cm、柄部分の直径3.5cmを測る。

四脚付き容器（2） 2方に把手を作り出した平面が円形をした皿部の底面に低脚を4つ作り出す。皿部の直径は約30.8cm、把手を含めた長さは41.5cmである。脚部を含めた高さは7.4cm、皿の内面の深さは約5cmである。内面は丁寧に加工され長さ1～2cmの細かな傷（使用痕か）がみられる。脚の側面は丁寧に面取りされる。腐食土層出土。

つち（3・4） 3は長さ33.5cm、最大幅9.5cm、握りの長さ15.4cm、握りの最大径4.5cmを測る。握り先端は僅かに太めに加工される。4面とも使用痕がある。4は長さ28.4cm、最大幅7.0cm、握りの長さ13.7cm、握りの最大径5.0cmを測る。握り先端は僅かに太めに加工される。4面とも使用痕がある。両者とも腐食土層出土。

柄鏡型木製品（7・8） 大小各1点出土した。7は柄を含めた長さ58.6cm、幅39.3cm、厚さ3.1cm、柄部分の長さ14.1cmを測る。両面ともかなり丁寧なケズリを施し、平坦面を形成する。側面は丁寧に面取りされる。片面の中央部付近に長さ12cm、幅14cmの範囲で横方向の細かな傷が無数に残っている。傷はその範囲の周囲で一部不定方向を示すものもあるが、主体となる傷は一定の方向である。傷は1本が5cm以下であり、引きずるように長く付けられたものは認められない。8は柄を含めた長さ45.7cm、幅30.4cm、厚さ2.3cm、柄部分の長さ13.1cmを測る。7と比較すると小振りながら基本的な調整は同じである。表面は風化が進んでいるが、やはり片面に細かな傷が認められる。風化している部分にも傷が及んでいたことを想定すれば、片面のほぼ全面に付けられていたようである。

この木製品の用途として、俎を考えている。両者は腐食土層中で重なって出土した。

5は鋤先の欠損品と考えている。現存の長さ10.7cm、幅7.9cmですべての面が丁寧に削られている。腐食土層出土。

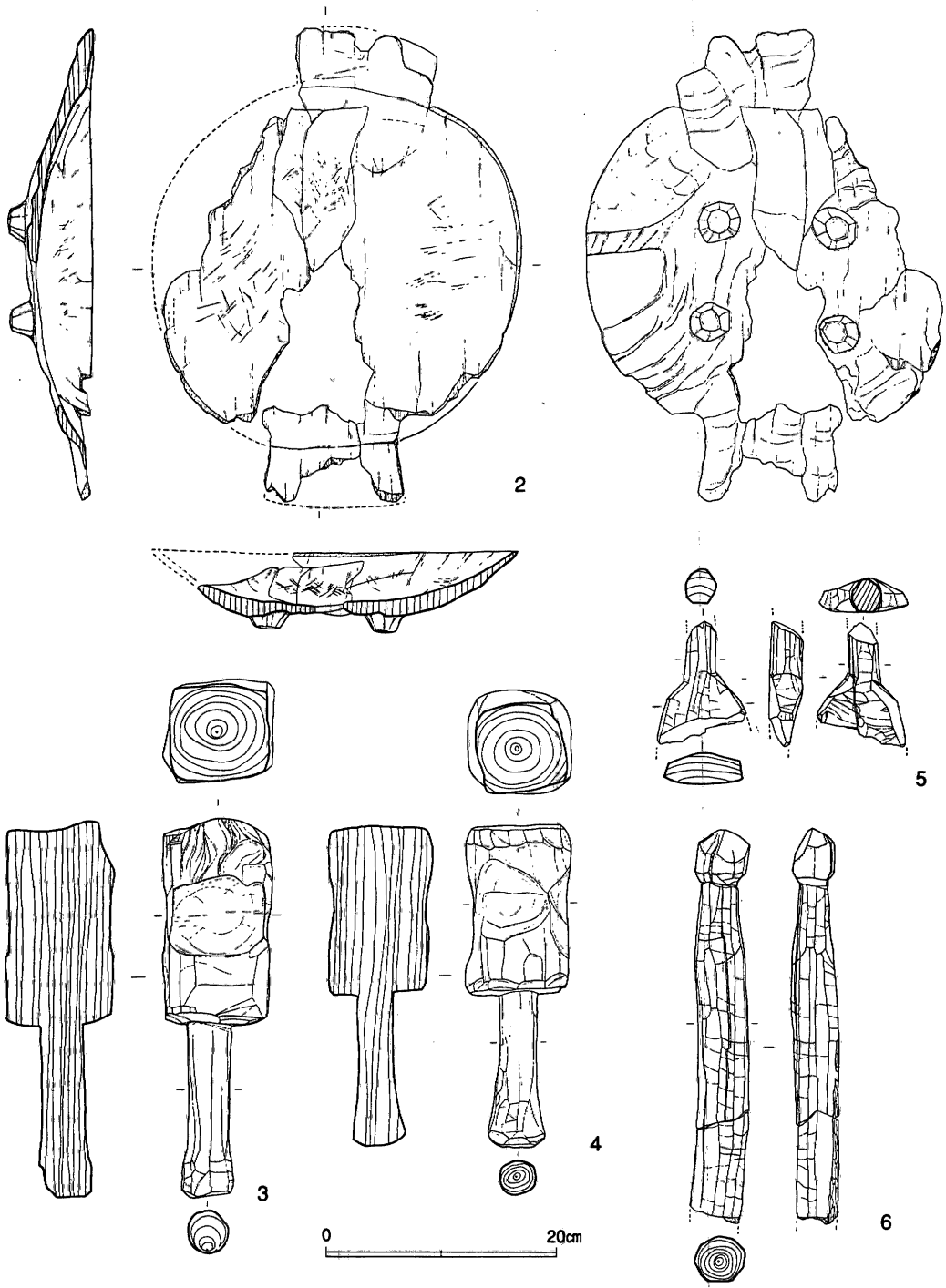


Fig. 53　1SD001出土木製品実測図Ⅱ（1/6）

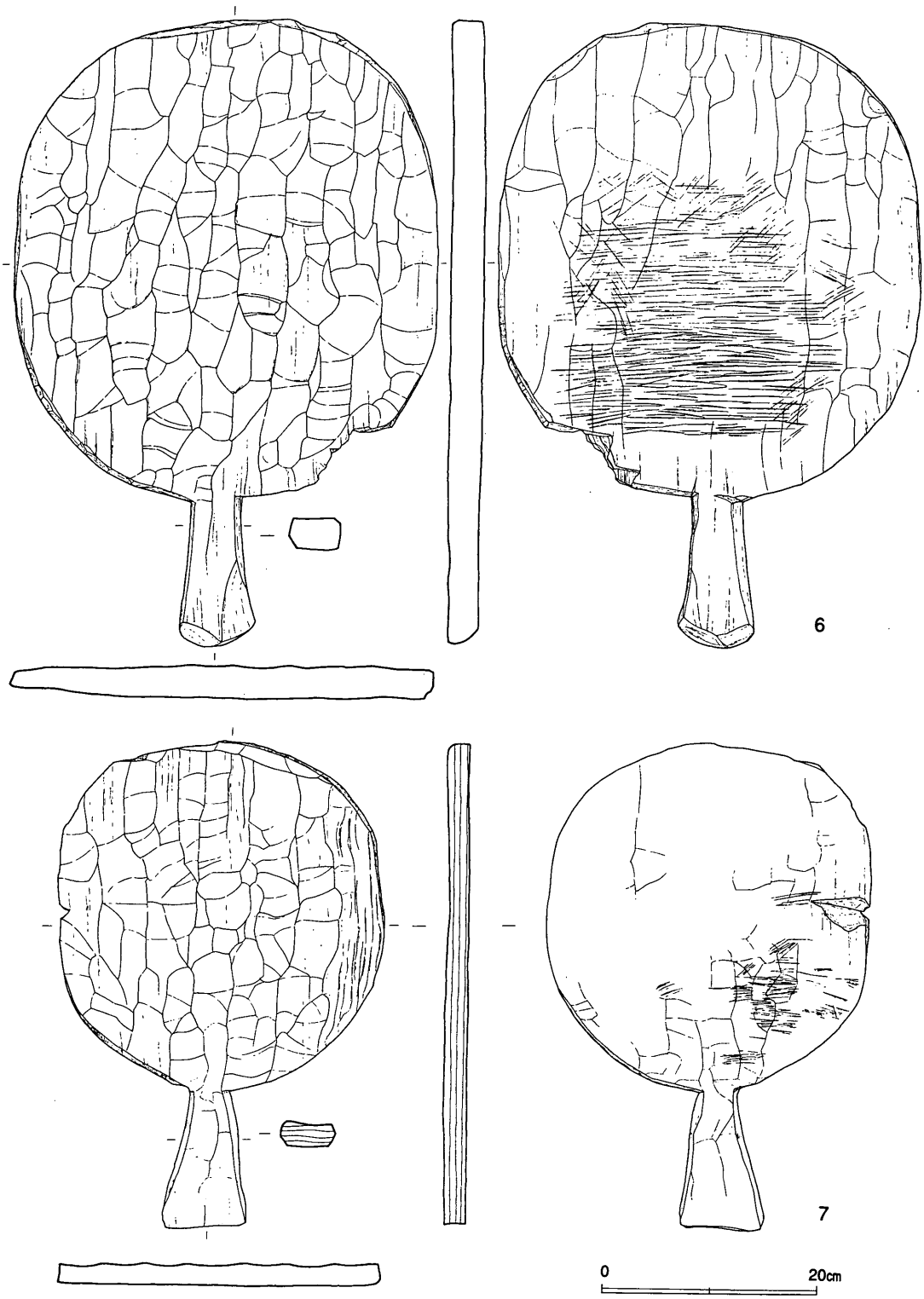


Fig. 54　1SD001出土木製品実測図Ⅲ（1/6）

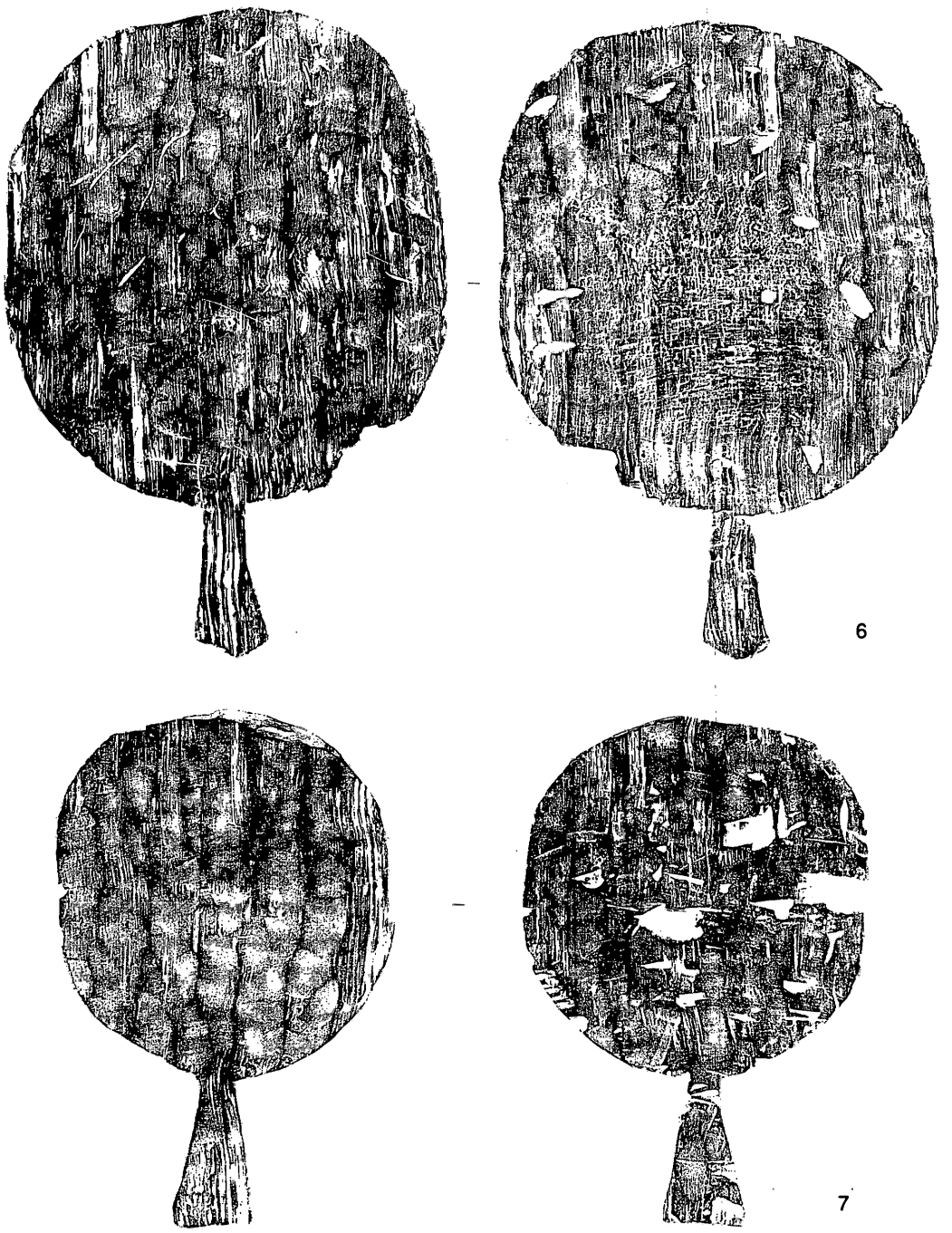


Fig. 55　1SD001出土柄鏡形木製品拓影（1/6）

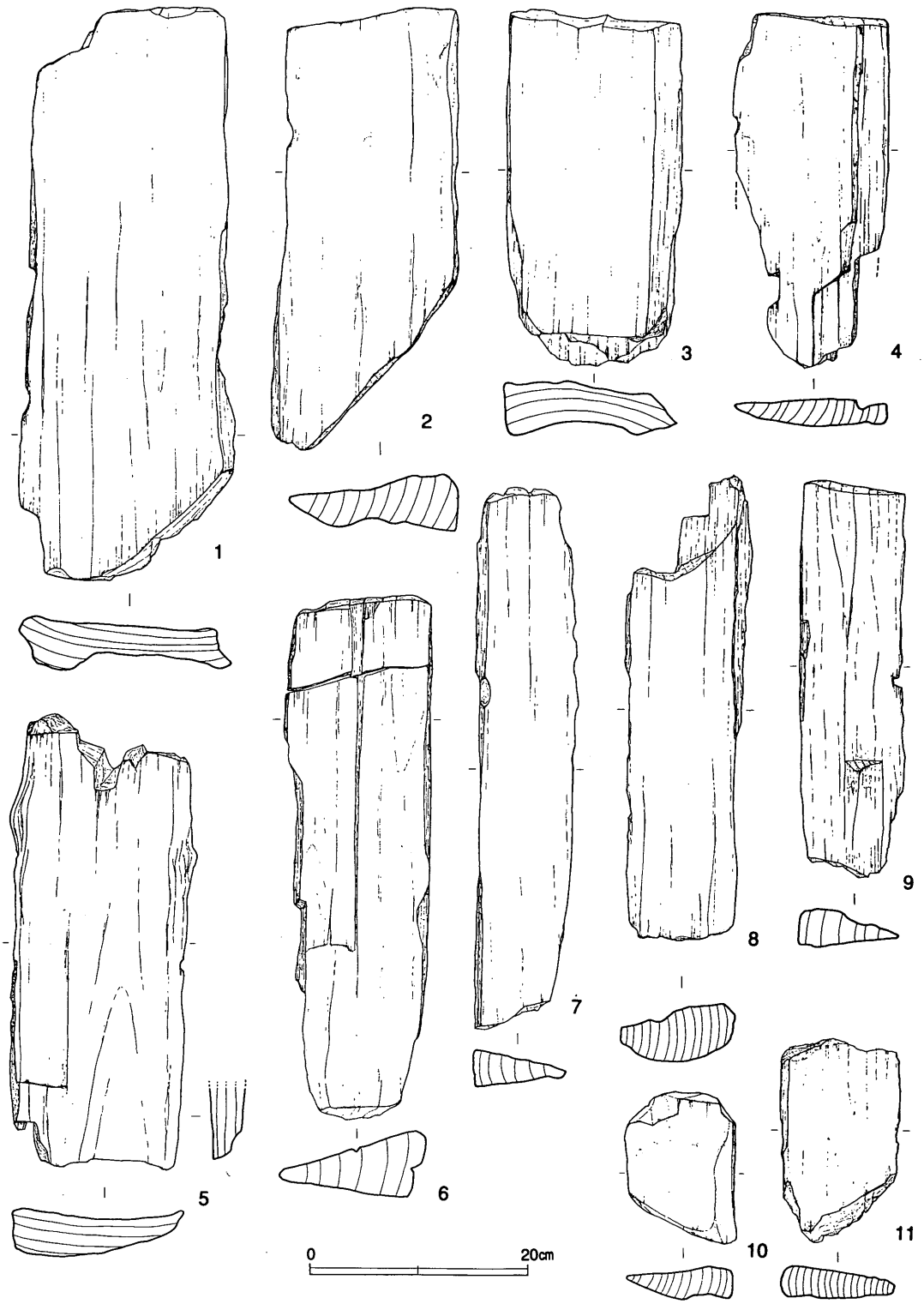


Fig. 56　1SX065出土木製品実測図Ⅰ（1/3）

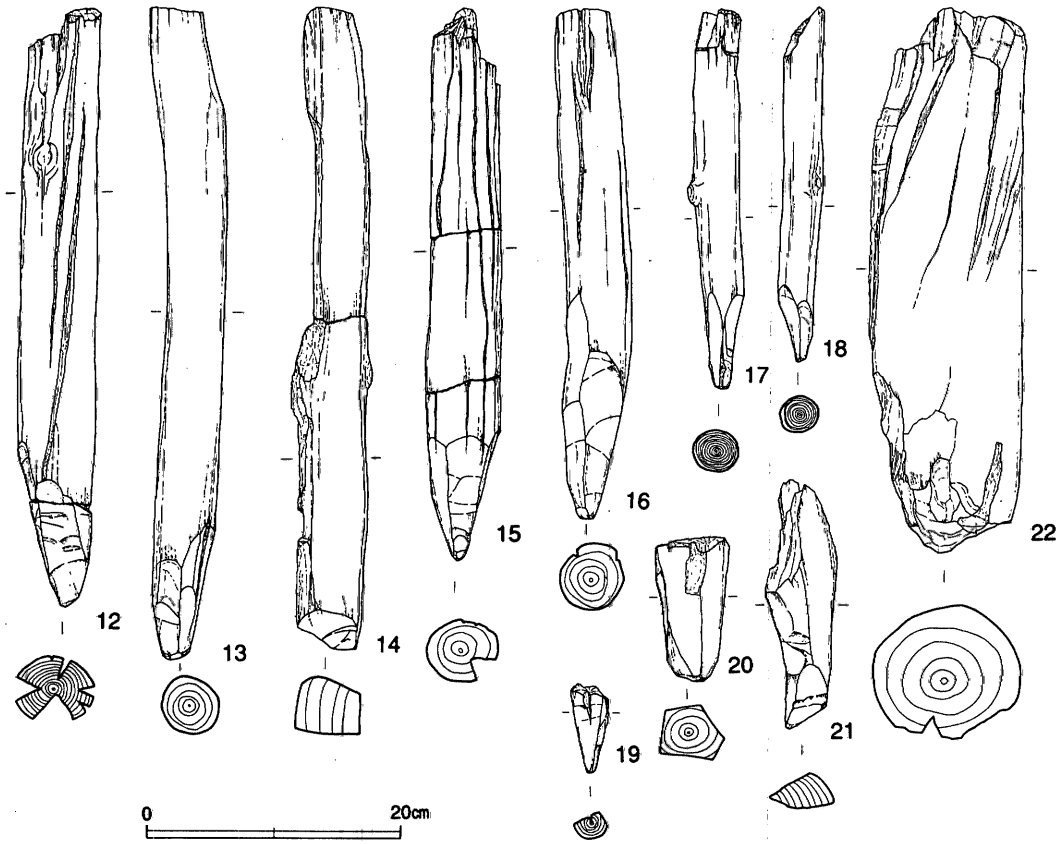


Fig. 57　1SX065出土木製品実測図Ⅱ（1/6）

6は先端を葱坊主状に加工した杭状の製品である。現存の長さ35.0cm、最大径5.0cmを測る。各面は丁寧にケズリ調整が加えられる。黒色土層出土。

その他の遺構出土木製品

1SX065出土木製品（Fig.56・57、Pla.61、別表2）

遺構の構築に用いられた矢板及び杭が主体をなす。1～11は矢板で、断面が三角形を呈するものが多く、下側と考えられる小口部分は先端を僅かながら鋭利に加工している。12～21は杭で、大小様々であるが、多くは自然木の先端を加工した程度のものである。22は加工の状況から柱とみられる。法量は別表2に示した。

1SX090出土木製品（Fig.58、Pla.62、別表2）

杭（1・2）　1は長さ93.1cm、最大径13.0cmを測る。2は長さ79.4cm、最大径11.9cmを測る。両者とも自然木の先端を加工して杭にしたものである。

3は2片に分かれているが形状から同一固体と判断した。本来の形状は復原できないが、最大長48.9cm、復原される最大幅34.7cmを測る。厚い板材の小口部分の両端に把手を各1つづつ作り出している。把手は一方が長さ13.4cm、直径3.9cm、いま一方が長さ16.4cm、直径4.

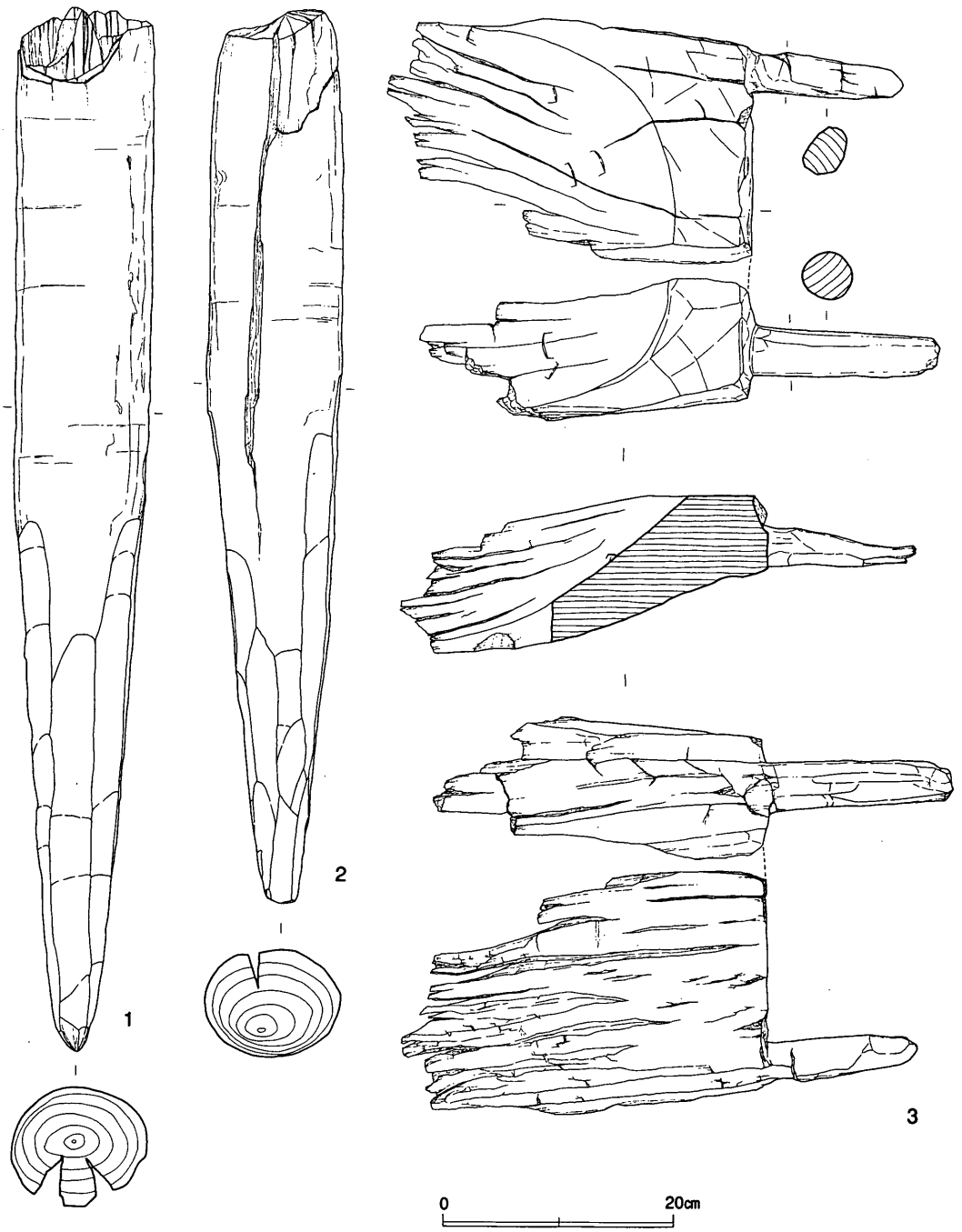


Fig. 58　1SX090出土木製品実測図（1/6）

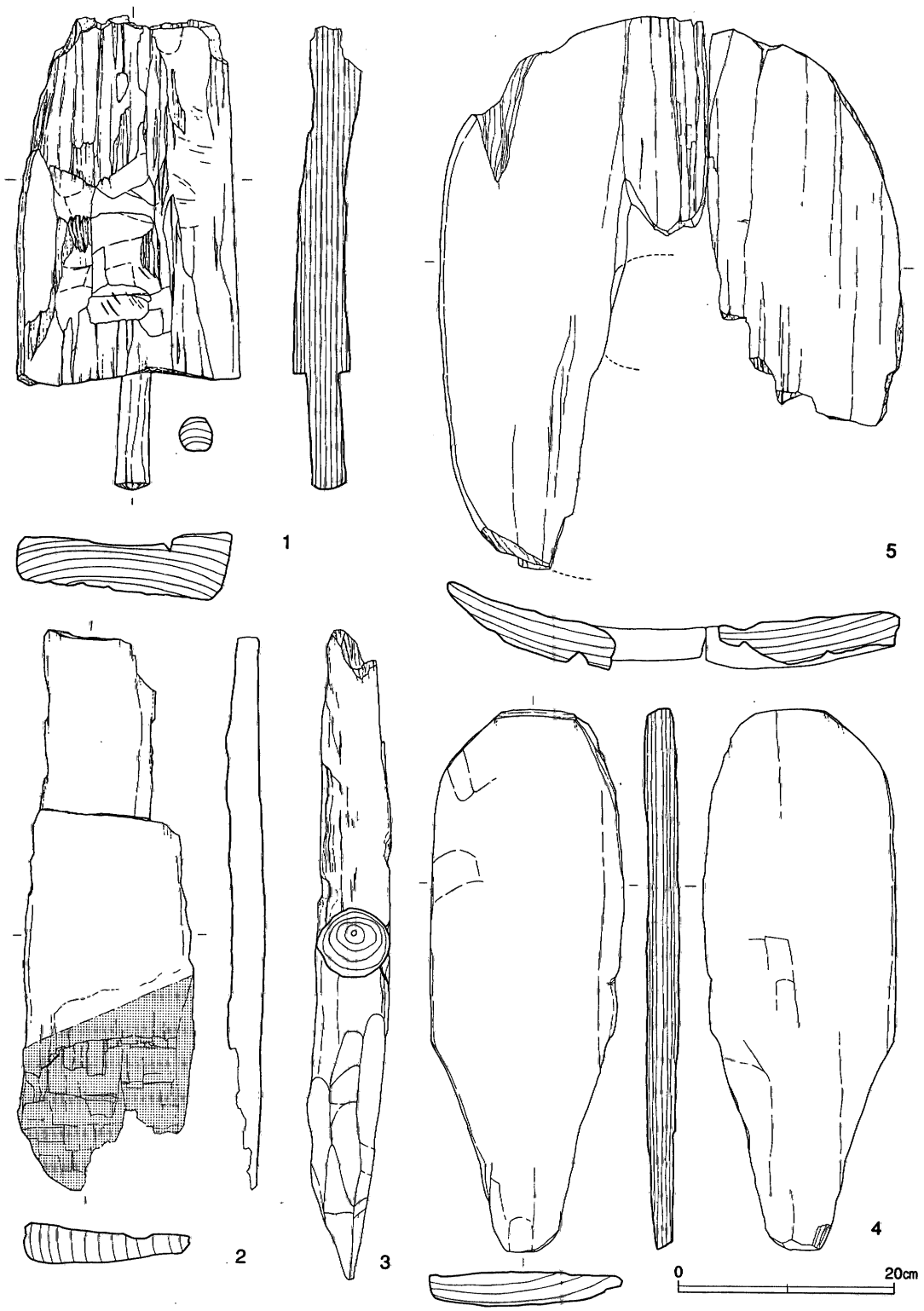


Fig. 59　1SX100出土木製品実測図Ⅰ（1/3）

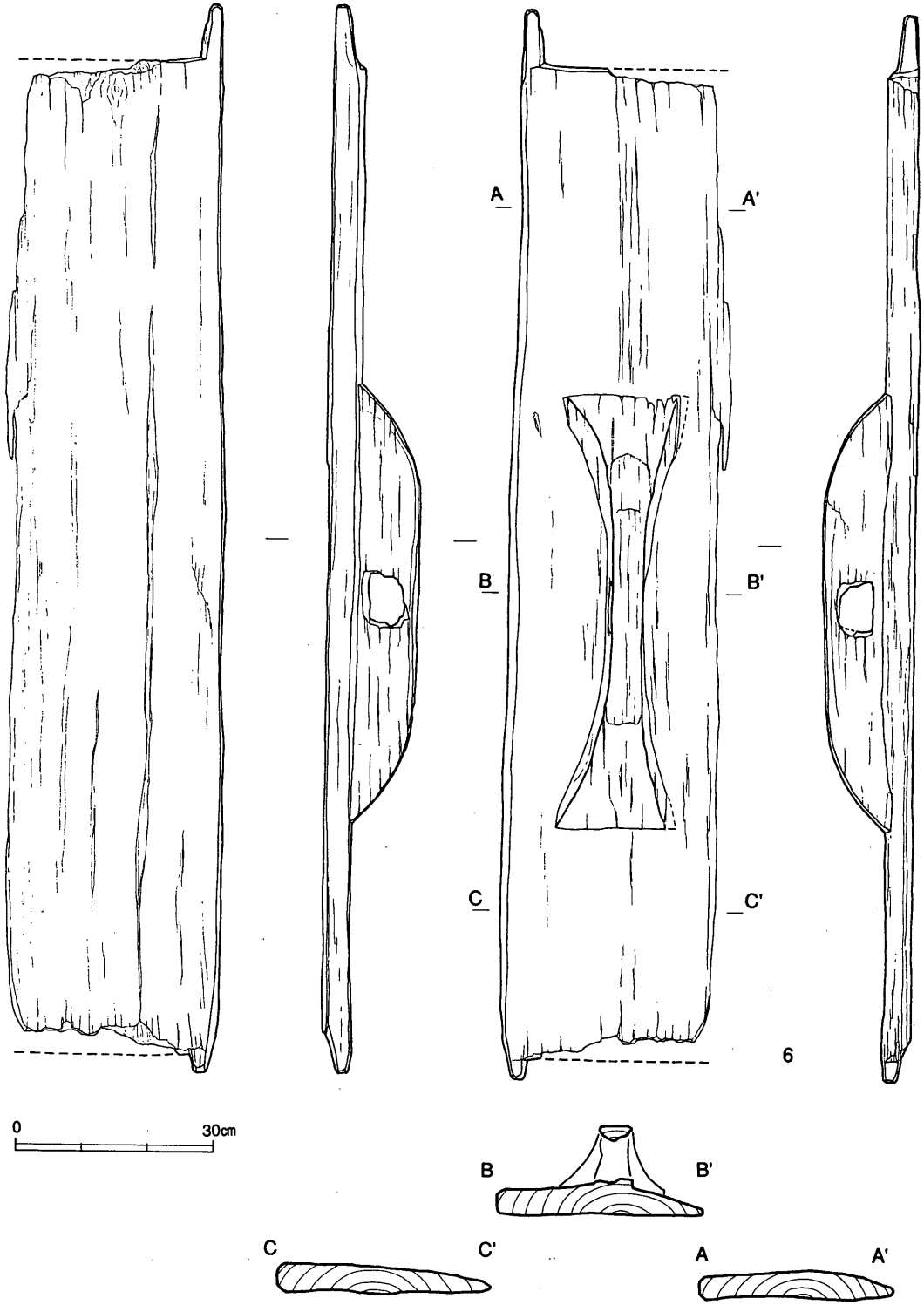


Fig.60　1SX100出土木製品実測図Ⅱ（1/10）

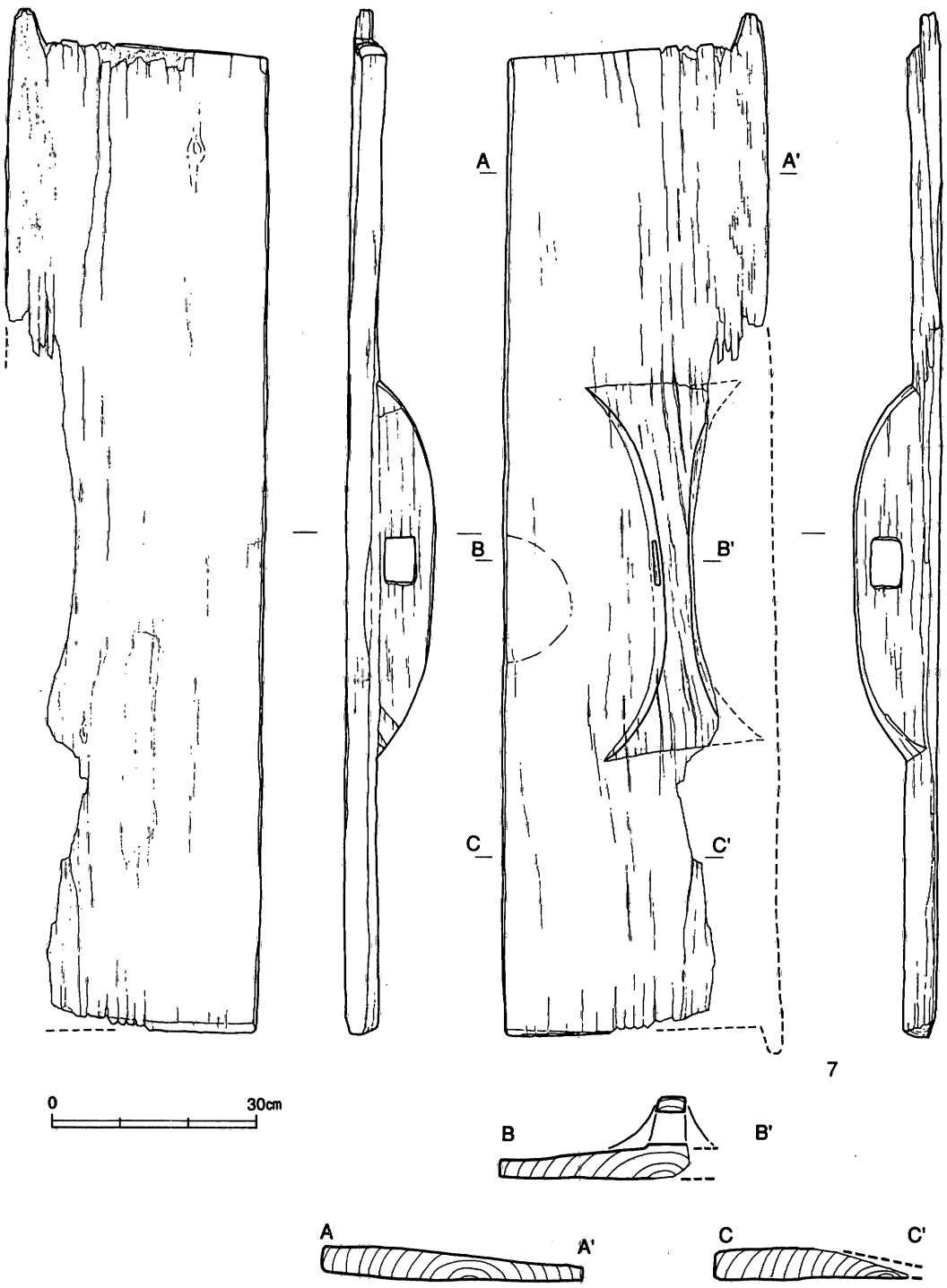


Fig.61　1SX100出土木製品実測図Ⅲ（1/10）

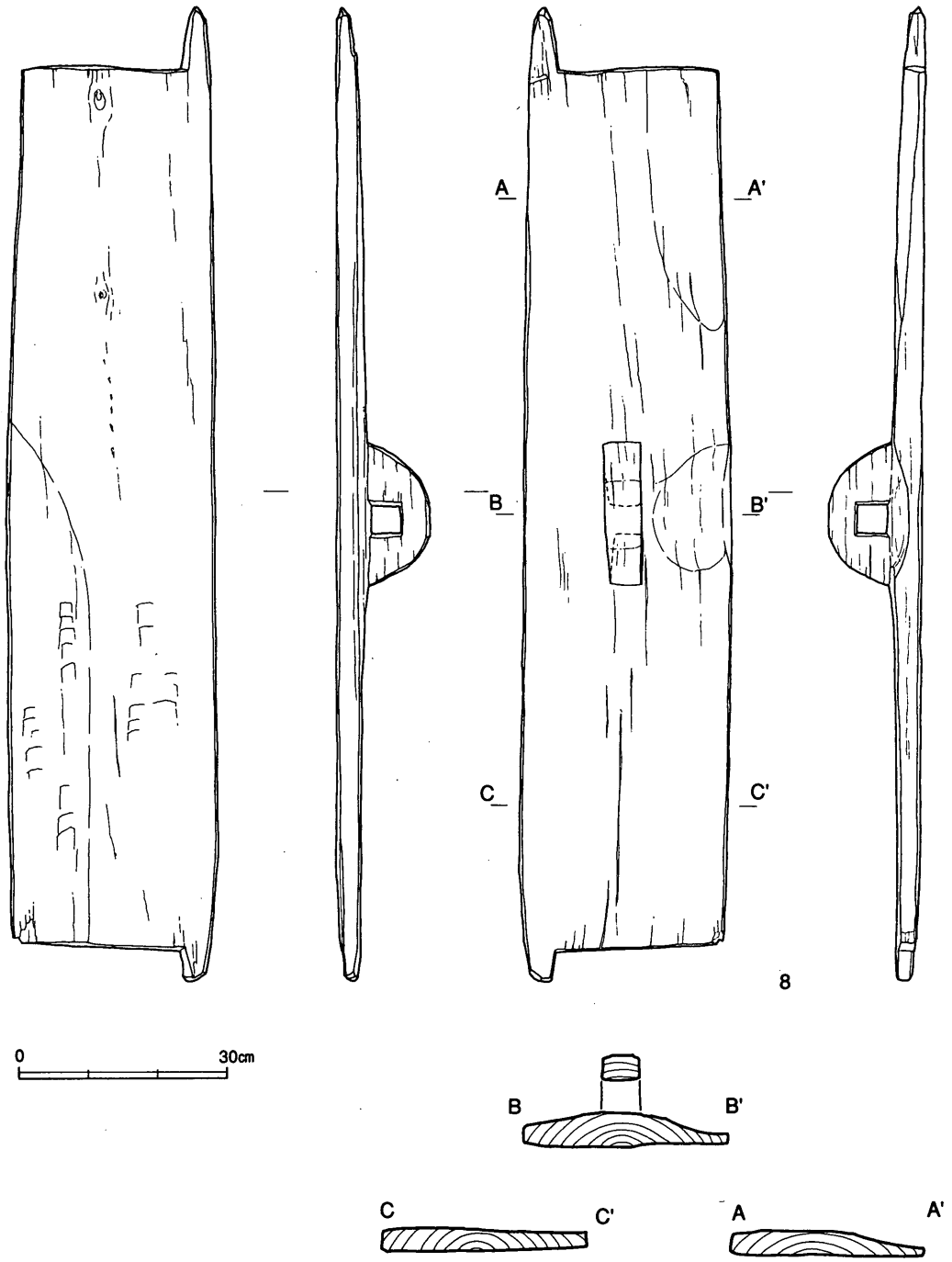


Fig.62　1SX100出土木製品実測図Ⅳ（1/10）

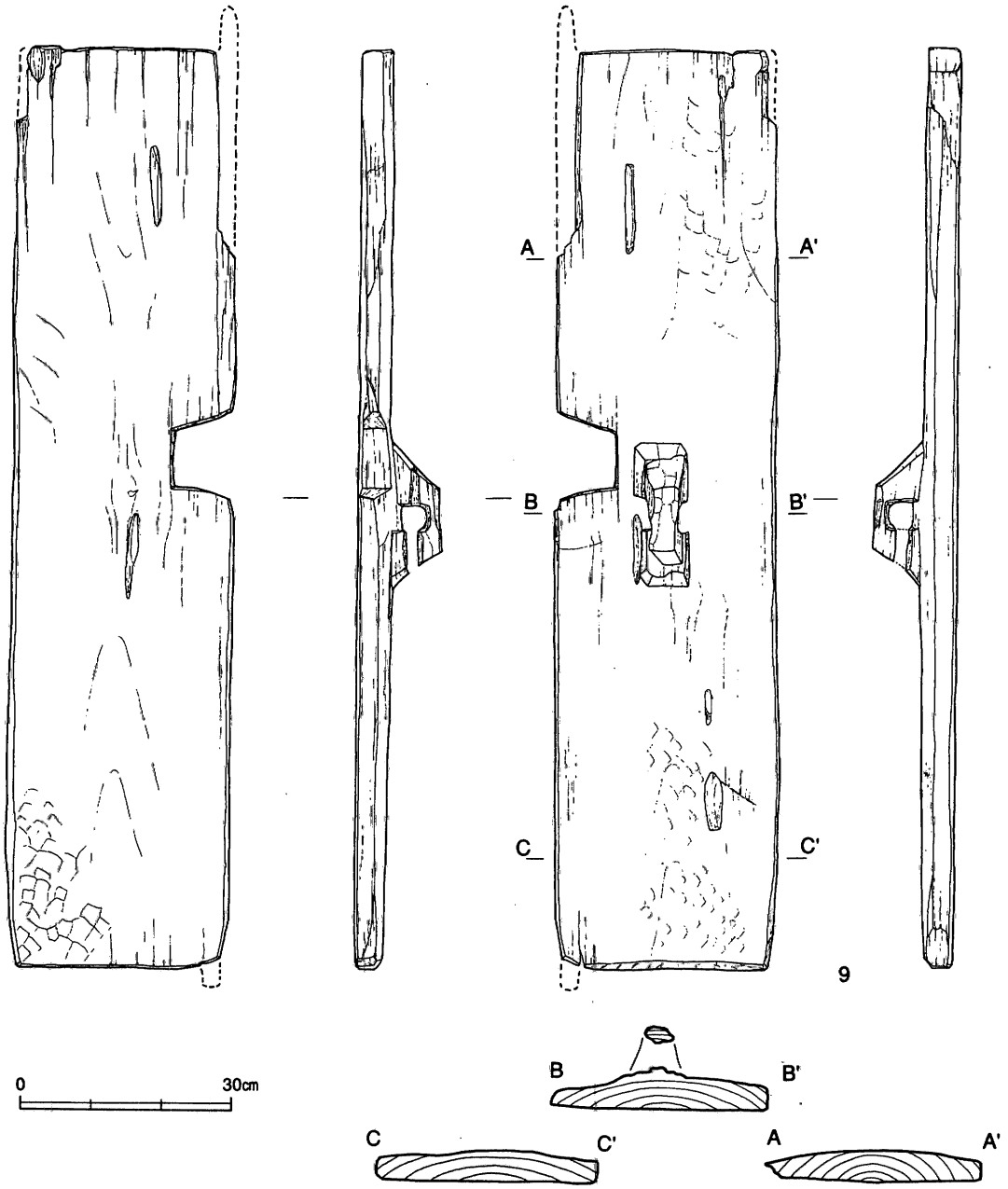


Fig.63　1SX100出土木製品実測図Ⅴ（1/10）

3cmである。本体の片面は弧状に掘り窪められ内面の深さは12cm程度になる。裏面は表面の掘り窪めに対応するように把手方向に至るにつれ競り上がる。用途は明確にしにくいが、把手付きの槽とみられる。

Fig.64　1SX100出土扉板拓影（1/10）

1SX100出土木製品（Fig.59～67、Pla.62～64）

矢板（2）　長さ52.8cm、幅16.4cm、厚さ3.8cmを測る。先端を加工した後、焼いている。出土地点はFig.79－12。

杭（3）　長さ61.8cm、最大径8.5cmを測る。自然木の先端を加工したものである。

工作台（1）　長方形の板材に把手を作り出したもので、工作台的な正確を有するものと判断した。把手を含めた本体の長さ43.6cm、幅20.7cm、厚さは最大で6.4cm、把手の長さ10.9cm、径3.1cmを測る。本体の表面は丁寧な削りであるが、一方の面が窪んでおり且つ細かな傷が認められるところから、この面が使用面と考えられる。

櫂状木製品（4）　長さ51.6cm、最大幅17.9cm、最大厚3.1cmを測る。表面は風化がすすん

でおり調整及び使用の痕跡は明らかではない。出土地点はFig.79-31。

鼠返し（5）　長円径を呈し、僅かに湾曲する。中央に穿孔されていた痕跡が認められる。現存最大長52.2cm、最大幅43.7cm、最大厚4.0cmを測る。

扉（6～9）　6・7は当初一対であったと考えられるもので、平面が蝶形を呈する閂受けを扉の片面に作り出している。閂受けの中央部分には方形の穿孔があり、閂を通していたことがわかる。6は扉部分の長さ151.0cm、幅33.0cm、厚さ約5cm（閂受けを除く）、回転軸を含めた長さは163.0cmを測る。回転軸は長い方がほぼ元の形状を留めているとみられ、短い方は扉の開閉によって磨耗した可能性が考えられるところから、図の上が扉使用段階の上であると判断している。幅については入り口側の腐食が著しく、確定できる数値ではないが、閂受けの位置から見てほぼ現状に近い幅を有していたものと考えられる。蝶形を呈する閂受けは長さ66.5cm、復原最大幅約20cm、中央部分上面の幅5.0cm、高さは9.0cmである。中央に貫通する孔は7×5cm程度に復原できよう。材の厚さは入り口側に向かうにつれ徐々に薄くなっている。表面の調整は風化が進行しておりほとんど観察できない。7は扉部分の長さ144.5cm、幅38.5cm、厚さ約5cm（閂受けを除く）、閂受け付近の回転軸側が大きく腐食しており、片方の軸のみ残存している。この資料の上下方向の判断は、両端から閂受け穿孔部分までの距離が6と等しくなることを条件にして、図に配置した方向が使用段階の方向と考えている。蝶形を呈する閂受けは長さ55.5cm、復原最大幅約20cm強、中央部分上面の幅4.5cm、高さは7.0cmである。中央に貫通する孔は7×5cmである。表面の調整は風化が進行しておりほとんど観察できないが、扉表面で入り口側の閂受け穿孔部分に近い高さのところが僅かに窪んでおり、開閉時に手を差し入れる部分と判断した。このことから扉を閉めた際に6の扉が7の上に一部重複していたことを窺わせる。したがって復原される入り口の広さは66cm内外ではなかったかと思われる。8は閂受けの平面が長方形、立面が半円形を呈するものである。表面の風化はあるが大きな欠損はなく、ほぼ本来の形状を留めるものと見られる。各部の法量は、扉部分の長さ126.0cm、幅30.0cm、平均的な厚さ約3.

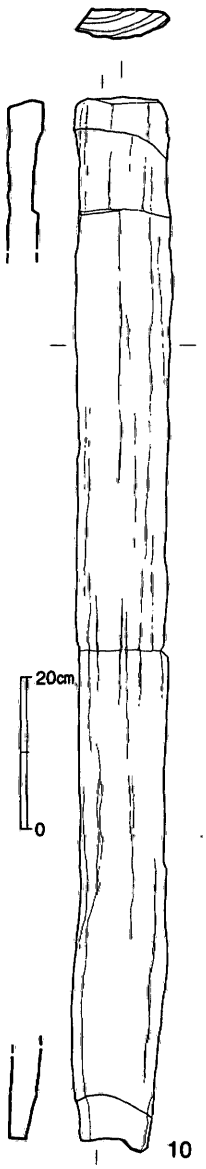


Fig.65　1SX100
出土木製品実測図
Ⅵ（1/10）

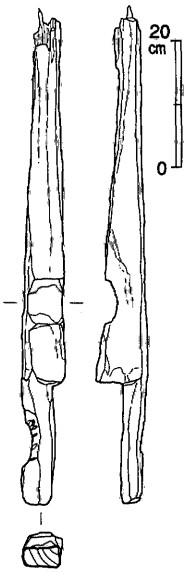


Fig.66　1SX100
出土木製品実測図
Ⅶ（1/6）

5cm（閂受けを除く）、回転軸を含めた長さは140.5cmを測る。回転軸は長い方がほぼ元の形状を留めているとみられ、短い方は扉の開閉によって磨耗した可能性が高いと考えられるところから、図の上が扉使用段階の上であると判断している。閂受けは長さ20.5cm、幅5.5cm、高さ8.5cmで中央に5×5cmのほぼ正方形の穿孔がある。閂受けの高さに近い入り口側の材は僅かに窪んでおり、開閉時に手を差し入れる部分と判断される。扉裏面は磨耗が少ないため、部分的に削りによる調整の痕跡が観察される。９は閂受けの平面が長方形、立面が台形を呈するものである。両側の回転軸と閂受けの一部を失っているが、軸側の側縁に12.0×8.5cmの二次加工がある以外は扉部分はほぼ完存している。扉部分の長さ131.0cm、幅31.5cm、平均的な厚さ約4.5cm（閂受けを除く）を測る。この状態では使用段階の上下は確定できない。把手は長さ20.5cm、下端の幅8.0cm、上端の幅4.0cm、高さ7.0cmで、中央に5×4cmで真ん中付近がやや狭くなるもののほぼ正方形の穿孔がある。扉両面は磨耗が少ないため、部分的に削りによる調整の痕跡が観察される。

８及び９については現在のところ当初一対であったものか否か判断に苦しむところである。一対であることに対する否定的な考えは、８の下端から閂受け穿孔部までの距離が９のいずれの側からの距離にも該当しないことにある。８の上下を逆に考えた場合は図に示す９の方向で近似した数値を得られるが、８の回転軸は長さの差が大きく、この状態では短い方の回転軸を鴨居に差し込み、長い方の回転軸を敷居に嵌めた時、敷居面と扉下面の間に大きな隙間（約5cmは空く）を生じさせないかぎり、扉は外れてしまうことになり実際の使用に耐えないことがわかる。しかしながら肯定的な考えとして、扉自体の法量が近似していること、閉まっている状態で６・７と同様に重なりが認められ、且つ扉表面の構造が同様であることが前提であるとした場合、８は下、９は上に重なる扉であると見做されること、閂受けの平面形及び長さが近似し、且つ９の閂受けが二次加工とした場合にその

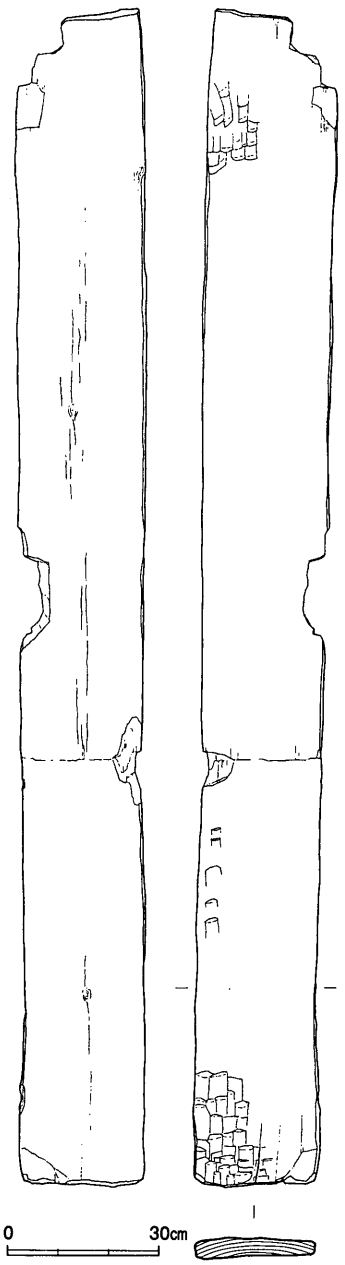


Fig.67　1SX100出土
木製品実測図Ⅷ（1/15）

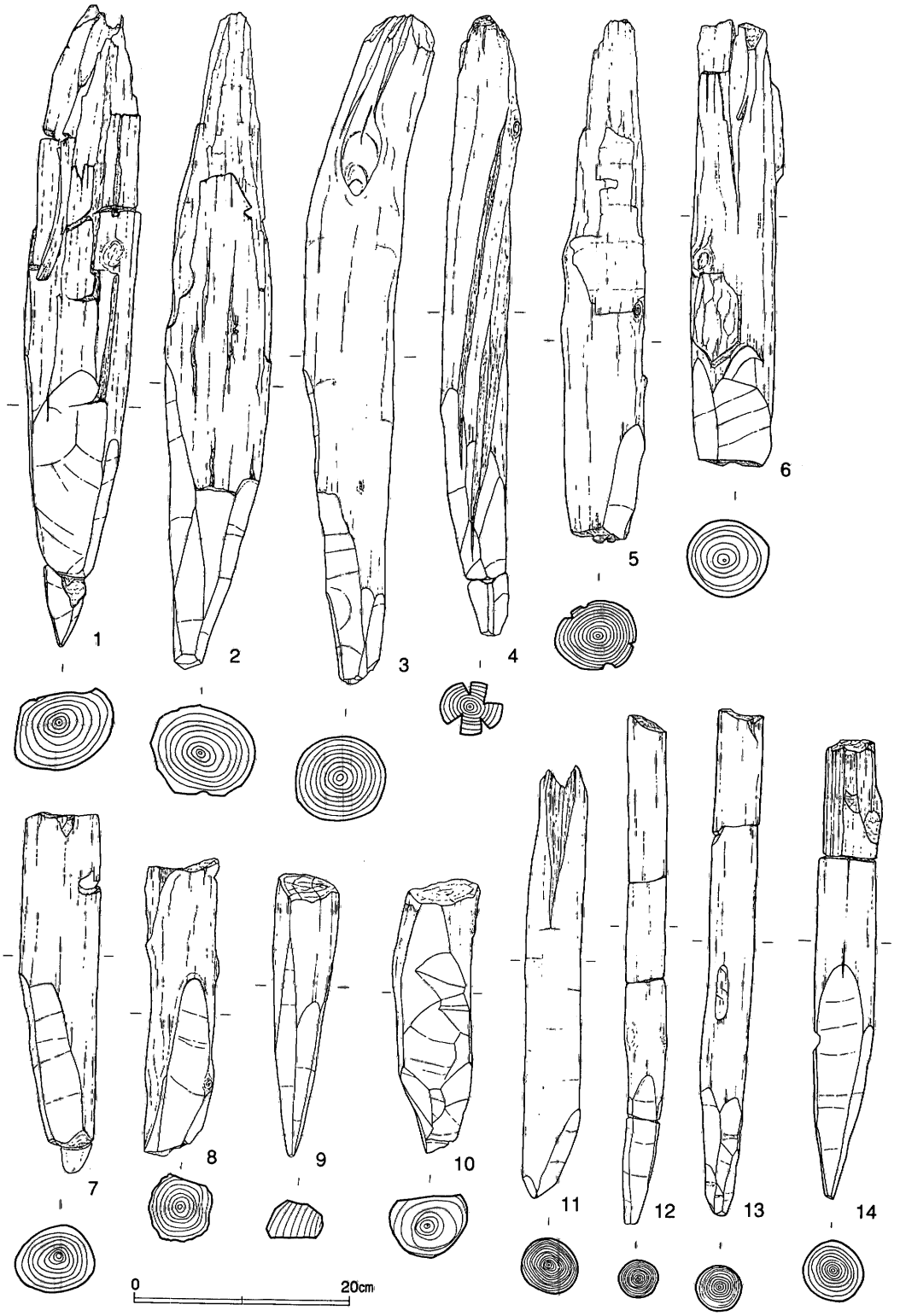


Fig. 68　1SX105出土木製品実測図Ⅰ（1/6）

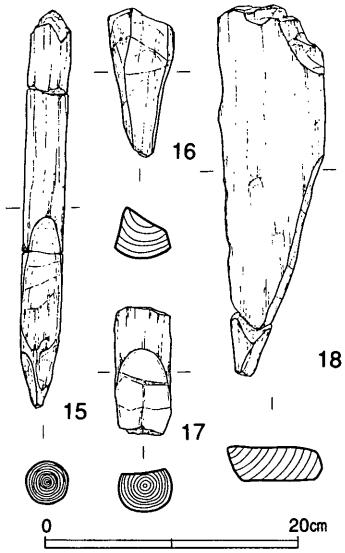


Fig. 69　1SX105出土木製品実測図Ⅱ
(1/6)

法量は、基本的には８の法量の範囲内であり実際に加工が可能なこと、などが掲げられる。よって早急な判断は避けることとした。出土地点は６がFig.79－１、７がFig.79－34、８がFig.79－26、９がFig.79－25である。

棒材（10・11）10は片方の端部を失うが、上下（左右）に同様の浅い繰り込みを設けるものである。現状の長さは143.2cm、幅は13.0cm、厚さ4.3cmを測る。建築部材の一部と考える。11は長さ82.4cm、最も太い部分で6.0×6.3cmを測るもので、端部の19.6cm分を3.7×6.0cmのほぞ状に加工し、その一部をさらに抉り取っている。本体部分の小口に近い側にも抉りがあり、小口とは反対側に向かうにつれ徐々に細くなっている。この先は欠損しており明らかではない。建築部材の一部と考える。出土地点は10がFig.79－15、11がFig.79－39である。

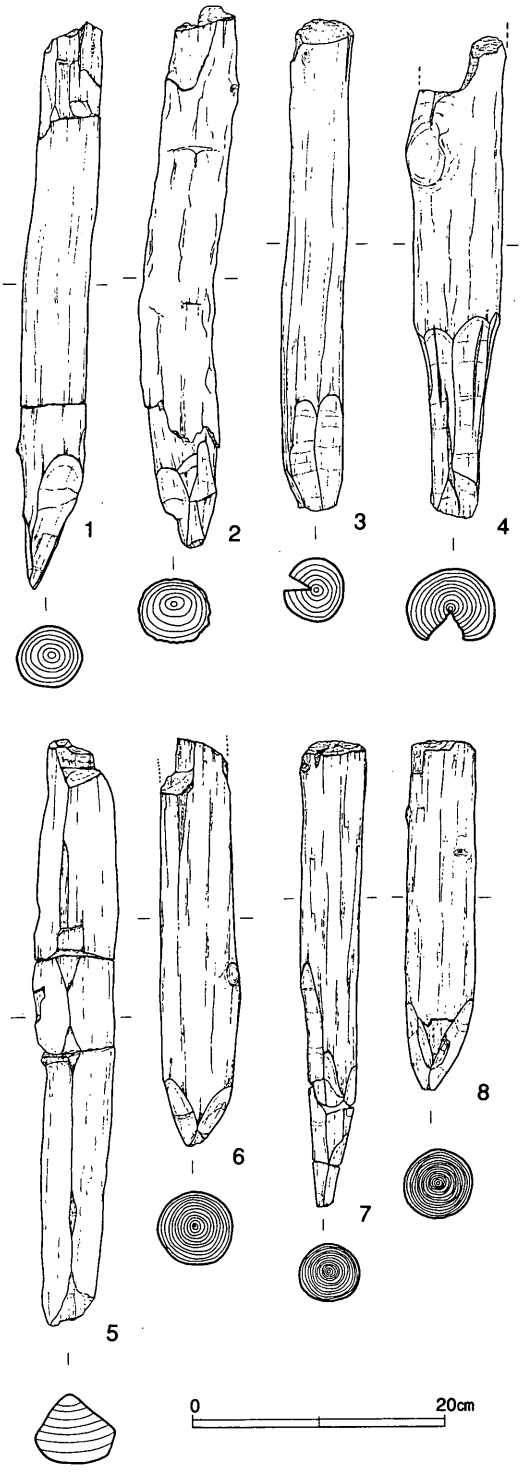


Fig. 70　1SX110出土木製品実測図（1/6）

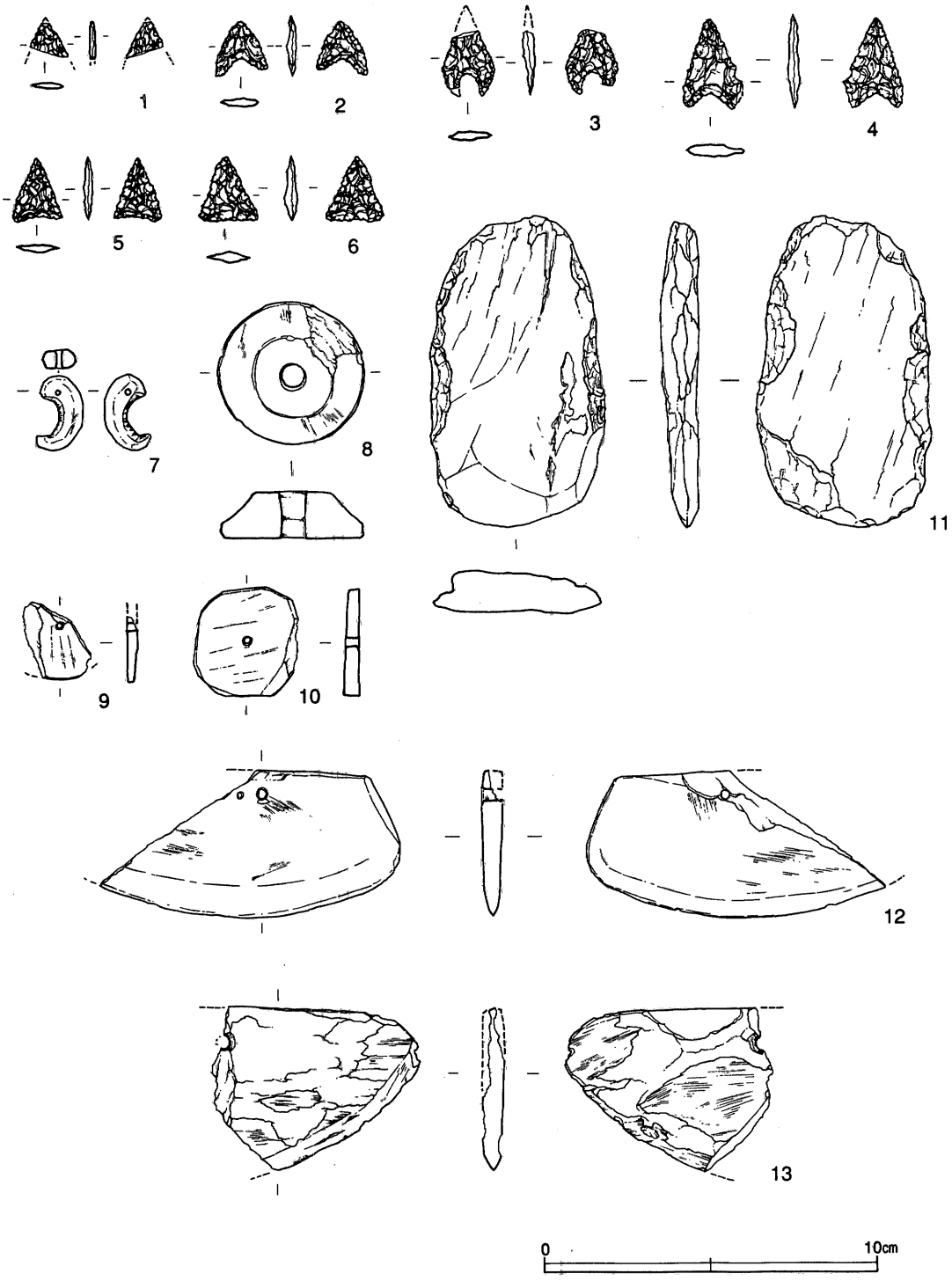


Fig. 71　石器実測図Ⅰ（1/2）

板材（12） 長さ237.4cm、幅26.4cm、厚さ4.6cmを測るもので部分的な破損はあるが、これで全体の形状を窺い知ることができるものと思われる。材の表面の一部には、削りによる調整の痕跡が認められる。建築部材の一部と考える。出土地点はFig.79－38。

1SX105出土木製品（Fig.68・69、Pla.65、別表２）

杭（１～17） 自然木の先端を加工したもので太さは不揃いである。法量は別表２に示した。

矢板（18） 板材を加工したもので、先端を尖らせている。杭としての意識がはたらいた結果か。

1SX110出土木製品（Fig.70、別表２）

杭（１～８） 自然木の先端を加工したもので太さは不揃いである。このうち５は五角形を呈し、うち４面が加工されている。法量は別表２に示した。

３．石製品

石器（Fig.71・72、Pla.66・67、Tab.1）

打製石鏃（１～６） すべて黒曜石である。平面形状で分類した場合、抉りが深く中位に最大幅を有するもの（３）、二等辺三角形状を呈し抉りが浅いもの（２・４）、ほとんど抉りが認められないもの（５・６）に分けられる。１は先端部の破片資料である。

石鍬（11） 緑色片岩製で、刃部の片面のみ研磨している。長さ9.4cm、幅5.0cm、厚さ1.1cmを測り、偏平な自然石を利用したもので、両側から受ける調整は細かな所作によっている。表土出土。

磨製石斧（15） 玄武岩製で刃部を欠失する。現存の長さ13.2cm、最大幅7.9cm、厚さ5.3cmを測り、表面には敲打痕が観察される。1SD001出土。

石包丁（12・13） 12は泥岩製で、刃は両刃である。紐穴は径0.3cmと小さい。紐穴の横約0.5cmのところに穿孔途中で中止したとみられる窪みがある。現存最大長9.0cm、断面図を作成した部分の幅4.4cm、最大厚0.6cmを測る。13は輝緑凝灰岩製で、刃は両刃である。紐穴は両側からほぼ均等に回転を利用した穿孔具によって穿たれる。現存最大長6.2cm、同幅5.0cm、厚さ0.6cmを測る。両者とも1SX100出土。

勾玉（７） 頁岩製とみられ、長さ2.3cmを測り、全体を研磨によって仕上げている。穿孔は両側から行なわれているようである。灰色土層出土。

紡錘（８） 滑石製で、直径4.3cm、高さ1.4cmを測る。中央に直径0.8cmの孔を穿つ。穿孔は両側から行なうため孔の中ほどに稜線が巡る。表土出土。

臼玉（9・10） 滑石製で、表面及び側縁は丁寧に削られている。10は長辺3.3cm、短辺3.1cm、厚さ0.4cmを測る。中央に径0.3cmの穿孔がある。9は破片資料で厚さ0.3cmを測り、中央とみられる位置に径0.2cmの穿孔がある。両者とも灰色土層出土。

砥石（14） 砂岩製で、長さ27.5cm、最大幅8.6cm、厚さ3.2cmを測る。広端部小口面は自然面、狭端部小口面は切断面である。表土出土。

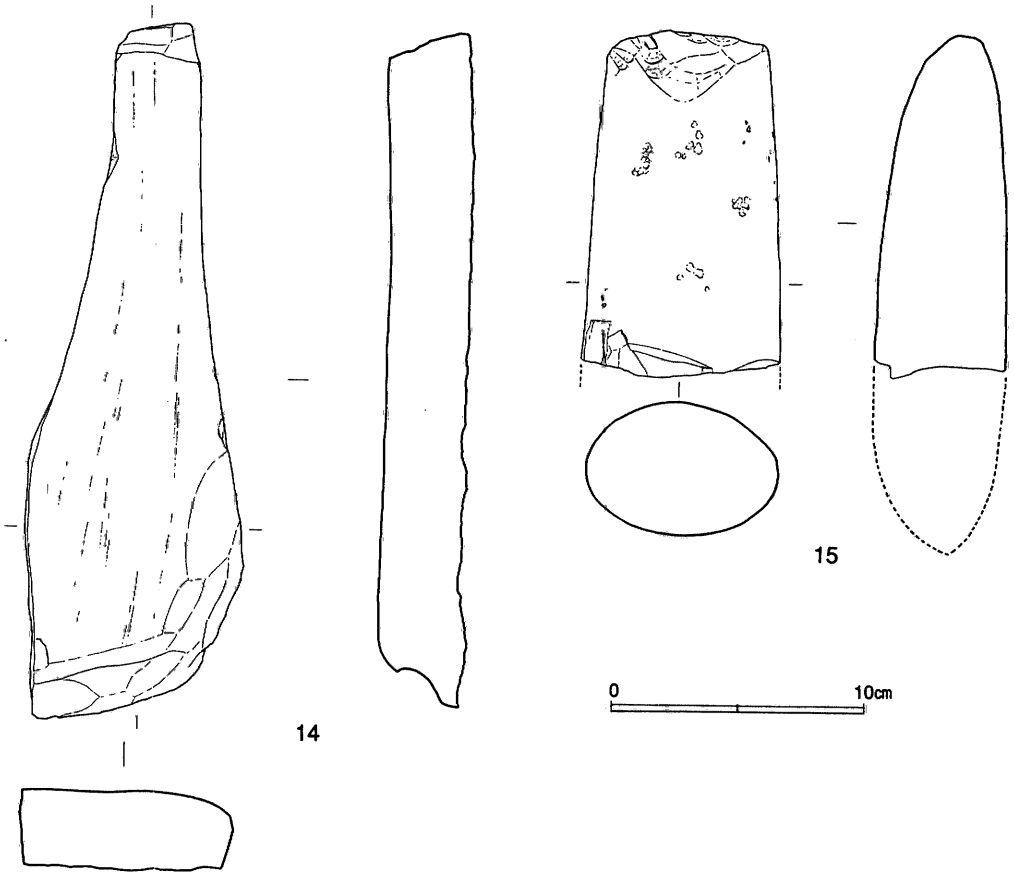


Fig. 72 石器実測図Ⅱ（1/3）

Tab.1 石鏃計測表

図番号	出土地点	全長cm	幅cm	厚さcm	素材
Fig. 71-1	灰色土層	1.1+	1.2+	0.2	黒曜石
Fig. 71-2	表面採集	1.7	1.6	0.3	安山岩
Fig. 71-3	1SX028	1.9+	1.7	0.4	黒曜石
Fig. 71-4	表面採集	2.8	1.8	0.4	安山岩
Fig. 71-5	灰色土層	1.9	1.5	0.3	黒曜石
Fig. 71-6	1SD001腐食土層	1.9	1.8	0.4	黒曜石

Ⅳ．小結

１．各遺構の年代と所見

時代を追って尾崎遺跡第１次調査を概観することにより小結としたい。

縄文時代

この時代に属する遺物には石鏃と石鍬があるが、顕著な遺構は検出されていない。近接する前田遺跡、宮ノ本遺跡からは後晩期の土器とともにこれらの遺物が出土している。石鍬の原材料の緑色片岩がよく出土するという特徴がある。

弥生時代

板付Ⅰ式の甕型土器、Ⅱ式の壷型土器などの前期の遺物がまとまって調査区域の北側で検出されている。この時期には大佐野川を挟む対岸の前田遺跡で前期の住居を中心とした集落が、南約500mの筑紫野市剣塚遺跡には貯蔵施設と墳墓が見つかっており、この地域の開発がこの時期に始まったことを示している。

古墳時代

前期前半には４軒の住居が相当すると思われる。これら住居の床面、特に中央部から出土する大半の遺物は須恵器を含む６世紀の遺物であるが、1SB070の主柱穴掘り方から出土した小型特種器台によって本来の建てられた時期が知られる。このことから床面中央部がかなり長い間窪んだ状態で開いていたことが想定される。住居のプラン自体は方形を呈しベットを持つが主柱穴は２つであり、弥生的要素を残しながら古墳時代のプランに移行しつつある。弥生後期後半までの集落は川向こうの前田遺跡にあり、この時期（布留古段階）には尾崎遺跡、上川久保遺跡等の南側の自然堤防上に移行する。宮ノ本遺跡の前期古墳もこの時期に次々と形成されてゆく。住居以外にこの時期に属す可能性がある遺構には位置、方位から1SB029などが挙げられるが、顕著な遺物が出土しておらず後述の後期に属すことも否定できない。

後期後半には調査区域の南北に大きな溝が現われ、これは水流が無く低湿地化しており、これに寄生して住居を含む居住空間が営まれている。溝自体は蛇行しながらも現在流れる大佐野川の流下する方向に従い、特に1SD001は土層観察でもほとんど滞水状態を示しており、これらの溝は、古墳時代の大佐野川が氾濫し自然堤防の後背湿地側に造った三日月湖状の溜まりであったと解される。安定地盤上には住居、掘立柱建物、土坑が存在するが、今回の調査区域では有機的な関係説明は難しい。1SD001内で見つかった流木や杭、建築部材は杭列との関係から恣意的にこの場所に置かれたものと解され、大型の部材を「コ」の字形に並べ杭で囲ったもの（1SX100・110）と掘り方に矢板を打ったもの（1SX065）、ただ材を平行に並べたもの（1SX090）とが見られる（Fig.75）。その時期は出土した須恵器の坏が小田富士雄氏編年の坏IIのタイプに属することから６世紀前半代と考えられる。その後の調査により大型の囲いを持

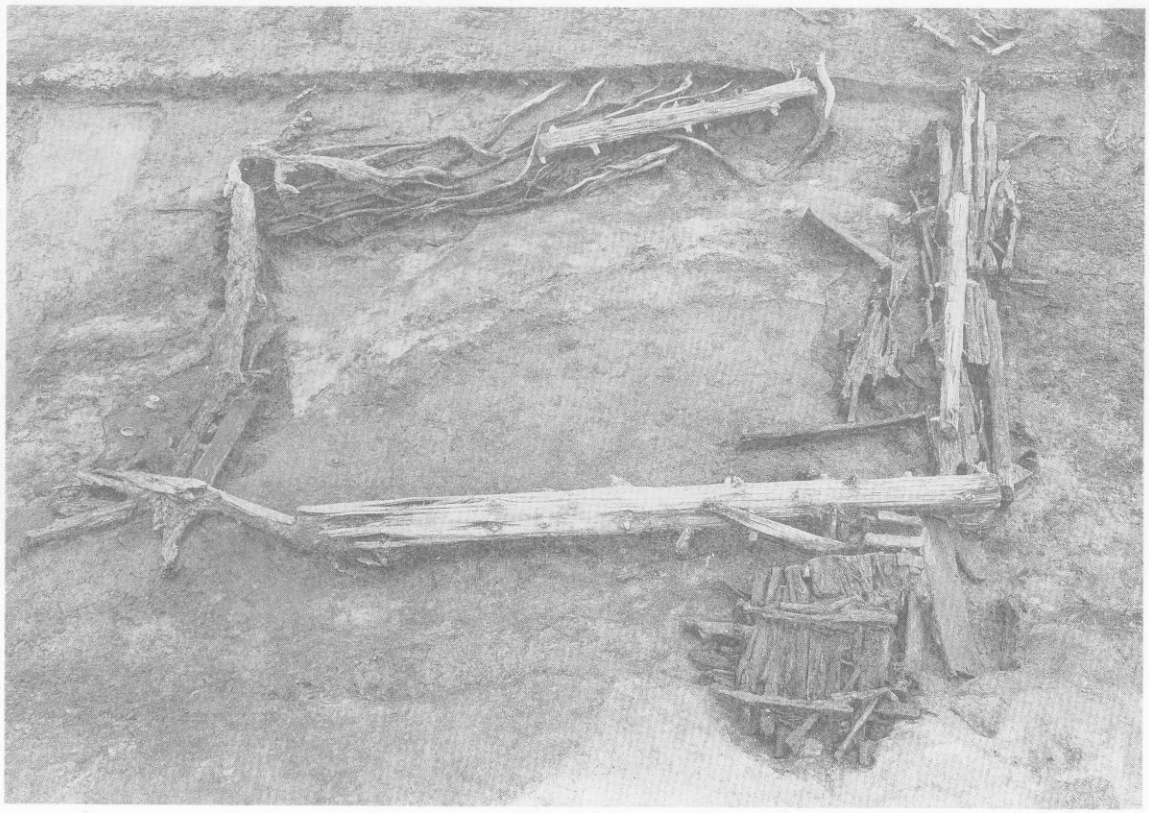


Fig. 73　脇道遺跡第２次調査検出の貯木遺構

Fig. 74　尾崎遺跡第２次調査検出の貯木遺構

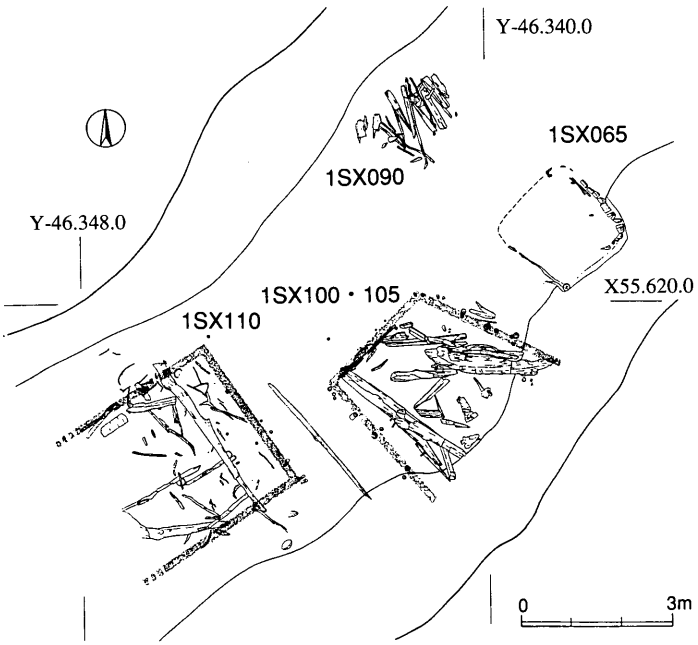


Fig. 75　桝状遺構他復原想定図

つ遺構が西南に近接する脇道遺跡（Fig. 73）、材を平行に並べたものが尾崎遺跡２次調査の低湿土壌中で見つかっており（Fig. 74）、該期集落の周辺の低湿地が木製資材の貯木場に利用されていたことがわかる。湿地の汀線きわで手つくねの器台や椀の模造品、多量の土師器、須恵器の坏類が廃棄されており、これらを用いた何らかの行為が複数回おこなわれたことを示している（脇道遺跡でも同じような状況が見られる）。集落本体は恐らく本報告の地点の北東側にあったものと思われる。

歴史時代

「表土」とした遺構全体を覆う層から各種の陶磁器類が出土している。越州系青磁Ⅰ類片の出土はこの時期の墳墓が展開する宮ノ本遺跡に関連するものか。明の染付は戦国期に「わくど」城、「尾崎」城などのこの周辺にあったとされる山城や近世初期の検知帳に見られる「大佐野村」との関連を想定させるが、この土地は基本的に13世紀頃の大規模な開墾によって本格的に耕地化し、現在に至っている。

２．扉板について

尾崎遺跡第1次調査で出土した4枚のほぞ穴を持つ把手の付いた板材は、各々の長軸方向の一端に回転軸を備え持つことから建物の扉材であることが推定され、九州大学工学部建築学の山本輝雄先生のご教示により、現在でも鹿児島県や沖縄県の南島域でこのタイプの扉が伝承されていることがわかった（Fig. 76）。

遺跡から出土する建築部材はほとんどの場合、建物廃絶後に他の施設に部材として転用されることが多く、または転用するまでの間低湿地に仮保管された状態で検出されることが多く、各部材が有機的に意味づけされるケースは少ない。しかし、扉に関しては近年出土例（Fig. 77）が増え、鴨居や方立といった関連部材がセットで供伴したものもあり、それらを概観する中で尾崎遺跡の扉を振り返ってみたい。

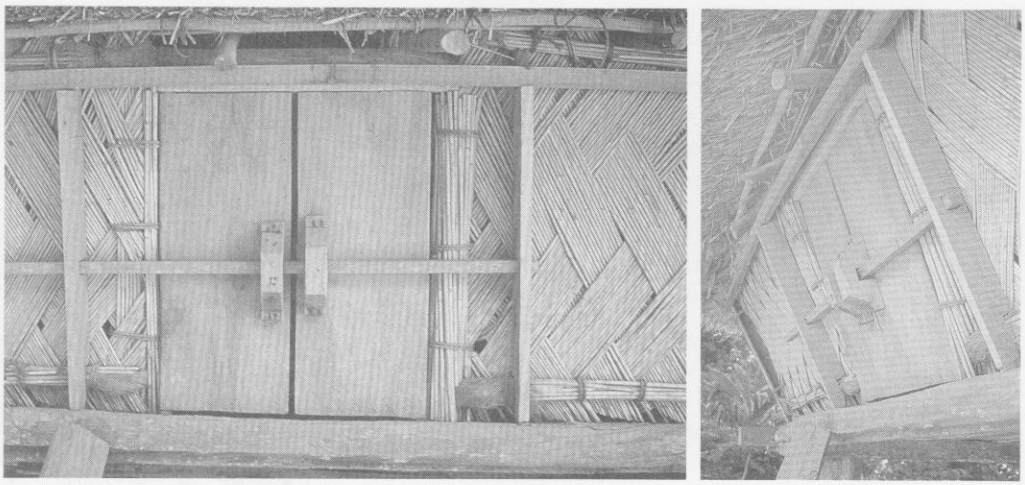


Fig. 76　南島の倉庫に用いられている扉（九州大学山本輝雄氏提供）

Tab. 2　木製扉板出土遺跡地名表

番号	府県名	市町名	遺跡名	遺構	遺物	時期	扉法量	備考	関係文献等
1	福岡県	太宰府市	脇道	低湿地	扉他	6世紀前半		貯蔵施設に転用	未発表
2	福岡県	二丈町	石崎	甕棺	扉	弥生前期末		甕棺蓋に転用	註1
3	福岡県	北九州市	権ヶ迫	土杭D-12	扉	古墳時代	115×（40）		註2
4	福岡県	北九州市	長野A	2区3号土杭	鴨居？	古墳時代		谷池	註3
5	福岡県	北九州市	金山	5区包含層	扉	弥生末～古墳前期		低湿地	註4
6	山口県	下関市	吉田馬場	A地区LD010(溝)	扉	古墳後期	81×27×3.4		註5
7	愛媛県		町谷		扉	6世紀後半		低湿地	註6
8	兵庫県	川西市	栄根19次	G区自然河川	扉	古墳中期	130+×40×3		未発表
9	兵庫県	神戸市	玉津田中		扉				
10	大阪府	寝屋川市	讃良郡条里		扉	6世紀		井戸枠に転用	註7
11	大阪府	大東市	北新町		扉、柱、鴨居	5世紀前半	140×40×4	井戸枠に転用	註8
12	大阪府	大阪市	長原		鴨居				
13	大阪府		豊中古池		扉				註9
14	大阪府		大仙		扉				
15	和歌山県		鳴神		扉				註10
16	京都府	亀岡市	千代川22区	井戸	扉	8世紀後半	24.1+×31.3+×4.3	井戸枠に転用	註11
17	奈良県		和爾		扉	5世紀		井戸枠に転用	註12
18	静岡県		山本		扉				註13
19	群馬県	渋川市	中村		鴨居（片開）	古墳時代			註14
20	群馬県		三ツ寺	2号井戸	扉	古墳後期	48+×40.2×3	井戸枠に転用	註15

現在、管見に触れるところの扉に関する出土類例はTab. 2に挙げた20例である。そのうち大阪府大東市の北新町遺跡の例は扉、鴨居、方立が転用されていたとはいえ、一つの遺構から組み合わせ可能なセットで出土しており白眉な資料である。扉板は中央に尾崎の例と同じく平面観が牒型、側面観が弓なりを呈す閂受けを有し、端部には棒状の突起が上下対になっている。この突起は回転軸で片方が短く造られている。鴨居と思われる部材は両小口が開くH形で、軸受けの穴と方立が挿入されるほぞ穴がだぶって穿たれている。断面でみると軸受けより方立がはまる位置が段違いに凸起している。恐らく扉板を取付けるため短い方の回転軸の長さ分の遊

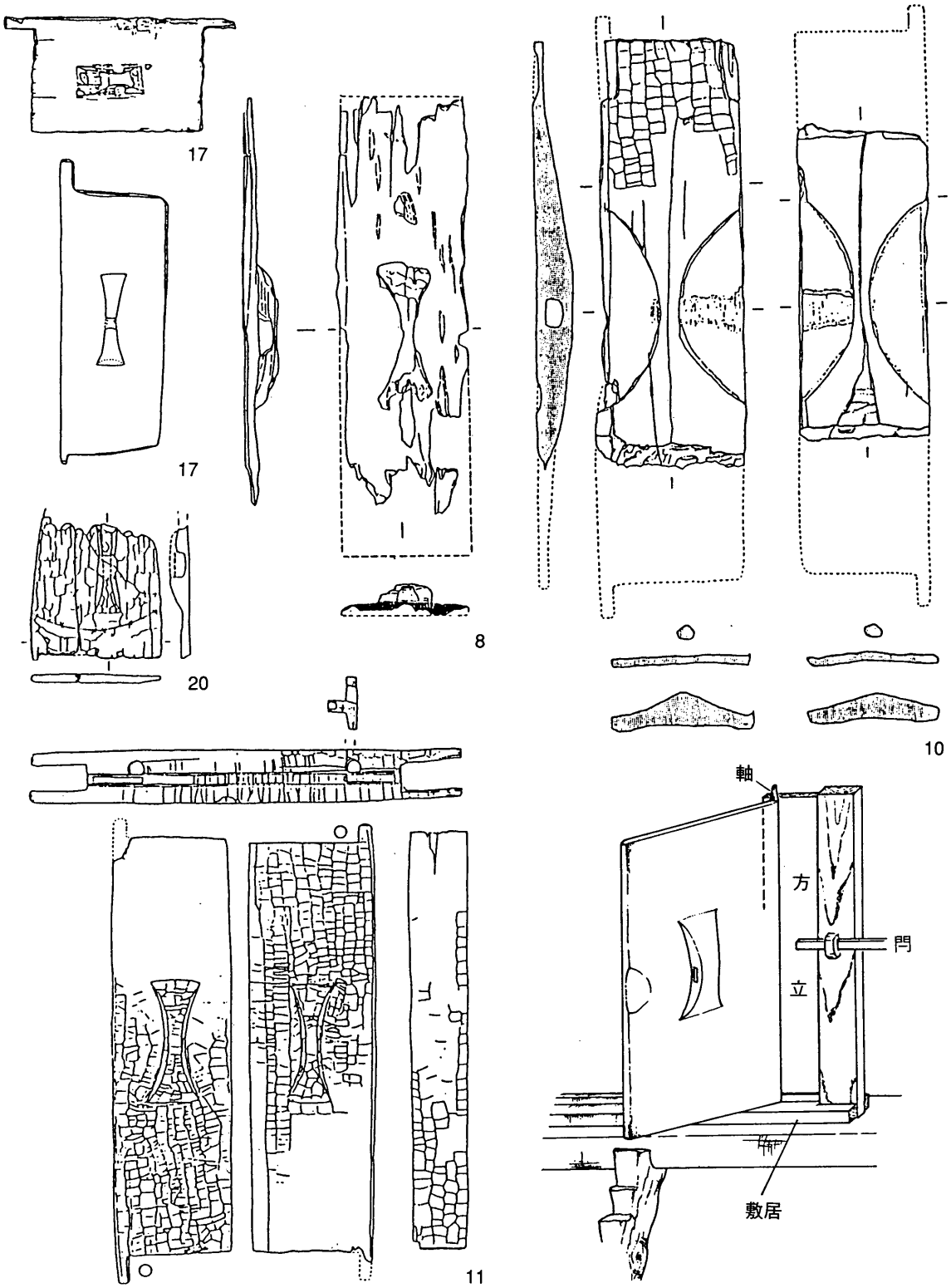


Fig. 77　出土した扉板の諸例（番号はTab. 2に一致）

Fig. 78　島根県鏡北廻古墳の閉塞石
（『石棺式石室の研究』より転載）

びによって出来る隙間をカバーするためのものと思われる。

扉の閂受けの意匠は平面形が方形の簡素なものと牒型のものと閂受けがないものがあるが、古墳時代に限っていえば装飾的な牒型のものが九州から関東まで広く普及している。また、出雲地方を中心とする日本海側の後期古墳の閉塞石に見られる削りだしの装飾の意匠は、まさに閂が通され牒型の扉板がしっかり閉じられた状態が現されている（Fig. 78）。牒型の意匠は地域を越え当該期の集落内の正式な倉に広く用いられた意匠であったと思われる。

扉板自体の存在は福岡県石崎遺跡例により弥生時代前期中頃まで遡り、近年の調査例では掘立柱建物自体の検出例も弥生前期の古い段階まで確認されており、扉板は集落内施設に掘立柱建物が導入されるとともに使用が始まったものと思われる。

Tab. 2関係文献等
註１．未発表。橋口達也、古川秀幸氏ご教示。
註２．北九州市教育文化事業団『権ヶ迫、先ノ下遺跡』1987
註３．北九州市教育文化事業団『長野A2』1987
註４．未発表。山手誠治、佐藤浩司氏ご教示。
註５．下関市教育委員会『吉田馬場遺跡』1992
註６．未発表。愛媛県埋蔵文化財センター大滝氏ご教示。
註７．西口陽一「讃良条里遺跡の発掘調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会第20回資料』1989大阪府教育委員会
註８．大東市北新町遺跡調査会『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』1991
註９．豊中、古池遺跡調査会『豊中、古池遺跡発掘調査概報そのⅢ』1976
註10．和歌山県教育委員会『昭和45年度阪和高速道路遺跡発掘調査概報』1971
註11．京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報』第31号　1989
註12．奈良県立橿原考古学研究所『和爾、森本遺跡』1983
註13．築地書館『伊豆山木遺跡』1962
註14．群馬県教育委員会『中村遺跡』1986
註15．群馬県埋蔵文化財調査事業団『三ツ寺1遺跡』1988

別表１　土師器坏の計測表

A. 黒色仕上げの有○無×　　B. ヘラ記号の有○無×

1SI040

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig. 23-2	12.6	5.3	I-2-a	×	×

1SD001黒色土層

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig. 27-1	10.8	3.8+	I-1-a	×	×
Fig. 27-2	11.3	6.1	I-1-a	×	×
Fig. 27-3	11.3	6.6	I-1-a	×	○
Fig. 27-4	11.5	4.8	I-1-a	×	×
Fig. 27-5	11.6	5.6	I-1-a	×	×
Fig. 27-6	11.7	4.9	I-1-a	×	×
Fig. 27-7	11.8	6.1	I-1-a	×	×
Fig. 27-8	12.0	5.8	I-1-a	×	×
Fig. 27-9	12.0	5.7	I-1-a	×	○
Fig. 27-10	12.1	5.1	I-1-a	×	×
Fig. 27-11	12.1	5.5	I-1-a	×	×
Fig. 27-12	12.3	5.5	I-1-a	×	×
Fig. 27-13	12.3	5.2	I-1-a	×	○
Fig. 27-14	12.4	4.7	I-1-a	×	○
Fig. 27-15	12.4	6.3+	I-1-a	×	×
Fig. 27-16	12.5	5.6	I-1-a	×	×
Fig. 27-17	12.6	5.7	I-1-a	×	×
Fig. 27-18	12.7	5.4	I-1-a	×	×
Fig. 27-19	12.8	6.0	I-1-a	×	×
Fig. 27-20	13.0	5.9	I-1-a	×	○
Fig. 27-21	13.0	4.9	I-1-a	×	×
Fig. 27-22	13.2	5.2	I-1-a	×	×
Fig. 28-23	13.1	5.1	I-1-a	×	×
Fig. 28-24	13.1	6.2	I-1-a	×	×
Fig. 28-25	13.6	5.1+	I-1-a	×	×
Fig. 28-26	11.3	5.9	I-2-a	×	○
Fig. 28-27	11.7	5.8	I-2-a	×	×
Fig. 28-28	11.8	5.6	I-2-a	×	×
Fig. 28-29	12.2	4.9	I-2-a	×	×
Fig. 28-30	12.2	5.4	I-2-a	×	×
Fig. 28-31	12.4	5.2	I-2-a	×	×
Fig. 28-32	12.4	5.4	I-2-a	×	○
Fig. 28-33	12.6	6.1	I-2-a	×	×
Fig. 28-34	12.7	6.1	I-2-a	×	×
Fig. 28-35	12.7	5.4+	I-2-a	×	×
Fig. 28-36	13.0	4.2	I-2-a	×	×
Fig. 28-37	13.0	5.6	I-2-a	×	○
Fig. 28-38	13.0	6.0	I-2-a	×	×
Fig. 28-39	13.4	5.5	I-2-a	×	×
Fig. 28-40	13.5	5.7	I-2-a	×	×
Fig. 28-41	13.7	5.7	I-2-a	×	×
Fig. 28-42	13.3	6.0+	I-1-c	×	×
Fig. 29-43	10.9	5.0	I-3-a	×	×
Fig. 29-44	11.8	5.3+	I-3-a	×	×
Fig. 29-45	11.9	4.9+	I-3-a	×	×
Fig. 29-46	11.9	5.9	I-3-a	×	×
Fig. 29-47	11.3	6.5	I-3-b	○	○
Fig. 29-48	11.5	5.8	I-3-b	○	○
Fig. 29-49	11.5	5.3	I-3-b	○	○
Fig. 29-50	11.9	5.0	I-3-b	×	×
Fig. 29-51	12.0	5.9	I-3-b	×	×
Fig. 29-52	12.0	5.5	I-3-b	×	×
Fig. 29-53	12.1	5.4	I-3-b	○	×
Fig. 29-54	12.4	5.5	I-3-b	×	○
Fig. 29-55	12.7	5.3	I-3-b	○	×
Fig. 29-56	12.7	5.7	I-3-b	○	×
Fig. 29-57	1.27	6.4	I-3-b	○	○
Fig. 29-58	13.1	6.8	I-3-b	×	×
Fig. 29-59	13.2	5.5	I-3-b	○	×
Fig. 29-60	13.5	5.3	I-3-b	○	×
Fig. 29-61	14.2	4.9	I-3-b	○	×
Fig. 30-62	12.2	6.2	II-2-a	×	○
Fig. 30-63	13.2	6.2	II-2-a	×	○
Fig. 30-64	12.5	7.3	II-2-a	×	×
Fig. 30-65	10.4	4.1+	II-3-b	×	×
Fig. 30-66	12.4	5.5	II-3-b	×	×

1SD001腐食土層

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig. 33-1	11.6	5.3	I-1-a	×	×
Fig. 33-2	11.7	5.5	I-1-a	×	×
Fig. 33-3	11.8	5.6	I-1-a	×	○
Fig. 33-4	11.9	4.6+	I-1-a	×	×
Fig. 33-5	12.0	5.1	I-1-a	×	×
Fig. 33-6	12.0	6.6	I-1-a	×	×
Fig. 33-7	12.4	5.4	I-1-a	×	×
Fig. 33-8	12.4	4.3	I-1-a	×	×
Fig. 33-9	12.5	6.2	I-1-a	×	×
Fig. 33-10	12.5	5.8	I-1-a	×	○
Fig. 33-11	12.9	5.1	I-1-a	×	×
Fig. 33-12	12.9	5.4	I-1-a	×	×
Fig. 33-13	13.0	5.3	I-1-a	×	×
Fig. 33-14	13.2	6.0+	I-1-a	×	×
Fig. 33-15	13.2	5.2	I-1-c	×	×
Fig. 33-16	12.0	6.2	I-1-e	×	×
Fig. 33-17	13.3	5.5	I-2-a	×	×
Fig. 33-18	13.2	5.9	I-3-a	○	×
Fig. 33-19	11.4	5.2	I-3-b	×	×
Fig. 33-20	12.1	5.6	I-3-b	○	×
Fig. 33-21	12.4	5.1+	I-3-b	×	×
Fig. 33-22	12.4	5.6	I-3-b	×	○
Fig. 33-23	12.7	6.1	I-3-b	○	×
Fig. 34-24	13.6	6.4	II-1-a	×	×
Fig. 34-25	13.8	6.0	II-1-a	×	×
Fig. 34-26	14.5	7.0	II-1-c	×	×

1SD020

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig. 35-8	11.0	4.5+	I-1-a	×	×
Fig. 35-9	11.9	4.1	I-2-a	×	×

1SD015

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig. 37-19	13.1	5.8	I-1-a	×	○

1SX100

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig.40-1	11.0	4.8	I-1-a	×	○
Fig.40-2	11.3	6.2	I-1-a	×	○
Fig.40-3	11.6	5.4	I-1-a	×	○
Fig.40-4	11.4	5.5	I-1-a	×	×
Fig.40-5	12.0	5.1	I-1-a	×	○
Fig.40-6	12.0	5.9	I-1-a	×	×
Fig.40-7	12.1	5.7	I-1-a	×	×
Fig.40-8	12.1	5.4+	I-1-a	×	×
Fig.40-9	12.1	5.5	I-1-a	×	○
Fig.40-10	12.3	5.3	I-1-a	×	×
Fig.40-11	12.6	4.2	I-1-a	×	○
Fig.40-12	12.7	5.4	I-1-a	×	×
Fig.40-13	13.5	5.3	I-1-a	×	×
Fig.40-14	12.5	5.8	I-1-c	×	×
Fig.40-15	11.8	4.7	I-1-d	×	×
Fig.40-16	11.7	5.0	I-2-a	×	×
Fig.40-17	11.7	4.7	I-2-a	×	×
Fig.40-18	11.7	6.5+	I-2-a	×	×
Fig.40-19	11.9	6.3	I-2-a	×	×
Fig.40-20	12.7	5.3	I-2-a	×	×
Fig.40-21	12.9	5.6+	I-2-a	×	×
Fig.40-22	13.1	4.2+	I-2-a	×	×
Fig.41-23	12.5	5.2	I-3-a	○	×
Fig.41-24	11.4	4.9	I-3-b	×	×
Fig.41-25	11.7	5.6	I-3-b	×	×
Fig.41-26	11.7	5.6	I-3-b	×	×
Fig.41-27	11.7	5.2	I-3-b	○	×
Fig.41-28	11.9	5.3	I-3-b	×	×
Fig.41-29	12.4	5.4	I-3-b	○	×
Fig.41-30	12.8	5.6	I-3-b	○	×
Fig.41-31	12.8	6.2	I-3-b	○	×
Fig.41-32	13.2	4.8+	I-3-b	×	×
Fig.41-33	12.1	5.9	II-3-b	×	×
Fig.41-34	12.2	5.2+	II-3-b	×	×
Fig.41-35	14.2	4.3+	II-3-a	×	×
Fig.41-36	13.7	4.5+	II-2-a	×	×
Fig.41-37	11.5	5.8	II-2-a	×	×
Fig.41-38	11.0	5.7	II-2-a	×	×
Fig.41-39	12.4	6.2+	II-1-a	×	×
Fig.41-40	15.1	4.6+	II-1-a	×	×
Fig.41-41	11.9	7.2	II	×	×
Fig.46-14	11.5	4.2+	I-1-a	×	×

1SX100灰色土層

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig.46-1	12.2	5.3	I-2-a	×	×
Fig.46-2	12.2	5.9	I-3-b	×	×
Fig.46-3	11.9	6.9	II	×	×

1SX110

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig.47-1	12.4	5.5	I-1-a	×	×
Fig.47-2	12.4	5.6	I-1-a	×	×
Fig.47-3	12.8	4.9	I-1-a	×	×
Fig.47-4	14.0	6.1	I-1-a	×	×
Fig.47-5	12.2	5.9	I-2-a	×	×
Fig.47-6	12.6	4.8	I-2-a	×	×
Fig.47-7	12.3	5.6	I-3-b	○	×
Fig.47-8	12.6	5.1	I-3-b	×	×

灰色土層

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig.48-1	11.9	5.3	I-1-a	×	×
Fig.48-2	11.9	6.4	I-1-a	×	×
Fig.48-3	12.8	5.3	I-1-a	×	×
Fig.48-4	12.9	5.5	I-1-a	×	○
Fig.48-5	12.7	5.3	I-2-a	×	×
Fig.48-6	12.3	6.0+	I-2-c	×	×
Fig.48-7	11.3	4.9+	I-3-a	○	×
Fig.48-8	13.1	6.0	I-3-b	×	×
Fig.48-9	15.0	5.3+	II-1-a	×	×
Fig.48-10	15.7	5.9+	II-3-b	×	×

黒色土層

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig.50-1	11.6	6.0	I-1-a	×	×

表土

図番号	口径	器高	分類番号	A	B
Fig.50-5	12.4	5.6+	I-1-a	×	×

別表２　杭・矢板計測表

出土地点はFig. 79と対応

1SX065（矢板）

図番号	長さ	幅	厚さ	出土地点
Fig. 56-1	54.0	19.8	5.0	5
Fig. 56-2	40.7	18.1	5.2	13
Fig. 56-3	33.6	16.3	5.1	12
Fig. 56-4	33.2	9.6	2.5	18
Fig. 56-5	43.1	15.8	4.1	9
Fig. 56-6	49.5	13.6	6.2	10
Fig. 56-7	51.2	9.6	3.4	6
Fig. 56-8	43.6	11.5	4.9	—
Fig. 56-9	36.5	9.8	3.5	11
Fig. 56-10	14.4	9.9	3.1	—
Fig. 56-11	19.2	11.0	10.4	—

1SX065（杭）

図番号	長さ	幅（径）	厚さ	出土地点
Fig. 57-12	48.4	(6.1)	—	—
Fig. 57-13	53.0	(6.0)	—	22
Fig. 57-14	51.1	6.3	4.6	3
Fig. 57-15	44.7	(5.5)	—	21
Fig. 57-16	41.3	(6.2)	—	2
Fig. 57-17	30.8	(4.1)	—	—
Fig. 57-18	28.7	(3.2)	—	—
Fig. 57-19	7.1	(2.7)	—	—
Fig. 57-20	11.8	5.8	4.9	—
Fig. 57-21	19.7	5.7	3.0	—
Fig. 57-22	44.2	(12.2)	—	20

1SX090（杭）

図番号	長さ	幅（径）	厚さ	出土地点
Fig. 58-1	93.1	(13.0)	—	3
Fig. 58-2	79.4	(11.9)	—	—
—	30	(5)	—	19
—	21	(5)	—	22
—	50	6	3	12
—	24	(2)	—	17
—	27	(2)	—	17
—	55	(2)	—	14
—	34	10	—	8a
—	57	(3)	—	9
—	34	(3)	—	9
—	27	(4)	—	6b

1SX105（杭）

図番号	長さ	幅（径）	厚さ	出土地点
Fig. 68-1	60.8	(10.0)	—	5
Fig. 68-2	62.3	(9.7)	—	1
Fig. 68-3	63.4	(8.3)	—	19
Fig. 68-4	58.6	(5.8)	—	16
Fig. 68-5	49.8	(7.4)	—	17
Fig. 68-6	42.3	(7.6)	—	6
Fig. 68-7	34.2	(7.2)	—	3
Fig. 68-8	27.6	(6.7)	—	18
Fig. 68-9	26.8	(5.2)	—	10
Fig. 68-10	26.0	(8.0)	—	2
Fig. 68-11	41.1	(5.1)	—	11
Fig. 68-12	48.2	(3.9)	—	30
Fig. 68-13	47.9	(4.3)	—	32
Fig. 68-14	43.7	(5.7)	—	7
Fig. 69-15	32.2	(3.5)	—	33
Fig. 69-16	12.1	(5.2)	—	10
Fig. 69-17	10.1	(4.5)	—	35
Pla. 65-a	65.0	10.3	—	9
—	55	(8)	—	4
—	26	(5)	—	28
—	40	(6)	—	21
—	28	(7)	—	22
—	22	(4.5)	—	27
—	26	(4.5)	—	25
—	27	(6)	—	23
—	29	(5)	—	29
—	39	(8)	—	20
—	14	(6)	—	24
—	20	(4)	—	24
—	21	(4)	—	31
—	17	(4)	—	26
—	97	(7)	—	15
—	53	(6)	—	12
—	13	(5)	—	12

1SX105（矢板）

図番号	長さ	幅（径）	厚さ	出土地点
Fig. 69-18	30.1	8.4	2.9	34

1SX110（杭）

図番号	長さ	幅（径）	厚さ	出土地点
Fig. 70-1	45.8	(5.2)	—	18
Fig. 70-2	43.6	(6.0)	—	21
Fig. 70-3	39.6	(4.9)	—	17
Fig. 70-4	38.8	(7.6)	—	16
Fig. 70-5	47.6	6.4	5.5	23
Fig. 70-6	33.0	(6.3)	—	20
Fig. 70-7	28.9	(5.3)	—	15
Fig. 70-8	28.4	(5.4)	—	19
—	38.3	(5.0)	—	22

1SX110（矢板）

図番号	長さ	幅（径）	厚さ	出土地点
—	53	16	2	12
—	27	8	3	—

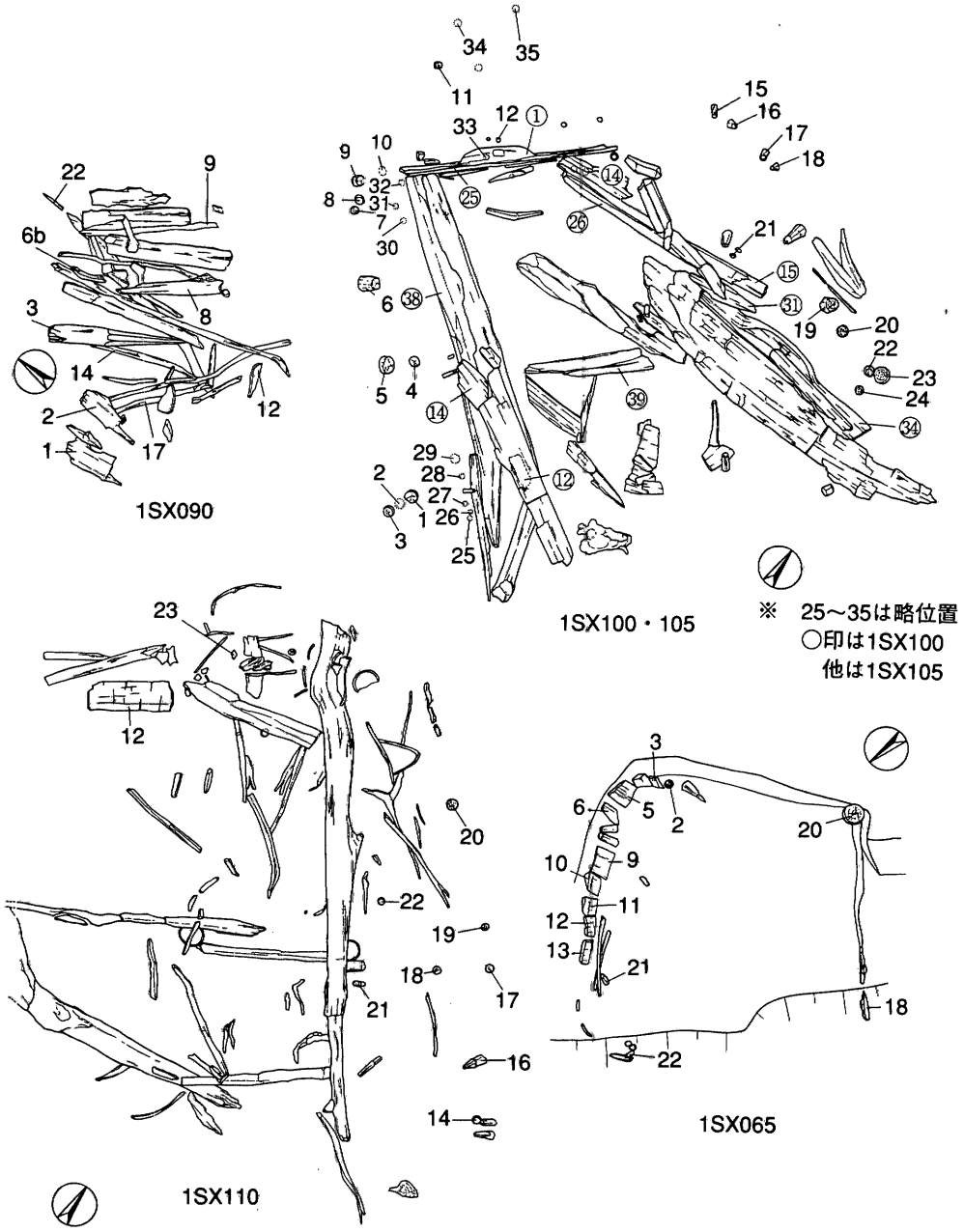


Fig. 79　1SX065・090・100・105・110　木製品出土地点位置図

土師器表面の漆仕上げ処理について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部
永　嶋　正　春

1　はじめに

古墳時代の土師器の一部には、漆による表面処理を施したものが認められる。透水性の予防が主たる目的と考えられる。筆者が最初に確認したのは、栃木県鹿沼市に所在する稲荷塚遺跡から出土した古墳時代後期の土師器についてであるが[1]、その表面処理方法は、それ以降の調査により、北関東あるいは千葉県下の該期の土師器については一定程度検出される状況にある[2]。

この処理方法とは、次の様なものと考えている。まず器胎の成形にあたっては、大きな鉱物粒子が表面に出ない様に器表面を丁寧に調整し、コロイド的な粘土粒子でその表面を覆う。この丁寧な調整により、大方の水漏れは防止されるとともに、漆処理の良好な土台がつくり出される。このような事前準備を経て焼成された土師器が、まだ余熱を持っている段階（恐らく、２～300℃）で、表面をきれいに清掃し、漆を拭くようにして塗る。いわゆる焼付け漆である。こうすることにより、漆の胎土表面への付着性を良くし、また漆をきわめて短時間に硬化させることができる。生じる漆の膜厚は薄く、時には無いに等しい。しかしながら、その透水性を防ぐ能力は抜群で、器表面の丁寧な調整と相俟って、土師器の漏水を完全に止めることができる。きわめて小量の漆の使用により、土師器の機能を大幅に改善できるわけである。また、移り香が無い点なども、水物容器としてはまことに具合いが良い。このような土師器を、筆者は‘漆仕上げ処理をした土師器’あるいは‘漆仕上げ土師器’と呼んでいる。

漆仕上げ土師器の外観性状は、その処理温度、使用された漆の種類と量、素地の性質などによりかなりの幅を有するものであるが、一般に、幾分艶の目立つ淡乳赤褐色～黒色の色調を呈しており、胎土そのものの色調とは異なっている。この表面処理に用いられた材料を漆であると科学的に証明するのはなかなか困難であり、また油煙その他で燻べられた場合にも類似の状況になるのも事実である。しかしながら、将来的には顕微赤外的な方法でウルシオールの赤外吸収スペクトルが検出されるなどして、その見極めがはかれると考えられる。筆者としては、日本の漆文化の全体的な状況を把握するのを第一の目的とし、縄文時代から現代に至るまでの様々な漆資料の調査を実施しており、その観点からすれば古墳時代に於ける漆仕上げ土師器の存在は、きわめて納得できるものである。

ところで、ここに取り上げる太宰府市尾崎遺跡出土の土師器であるが、４点の内、少なくとも３点はその外観性状が上述の漆仕上げ土師器に一致している。これらの土師器は、発掘調査

担当者によって、５Ｃ後半～６Ｃ前半に比定されており、もしこの種の土師器に漆処理が確認できるのであれば、現在のところ時期的には関東のものに先行する事例になる。ここではこれらの土師器に関する調査結果を報告し、大方の参考に供することとしたい。

2　調査結果

調査は、土師器そのものの微細部にわたる光学顕微鏡的な観察と、土師器の表面部から微小に採取した試料についての層断面の観察とに依った。後者の観察も光学顕微鏡に依ったが、試料をポリエステル樹脂に埋包固定後、必要な箇所で切断研磨し、とりあえずの観察を済ませた後、スライドガラスに貼り付け、薄片状態に仕上げてから行ったものである。

Ｒ－006※ 器表面は、内外両面の全面にわたってかなり艶のある黒色で覆われている（図版１の１、１の２）が、現状では擦れや傷みが多く、胎土が下から顔を出しているためのむらが目立つ。なかでは良好な部分について検鏡すると、細かな断文を生じながらも連続している、艶のある黒色層の存在が観察できる（図版１の３）。微視的に見たその色調は、必ずしも純黒色とは言えず、層の薄いと思われる部分については、幾分赤色味も感じられる。典型的な黒色部から採取した表面部試料の層断面薄片（図版１の４）で見ると、厚さが厚いところでも12μm(0.012mm)程の黒色の単一層が胎土の表面を覆っている状況を確認することがてきる。なお薄いところではその厚さが数μmあるいはそれ以下である。この黒色層は、細かな断文があるといえども、きわめて良く胎土表面に密着しており、それがこの表面処理方法の特徴であることを示している。また断文については、胎土と黒色物質との間に熱膨張率の差が有るために発生したと考えることが、この資料の場合最も合理的である。すなわち、高温で固定した漆膜が、その熱膨張率が胎土のそれより相当大きいために、常温にまで冷却された時に収縮し、断文が発生したと理解するのである。

以上の諸特徴、すなわち、①黒色味の強い単一な層であること、②層の厚さが薄いこと、③胎土に良く付着していること、④断文が発生していることなどを最も端的に示すものとして、焼付け漆の存在を考えたい。

Ｒ－008※ この資料の外観は、基本的には前述の資料Ｒ－006と同じである（図版１の５、１の６）。ただ、現状での残り具合いで見ると、口縁部の内外に顕著で、かなり黒色味が強く感じられるのに対して、内底部などでは付着の状況が弱く、色調にも幾分褐色味が加わっている。さらに外底部などでは、表面処理そのものが残存していない。場所によるこれら性状の違いは、器表面の摩滅や痛みに依るところが大きいのは当然であるが、当初の処理むらを考える必要もあろう。たとえば、内面のやや処理の顕著な箇所では、内に数条の微細なクラックを有する光沢のある黒色の小斑点状のものが、平等に分散している（図版１の７、２の１）。この小斑点

状のものの厚さは60μmにも達しており（図版２の４）、その周囲の付着物の厚さ（図版２の３）が10μmあるいはそれ以下であることからみると、著しく厚い。さらに口縁部外面などには、著しく光沢を有する黒色の箇所も見られるが（図版１の８）、これは微細なクラックが網状に走りながら、連続して平滑に広がる塗膜状の付着物である（図版２の２）。これらの典型的な箇所に比し、内底部などに認められる厚みも感じられず黒さも弱い箇所の表面状況は、次の資料Ｒ－004の特徴に類似している。これらの内容は、高温硬化の漆であればこそ持ち得るものであり、表面の状況には幅があるものの、むしろ漆の焼付け処理の持つ質感の幅を良く示しているという意味では典型的な資料と考えて良い。

Ｒ－004※　前二者の資料ほどには器表面が黒色化しておらず、また表面に何らかの厚みを感じさせる付着物が存在すると言える状況でもない。しかしながら、淡乳褐色～褐黒色を呈する器胎内外表面のやや艶のある色調（図版２の５、２の６）は、その割れ断面が持つ胎土そのものの淡灰褐色の明るい色調とは全く異なるものである。顕微鏡でその表面を丹念に観察した場合、大方は図版２の７に示すような状況を呈する。すなわち、胎土の色調とは異なるきわめて薄い被覆が存在するかのごとく観察できるのである。しかしながらその層断面（図版２の８）で見た場合、胎土表面には確実に層を成すと言える状況の付着物は認められず、もし在ったとしてもその厚さは１μmを大きく割り込むものに過ぎない。ただ胎土の表面部が10数μmの深さにまで褐黒色にかなり変色している状況が見て取れ、これが外観的な色調を規定していると考えれば、この資料の持つ質感に納得することができる。この状況は積極的な表面処理の結果と理解してよい。ところで図版２の７に示したような表面性状については、前記の資料Ｒ－008の内底部などに認めることができ、また本資料で言えば、濃色の箇所の表面には、僅かではあるが資料Ｒ－008に見られるような艶のある黒色の微斑を検出することもできる。以上の状況を踏まえ、本資料にも高温硬化法による漆処理が行われているものと判断する。使用した漆の種類と量及び土器本体の温度の関係でこの資料のような外観性状を生じたものと理解したい。

Ｒ－011※　外底面の広い範囲に顕著なカーボン吸着が認められる所から、加熱使用に供せられたと考えられ、そのためもあってか内外の器表面の状況は良くない。しかしながら、胎土表面の調整に丁寧さが認められること、内面の一部に黒色の微斑が残存することなどから、当初においては漆による焼付け処理がなされていた可能性を考慮する必要はあろう。

3　おわりに

尾崎遺跡出土の土師器について、その表面処理技術の観点から調査を行い、いわゆる漆仕上げ土師器と判断することができた。漆そのものを分析化学的に同定したわけではないので、いささかの疑問が残る余地もあろうが、この点については将来的には解決されるはずの問題であり、また筆者にとっては漆と同定することのみに関心があるわけでもない。間接的ではあるが、

資料の示す外観及びその層断面について微細に検討することで、およそ漆としての推定が成り立つと共に、むしろ技術的な内容については大きな情報が得られるものと考えている。

ところで本遺跡の土師器は、５Ｃ後半～６Ｃ前半に比定されている点で、今の所関東地方の漆仕上げ土師器に先行する事例になる。しかしながら類例の検討があまり進んでいない現状にあっては、漆の高温焼付け処理方法に関する技術的な系譜や伝播については、はっきりしたことは言えない状況であろう。ただ筆者としては、すでに縄文時代において土製品（土器、土偶など）に同様なことが行われていたと判断しており、また古墳時代においては鉄製の武具類に焼付け漆の手法が用いられている事実もあるので、今後はそれらのことを念頭に置いて、幅広く調査を進める必要があろう。また北部九州については、古墳時代の漆製品や漆の要具（漆液容器など）の検出に努めると共に、さらに遡った時代における漆の利用状況を丹念に追い求めていく必要がある。

文末ながら、今回の資料調査の機会をおつくり頂いた、太宰府市教育委員会の方々に感謝の意を表したい。

註

1）永嶋正春「鹿沼市稲荷塚遺跡出土品の材質と技法－古墳時代後期の、漆による表面仕上げを施した土師器を中心－」『稲荷塚・大野原』栃木県教育委員会　1987

2）同　「漆仕上土師器について」『東金市久我台遺跡』（財）千葉県文化財センター　1988

同　「榎作遺跡出土土師器の表面処理方法について」『千葉市榎作遺跡』（財）千葉県文化財センター　1992

※

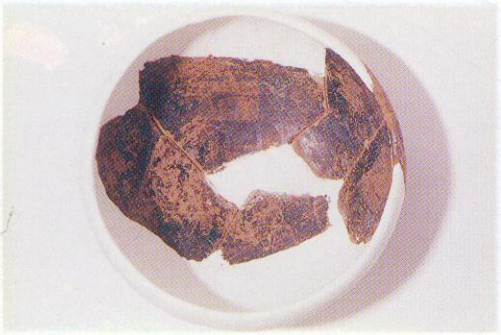
Ｒ－006　1SX100（Fig.41―28）

Ｒ－008　1SD001 黒色土層（Fig.29―47）

Ｒ－004　1SD001 腐食土層（Fig.33―23）

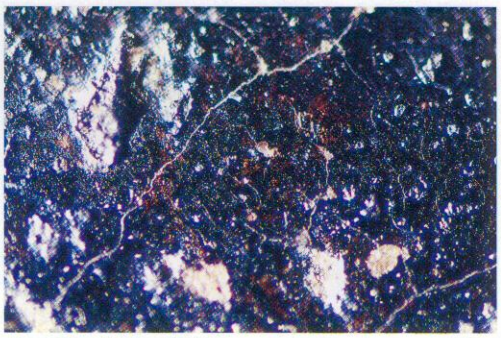
Ｒ－011　1SX100（Fig.41―31）

図版 1

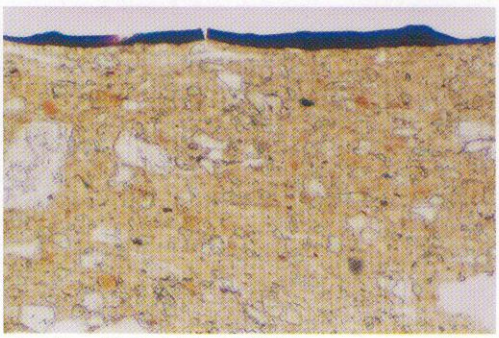


1　R－006　内面

2　R－006　外面　1×



3　R－006　外面　50×

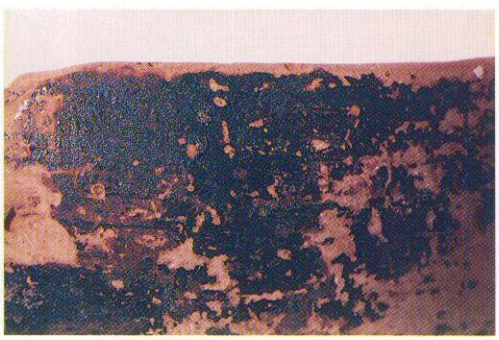


4　R－006　同左　層断面　200×

5　R－008　内面

6　R－008　外面

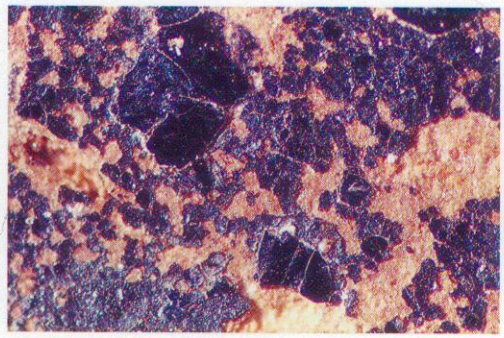
7　R－008　内面　2×



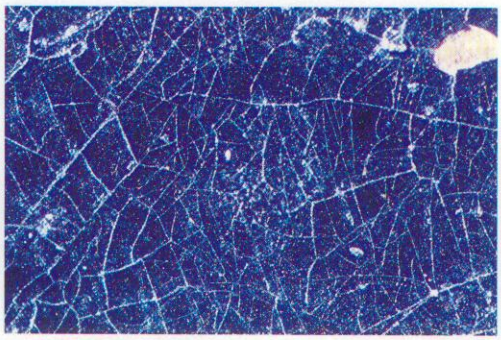
8　R－008　外面　2×

尾崎遺跡出土土師器

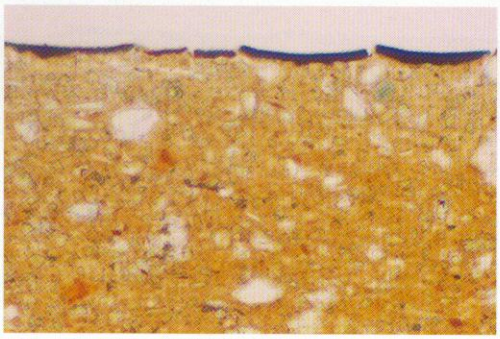
図版 2



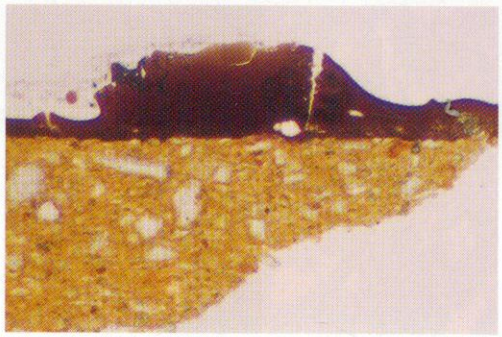
1　R－008　内面　50×



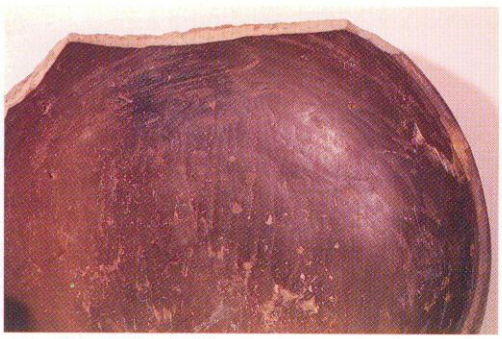
2　R－008　外面　50×



3　R－008　層断面　200×

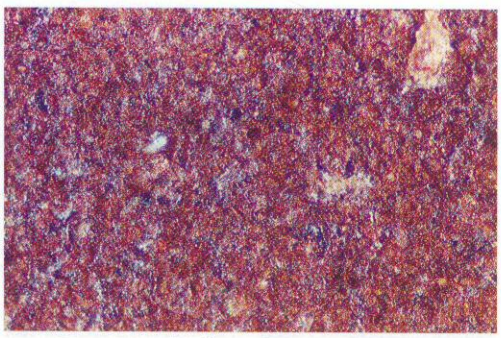


4　R－008　層断面　200×

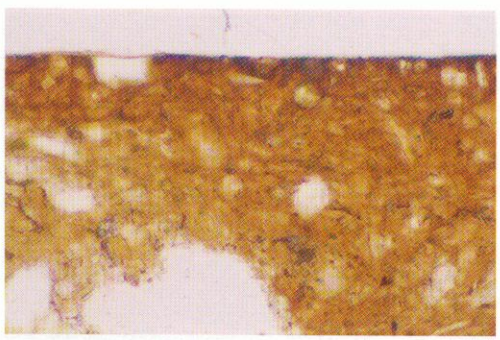


5　R－004　内面　1/2×

6　R－004　外面　2×



7　R－004　内面　100×



8　R－004　層断面　200×

尾崎遺跡出土土師器

1．太宰府出土の石包丁の使用痕分析

近年石器の使用痕研究の発展によって、我々は石器の機能－どこを、何に、どのように使ったか－についてより確実な推論をくだせるようになった。特に弥生時代の収穫具の分析は、これまで東北・中部・近畿地方で着手され、稲作の技術組織を解明する上で有効な手段の一つであることが示され始めている。ところが稲作が日本列島で最初に渡来したと考えられる九州地方ではまだ収穫具の使用痕分析は行われていない。そこでこの地域での収穫具での使用痕分析の可能性を示すため、試験的に尾崎遺跡１SX100出土の石包丁１点の使用痕を検査することにした。

観察結果

植物の作業によって生じる滑らかで丸みをもった光沢面が斑点状に形成されていることが確認された。斑点状に形成されるのは、大きな平担面を持つ鉱物の上で、光沢面がより発達して見えやすいからである。

完形品ではないが光沢面の分布は、基本的にはこれまで分析された石庖丁と同じパターンを示す（須藤・阿子島1985，御堂島1989b,c,1991）。すなわち両面とも向かって左側で光沢面が発達し、刃部は相対的に光沢面の発達が弱い。ただしこの資料で特徴的なのは、ａ面で、光沢面が左端に偏っている点である。刃部に向かって漸移的に光沢面が弱くなっていくので、刃の研ぎ直しを行っているとは言いがたい。ｂ面は典型的な分布パターンを示していた可能性があるが、右上に光沢面の発達部があることが注意される。この原因として左手でも石庖丁を使用したか、穂が反対面から巻込まれるようにして摘みとられた可能性が考えられる。いずれにしろ、穂が石庖丁の上部で押さえられたこと示している。

以上、この地域の石庖丁でも使用痕の分析が可能なことが確認された。今後、分析を進めることにより、日本列島の稲作最初期の収穫具のあり方、また稲作の技術組織の地域性－石庖丁の使用法が九州から東北地方にいたるまで、どの程度斉一的なのか、この地域にも石庖丁以外に収穫に関連した石器があるのか（山田1987、斎野1989、御堂島1989ａ参照）等－を知る手掛りが得られるだろう。

（引用文献）　須藤隆・阿子島香　1985「東北地方の石庖丁について」　日本考古学協会第51回総会研究発表要旨　p.19　／　斎野裕彦　1989　「東北地方における初期稲作農耕の様相（予察）」　地方史研究　39-4：4-18　／　御堂島正　1989ａ「有肩扇状石器の使用痕分析－南信州弥生時代における打製石器の機能－」古代文化41-3：30-43／　御堂実正　1989ｂ　「『抉入打製石痕丁』の使用痕分析－南信州弥生時代における打製石器の機能－」　古代文化　41-6：19-27／　御堂島正　1980ｃ　「『抉入打製石庖丁』の使用法－南信州弥生時代における打製石器の機能－」　古代文化41-8：1-15　／　御堂島正　1991　「磨製石庖丁の使用痕分析－南信州弥生時代における磨製石器の機能－」　古代文化 43-11：26-35／　山田しょう　1987　「弥生時代の石器の使用痕分析」『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集：461-468

（1993.5.12 受領）

2．自然科学分析

（1）花粉分析

1．試料

分析は送付されてきた試料すべてについて行なった。試料は当社にて土質を記載した後、分析を行なった。分析試料については以下の表1に示す。

表1　花粉分析試料表

試料番号	遺跡名および試料採取地点等	土　　質
1	尾崎遺跡　BV31　ワラサンプル	黒色砂混じり有機質シルト
2	尾崎遺跡　ISD001　Ⅲ層　黒色土	暗灰黄色シルト質砂
3	尾崎遺跡　ISD001　Ⅳ層　腐植土	黒褐色砂質シルト
4	尾崎遺跡　ISD001　植物遺体	黒褐色砂質シルト
5	尾崎遺跡　ISX100　内側の土	黒褐色有機質シルト
6	尾崎遺跡　ISX017　焦土	黒褐色有機質シルト

＊　土質は当社にて記載したものを用いた。

2．分析方法および結果表示法

試料約10ｇについてフッ化水素処理による試料の泥化、重液分離（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の濃集、アセトリシス処理（無水酢酸：氷酢酸＝９：１）セルロースの分解、KOH処理による腐食酸の溶解の順に行ない、堆積物中から花粉化石を濃集した。

処理後の残渣の一部についてグリセリンで封入してプレパラートを作成し、その中に出現したすべての種類（Taxa）について同定・計数した。

結果を木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉数を除いた数を基数とした百分率で出現率を算出し、花粉化石分布図を作成した。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。また、総数が100固体未満のものは、統計的に扱うと結果が湾曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめた。

3．結果

結果を図1、表2に示す。

（試料番号1～6）

木本花粉では、シイノキ属が高率で出現し、コナラ属アカガシ亜属を比較的多く伴う。試料番号5では、これらに加えスギ属の出現率が高い。草本花粉は全体的に出現率が低く、イネ科・クワ科・ヨモギ属などが出現する。

表2　花粉分析結果表

種類（Taxa）	試料番号	1	2	3	4	5	6
木本花粉							
モミ属		1	—	—	—	1	—
ツガ属		—	1	—	—	—	—
マツ属		7	—	1	—	4	3
コウヤマキ属		—	—	1	—	—	—
スギ属		2	—	5	—	76	2
ヤナギ属		—	—	—	—	—	—
ヤマモモ属		1	—	—	1	—	1
クルミ属		—	—	—	1	—	—
クマシデ属—アサダ属		2	—	—	2	8	5
カバノキ属		—	—	—	—	—	1
ハンノキ属		—	—	1	—	2	—
コナラ属コナラ亜属		10	5	2	16	7	5
コナラ属アカガシ亜属		59	45	24	79	49	72
クリ属		6	2	—	—	—	—
シイノキ属		151	290	156	218	70	114
ニレ属—ケヤキ属		—	—	1	—	—	—
エノキ属—ムクノキ属		1	—	4	—	—	1
クワ科		—	—	—	—	—	—
シキミ属		1	—	—	—	—	—
ジャケツイバラ属		—	—	1	—	—	—
カラスザンショウ属		—	—	—	—	1	—
キハダ属		—	—	—	—	—	—
ウルシ属		—	—	—	—	—	2
モチノキ属		1	—	—	1	—	—
ニシキギ属		—	—	—	—	—	23
ブドウ属		—	—	—	—	—	—
ツタ属		—	—	—	—	—	1
ツバキ属		—	—	—	—	1	—
グミ属		—	—	—	—	1	—
ウコギ科		—	—	2	1	1	1
ミズキ属		—	—	—	—	—	2
ツツジ科		—	—	—	3	—	—
ハイノキ属		—	—	—	3	—	1
エゴノキ属		—	—	—	—	—	1
トネリコ属		—	1	—	—	—	—
草本花粉							
ヒルムシロ属		2	—	—	—	—	—
イネ科		22	—	2	—	33	16
カヤツリグサ科		6	—	1	—	1	4
ミズアオイ属		1	—	—	—	—	—
クワ科		2	—	—	—	32	4
ギシギシ属		—	—	—	—	1	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節		1	—	—	—	—	2
アカザ科		—	—	—	—	1	—
ナデシコ科		—	—	—	—	—	—
キンポウゲ科		—	—	—	—	2	1
アブラナ科		4	—	—	—	17	—
マメ科		2	1	1	—	24	5
ツリフネソウ属		—	—	—	—	9	—
セリ科		—	—	—	—	—	—
ナス科		—	—	—	—	—	1
オオバコ属		—	—	—	—	—	—
オミナエシ属		—	—	—	—	1	—
ゴキヅル属		—	—	—	—	—	—
ヨモギ属		24	—	11	—	12	6
他のキク亜科		1	—	—	—	1	1
キク亜科		1	—	—	—	1	—
不明花粉		4	29	2	3	7	1
シダ類胞子							
シダ類胞子		110	—	45	6	54	58
合計							
木本花粉		242	344	198	325	221	235
草本花粉		66	1	15	0	135	40
不明花粉		4	29	2	3	7	1
シダ類胞子		110	0	45	6	54	58
総花粉・胞子		422	374	260	334	417	334.

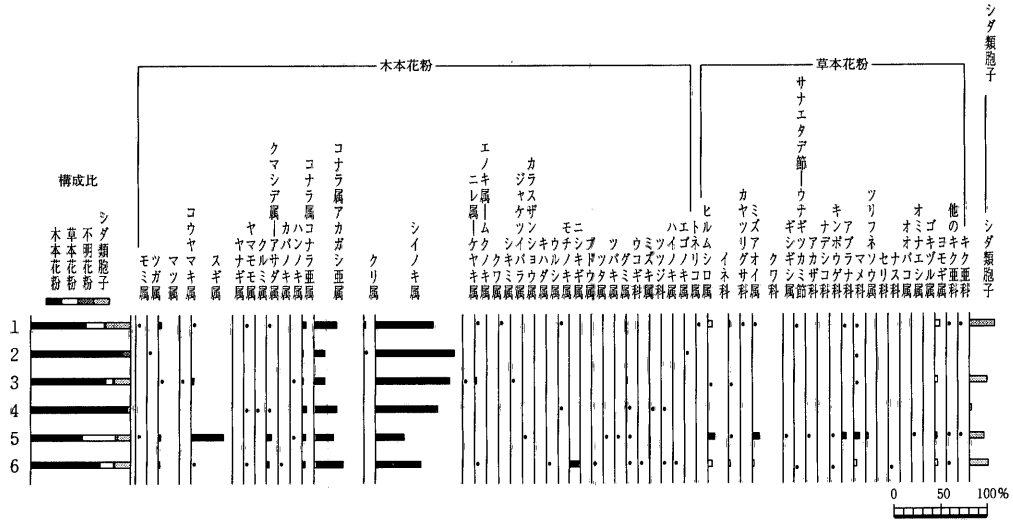


図1　花粉化石分布図

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料において出現した種類（Taxa）を示す。

4．考察

本遺跡の各遺構からは、シイノキ属の花粉化石が高率に出現した。シイノキ属は、関東以南、特に西日本を中心に分布し、カシ類とともに暖温帯林を構成する主要な樹種である。また、日本各地で行なわれた花粉分析結果から。シイノキ属が高率で出現する地点は、年平均気温が14℃以上、年有効降水量は1100mm以上の温暖な気候環境によって特徴づけられるといわれている（塚田ほか1990）。さらに、ヤマモモ属、シキミ属、ハイノキ属といった暖温帯に主に分布する樹種の花粉化石が出現することを考えると、当時（5～6世紀）はシイ類、カシ類を中心とした暖温帯林が周囲を覆っていたものと推測される。なお、シイノキ属が風媒花に比べて花粉の生産量や飛散能力が劣る虫媒花であることを考慮にいれると、シイ類が遺跡付近に多く生育していたのかもしれない。試料番号2～4は古墳時代の溝（1SD001）内堆積物であり、自然流路とされ、試料番号5は1SD001の溝内に構築された柵状遺構（1SX100）である。両者の花粉組成の違いは1SX100にスギが高率に出現することである。他の花粉は1SD001と同様である。このことは各々の堆積当時の植生に差があるのではなく、局地的な植生または埋没過程の違いが反映した結果と考える。また、試料番号6ではニシキギ属が多く出現する。これも、局地的にこれらの植物が生育していたとも解釈できるが、遺構の時代性や採取層準なども考慮し、今後解析を行なっていく必要があろう。

（2）種実同定

1．試料

種実同定は、尾崎遺跡において採取された送付試料35点について行なった。試料の詳細については以下に示す。

表3　種実遺体同定試料表

試料番号	遺跡名および試料採取地点等	試料番号	遺跡名および試料採取地点等
12	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	30	尾崎遺跡　ISD001　黒色土
13	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	31	尾崎遺跡　ISD001　腐植土
14	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	32	尾崎遺跡　ISD001　腐植土
15	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	33	尾崎遺跡　ISD001　腐植土
16下	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	34	尾崎遺跡　ISX015
17	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	35	尾崎遺跡　ISD020
18	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	36	尾崎遺跡　ISI040　中央黒色土
19下	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	37	尾崎遺跡　ISX100
20	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	38	尾崎遺跡　ISX100
21	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	39	尾崎遺跡　ISX100
22	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	41	尾崎遺跡　灰色土
23	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	42	尾崎遺跡　灰色土
24	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	43	尾崎遺跡　灰色土
25	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	44	尾崎遺跡　灰色土
26	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	45	尾崎遺跡　灰色土
27	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	46	尾崎遺跡　Hトレンチ
28	尾崎遺跡　ISD001　黒色土	47	尾崎遺跡　Jトレンチ
29	尾崎遺跡　ISD001　黒色土(上層)		

2．同定方法

肉眼および双眼実体鏡下で個々の種実遺体を観察し、形態学的特徴により種類を同定した。

3．結果

結果を表4に示す。以下同定された種類の形態学的特徴を記す。

・イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia* K.Koch）　イヌガヤ科イヌガヤ属　　種子

種子は茶褐色。側面観は長楕円形、上面観は両凸レンズ形。長さ16mm程度、幅9～10mm程度。種皮は硬く、表面には顆粒状の小さな突起が存在する。

・クリ（*Castanea Crenata* Siebold et Zuccarini）　ブナ科クリ属　　果実

果皮は暗茶褐色。10mm程度の破片。復原しても比較的小型のものと見られる。

・コナラ属（*Quercus* sp.）　ブナ科　果実

果実は茶褐色。No.47の固体では長さ17mm、径13mm。果実上部に輪状紋を持たないので、コナラ亜属（*Lepidobalanus*）であるとみられる。

・コウゾ属（*Broussonetia* sp.）　クワ科　核

核は淡褐色。側面観は楕円形。長さ２mm、幅１mm。基部に突起をもち、表面には瘤状の隆起が散在する。核は厚く硬い。

・タデ属（*Polygonum* sp.）　タデ科　果実

果実は黒色でやや光沢がある。側面観は卵形、上面観はやや片側が厚くなる両凸レンズ形。長さ1.5mm、幅１mm程度。菓皮は薄いが硬い。

・ホウノキ（*Magnolia obovata* Thunberg）　モクレン科ホオノキ属　種子

種子は淡褐色。側面観は広卵形、上面観は腎形。長さ７mm、幅８mm程度。種子の表面には縦方向にしわ状構造がある。種皮は厚く硬い。

・クロモジ属（*Lindera* sp.）　クスノキ科　種子

種子は茶褐色。ほぼ球形。径６mm程度。一端に小さく爪状に突出する部分がある。種皮はやや薄くやや硬い。

・オトギリソウ属（*Hypericum* sp.）　オトギリソウ科　種子

種子は炭化し、黒色。側面観は楕円形で、長さ１mm程度。

・モモ（*Prunus persica* Batsch）バラ科サクラ属 核

核の側面観・上面観とも楕円形。長さ15～24mm，幅12～19mm，厚さ11～16mm。表面にはモモ特有のしわ状隆起構造がある。一側面には縫合線が発達し、下端には「へそ」がある。核は厚く硬い。

・アカメガシワ（*Mallotus japonicus* Mueller）トウダイグサ科アカメガシア属　種子

種子は黒色。やや偏平な球形。径3.5mm 程度。Ｙ字型の小さな「へそ」があり、表面には小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

・ミツバウツギ（*Staphylea bumalda* De Candolle） ミツバウツギ科ミツバウツギ属　種子

種子は黄褐色。側面観は卵形、上面観は楕円形。長さ7mm，幅5mm程度。種子の表面はやや光沢がある。種皮は薄いがやや硬い。

・ノブドウ属（*Ampelopsis* sp.） ブドウ科　種子

種子は灰黒色。側面観は倒心形。長さ4mm。背面に「さじ状」の「へそ」があり、腹面には縦長の2つの穴がある。種皮は厚く硬い。

・ブドウ属（*Vitis* sp.） ブドウ科　種子

種子は灰黒色。側面観は倒心形。長さ4mm，幅2.5mm。背面に「さじ状」の「へそ」があり、腹面には縦長の2つの穴がある。「へそ」の周囲がややくぼむ。種皮は厚く硬い。

・エゴノキ（*Styrax japonicus* Siebold et Zuccarini） エゴノキ科エゴノキ属　核

核は灰黒色。側面観は楕円形，上面観は円形。長さ10mm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に3本の浅い溝がある。核は厚く硬い。

・ヒョウタン類（*Lagenaria* sp.） ウリ科ユウガオ属　種子

種子は淡褐色で、褐色の筋がある。側面観は一端が切形の長卵形状，上面観は偏平。長さ10mm，幅5mm程度。種皮はやや厚いが弾力がある。

・タラノキ（*Aralia elata* Seemann） ウコギ科タラノキ属　核

核は茶褐色。側面観は半円形，上面観は卵形。長さ1.5mm 程度。核はやや厚く硬い。核の表面には不規則な瘤状突起がある。

・ムラサキシキブ属（*Callicarpa* sp.） クマツグラ科　核

核は淡褐色。側面観は卵形ないし長卵形，上面観は三日月形。長さ1.5mm 程度。背面は平滑，腹面はリング状の窪みがある。この部分は薄く柔らかく、他の部分はやや厚くわずかに弾力がある。

・ナス属（*Solanum* sp.） ナス科　種子

種子は淡褐色。側面観は円形，上面観は偏平。径1mm。一端に僅かにへこむ「へそ」がある。種皮はやや厚く柔らかい。表面には複雑にからみあった網目状模様がある。

・サトイモ（*Colocasia esculenta* Schott）サトイモ科　塊茎

塊茎は黒色。卵形に近い球状。長さ6cm，径2.5cm程度。

・ミクリ属A（*Sparganium* sp. A）　ミクリ科　果実

果実は淡褐色。側面観は中央部がややくびれる楕円形，上面観は円形。長さ4mm，径2mm程度。果実はやや硬い。

・ミクリ属B（Sparganium sp. B）　ミクリ科　果実

果実は淡褐色。側面観は菱形，上面観は円形に近い。長さ4mm，径2.5mm程度。表面に縦方向に延びる8本程度の隆起が存在する。果実はやや硬い。

・ミクリ属C（*Sparganium* sp. C）　ミクリ科　果実

ミクリ属Aとしたものよりもやや大型。

・スゲ属（*Carex* sp.）　カヤツリグサ科　果実

果実は茶褐色。側面観は楕円形，上面観は偏平。長さ1.5mm，幅1mm。表面には細かな網目状の模様が存在する。やや弾力がある。

・テンツキ属（*Fimbristylis* sp.）カヤツリグサ科　果実

果実は黒色。側面観は倒卵形，上面観は楕円形。長さ1.5mm，幅1mm。表面には細かな楕円形の網目状模様が存在する。やや弾力がある。

・ホタルイ属A（*Scirpus* sp. A）カヤツリグサ科　果実

果実は黒色。側面観は倒卵形，上面観は角が丸みを帯びる三陵形。長さ　mm，幅　mm程度。基部から果体よりやや短めの逆刺をもつ刺針がのびる。外型が類似し、刺針が不完全な個体を含める。ホタルイ属Cと似る。果実はやや硬い。

・ホタルイ属B（*Scirpus* sp. B）　カヤツリグサ科　果実

果実は茶褐色。側面観は倒卵形，上面観はやや平たく、角が丸みを帯びる三陵形。長さ1mm程度。ホタルイ属Aとしたものよりもやや厚みの少ない個体。果実はやや硬い。

・ホタルイ属C（*Scirpus* sp. C）　カヤツリグサ科　果実

果実は黒褐色。側面観は倒卵形，上面観と角が丸みを帯びる三陵。長さ2mm，幅1.5mm程

度。基部から果体よりもやや短めの逆刺をもつ刺針が6本程度のびる。果実はやや硬い。

・ホタルイ属D（*Scirpus* sp. D） カヤツリグサ科　果実

果実は黒褐色。側面観は倒卵形，上面観は角が丸みを帯びる三陵形。長さ2mm程度。基部から果体よりもやや長めの逆刺をもつ刺針が6本程度ある。果実はやや硬い。ホタルイ属Cとは刺針の長さによって区別できる。

・ホタイル属E（*Scirpus* sp. E） カヤツリグサ科　果実

果実は濃茶褐色。側面観は倒卵形，上面観は楕円形。長さ2mm，幅1.5mm 程度。刺針は破損，粉失したものと考えられる。果実表面には網目状模様が存在する。

・カヤツリグサ科A（Cyperaceae A） 果実

果実は淡褐色。側面観は両凸レンズ形，上面観は三陵形。長さ1.5mm，幅0.5mm 程度。表面には網目状模様が存在する。

・カヤツリグサ科B（Cyperaceae B） 果実

果実は淡白色。側面観は両凸レンズ形，上面観は三陵形。長さ1mm，幅0.5mm 。カヤツリグサ科Aとした個体よりやや厚みが少ない。

4．考察

今回同定された種類について、人間の利用に着目するとつぎのようになる。

・食用になるもの、（ ）内は食用となる部位

イヌガヤ（胚乳）、クリ（子葉）、コナラ属（子葉）、モモ（果実）、ブドウ属（果実）、サトイモ（魂茎）

・食用となる種類を含むもの、（ ）内は食用となる主な種

ナス属（ナス、ジャガイモ）

・食用以外で利用されるもの、（ ）内は用途

ヒョウタン（容器）

・栽培を考えられるもの

ヒョウタン、モモ、サトイモ

当時（古墳時代）の人間は、イヌガヤ、クリ、コナラ属、モモ、ブドウ属、サトイモなどを食料として利用し、またヒョウタンを容器として利用していたことが推測されることから、今

表4　種実遺体同定結果

種類	産出部位	12	13	14	15	16下	17	18	19下	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	41	42	43	44	45	46	47	合計
イヌガヤ	種子								1																								1			2
クリ	果実									〔2〕														(4)													6
コナラ属	果実																	(3)						2								(1)			1	7
コウゾ属	核												1																							1
タデ属	果実					4																														4
ホオノキ	種子																																14			14
クロモジ属	種子																										4		1			4				9
オトギリソウ属	種子										1																									1
モモ	核																				1		2	(1)		1										5
アカメガシワ	種子																																	1		1
ミツバウツギ	種子								3															25				1		1	1		4			35
ノブドウ属	種子																									1										1
ブドウ属	種子																			1																1
エゴノキ	種子								7													1		46					6	1	8	11	1			81
ヒョウタン類	種子																		1																	1
タラノキ	核					(1)																														1
ムラサキシキブ	核					2																														2
ナス属	種子										1																									1
サトイモ	塊茎				1																															1
ミクリ属A	果実	〔200		〔80								〔200				33	18																			531
ミクリ属B	果実					(1)							(4)	15	8																					28
ミクリ属C	果実					(8)		〔25〕					〕50																								183
スゲ属	果実												1																								1
テンツキ属	果実										1																										1
ホタルイ属A	果実					3					3							7																			13
ホタルイ属B	果実										1																										1
ホタルイ属C	果実												1																								1
ホタルイ属D	果実												1					4																			5
ホタルイ属E	果実																	5																			5
ホタルイ属F	果実					1												4																			5
カヤツリグサ科A	果実					5	9											3																			17
カヤツリグサ科B	果実						1																														1
不明A			1																																	1
不明B			1																																	1
合計		200	2	80	1	25	10	25	11	2	7	200	158	15	8	33	18	23	4	1	1	1	2	1	77	1	1	4	1	1	7	2	13	16	16	1	968

（ ）は破片も含む。〔 はおおよその個数。

回検出された種実遺体は利用後不要な部分を投棄したものなのかも知れない。これらのうち、モモ、サトイモ、ヒョウタンは、栽培のために古い時代に海外から持ち込まれたものであるといわれていることから、当時これらの種類を栽培していたことが推測される。

植物の生態性に着目すると、次のようになる。

・暖温帯に主に分布するもの

アカメガシワ

・水生植物あるいは水生植物の種類を含むもの

ミクリ属、スゲ属、テンツキ属、ホタルイ属、カヤツリグサ科

1SD001黒色土内において検出された種実遺体とそれ以外の場所から検出されたものとの間には、植物の生態性に着目すると若干の傾向がみられる。1SD001黒色土では水生植物の種類を含む草本類が検出されているのに対して、それ以外の場所では木本類の種実遺体が検出される。これは1SD001の黒色土が堆積した時期において、溝内が湿った状態であったためなのかもしれない。また、その場所で検出される木本の種実は、周囲に生えていた母植物に由来するものかもしれないが、人間にとって有用な種類の中には他から運び込まれている可能性も考えられる。

（3）昆虫同定

1．試料

試料は、尾崎遺跡から検出された昆虫遺体7点である。以下に試料についての一覧表を記す。

表5　昆虫同定試料

試料番号	試料採取地点等	試料番号	試料採取地点等
40	尾崎遺跡　1SX100	51	尾崎遺跡　1SX100
48	尾崎遺跡　灰色土	52	尾崎遺跡　Eトレ
49	尾崎遺跡　1SD001　黒色土	53	尾崎遺跡　Iトレ
50	尾崎遺跡　1SD020		

2．方法

双眼実体顕微鏡下で、昆虫遺体の形態学的特徴から種類を同定した。

3．結果

結果を表6に示す。

表6　昆虫遺体同定結果

試料番号	同　定　結　果
40	シャープゲンゴロウモドキ（*Dityscus sharpi* Wehncke） マメコガネ（*Pcpillia japonica* Xewmann）
48	オオモモブトシデムシ近似種（cf. *Necrodes asiaticus* Portevin）
49	ヒメコガネ類（*Anomala* sp.）
50	オオセンチコガネ（*Geotrupes auratus* Motschulsky） コアオハナムグリ（*Oxycetonia jucunda*（Faldermann）））
51	ゲンゴロウ近似種（cf. *Cybister japonicus* Sharp）
52	オオモモブトシデムシ近似種（cf. *Necrodes asiaticus* Portevin）
53	ヒメコガネ類近似種（cf. *Anomala* sp.）

以下に検出された昆虫遺体について形態学的特徴や検出部位について記す。

・シャープゲンゴロウモドキ（*Dityscus sharpi* Wehncke）

試料番号40から検出された。検出部位は、左上翅の基部、中央部、先端部、右上翅の中央部、先端部の各破片と後胸腹板である。後基節突起から上記の種と同定した。現在九州には分布していない。雄の上翅には出土標本のような強い縦溝がないことから、この個体は雌（♀）であると思われる。

・マメコガネ（*Pcpilla Japonica* Xewmann）

試料番号40から検出された。前胸背板、中央で２つに割れている。

・オオモモブトシデムシ近似種（cf. *Necrodes asiaticus* Portevin）

試料番号48において右上翅が検出された。翅端部外縁が反転しているが、埋没後に起きたものであろう。動物の腐肉や便所にくる。

・ヒメコガネ類（*Anomala* sp.）

試料番号49においては、右上翅が検出された。外縁と会合部は欠けている。また、試料番号53においては、前胸背板、後胸腹板？、中脚の腿節と脛節が検出された。

・オオセンチコガネ（*Geotrupes auratus* Motschulsky）

試料番号50から右上翅の後半分と、前半分の破片、左右不明の上翅破片がそれぞれ検出された。

・コアオハナムグリ（*Oxycetonia jucunda*（Faldermann））

試料番号50から前胸背板が検出された。

・ゲンゴロウ近似種（cf. *Cybister japonicus* Sharp）

試料番号51より右上翅前半部会合線よりの部分の破片が検出された。

・オオモモブトシデムシ近似種（cf. *Necrodes asiaticus* Portevin）

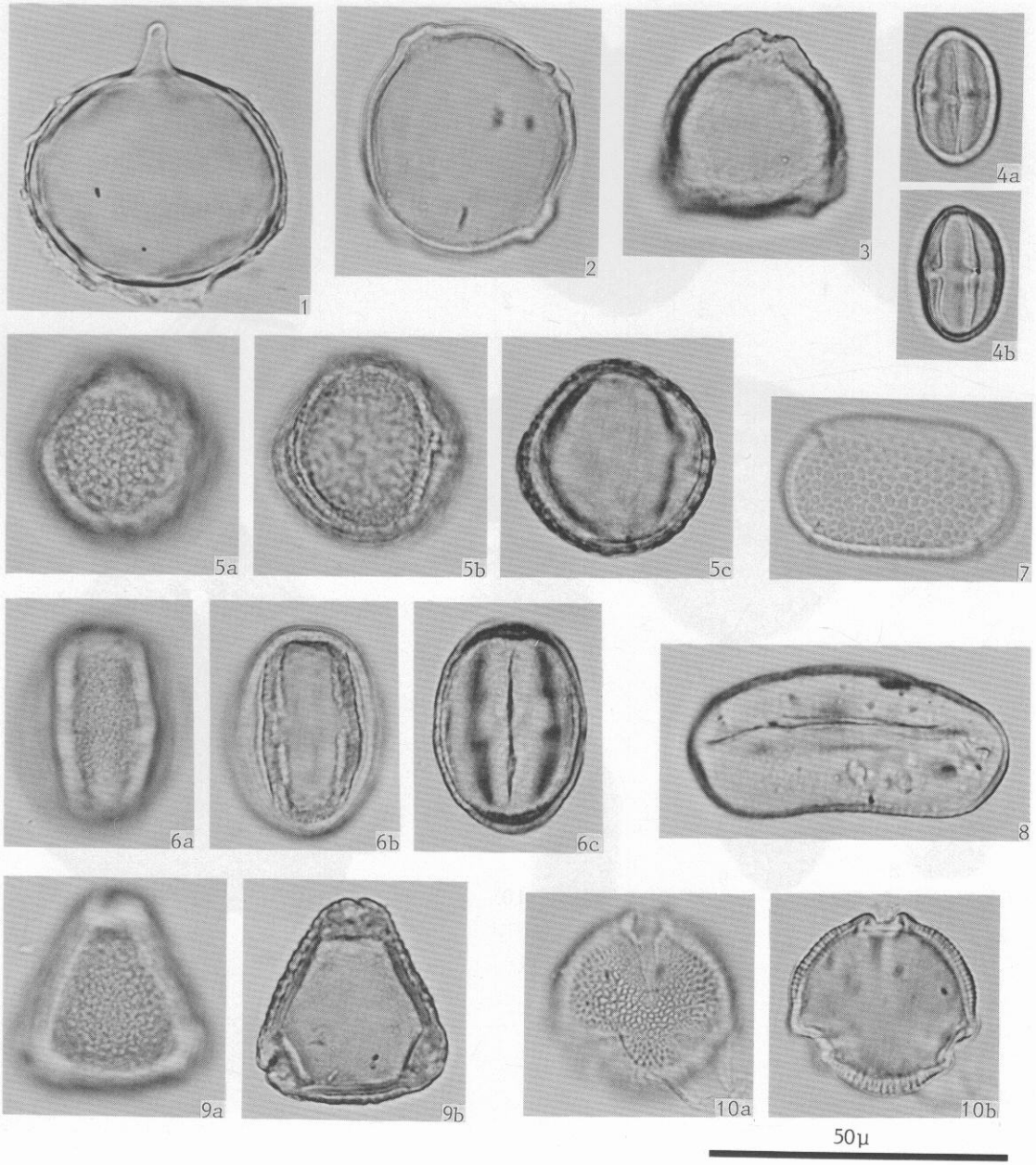
試料番号52より左右一体の上翅が検出された。

４．考察

本遺跡出土昆虫のうち、シャープゲンゴロウモドキとオオモモブトシデムシ近似種を除くと日本各地の各時代の遺跡によく見られるものである。オオモモブトシデムシやオオセンチコガネはウンコを食べる虫で、便所に来ることがあるので住居跡で発見されてもおかしくない。シャープゲンゴロウモドキは水棲であるため、当時枡状遺構内には、水が溜まるような状態であったと示唆され、興味深い結果である。なお、シャープゲンゴロウモドキの地理的な分布を考えると、現在では本州と佐渡から知られるのみであることから、過去の昆虫の地理的分布を考える上で興味深い。

引用文献　〈花粉分析に関するもの〉
徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子　化石の研究法　p.50－73　共立出版
塚田松雄・畑中健一・杉田真哉（1990）アジアの亜熱帯・暖温帯域における第四紀末の植生史　日本植物誌九州　p.217－246　至文堂

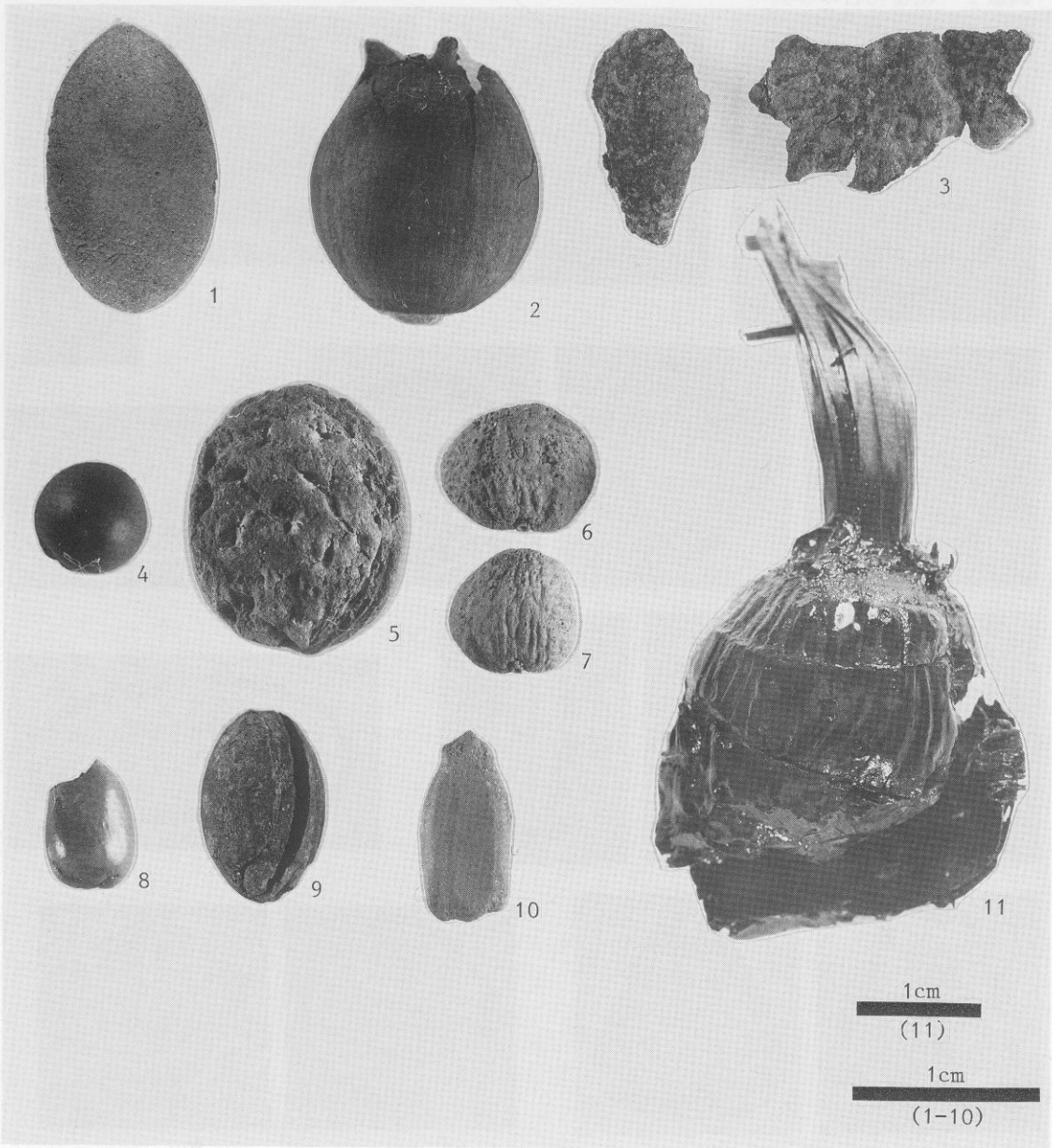
図版１　花粉化石の写真



1．スギ属（試料番号；５）
2．クマシデ属ーアサダ属（試料番号；５）
3．ヤマモモ属（試料番号；６）
4．シイノキ属（試料番号；６）
5．コナラ属コナラ亜属（試料番号；４）
6．コナラ属アカガシ亜属（試料番号；６）
7．ツリフネソウ属（試料番号；５）
8．ミズアオイ属
9．ハイノキ属（試料番号；４）
10．ニシキギ属（試料番号；６）

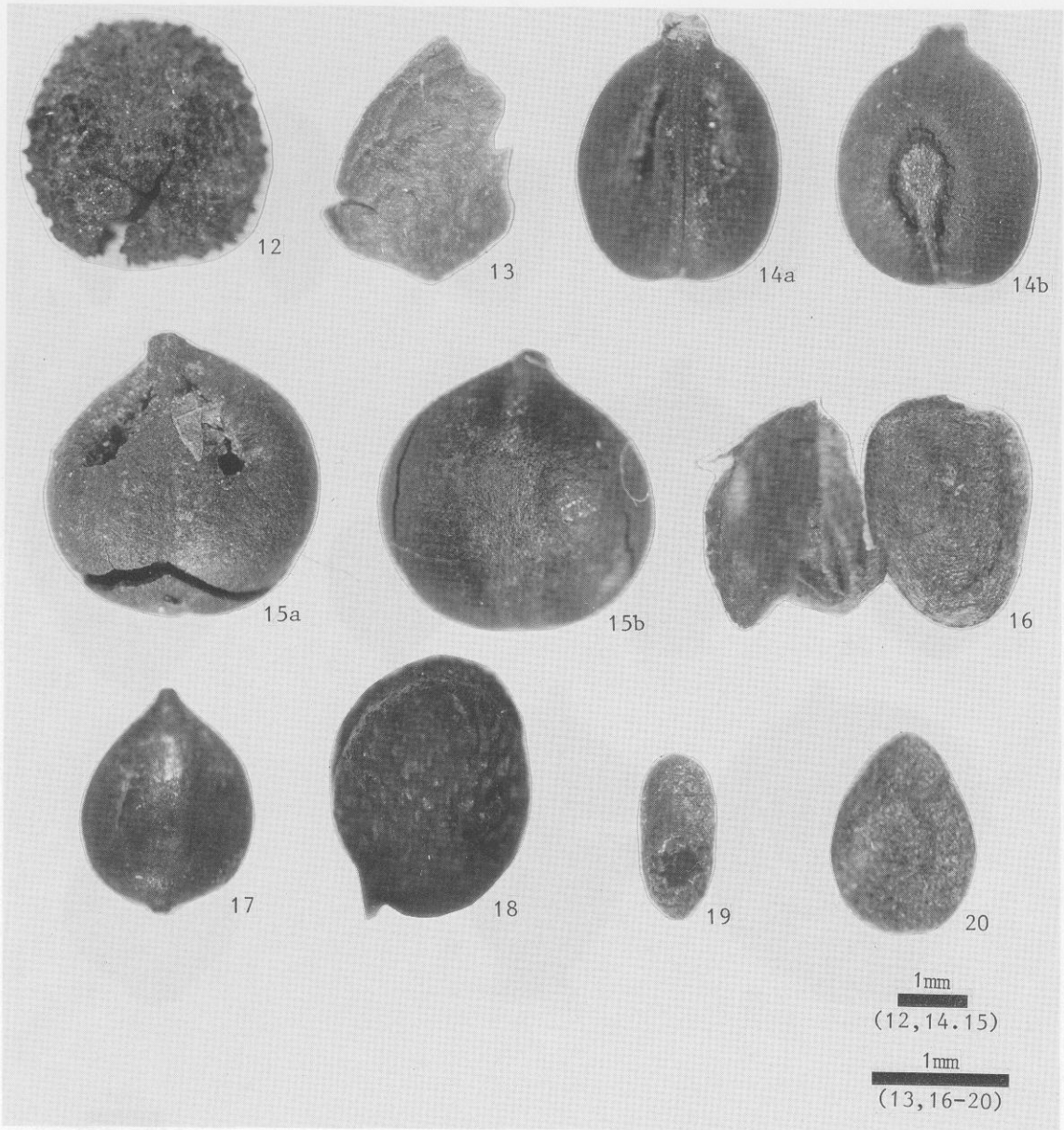
※８は今回報告分に関係しない。

図版２　種実遺体の写真



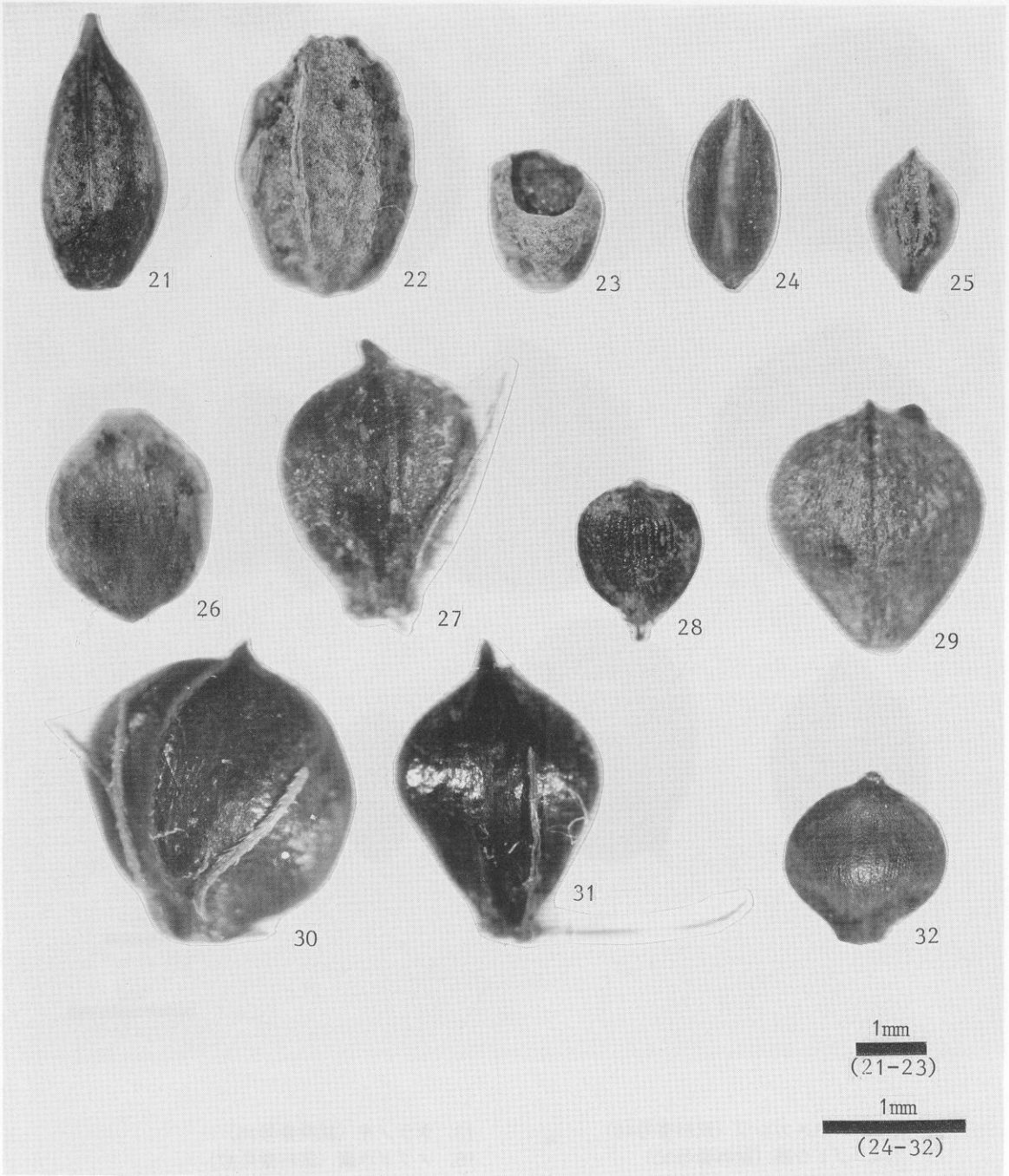
1．イヌガヤ（試料番号19）
2．コナラ属（試料番号47）
3．クリ（試料番号35）
4．クロモジ属（試料番号38）
5．モモ（試料番号36）
6．ホウノキ（試料番号46）
7．ホウノキ（試料番号46）
8．ミツバウツギ（試料番号45）
9．エゴノキ（試料番号45）
10．ヒョウタン類（試料番号29）
11．サトイモ（試料番号15）

図版３　種実遺体の写真



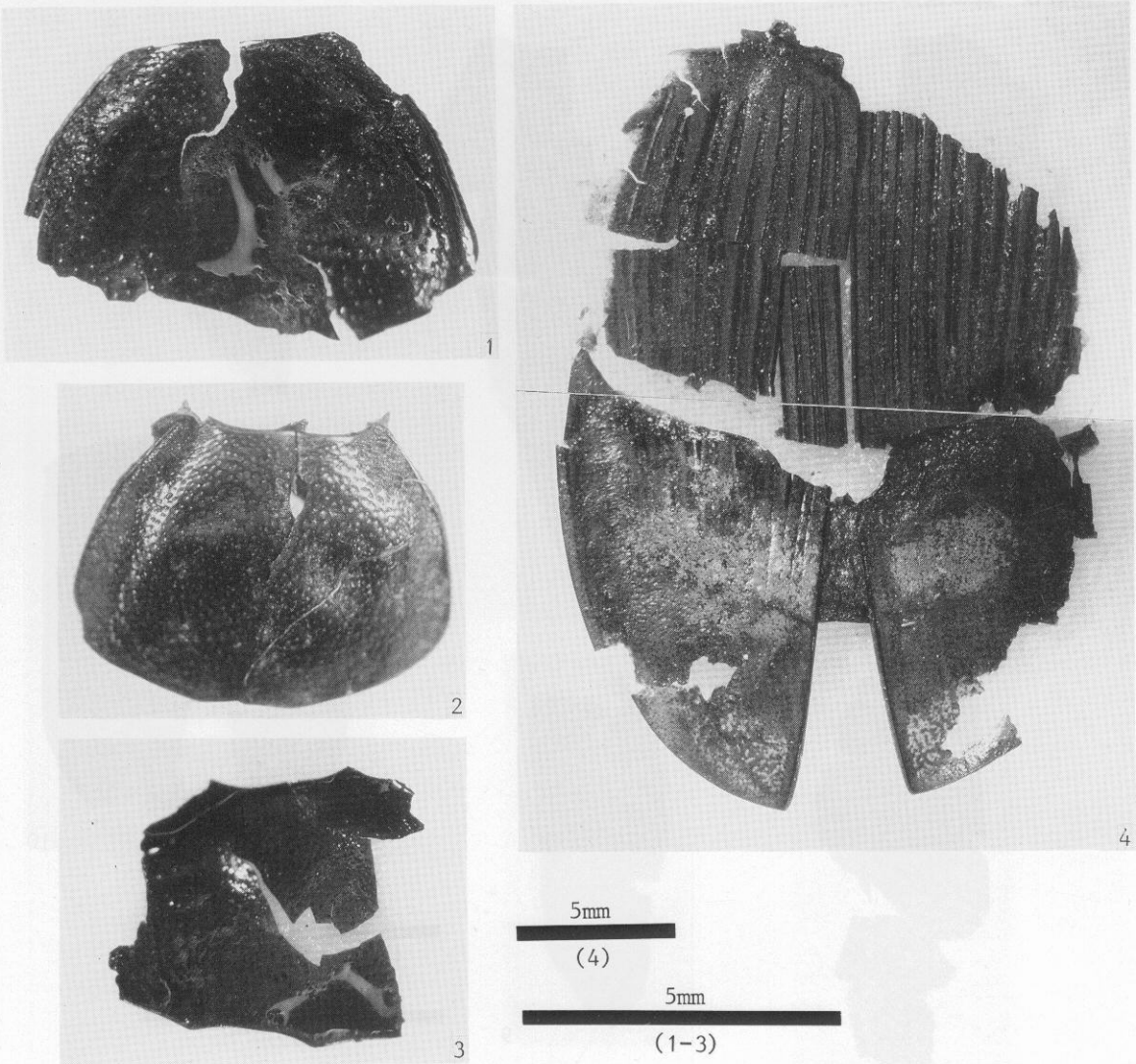
12. アカメガシワ（試料番号46）
13. タラノキ（試料番号16）
14. ブドウ属（試料番号30）
15. ノブドウ属（試料番号37）
16. ムラサキシキブ（試料番号16）
17. タデ属（試料番号16）
18. コウゾ属（試料番号23）
19. オトギリソウ近似種（試料番号21）
20. ナス属（試料番号21）

図版4　種実遺体の写真



21. ミクリ属A（試料番号27）
22. ミクリ属B（試料番号25）
23. ミクリ属C（試料番号23）
24. カヤツリグサ科A（試料番号16）
25. カヤツリグサ科B（試料番号17）
26. スゲ属（試料番号16）
27. ホタルイ属A（試料番号16）
28. ホタルイ属B（試料番号21）
29. ホタルイ属C（試料番号23）
30. ホタルイ属D（試料番号23）
31. ホタルイ属E（試料番号21）
32. ホタルイ属F（試料番号16）

図版５　昆虫遺体の写真



1．ヒメコガネ類（試料番号53）
2．マメコガネ（試料番号40）
3．コアオハナムグリ（試料番号50）
4．シャープゲンゴロウモドキ（試料番号40）

図版６　昆虫遺体の写真

5．ヒメコガネ類（試料番号49）
6．オオセンチコガネ（試料番号50）
7．オオセンチコガネ（試料番号50）
8．ゲンゴロウ近似種（試料番号51）
9．オオモモブトシデムシ（試料番号52）
10．オオモモブトシデムシ（試料番号48）

3．石包丁の使用痕

尾崎遺跡第１次調査の溝1SD001内の1SX100から出土した石包丁について高倍率の金属顕微鏡（オリンパスBH2-UMA）を用いて観察した結果について報告し、若干の所見を述べる。観察は1991年12月19日に東北大学内の埋蔵文化財調査室でおこなわれ、観察者は山田しょう（元東北大学埋蔵文化財調査室、現バーバード大学）、斎野裕彦（仙台市教育委員会）と山村信榮である。

資料は超音波洗浄機によって軽く洗浄し、観察前にアルコールで軽くふき取りをおこなった。資料の平滑面を100倍と200倍で見られたものは、傷状の擦過痕跡といわゆる「パッチ状のコーングロス」と呼ばれるイネ科植物で現われる光沢斑であった（写真図版参照）。

この光沢斑はA、B面ともに確認される。それぞれの面の内で強弱の分布が見られる（図１）。両面を相対的に比較した場合、面の左側の方がより強い光沢面の発達が見られる。このことは須藤、阿子島（1985）が報告した東北地方出土の石包丁の使用痕分布の一般的傾向と合致し、また、使用実験による成果からも右手使用によるイネ科植物の穂摘みによるものと解釈される。弱いながらB面にも若干A面に似たパターンでの使用痕が見られることから、多少左手による使用があったことも考えられる。刃部に光沢斑が無いのは研ぎ直しによる。

観察した本資料は小豆色をした砂岩質の堆積岩であるが、観察の結果見られた使用痕、特に光沢斑の形状認識には、過去に東北大学を中心に集積された実験や資料分析による成果を援用するに違和感はなかった。しかしながら、今後は「実験に解釈の基準を作らなければならないという基本的な立場を」順守するのであれば、在地産の出土遺物と同じ素材を用いた使用実験をおこなう必要性があろう。

観察に際して山田、斎野両氏には場所や機械の提供を受け、観察方法の指導や解釈についての数々のご教示をいただきながら、力量不足により意を尽くせない報告となってしまった。責は山村が負うものである。

九州においては磨製石器のみならず縄文後期から弥生前期に亘る剥片石器の分析や位置づけにおいても、器種構成比による解釈で留まり停滞したままであるが、今後は使用痕レベルまで踏み込んだ論議が必要であり、同じ石材によるパターン化した使用実験をおこないデータを集積する必要がある。

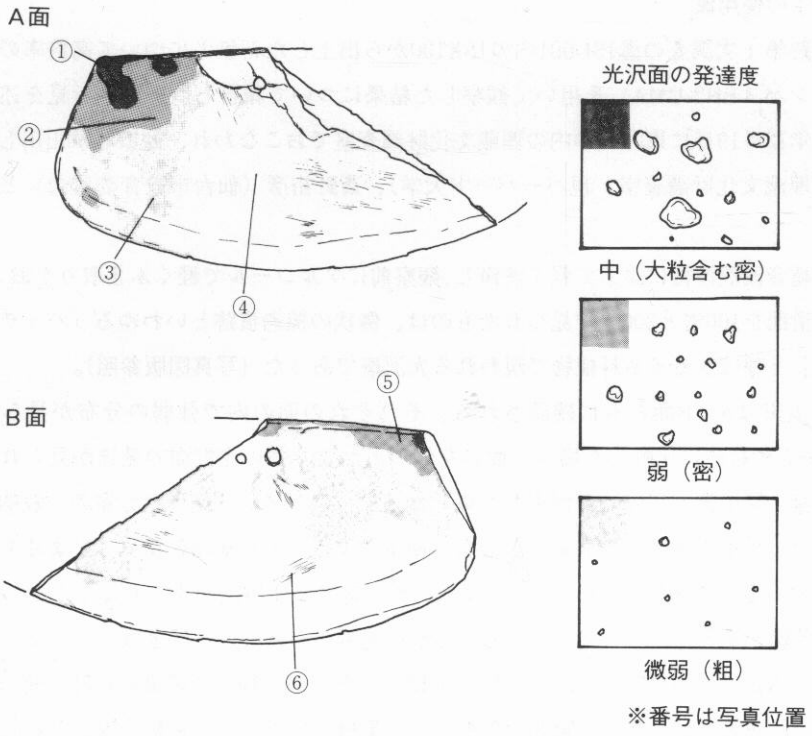
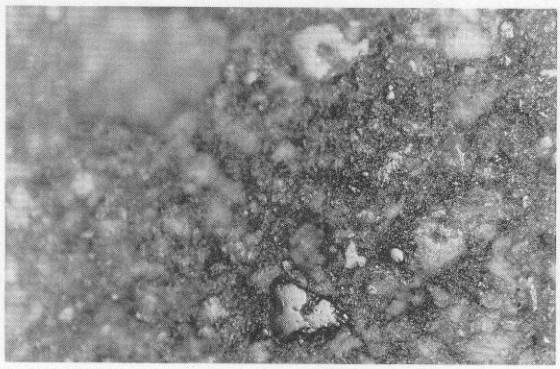
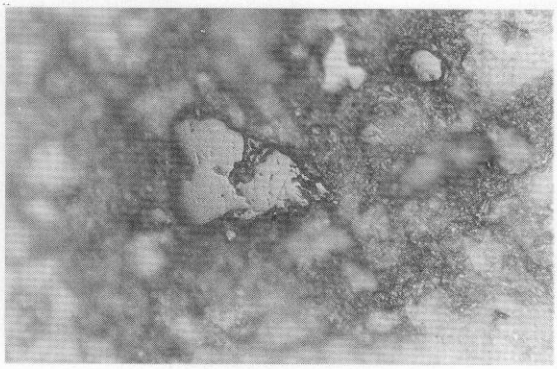


図1　石包丁の光沢面分布図

註
1「東北地方の石包丁について」1985須藤隆、阿子島香「日本考古学協会第51回総会研究発表」
2「使用痕研究の現状と針路」1986山田しょう「歴史」第67号東北史学会
3「石器」1991山村信榮「福岡市早良区有田七田前遺跡の研究」(「日本における初期弥生文化の成立」横山浩一先生退官記念論文集)

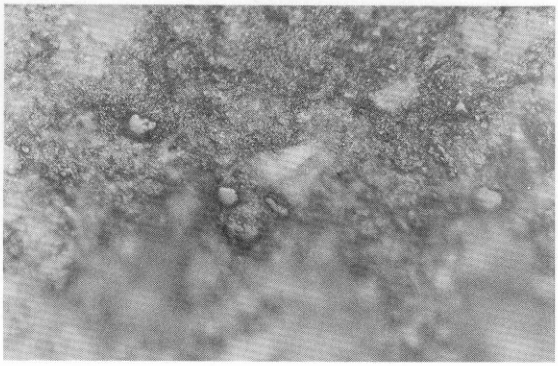


①a　植物による光沢面（中程度）　×100

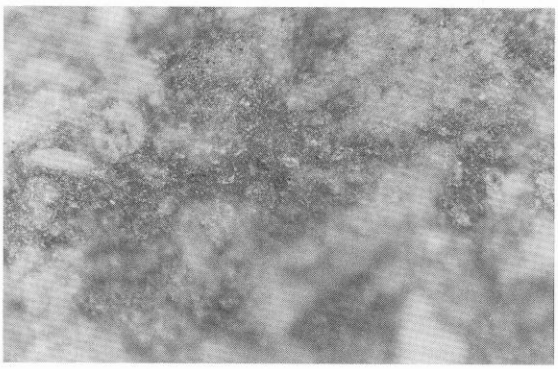


①b　同左拡大　×200

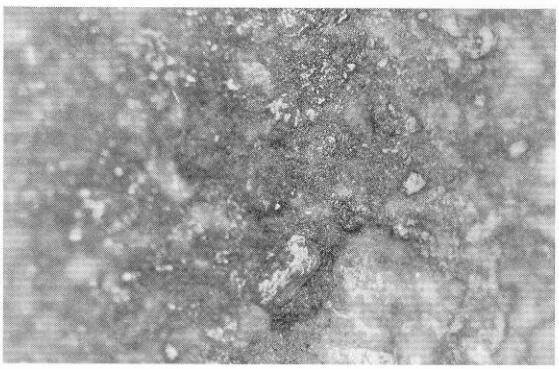
②　植物による光沢面（弱）



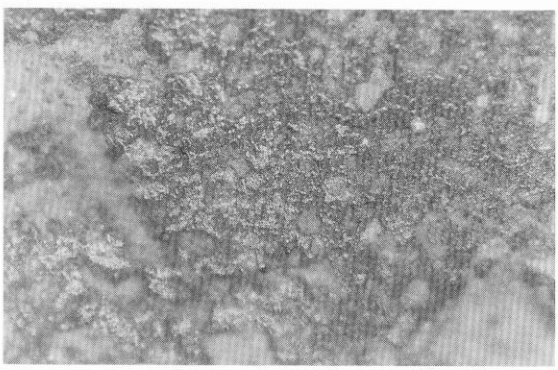
③a　植物による光沢面（微小）



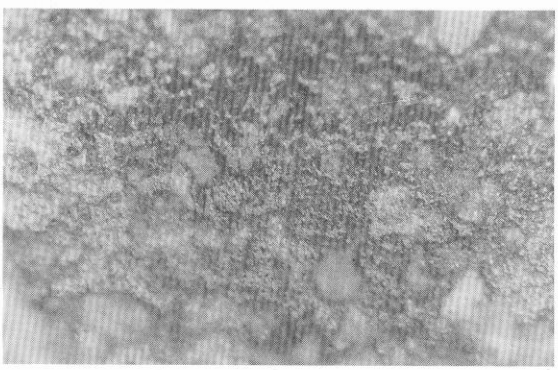
④　未変化部分



⑤　植物による光沢面（弱）



⑥a　砥石による光沢面　×100



⑥b　同左拡大　×200

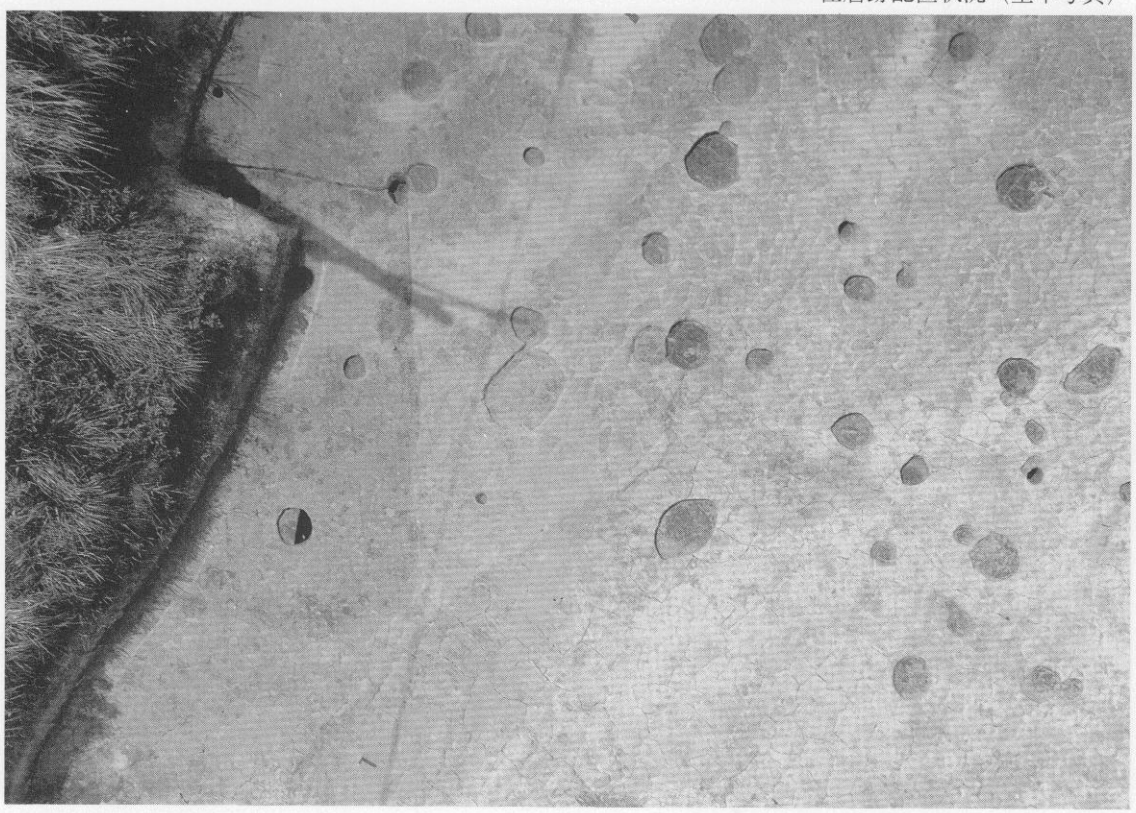
①a、⑤、⑥aは ⊢—⊣ が100μm・①b～④、⑥bは ⊢——⊣ が100μm

写 真 図 版

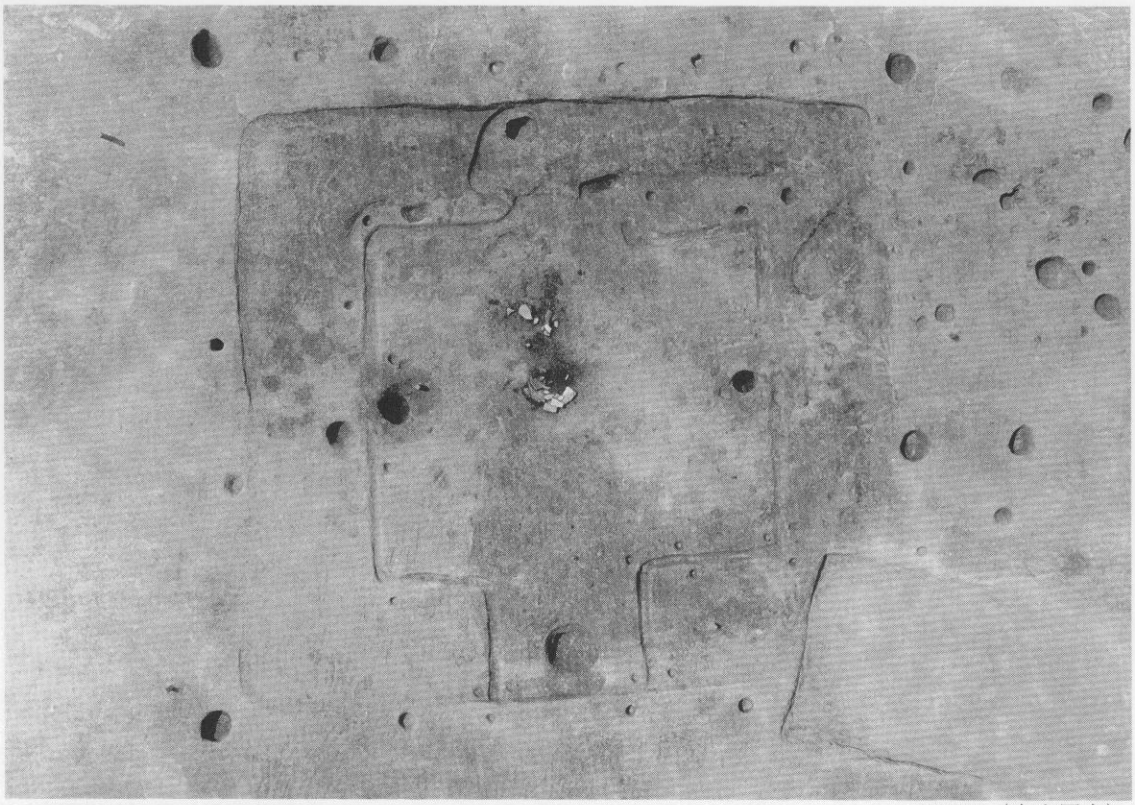
尾崎遺跡　第１次調査地点から西方を望む（中央の森は宮ノ本遺跡）

尾崎遺跡　第1次調査全景

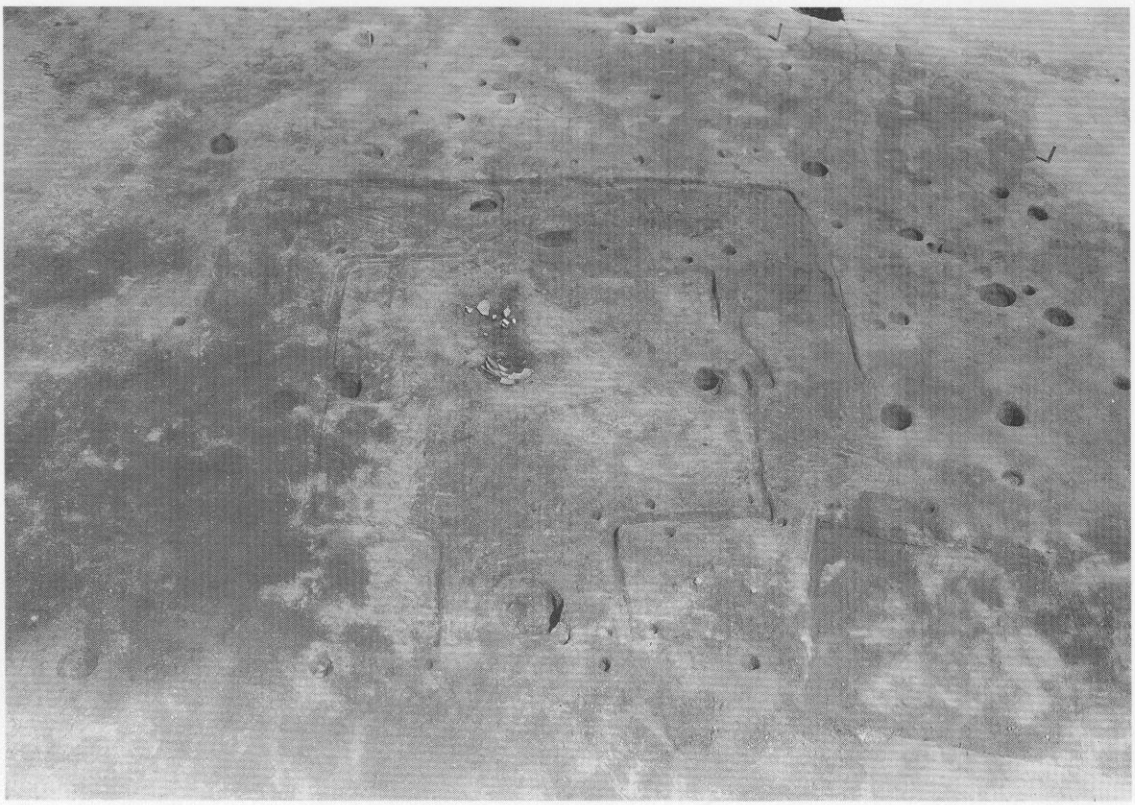
住居跡配置状況（空中写真）



1SI010（左）と1SB035（左）（空中写真）

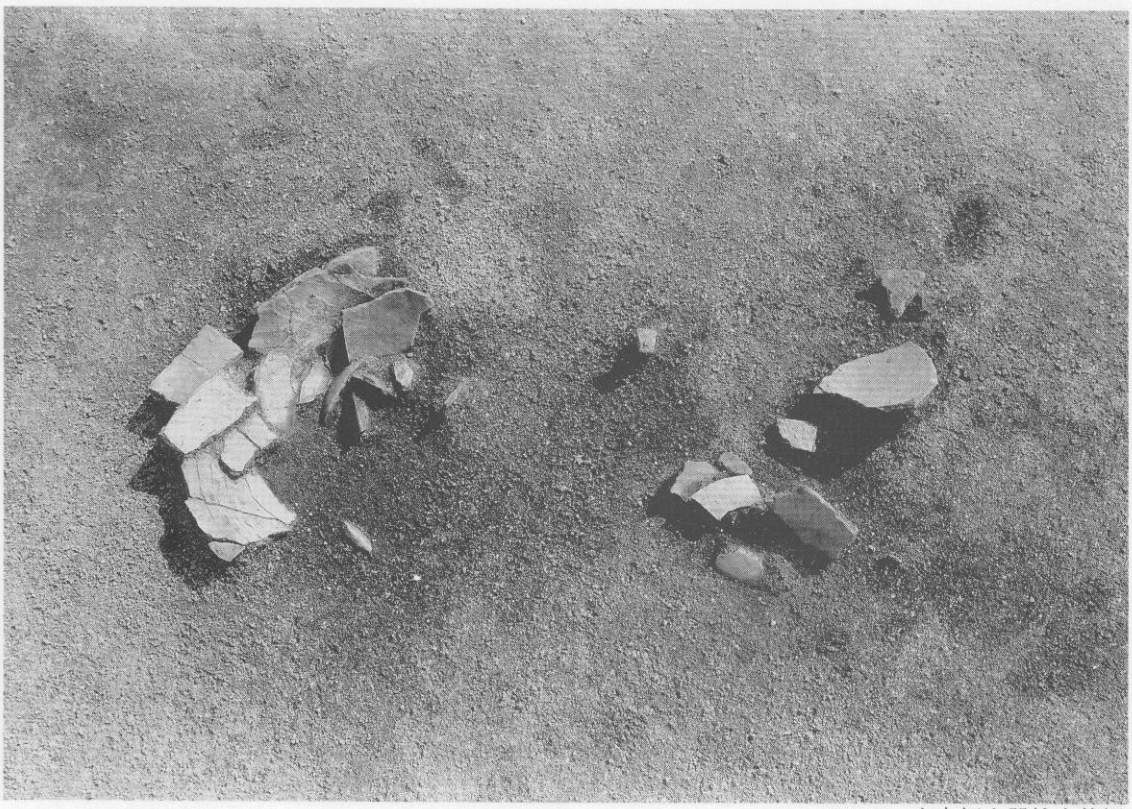


1SI040（空中写真）

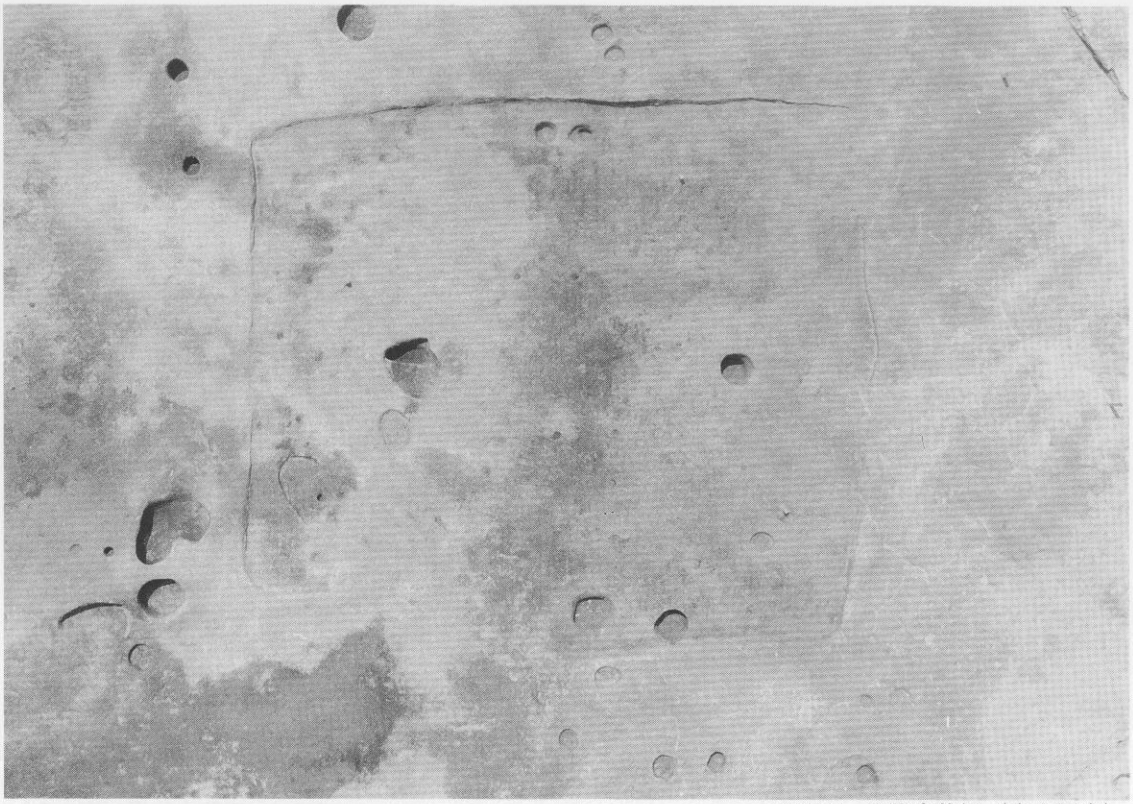


1SI040（南西から）

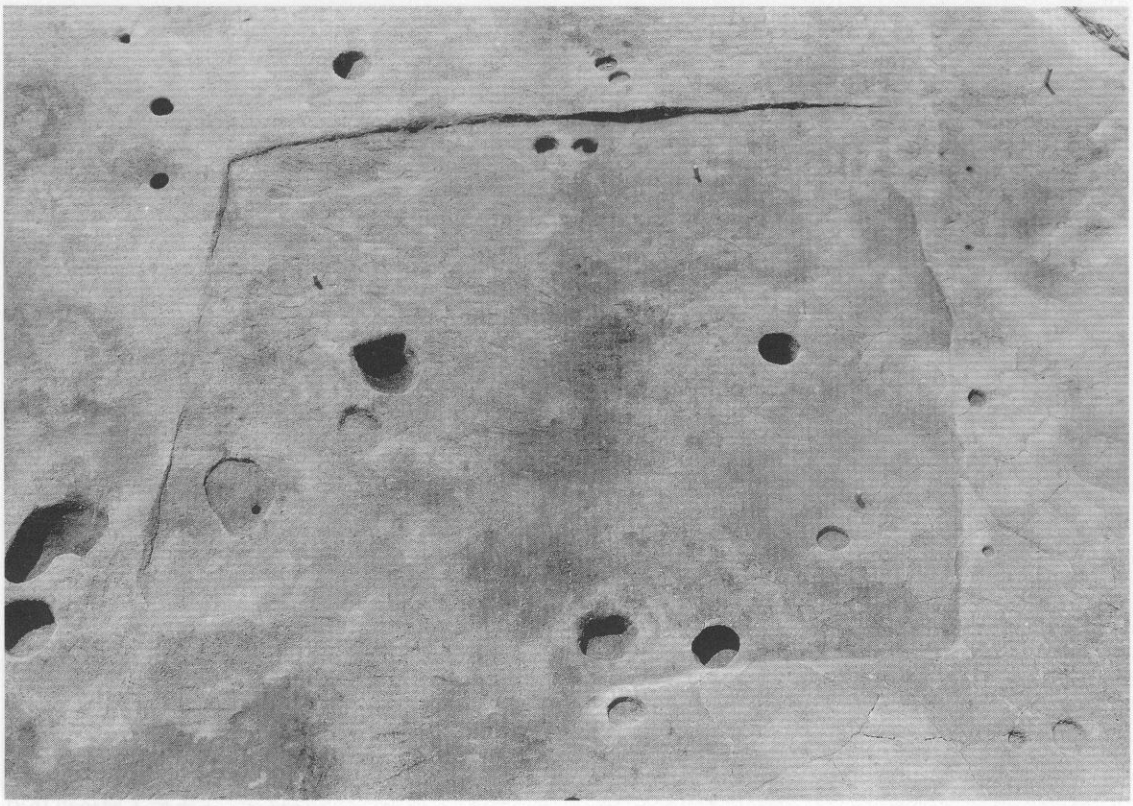
1SI040　床除去状況（東から）



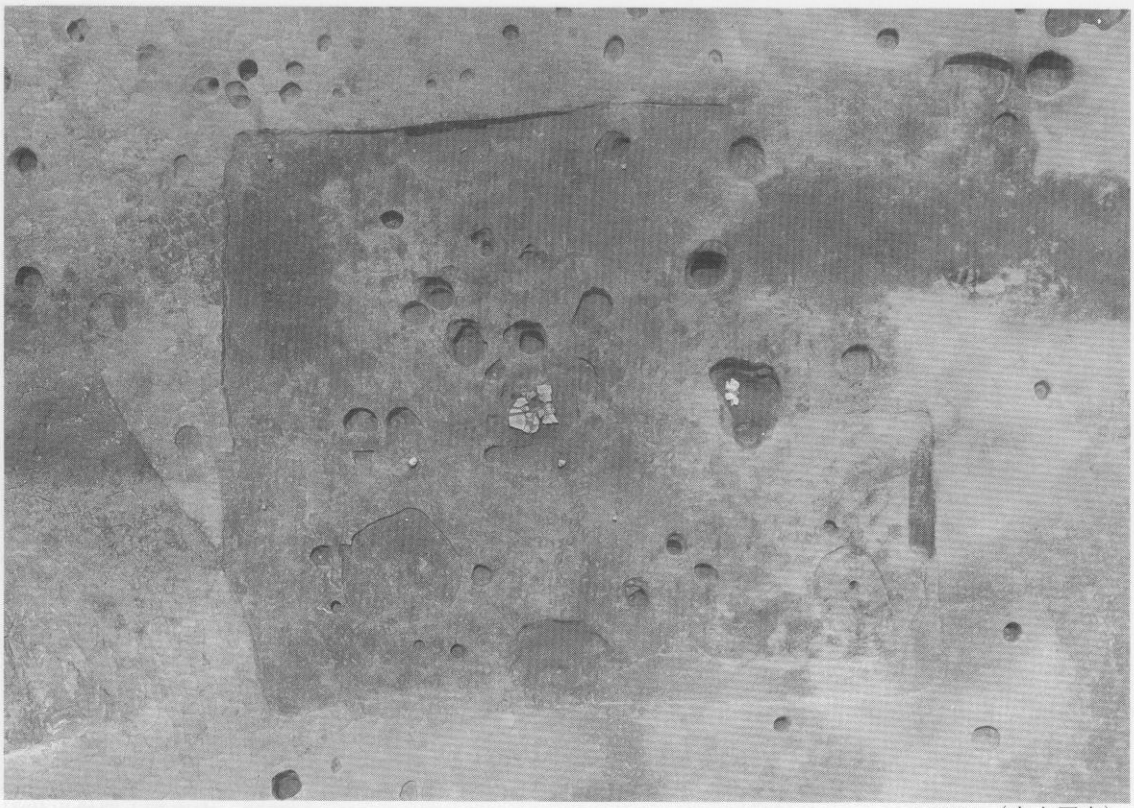
1SI040　中央炉土器検出状況



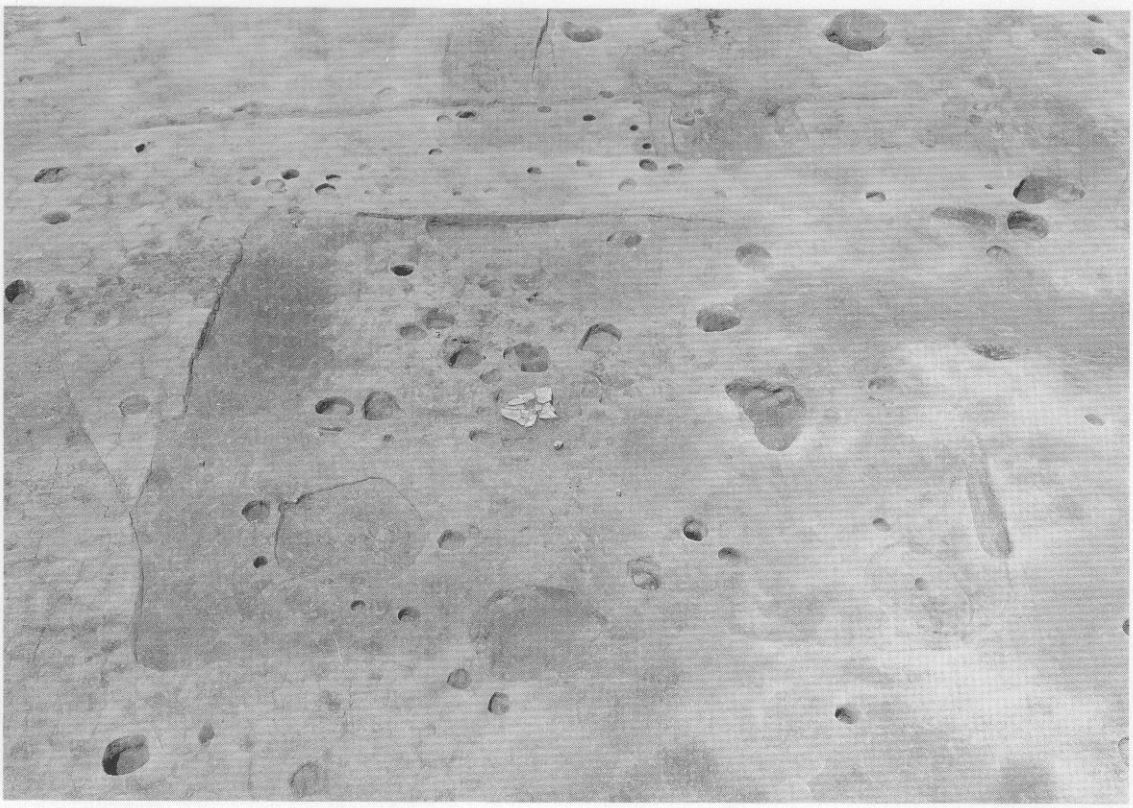
1SI050　床除去状況（空中写真）



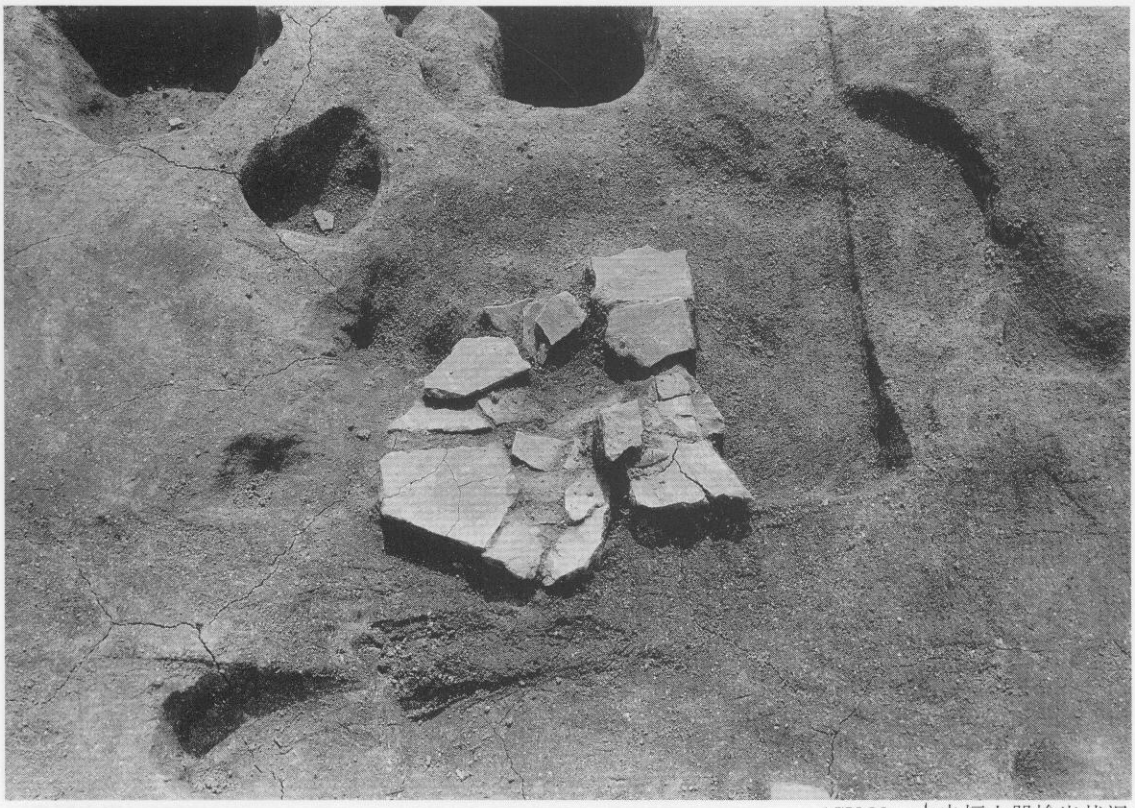
1SI050（東から）



1SI060（空中写真）

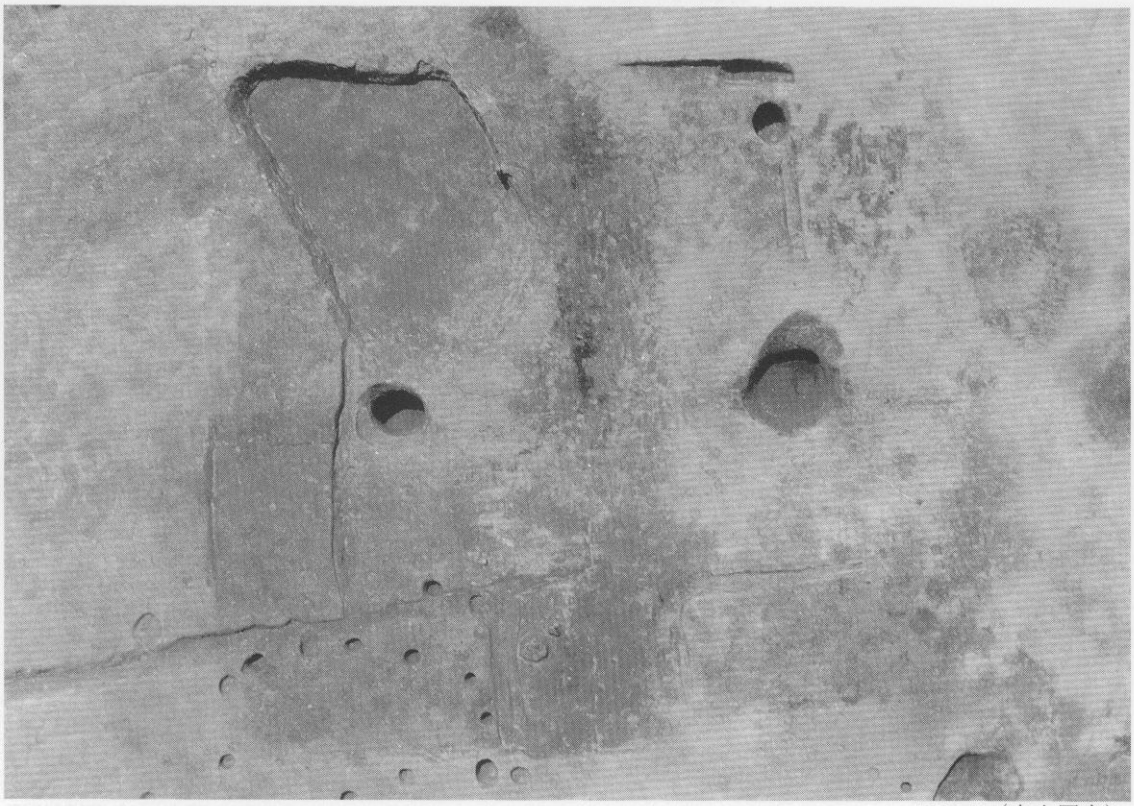


1SI060（東から）



1SI060　中央炉土器検出状況

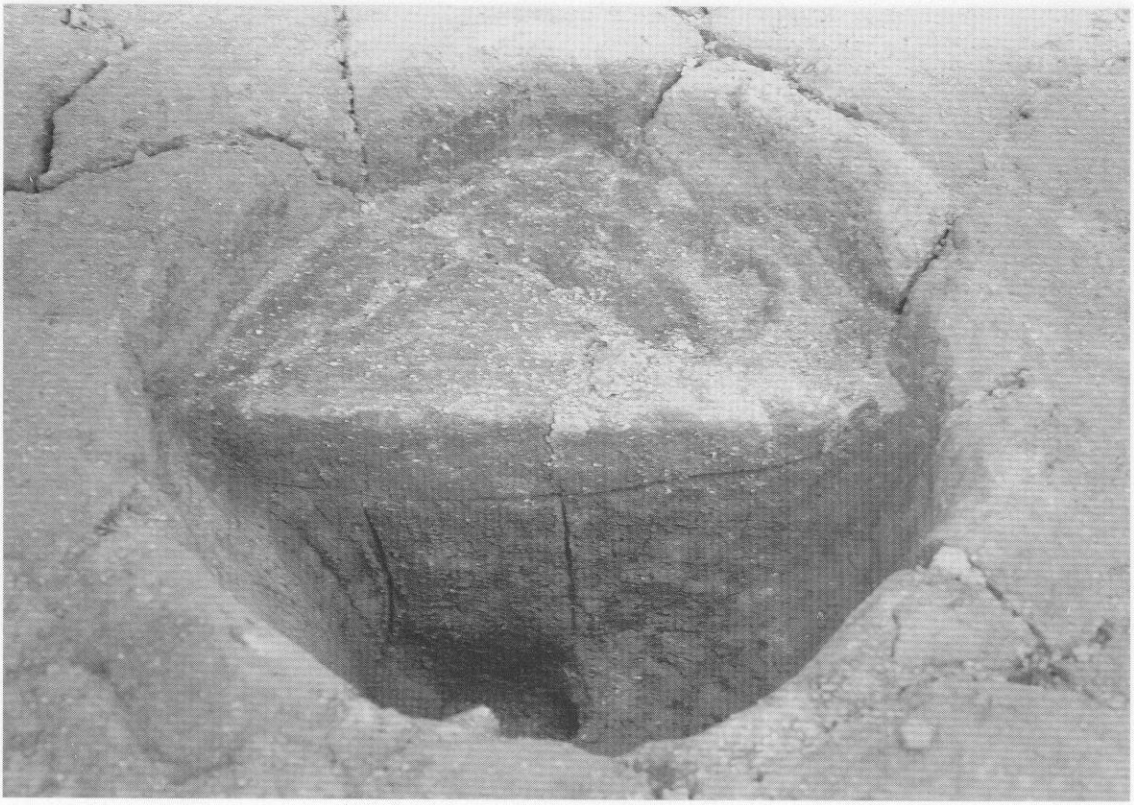
1SI070（西から）



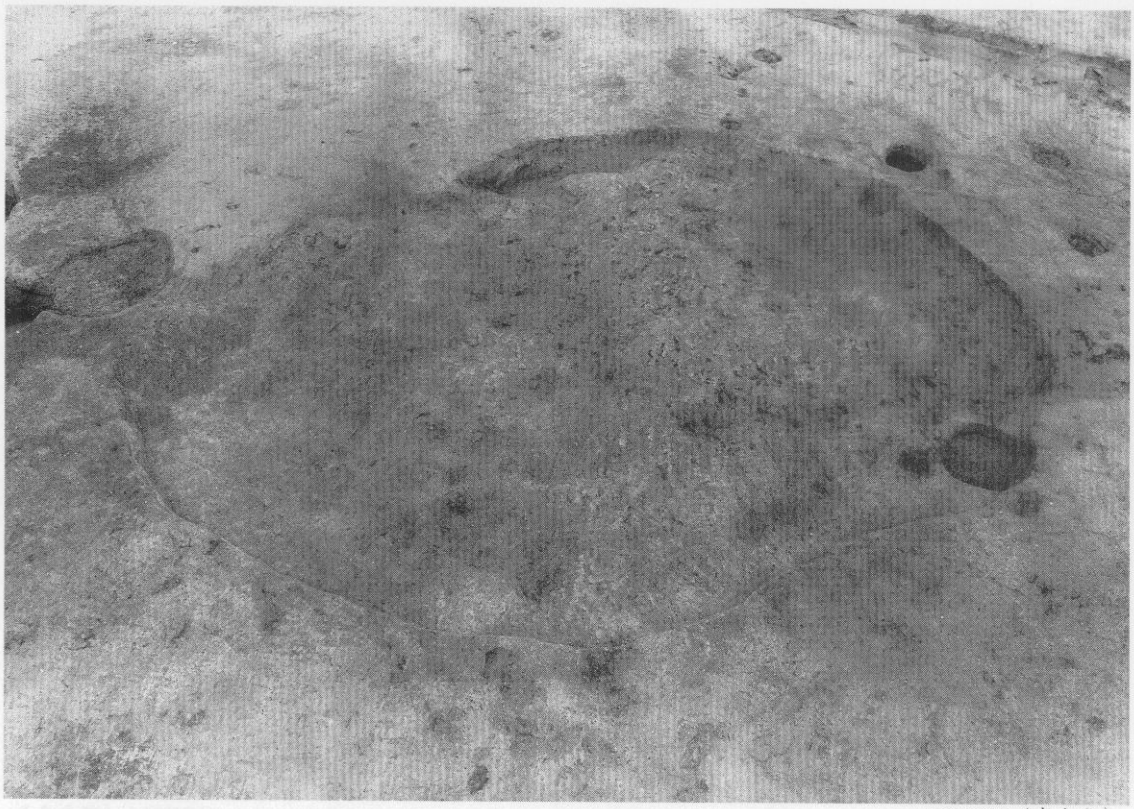
1SI070（空中写真）

1SI070（東から）

1SB035　掘方（e）断割状況



1SB035　掘方（a）断割状況



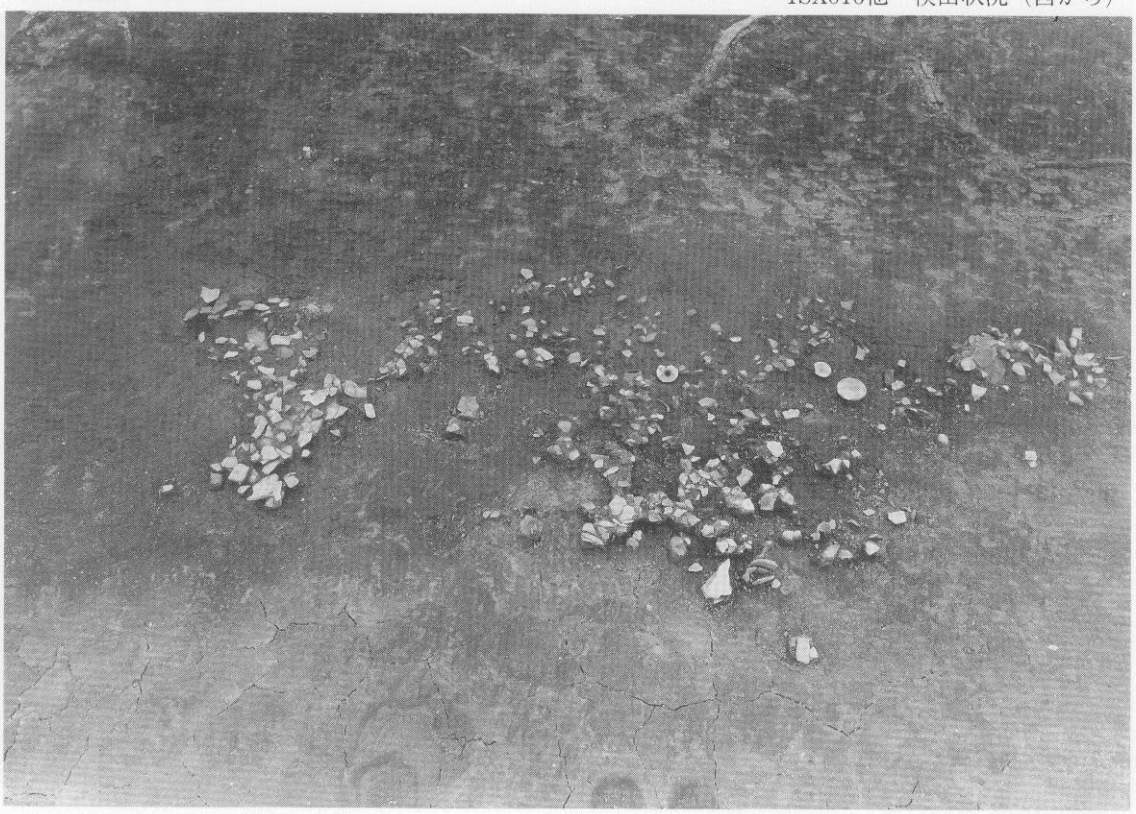
1SK005（東から）

1SK008（東から）

1SK014（南から）

1SK055（北西から）

1SX016他　検出状況（西から）

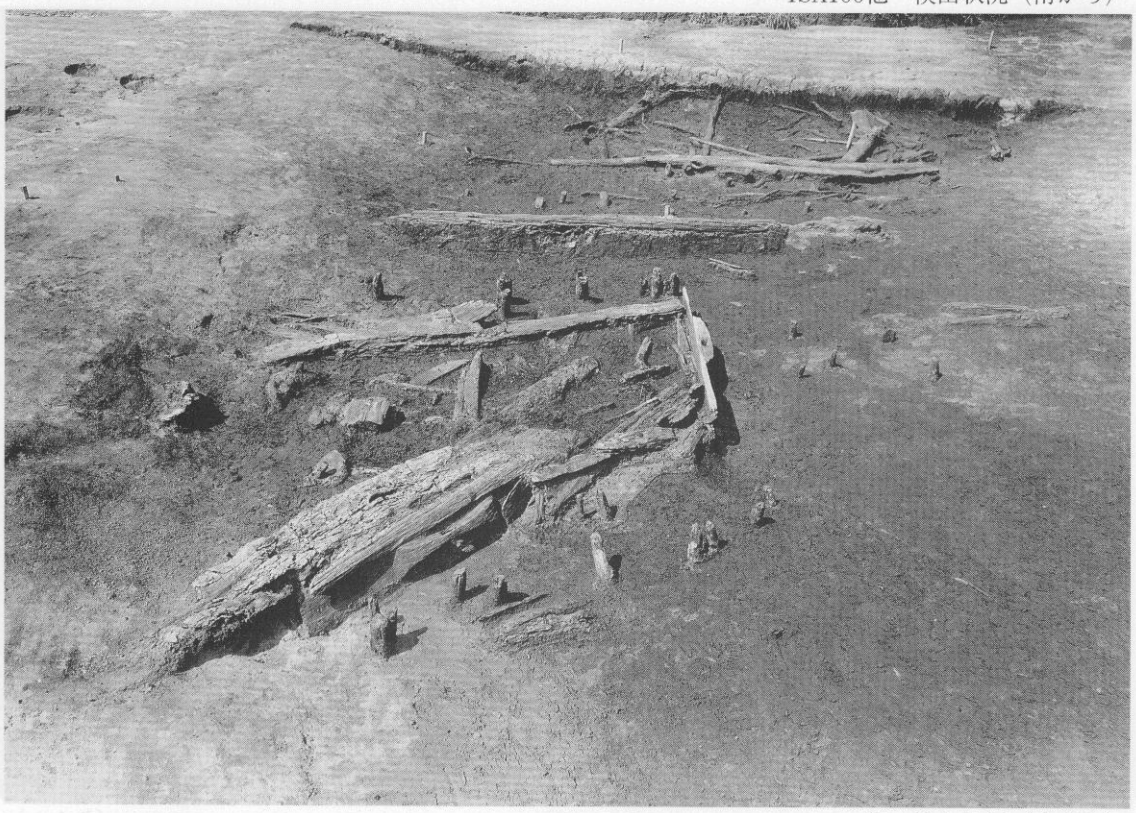


1SX016他　検出状況（北から）

1SX065（北西から）

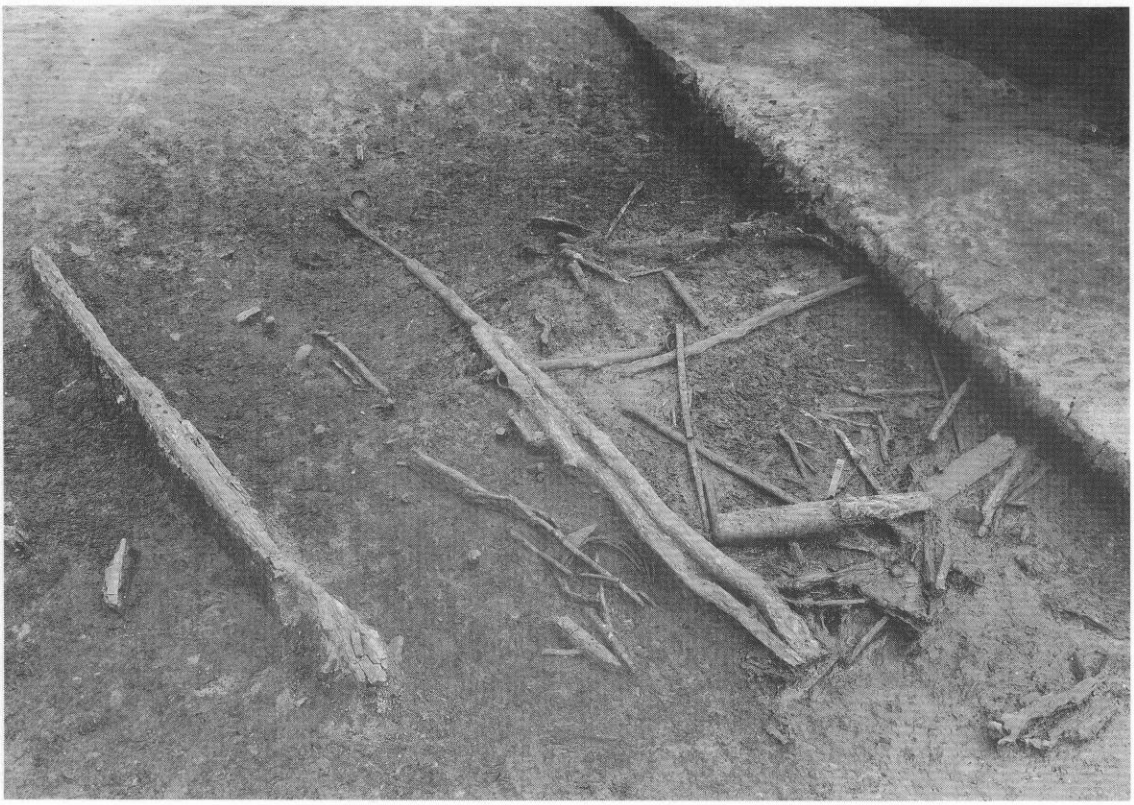
1SX065　掘り下げ状況（北から）

1SX100他　検出状況（南から）



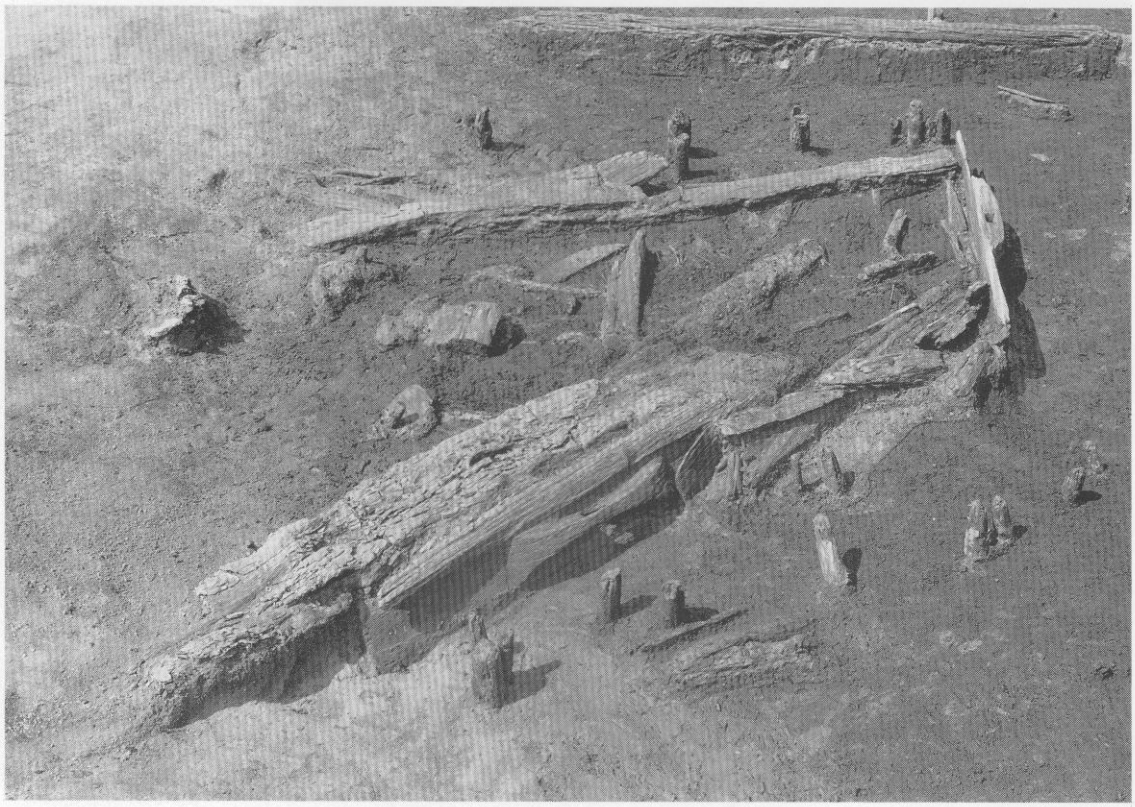
1SX100他　検出状況（東から）

1SX090（南から）

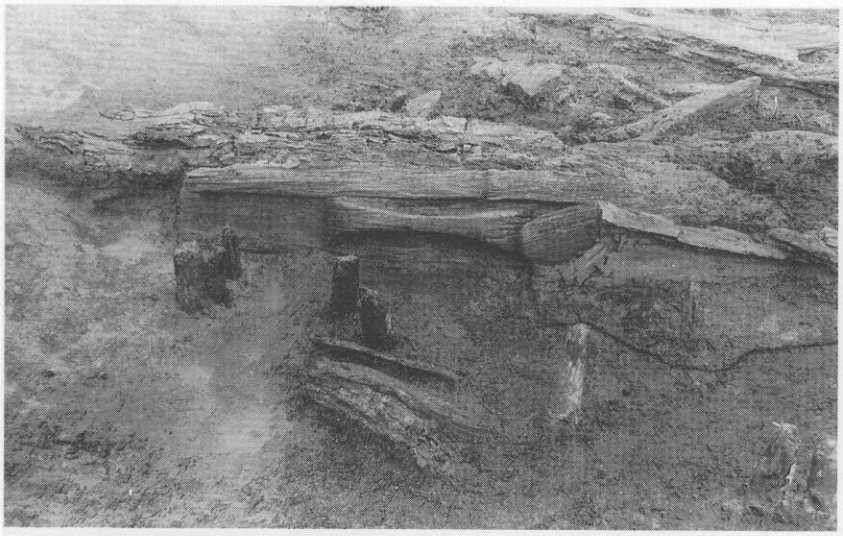


1SX110（北から）

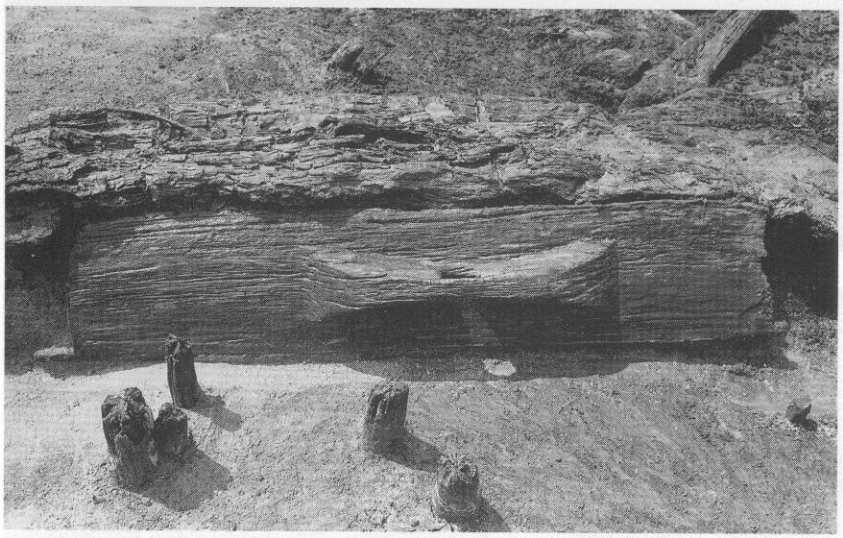
1SX100・105（北から）



1SX100・105（東から）



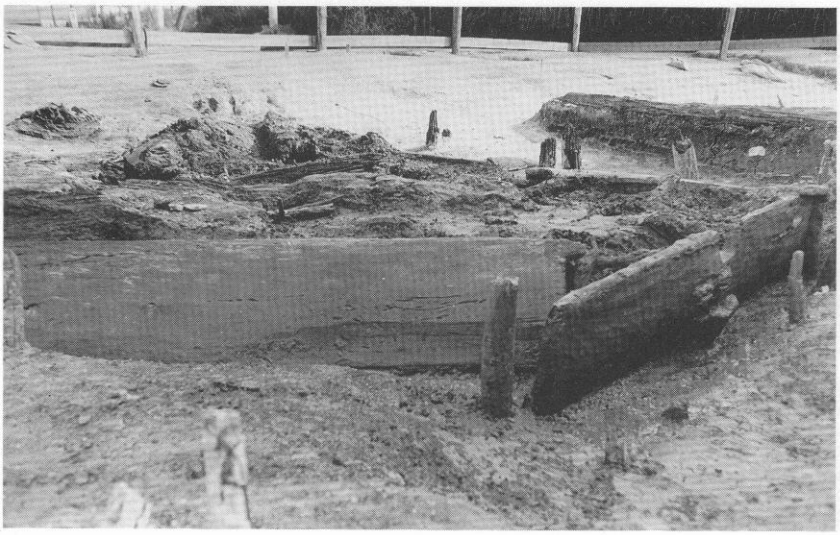
1SX100
扉板検出状況（東から）



1SX100
同上、別材除去後
（東から）

1SX100
西北コーナーの
粘土による目張り状況

1SX100
北辺の扉材を除去した後
にあらわれた別の扉材
（北から）

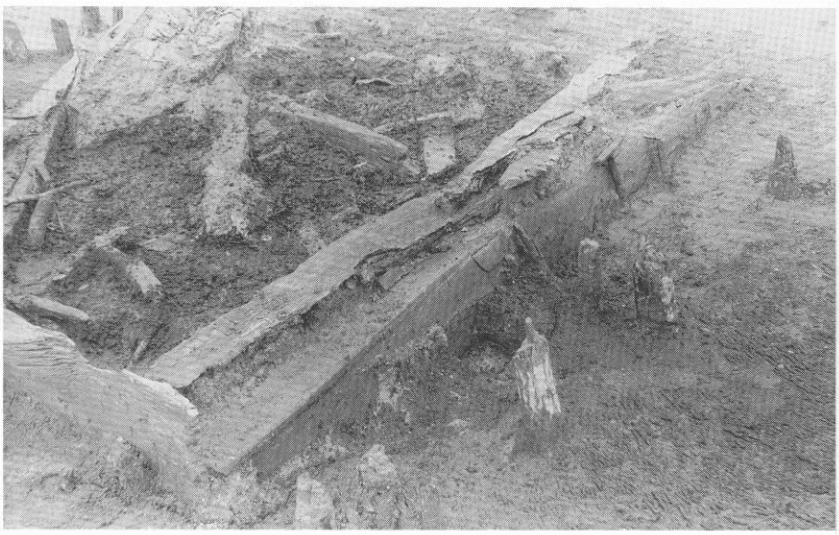


1SX100
同上、（北東から）

1SX100
内側の北東コーナーで
検出されたねずみ返し

1SX100
西辺の状況（南西から）

1SX100
同上、（西から）



1SX100
同上、（北西から）

1SI010

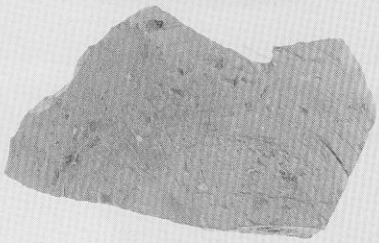
1

1SI040

2

3

1SI060



6

1SI070

7

4

5

1SK022

1

1SK055

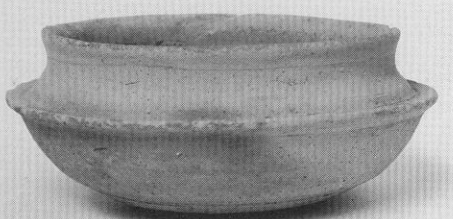
2

住居跡及び土壙出土土器

1SK055

1

2



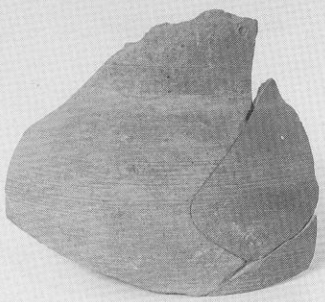
3

4

1SD001

1

3



7

6

1SK005・1SD001灰色土層出土土器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1SD001黒色土層出土土器

11

16

12

17

13

18

14

19

15

20

1SD001黒色土層出土土器

21

26

22

27

23

28

24

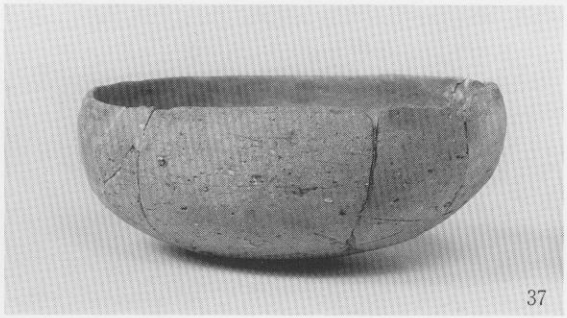
30

25

31

1SD001黒色土層出土土器

32


37

33

38

34

39

35

40

36

41

1SD001黒色土層出土土器

42

47

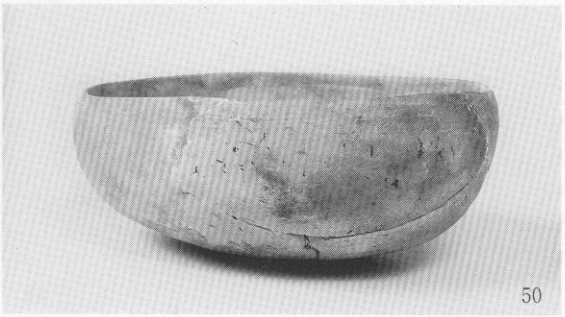
43

48

44

49

45

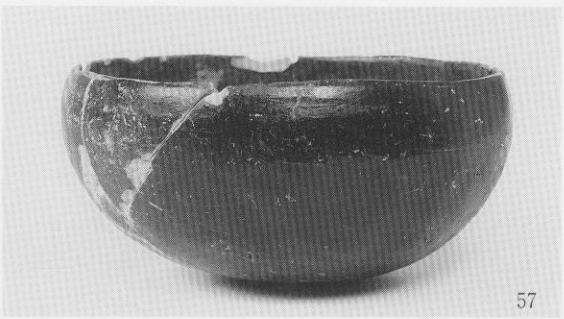

50

46

51

1SD001黒色土層出土土器

52


57

53

58

54

59

55

60

56

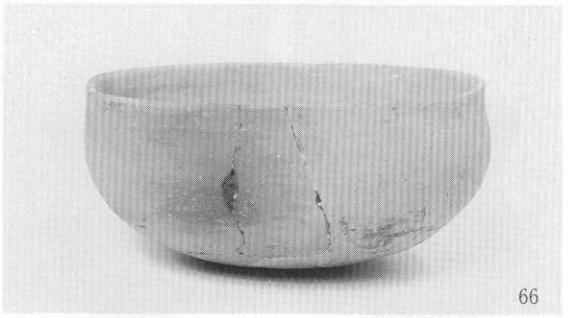
61

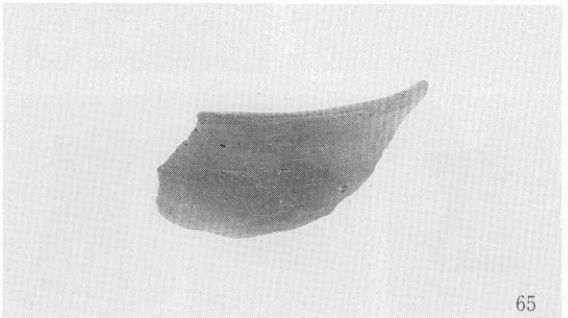
1SD001黒色土層出土土器

62

63

64


66


65

67

68

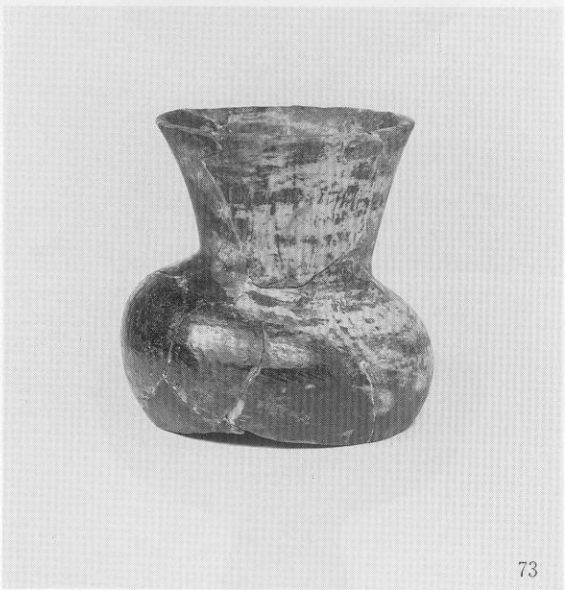
69

72

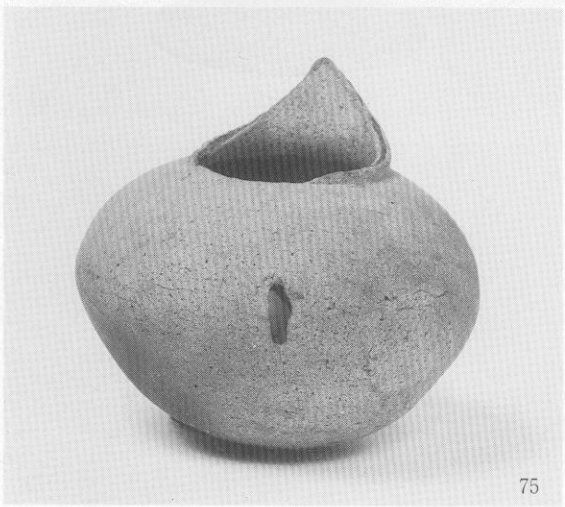
1SD001黒色土層出土土器

70

71


73

74

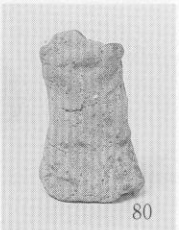

75

77

76

78

79

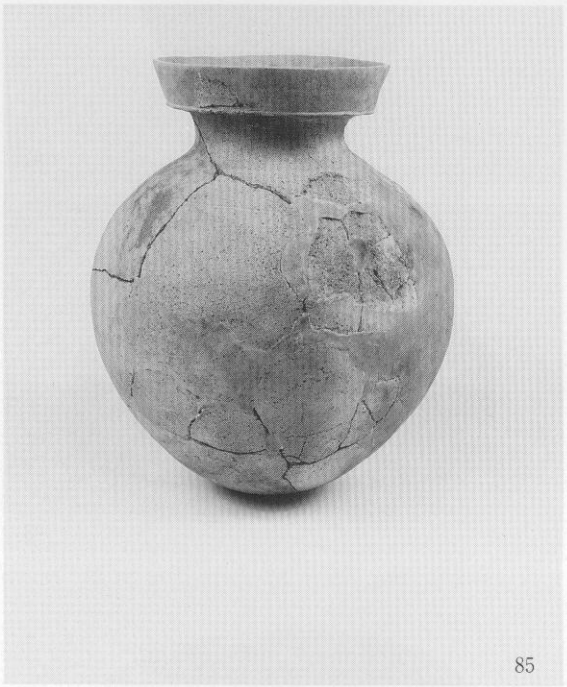

80

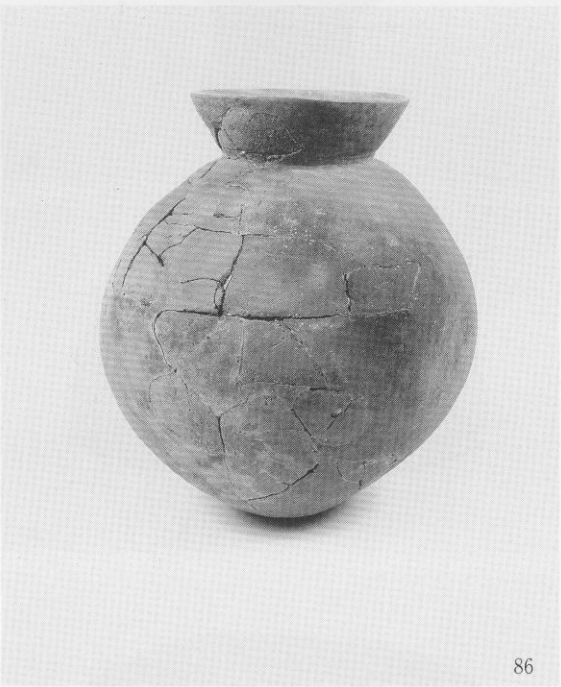
1SD001黒色土層出土土器

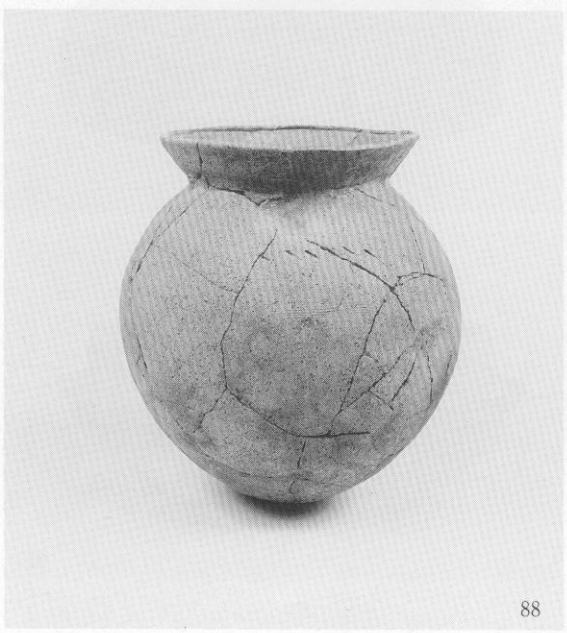
81

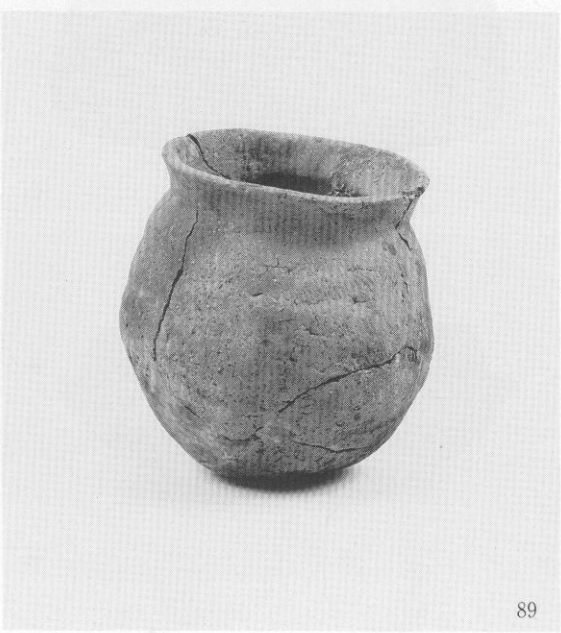
83

84

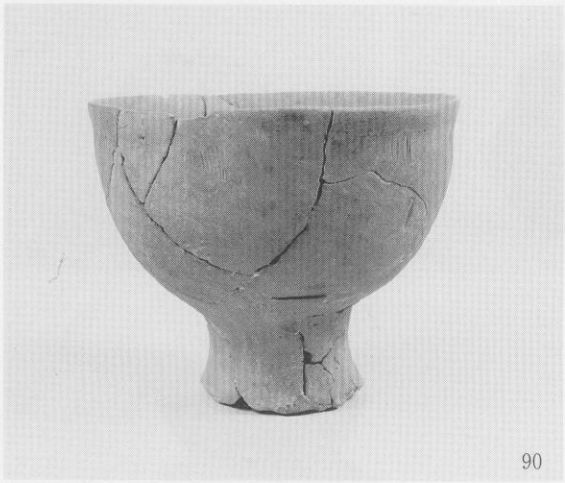

85


86

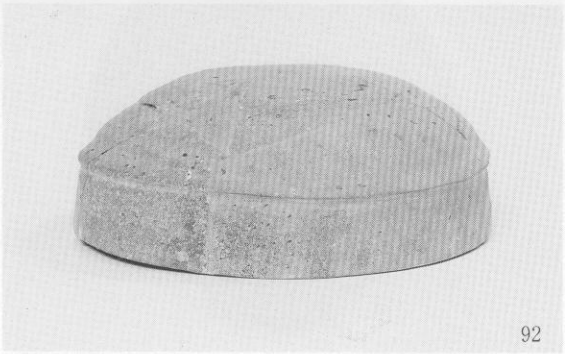

88


89

1SD001黒色土層出土土器


90

91


92

93

94

95

96

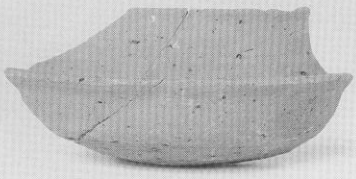
97

1SD001黒色土層出土土器

1SD001黒色土層

98

1SD001腐食土層



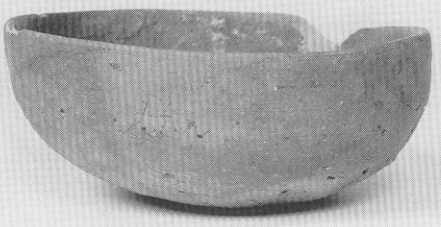
99

100

1

4

2



5

3

6

1SD001黒色土層・腐食土層出土土器

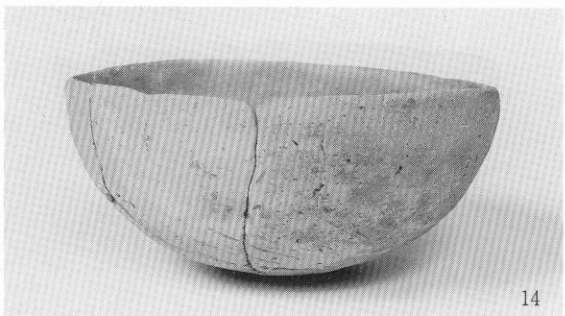
7

12

8

13

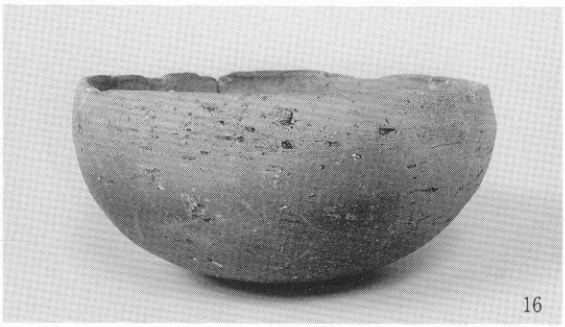
9


14

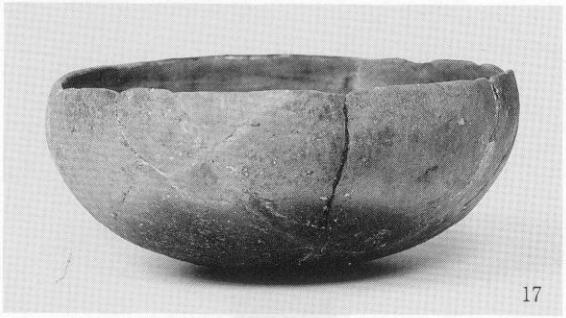
10

15

11


16

1SD001腐食土層出土土器


17

21

18

22

19

23

20

24

25

26

1SD001腐食土層出土土器

27

30

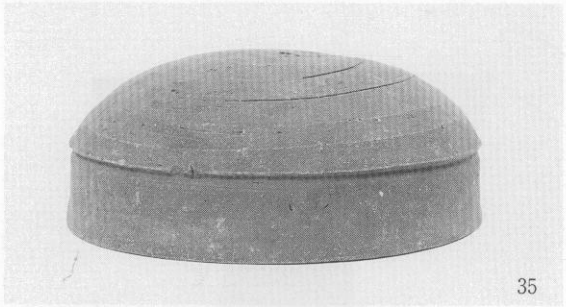
28

31

29

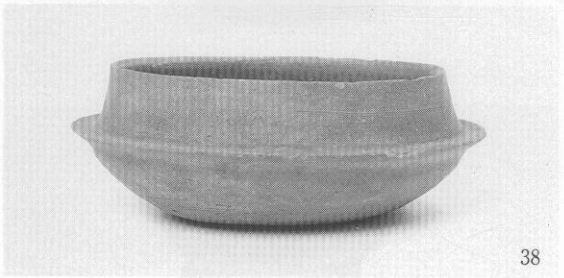
32

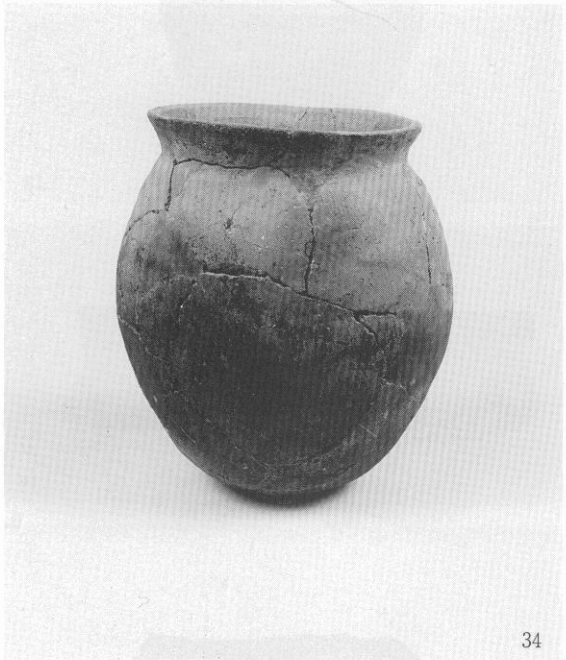
1SD001腐食土層出土土器

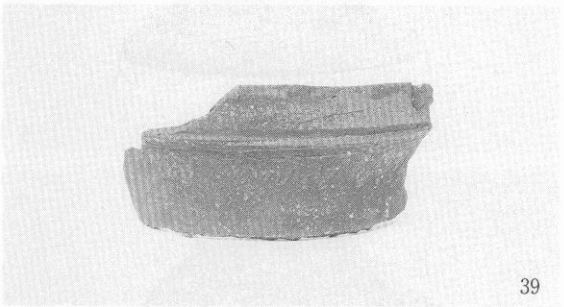

35

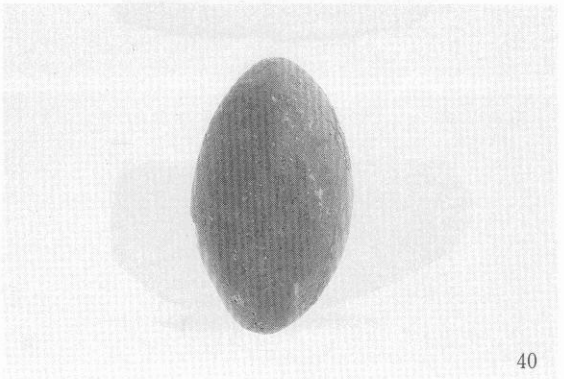
37

36


38


34


39


40

1SD002

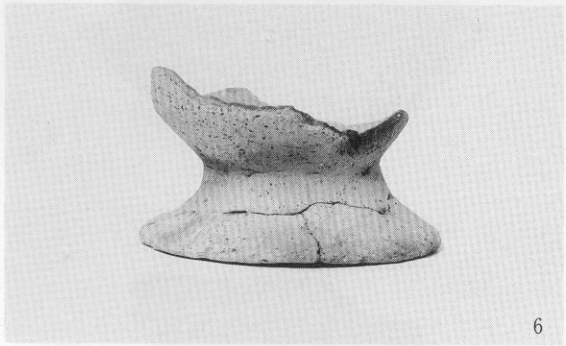
2

1

1SD001腐食土層・1SD002出土土器

5

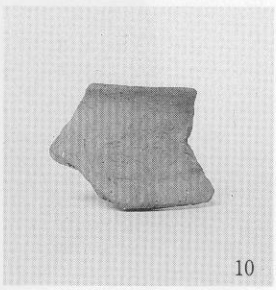
4

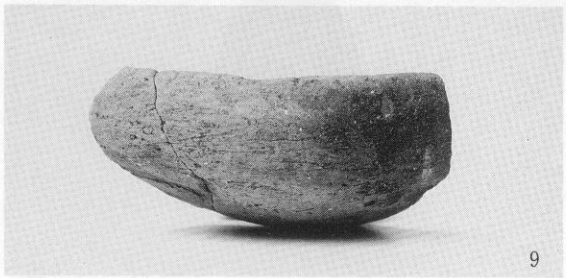

6

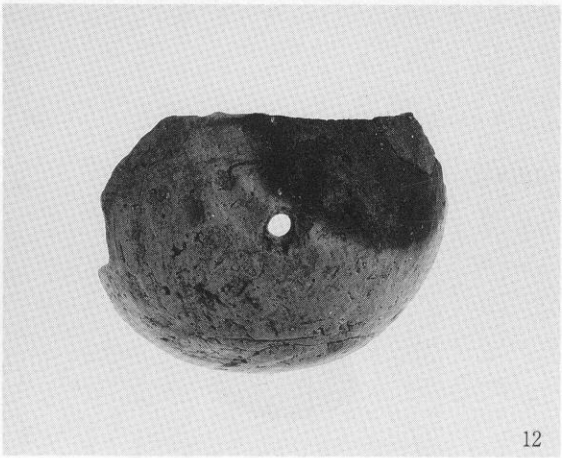
13

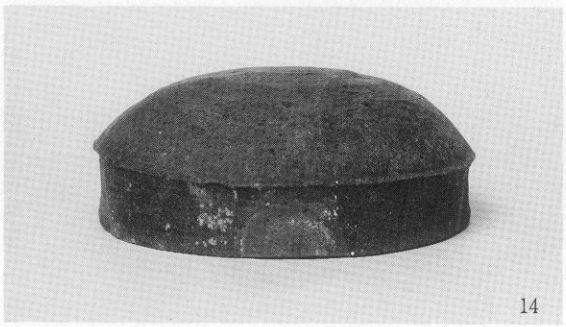
7

11


10

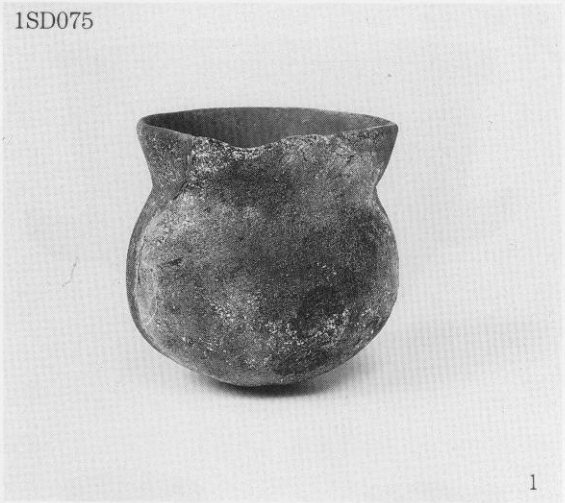

9


12

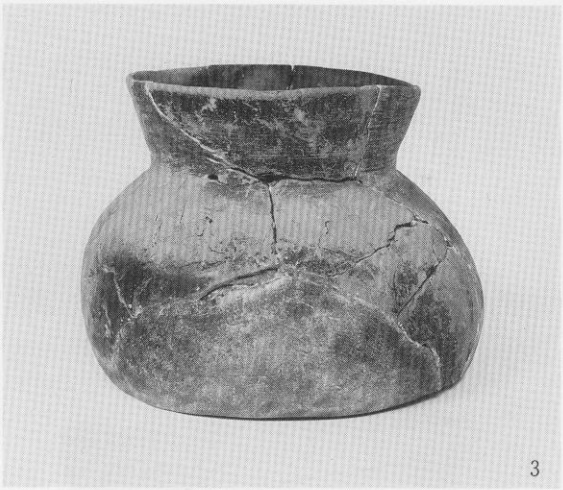

14

1SD020出土土器

1SD075

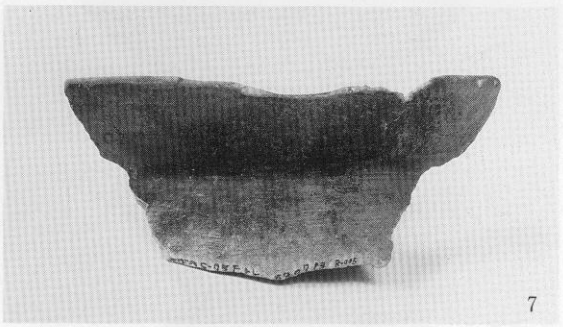


1



3

2

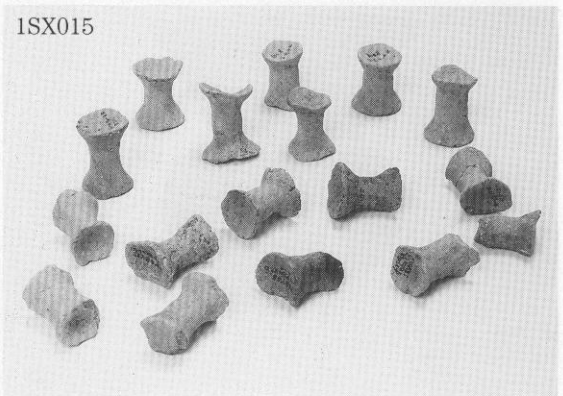


7

4

5

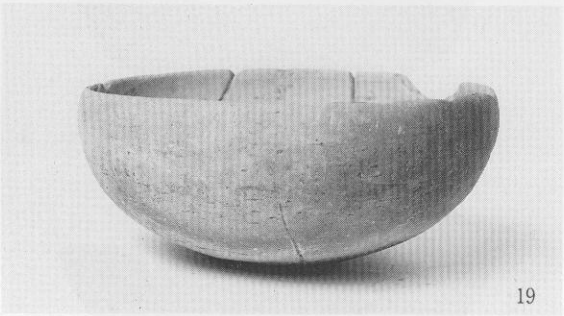
1SX015

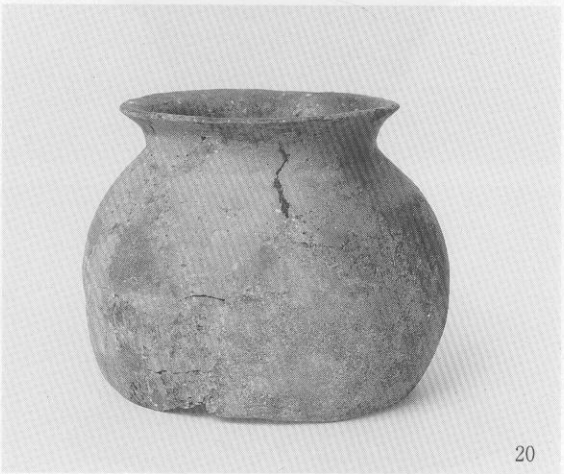


6

1SD075・1SX015出土土器

18


19


20

22

21

2

5

7

11

14

15

16

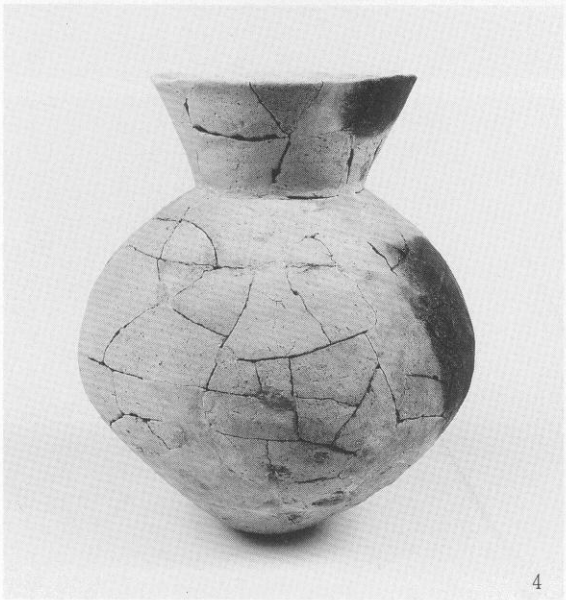
17

1SX015出土土器

1

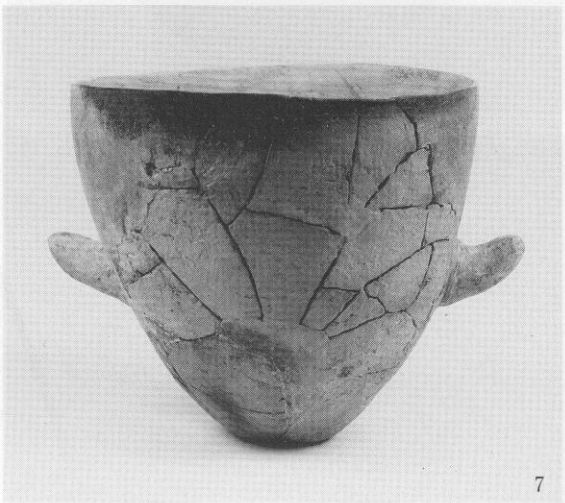
2

3


4

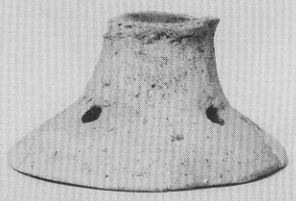
5

6


7

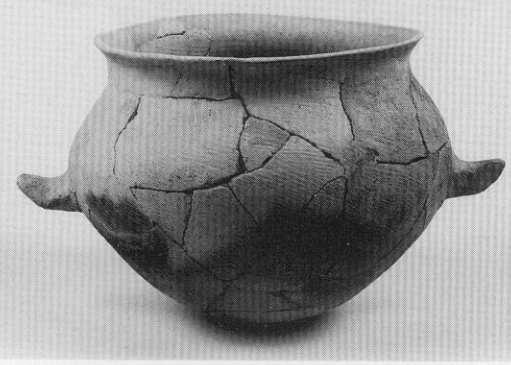
1SX016出土土器

1SX018



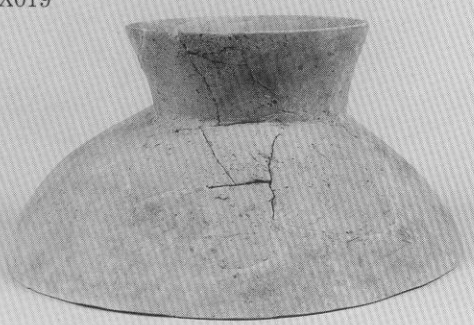
2

3



6

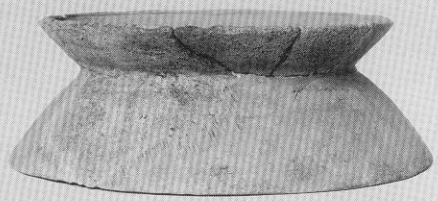
1SX019



9

1SX019

7



8

1SX021

10

11

1SX018・019・021出土土器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1SX100出土土器

11

16

12

17

13

18

14

19

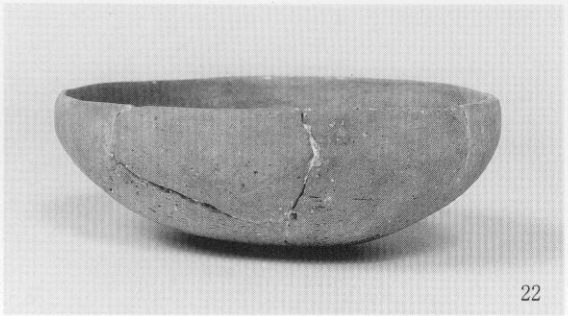
15

20

1SX100出土土器

21

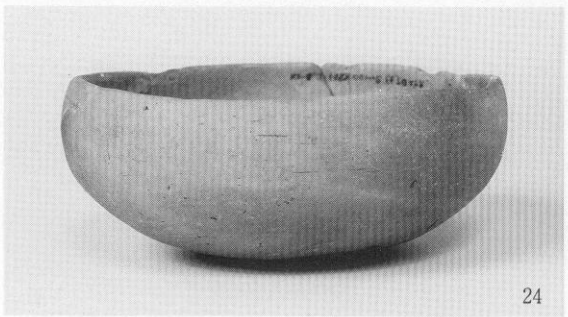
26


22

27

23

28


24

29

25

30

1SX100出土土器

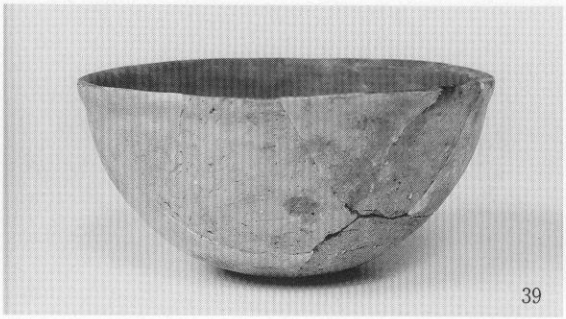
31

37

32

38

33


39

34

41

36

42

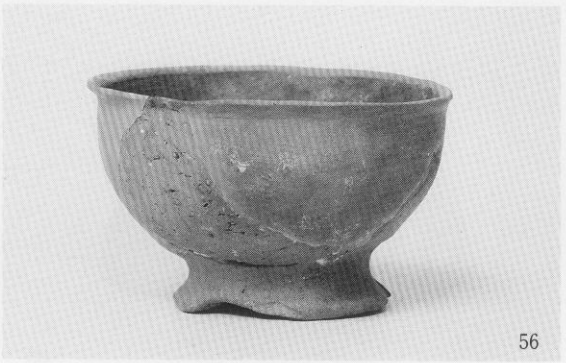
1SX100出土土器

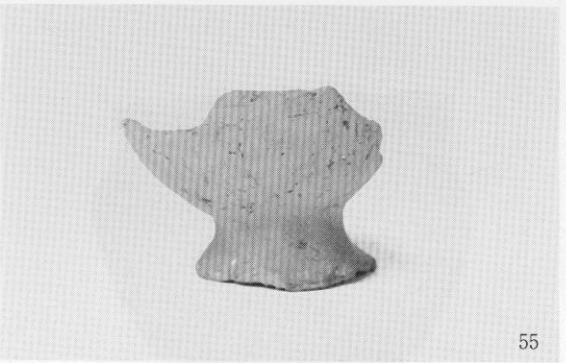
43

44

45

46


56


55

57

59

1SX100出土土器

60

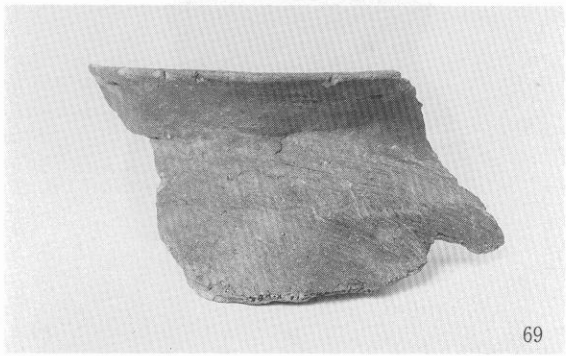
61

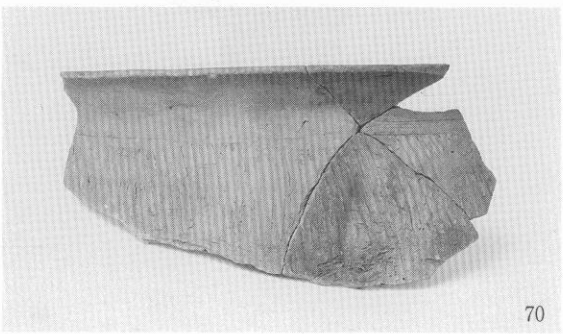
62

65

67

66

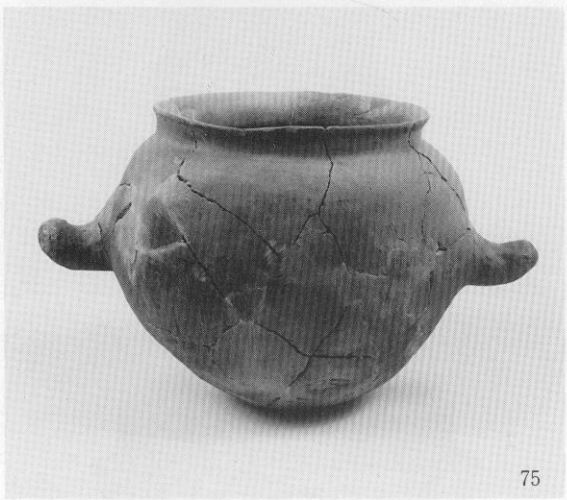

69

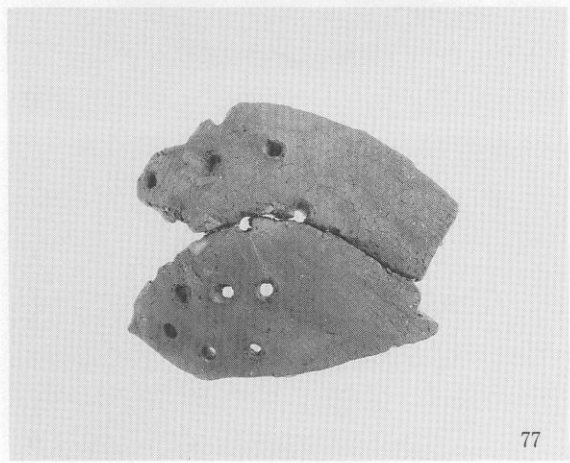

70

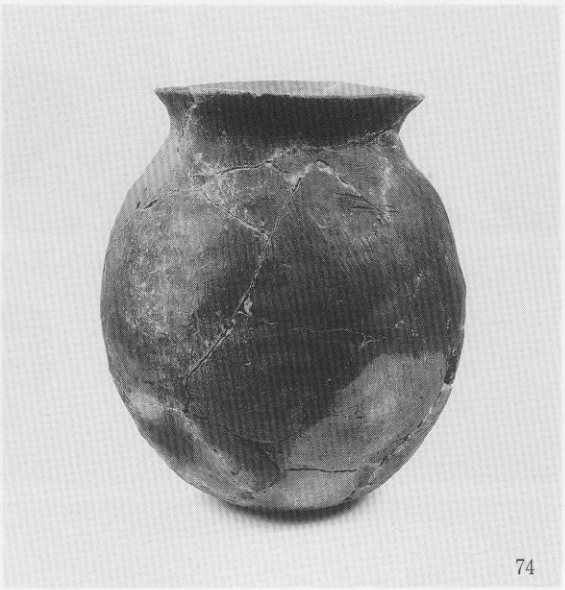
1SX100出土土器

71

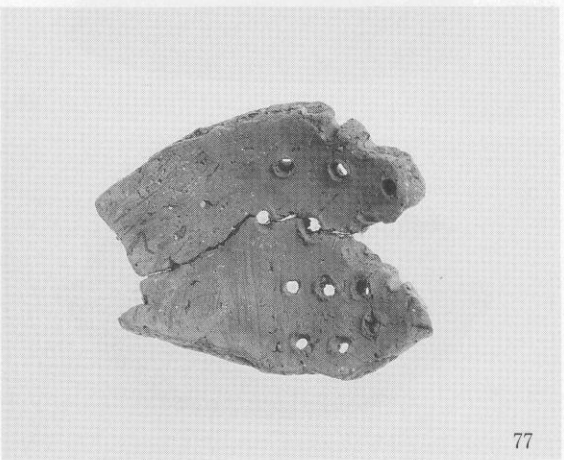
72


75


77


74

76


77

1SX100出土土器

Pla. 50

47

48

49

50

54

51

52

53

78

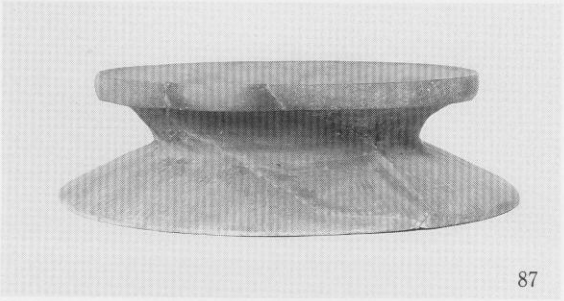
81

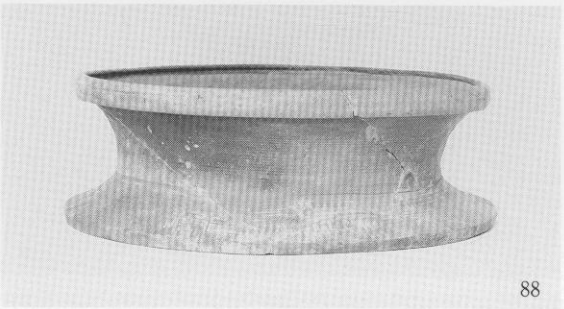
80

82

1SX100出土土器

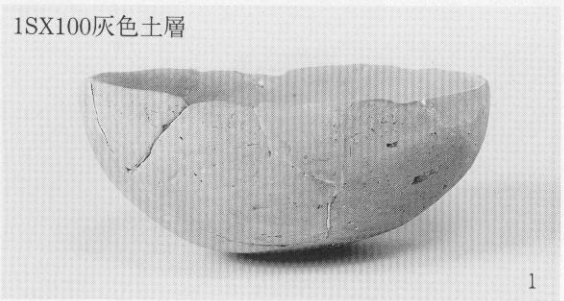
84


87

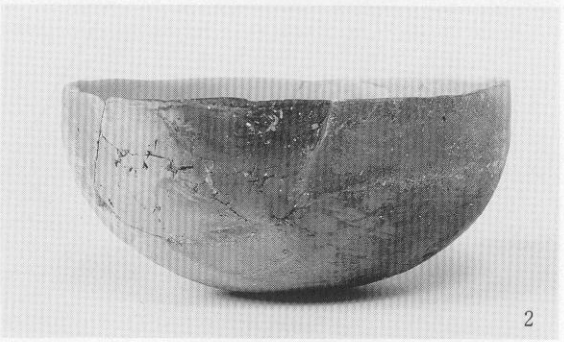

88

89

1SX100灰色土層


1

4


2

6

3

1SX100・1SX100灰色土層出土土器

5

9

7

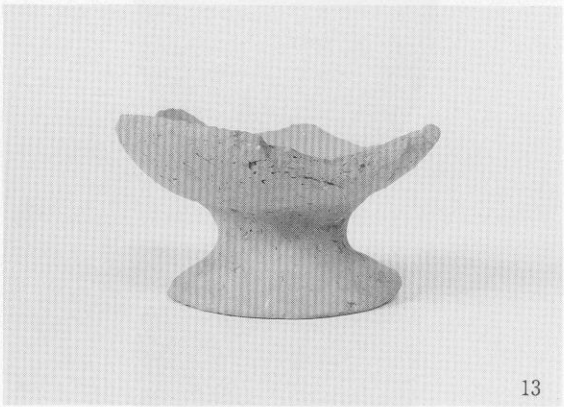
8

14

10

12

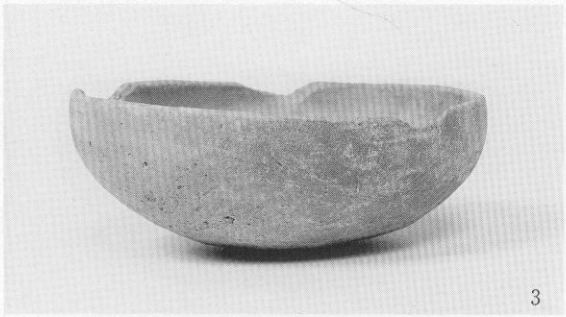
11


13

1SX100灰色土層他出土土器

1

2


3

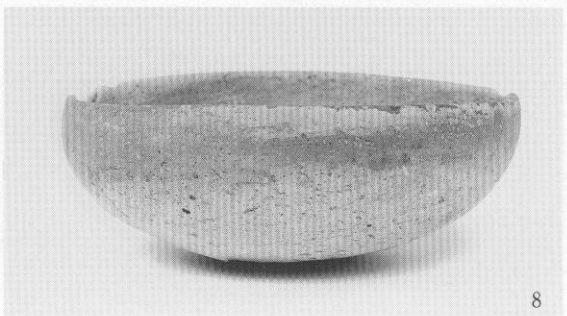
4

9

5

6

7


8

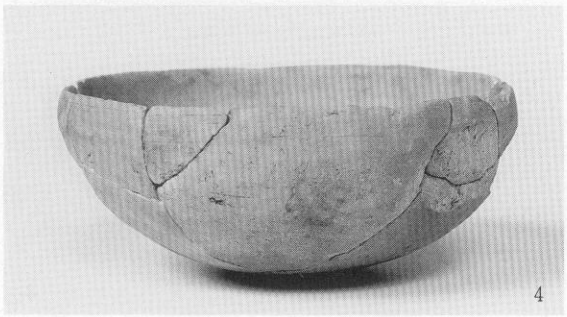
10

1SX110出土土器

1

2

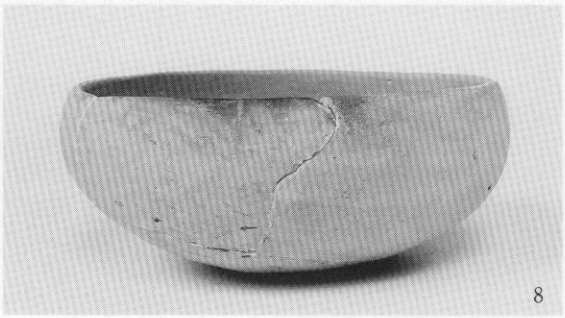
3

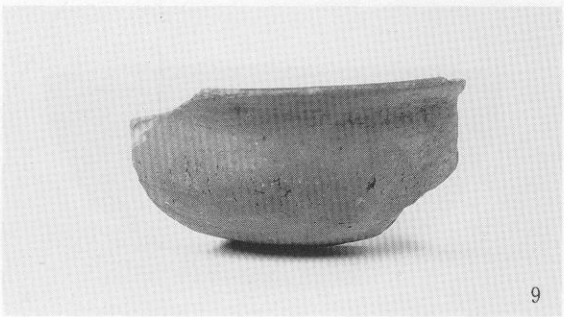

4

5

6

7


8


9

10

灰色土層出土土器

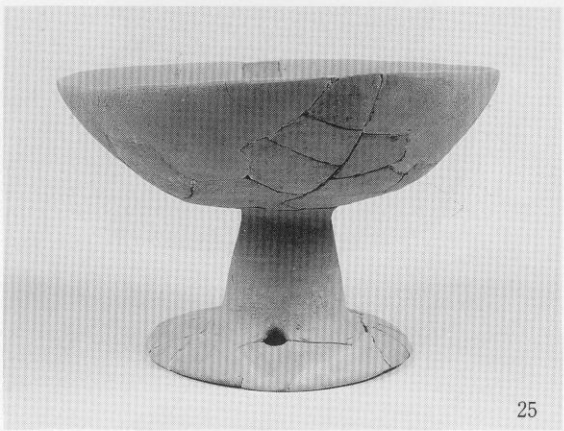
11

13

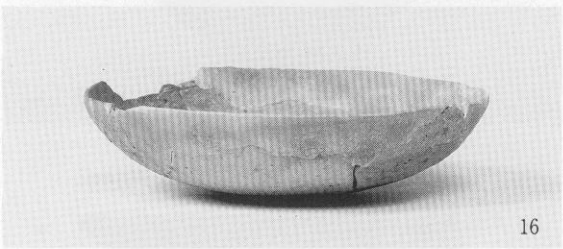
12

14

26


25

17


16

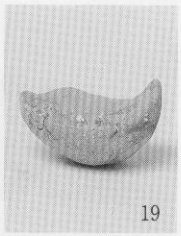
15

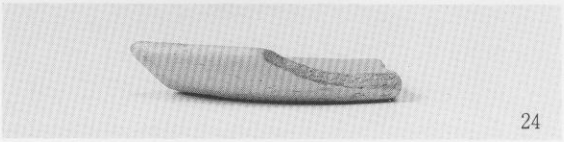
灰色土層出土土器

27

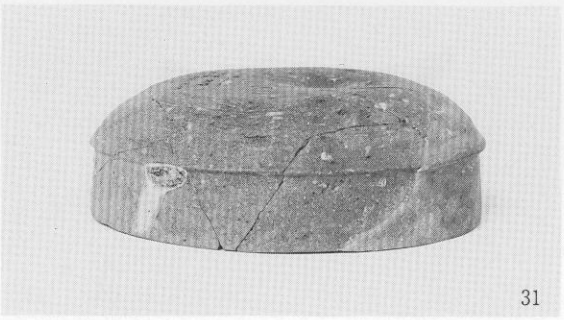
23

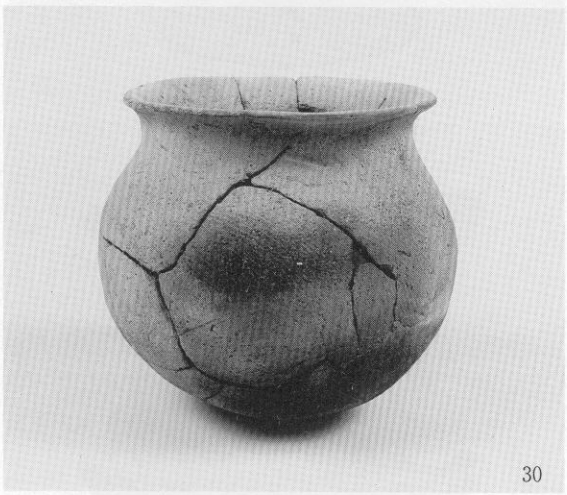
20

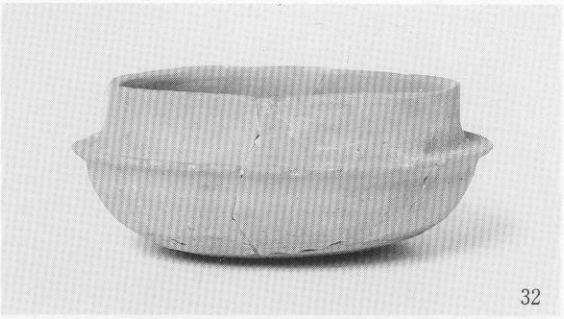

19


24

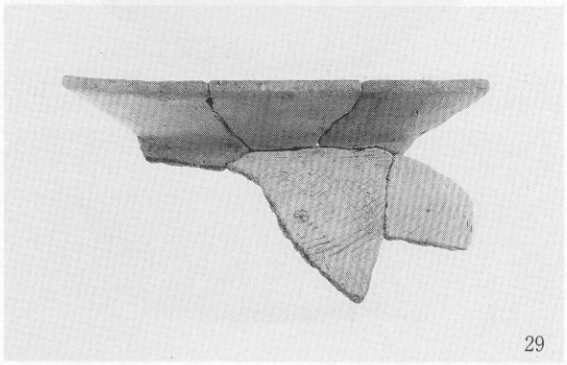
28

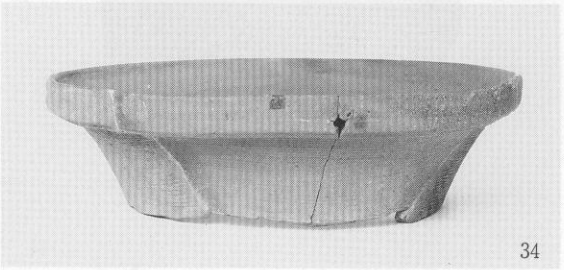

31


30


32

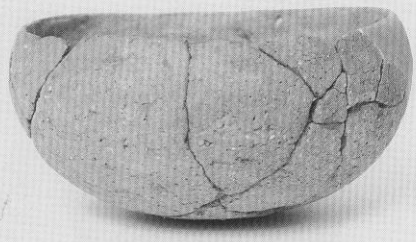
33


29


34

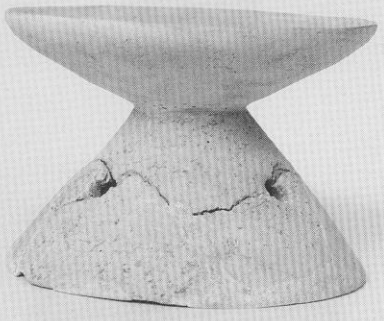
灰色土層出土土器

黒色土層

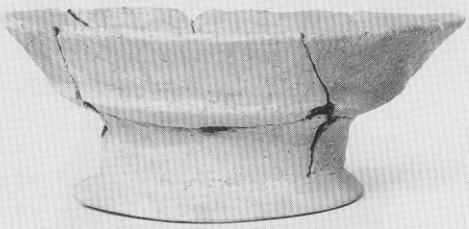


1

3



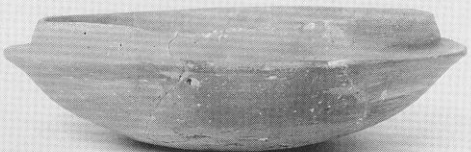
2



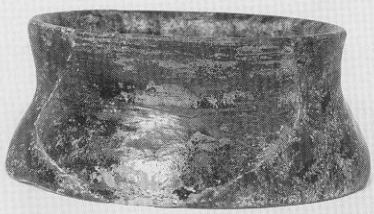
4

表土

5



12



6

11

9

7

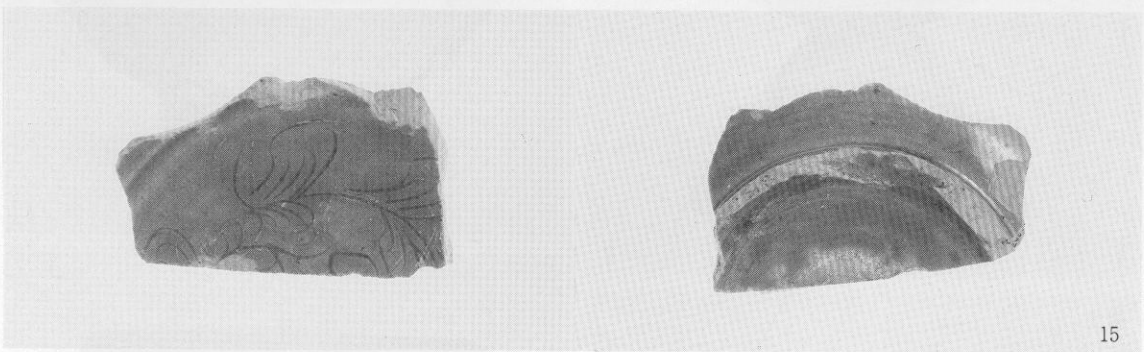
8

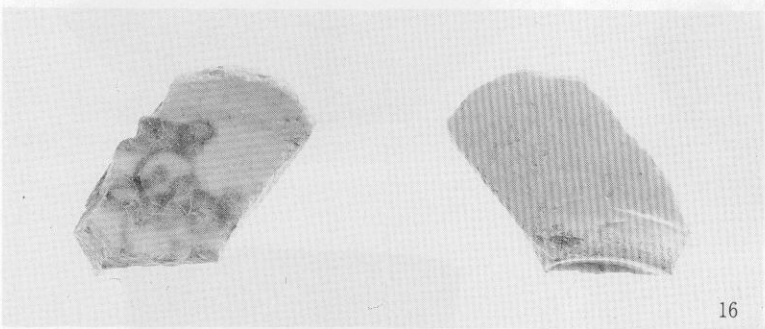
10

黒色土層・表土出土土器

14

13


15

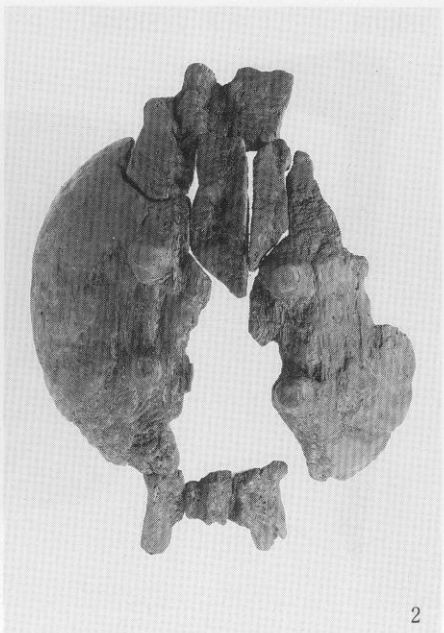

16

17

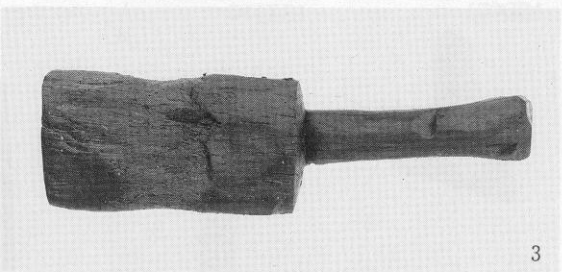
18

表土出土土器

1


2

4


3

8

7

6

1SD001出土木製品

1SK014

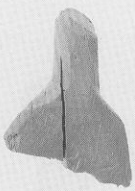
3

1SK055

1

1SD001

5



1SX110

1

14

3

4

1SB035

2

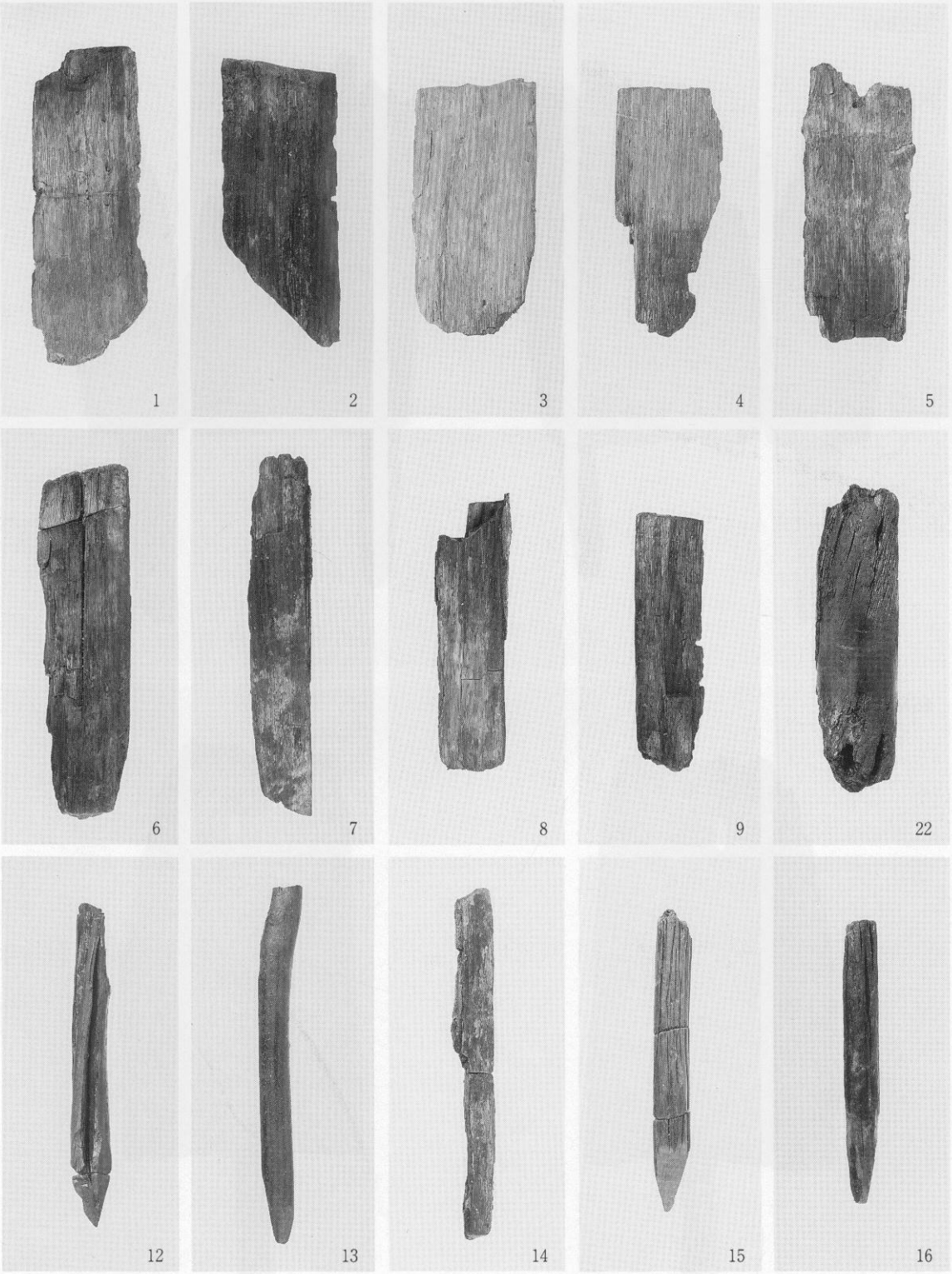
5

6

7

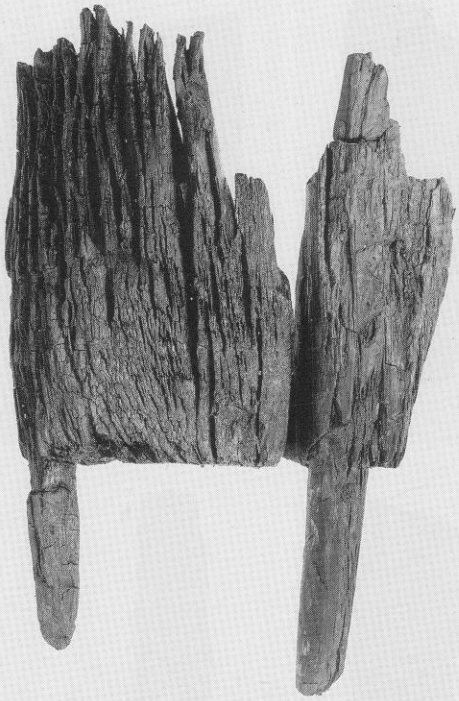
8

1SB035・1SD001・1SK014・1SK055・1SX110出土木製品



1SX065出土木製品

1SX090

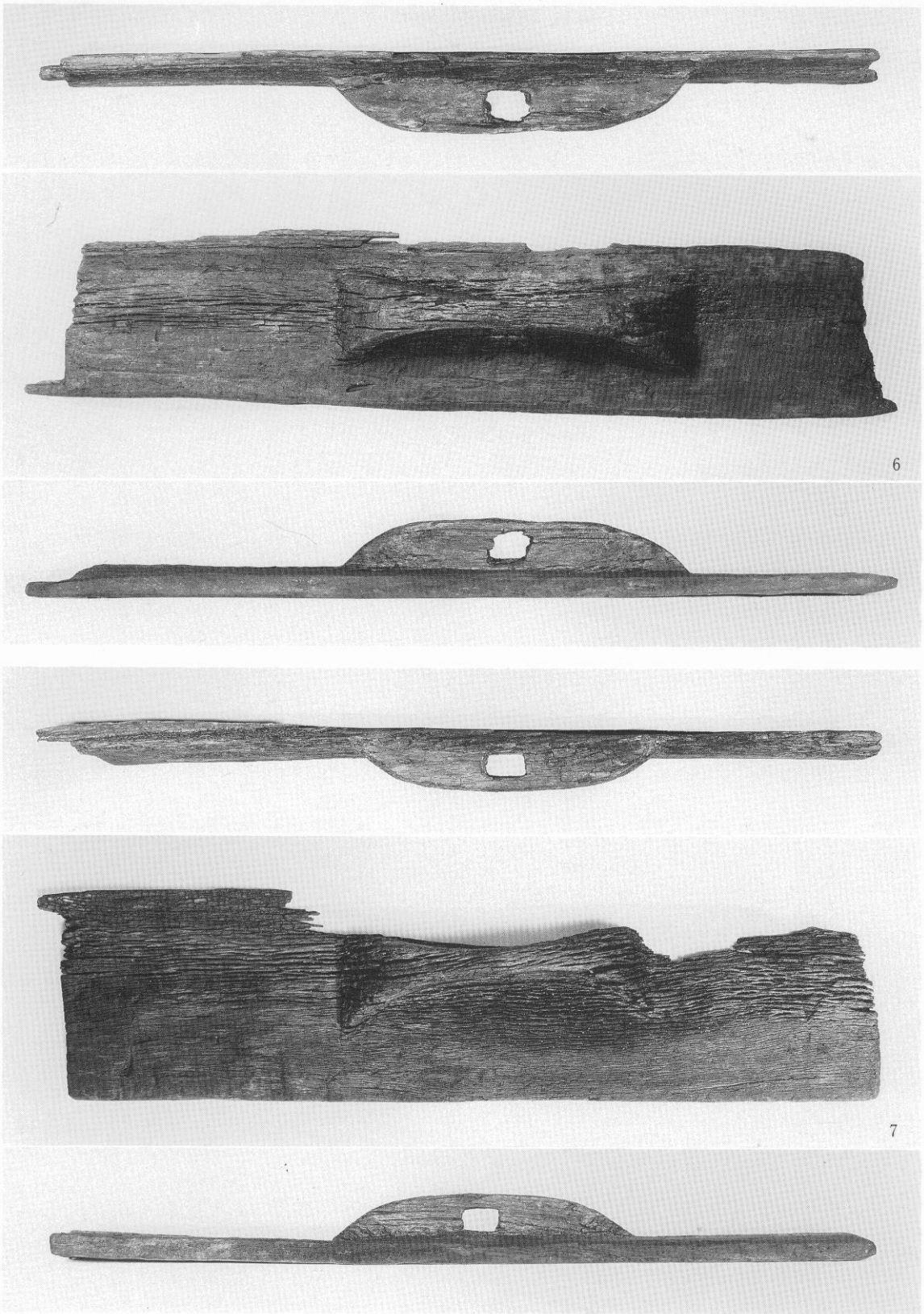


3

1SX100

1

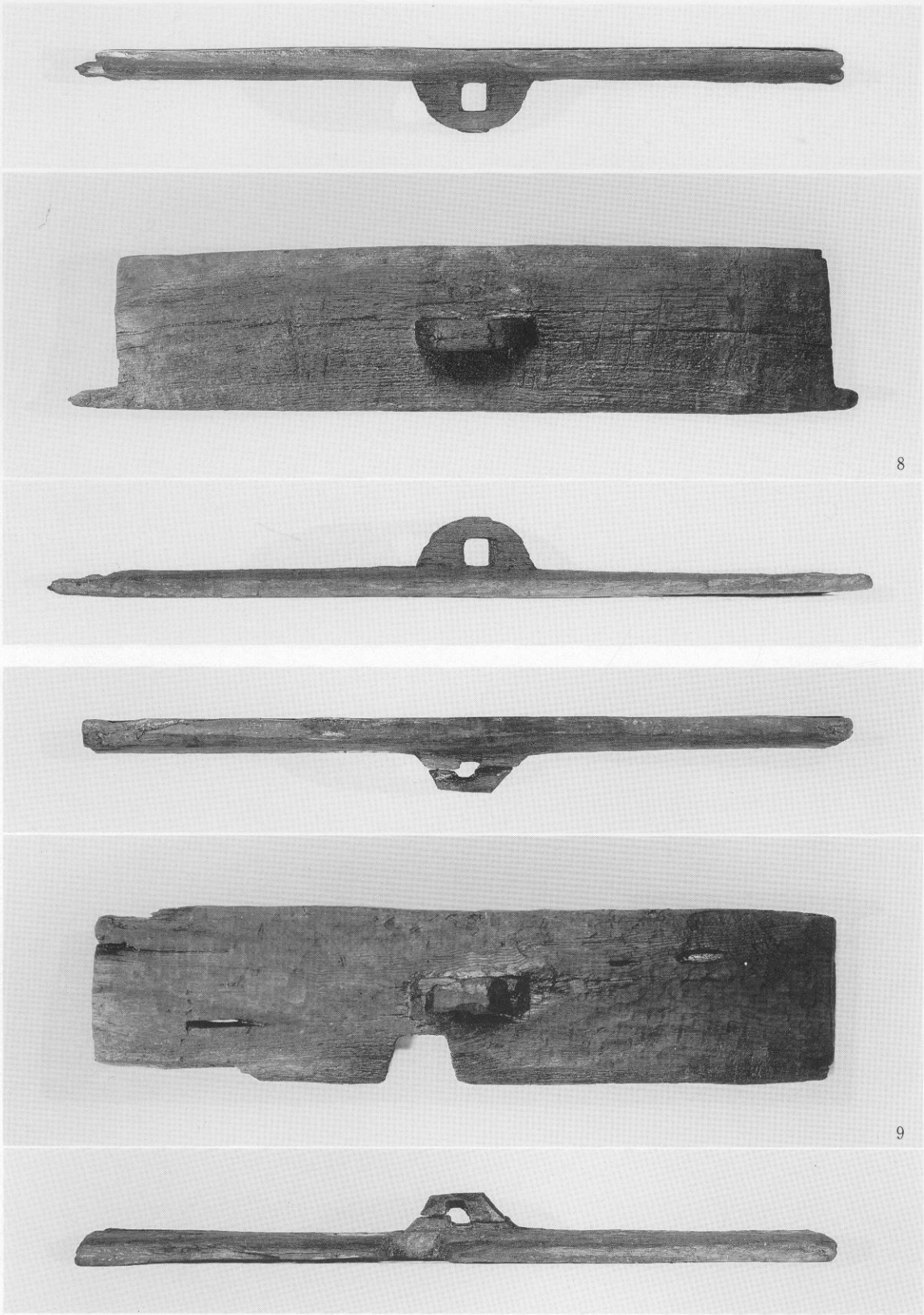
1SX090・1SX100出土木製品



6

7

1SX100出土扇板



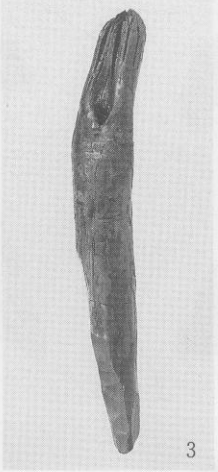
8

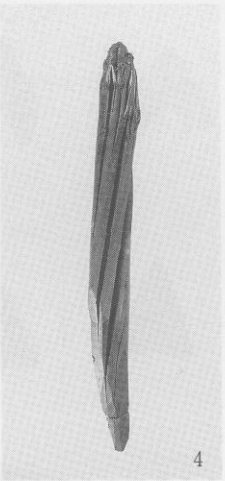
9

1SX100出土扇板

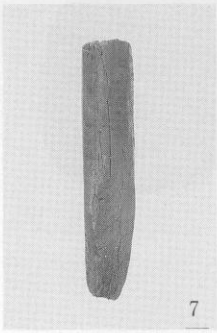
1

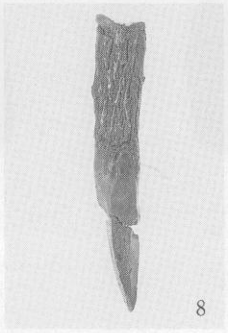
2

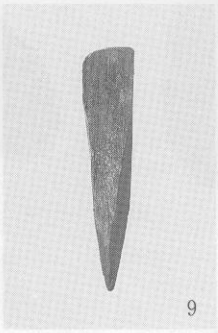

3

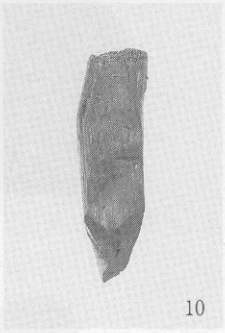

4

5


7

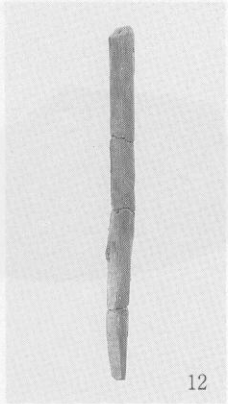

8

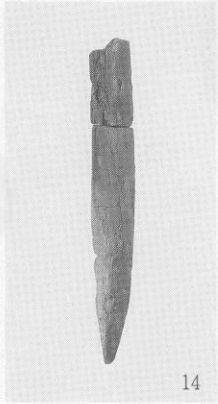

9

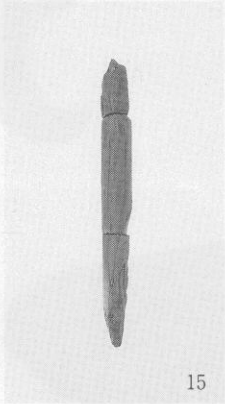

10

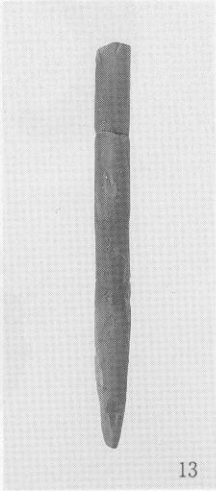
16

11

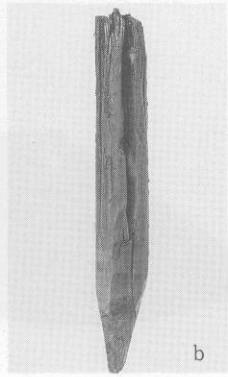

12


14

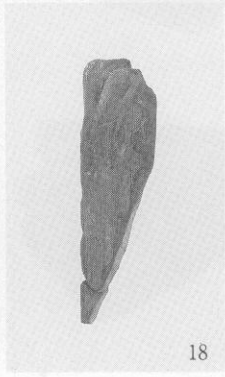

15

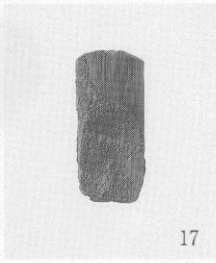

13

a

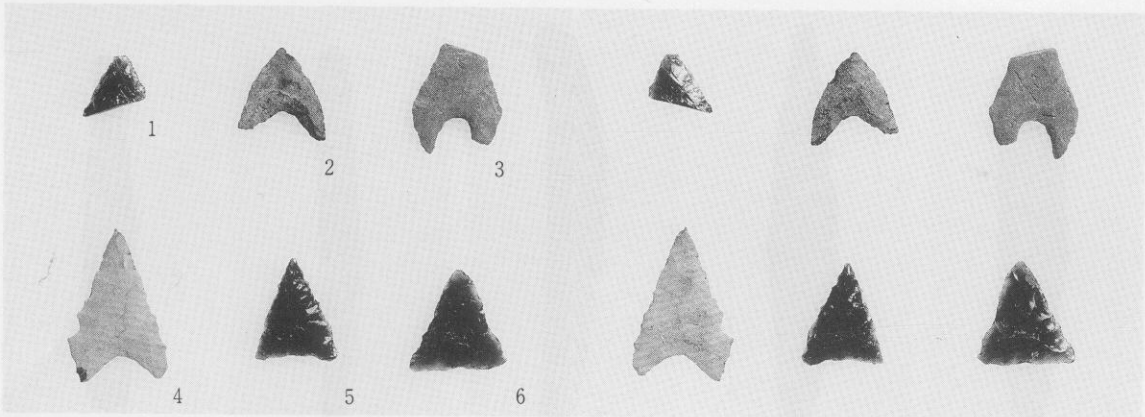

b

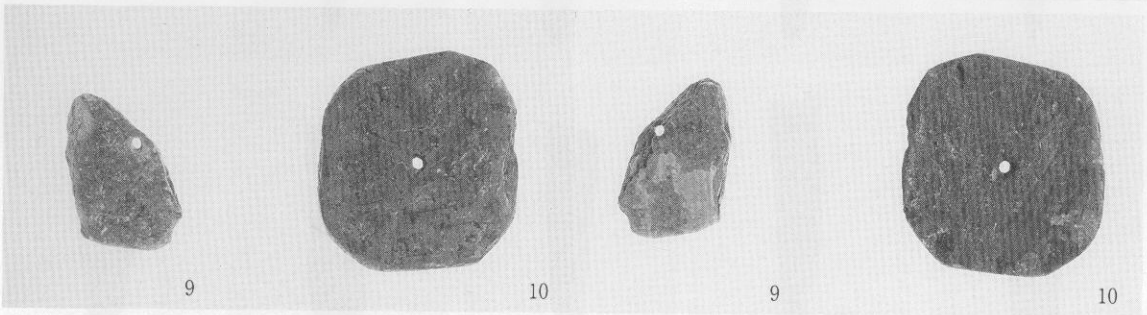
6

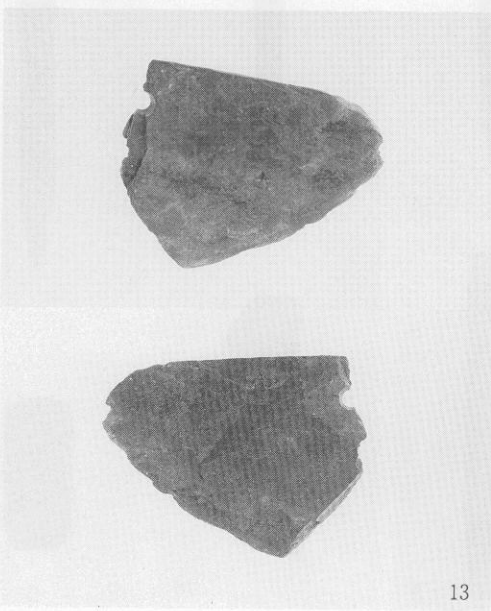

18

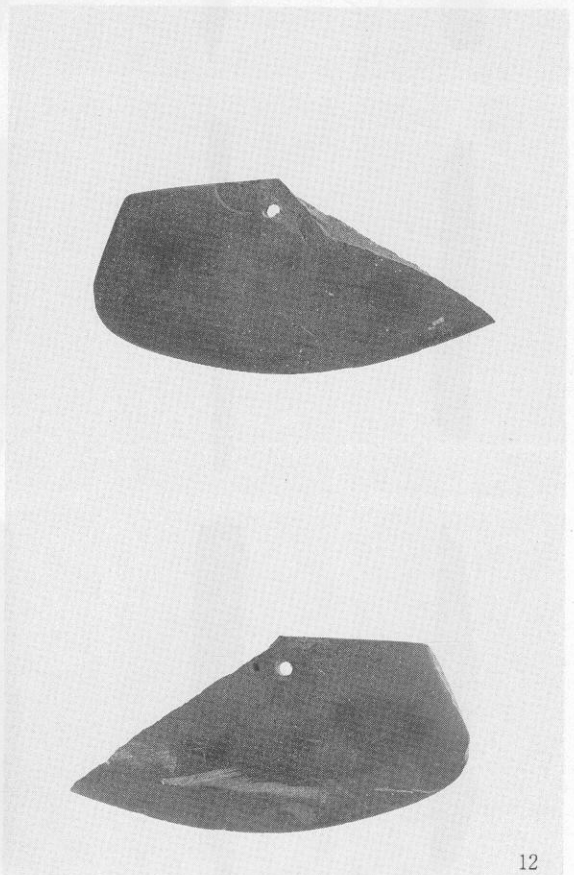

17

1SX105出土木製品

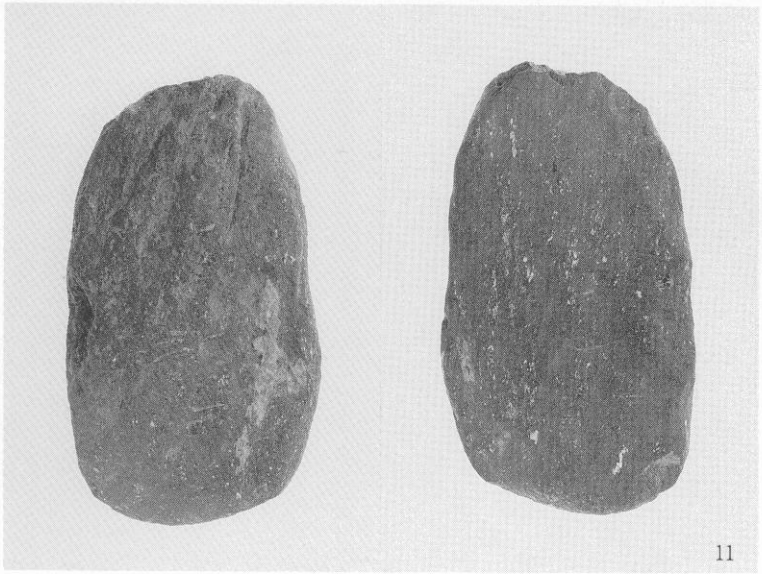




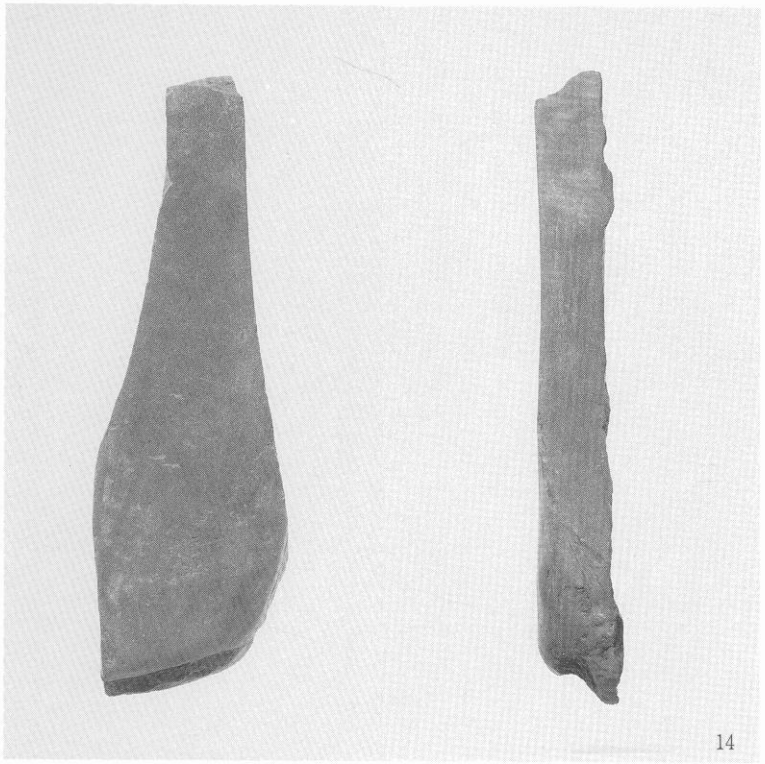




尾崎遺跡出土石器



11



14

尾崎遺跡出土石器

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅲ

太宰府市の文化財　第20集

1993.3.31

発行　財団法人　古都大宰府を守る会
太宰府市観世音寺４丁目６番１号
（大宰府展示館内）

印刷　有限会社　システム　レコ
福岡市東区土井１丁目11番７号

太宰府市教育委員会の了解
を得て財団法人古都太宰府
を守る会が増刷、頒布する
ものである。

付　　図

尾崎遺跡第1次調査全体図
（1：200）

Y-46.340.0

Y-46.280.0

X-55.630.0

X-55.580.0

1SK014

1SD001

1SX015

1SK025

1SB035

1SX039

1SD002

1SI010

1SK055

1SX090

1SX065

1SX100・105

1SX110

1SB080

1SK008

1SX016

1SX017

1SX021

1SX019

1SX018

1SK005

1SB029

1SD115

1SI050

1SI070

1SI040

1SK022

1SI060

1SX028

1SK045

1SD020

1SD075

磁北

座標北

磁北 −6°10′

真北 +0°16′

0

20m

付図

尾崎遺跡第１次調査全体図

（1：200）